ཀཱ།།བོད་ཡིག་གི་ལྷན་རྫོགས་པ།།

西藏文典

河口慧海著

大東出版社

ཨཱ།བོད་ཡིག་གི་ལུང་སྟོན་པ།།

西藏文典

གླེང་གཞི་ཡི་ཀ ।

序　　文

本書著述の目的は、西藏文學及び經論を學ぶ者のために、西藏語の文法を解説して、後學をしてその文學經論を正解せしむるにあり。故に本書に引用する言語文章は、大乘經論文學に出でたる言語、或はそれに準じたる文語にして、現代の口語法は説明せざるなり。勿論口語と雖も、その用法古代に屬して現今書中に遺れるもの、或は現代語なれども文學書中に誌されたるものは此限り非ず。されば本書著述の目的は、西藏語の文言雅語の法則を解説して、學者の正解に資せんとするなり。又一つには大學生及び專門學的研究者のための教科書たらしめんとするにあり。

本文典説明の根據は、西藏文學の父にして、同國語に於ける文字や文典の創造者なる、ཐོན་མི་བཟང་པོ Thon mi. sambhota の著作なる ལུང་སྟོན་པ་རྩ་བ་སུམ་བཅུ་པ། Lung ston pa rtsa ba sum cu pa 文典根本三十偈。 ཏཱ་ཀོ་ཡི་ཨ་ཛུག་པ། rtago kyi ajug pa 性入法。と、それ等の正釋なる ཞི་ཏུ་འགྲེལ་པ། situi agrel pa. シトゥッポの註釋に依るものなり。

西藏に於てはトンミーの根本文典三十偈及び性入法

に對して古來註釋せし者、二十餘家の多きを及ぶと雖も、シンツの如くは、その文法的理論を於て、亦それが實例を於て、正當なる説明を與へし者は、他に見ざるところなり。彼は梵語文法に精通せしと雖も、それ文法を拘束せられず、本來西藏語の特質を顯揚せるトゥンミーの根本文典を、それが固有せる實義の如くに解釋せり。これ著者がシンツの註釋に二三の不明ある點を除いて、大要その釋義を用ふる所以なり。

西藏に於ても亦歐洲に於ても、シンツの註釋を用ひず、或はその存在を知らざる多くの學者中には、トゥンミーの根本文典等の法則までも疑ふ者あり。曰く「飜譯聖典中には、トゥンミーの根本文典の法則に合せざる用法あり。これ聖典の譯文用法を正當とすれば、トゥンミーの用法は用ふるに適せざるなり。聖典に斯の如くトゥンミーに異なる用法のあるは、強ちにトゥンミーの用法に據るべからざることを示す者なり。」これは西紀ティンデルマ譯、牛若王、の法滅後西紀九百年より九百七十一年までの間、無教無文なりし時代を經て、後期佛教宣傳時代に入りて、盛大なる經典の飜譯を見るに至りしも、彼嚴密なるトゥンミーの文法、特に困難極まる性入法なる動詞の活用については閑却せられて、それと異なる二三の用法を、動詞に於てなす者あるに至れる事實を知らざるに由るなり。されば根本文典、即ちトゥンミーの或用法を、聖典の譯文に依て是正せんとする者は、これ誤解に基づく不正を以て、正を破ぶんとする顛倒見者なりと云ふべし。

西紀一千二百年代の初期に當つて、一切藏經が宋本より ᠵᡳᡴᡳᠨᡳᠯᡳᠨ シンリン版に開版せらるゝ以前に、文法的に綴分 gnar thang の正誤を施されしことあり。その後數百年を經て、西紀一千六百八十五年、北京に於て康熙皇帝の勅命に依て、多くの學者を集めて、藏語一切藏經を編纂出版せり。然れども文法に堪能なる、ᡩᡝᡵᡤᡝ デルケー（地名、並に地方）の學者等は、これに滿足せずして、西紀一千七百三十年、後期は地名版藏經を是正して出版せり。然れども一切藏經は浩瀚澎大にして、尚ほ是正の殘れるもの所々にあるなり。デルケ出版後僅かに二年を經て、官版として出版せられし カルマン新版も亦デルケー版と、多少の異點はあれども、それ長短は何れにもありて、一概にその優劣を判することを能はざるものあり。併しながらこれ等の一切藏經に一貫して行はるゝ所の法則は、その綴字法に於て小異ある外、一般には舊譯古文の法則に通じて行はるゝを見るなり。されば これ等の一切藏經は舊譯古文の法則に隨ふて讀むるに非ざれば、文法上正當なる解釋は得られざるなり。その舊譯古文の法則とは何ぞや。云ふまでもなくトゥンミーの根本文典三十條と性入法とにして、これ等を外にしては西藏文には何等の根據となる法則も、發見なし能はざるものと知るべし。

或人は曰く「言語は時代に隨つて變化するものなれば、文法もそれに隨つて、變ずるは當然として、聖典にある實例の法則を用ふるも可なりぞや」これ又西藏に於

て舊譯時代（西紀六百四十六年より、八百八十年まで）より、新譯時代（西紀八百八十一年より、現今に至るまで）となれる時の變化の實情を知らざるに依るなり。それ實情とは舊譯時代に用ひられたる綴字法の二三種を簡約ならせられたること、又或種の誤りして當時既に廢語となれるものを不用に帰せしめし事との外に、ドゥンミーの定められし文法については、何等の變化もなかりし事これなり。斯の如く舊譯より新譯に改變せる劃期的時代なりしと雖も、それが文の法則に於ては毫も變化する所なかりしは、何故なるかと云はゞ、本來西藏語動詞の活用は、文字の本性に隨ふて、その用法を定められしを以て、これを改變するの可能なかりしに由るなり。又一つには新舊通じて文語として用ひらるゝものは、その用語が文字に固定せられしを以て、口語の如く時と共に變化することは、許されざりしにも由るなり。而して口語の方は甚だしく變化して、發音の如きも多數の語が殆んど原音と異なるものとなり、甚だしきは言語の前置字、頭字、後置字、再置字等、がその發音を失へるもの、多くなりしは、確かに大なる變化なりと雖も、その文語に於て文字に誌されしものは、大約一千有余年間少しき變化なきを見るなり。

斯の如く固定せられし文語は、矢張りその當代の文に相應せる文法に隨ふて、解釋するより外に道なしと知るべし。もしそれ口語なればその時代の變遷に隨ふて、その實際の用法より新法を設立するも可なるべし。

然れども今は主として、文語の用法を論ずる場合なれば、口語の用法に依て變更する必要なしと知るべし。

上述の如く本文典説明の根據は、專らドゥンミー、サムボタの根本文典等に據るべしと雖も、その説明の順序組織等は、近代的教科組織等を用ふべし。これ學者に親み易く解し易き故なりと知るべし。

本典を著述するに當て、これが文典の根本原則を繙へられしドゥンミー、サムボタの大恩を深謝し、

それが正解の燈明を點ぜられし、シャッキャ大上人の功勞を思謝し、

次で余が西藏語を修むる為の指導や外護をせられし諸の教師上人、父母、朋友、信男、信女等の大恩を辭謝して、

此の本典著述の功德を以て、一切衆生の無上菩提の資に廻向すと謹んで言ふ。

昭和十一年六月廿八日

大日本藏經學會樓上にて

河口慧海誌す。

西藏文典目次

序　　文……I——V

第一篇　文字篇……(1——11)

第一章　字母と發音……(1——7)

一、明成字母三十と組分とその表……1

發音に對する注意と四韻字の符號……〃

二、明成字母と韻字符號との合同と百廿字表……2

三、音の生處と作者と努力、その表……3——4

音の作者と生處と努力との解釋……3

聲の大生命と小生命との別……〃

各異なる韻字等に對する發音の注意……4

四、綴字の種類、二字結合より六字結合まで……4——5

二綴より八綴に至るまでの例表……5

五、文字と言語との區別、一字一綴語の表……6

新譯時代の略綴の說明……〃

六、語句間別の點と線、一、二、四線の用法……6——7

埋藏典籍に於ける線代用の符號……7

第二章　綴字法……(7——10)

七、觀念語と形式語との區別……7——8

觀念語の意義とその例……7

形式語の意義とその例……7——8
八、言語を構成する字母の種類とその名……8
基字と前置字と後置字と再置字の意義と位置……〃
基、前、後、再の諸字母の分類……〃
再置の二字とそれに結ばるる後置字の例……〃
九、基字と支分と他字母との合成……8——9
基字の有頭字と有附字との別……9
一〇、有頭字の表……9
一一、有附字の表……9——10
有頭附字の表……10
第三章　讀方法、藏梵字母對照……(10——11)
一二、西藏語讀方の習得法……10——11
六字母一支韻の結合が二音となる例……10
發音上假名に附したる符號の讀方注意……11
一三、藏梵兩字の對照表……11
韻字音譯梵藏英和對照表……〃
明成字音譯梵藏英和對照表……〃
第二篇　品詞篇……(12——150)
第一章　品詞、敬語、數詞……(12——36)
一四、品詞の名と性……12
品詞の觀念語に入るべきものと然らざるものの別……12
一五、觀念語と形式語との文に依る例解……12

例文の解釋……12
一六、名詞構成と接尾語……13
接尾語に依て派生語が構成せらるゝ事……〃
一七、接尾語を有する名詞……13
單に物或は事を表す接尾語と例……〃
人或は持主を表す接尾語と例……〃
ma 或は mo を女性に用ふる例……14
ma 接尾語を人或は者の義に用ふる例……〃
ma 或は mo を、物、事、時を表すに用ふる例……〃
一八、接尾語結合の法則と譯文……14
一九、接尾語結合法の例解の一……15
pa 或は po を結ぶ例解……〃
ba 或は bo を結ぶ例解……〃
同對語に pa を結ぶ例……〃
二〇、接尾語結合法例解の二……15——16
地方住人たることを表す西藏語の特種用法……15
二一、形容名詞狀の接尾語……16
can と ldan との意義と發音とその用例……〃
mkhan の意義と用例……〃
二二、時、場所、人を表す接尾語 ka, kha, ga,……17
二三、小禽、事物等に用ひらるゝ接尾語 ka, kha, ga……17
二四、數、事情等の接尾語 ka, kha, ga……17——18
二五、接尾語 ka, kha. ga の異なる用例……18

二六、小なる者を表す接尾語及び例……18
二七、敬語名詞の多數なる事……18——20
普通語と敬語との對照表……19
二八、數詞の表……21
二九、基數の呼稱誌方に關する異點……22
十位より千位以下の滿數算へ方……〃
千位以上百萬位以下の滿數算へ方……〃
三〇、倍數、自乘數、數形容名詞、數副詞……23
三一、序數の構成……23
三二、字母にて序數を表す法……23——24
三三、性について……24——25
普通に接尾語 pa ,po は男性を表し、ma, mo は女性を表す例…〃
動物に pho は牡、mo は牝を表す例……〃
種牛、種馬等に對する pha の用法……〃
性の不明なるものを表す ma, mo……25
三四、pa, ba, po, bo を限定接尾語に用ふ……25
三五、不定接尾語、その結合法と例……25——26
三六、格語尾に用ふる助辭……26
三七、主格及び强勢法……26——27
强勢法の例……27
三八、伊具の格語尾卽ち屬格と具格……27——28
伊具格語尾と後置字との結合法則……27
屬格の例、具格の例……〃

三九、la 義七語の用法……28
業格、爲格、依格の語尾が la 義七語に依る……〃
la 義七語と後置字との結合法則表……〃
四〇、業格助辭と實例……28——29
無語尾業格の用例……29
四一、具格助辭の例と主格轉用……29
具格助辭が主格に轉用の實例……〃
四二、爲格助辭と例……30
四三、從格助辭と例……30——31
似從格助辭と例……30
同類中の比較には nas の例……31
異類比較には las の例……〃
攝略詞として用ふる nas の用例……〃
nas を接續詞と‘して’の義に用ふる例……〃
四四、屬格助辭と例……31
四種結合と實例……〃
四五、伊具助辭の異なる用法……32
gi 等が逆說的に用ひらるゝ例……〃
四六、依格助辭と例……32
la 義七語とも依格に用ひらるゝ實例……〃
四七、表時法とその例……32
四八、作境同性格の例……33
作境同性例の說明……〃
四九、格と否定詞構成……33

否定詞に依て格語尾を無視せんとする說……33
否定詞は動詞の否定詞にして格語尾に及ぼす……〃
五〇、呼格とその例……34
普通文に於ける呼詞を用語の前に置く例……〃
詩歌等にある呼詞を後に添加する例……〃
五一、數、單數、複數、兩數ある事……34——35
複數を表す字類とその用例……35
五二、名詞の格次、格名、語尾について……35
格次、格名、格語尾との對照表……36
五三、諸格數、語尾表……36
格語尾の諸種用法は助辭の部にある事……〃
第二章　代名詞……(37——42)
五四、人稱代名詞、普通語と敬語との對照表……37
指示代名詞を人稱代名詞に用ひる……〃
五五、人稱代名詞格語尾變化表……38
五六、人稱代名詞複數及び語尾……38
名詞と同樣なる諸格語尾變化の事……〃
五七、近稱指示代名詞……38——39
是を强勢的に用ふる例……〃
諸種接尾語の添加に依て諸義を表す例……39
場所に用ふる近稱代名詞の例表……〃
ka, ko, ga, ạdi に添へて特義を表す……〃
五八、遠稱指示代名詞……39

ni bo 等の接尾語に依て異なる意義を表す例……39
場所を表す遠稱指示代名詞……〃
de（その）に ka, ko, ga の接尾語のつく語義……〃
五九、近稱指示代名詞格語尾變化表……40
遠稱指示代名詞格語尾變化は近稱のと同一……〃
六〇、疑問代名詞……40
人稱專用と一切の疑問と量等に用る疑問代名詞……〃
ci と ji の疑問詞に結ぶ語の異なる例表……〃
六一、疑問代名詞の語尾について……40——41
諸種疑問代名詞の例表……40
六二、量、形式、理由等の疑問代名詞熟語……41
六三、關係代名詞……41——42
關係代名詞構成語の例……41
關係代名詞使用の文例……42
關係代名詞二語續置の例……〃
六四、省略關係代名詞……42
省略關係代名詞の用例……〃
省略關係代名詞に似て異なる指示代名詞の例……〃
第三章　形容詞……(43——61)
六五、形容詞の種類……43
形容詞三種の藏名と譯……〃
代名形容詞、數量形容詞、特質形容詞の例……〃
六六、代名形容詞の四種類……43

六七、屬格形容詞の例……43——44
六八、指示形容詞の類……44
限定指示と不定指示との二類……〃
兩指示形容詞の語類……〃
六九、限定形容詞と不定形容詞の例……44——45
限定形容詞の實例……〃
代名形容詞にして限定形容詞に屬する例……〃
不定形容詞の例……45
七〇、不定指示形容詞……45
不定指示形容詞の表義と解釋……〃
七一、不定指示形容詞の語類と例……45
同語類の表と文例……〃
七二、箇別形容詞……46
箇別形容詞の類語と文例……〃
七三、疑問形容詞……46
疑問形容詞として多く用ひらるゝ二語と文例……〃
七四、關係形容詞……46——47
關係形容詞の構成とその文例……46
七五、數量形容詞類語……47
不定數量形容詞類語……〃
限定數量形容詞とその類語……〃
限定數量形容詞と名づけらるゝ理由……〃
ボーとケエーの西藏計量と我國の相當量……〃
七六、不定數量形容詞の例……48

不定數量形容詞語句の例……48
不定數量形容詞の文例……〃
七七、基數を數ふる特異法……50
西藏通貨の數へ方とその數表……〃
半數を添加する特殊の數へ方……〃
紀元の建て方と年月日の數へ方……〃
七八、序數について……50
序數構成法と異例……〃
ang gi 番號を用ふる序數構成……50
七九、限定數詞を不定數詞に轉換……50——51
tsam 或は複數語尾を用ふる轉換……50
用ふる場合に由て限定詞が不限定となる例……51
八〇、特質形容詞の種類……51
說述形容詞の定義……〃
實質形容詞の定義……〃
固有形容詞の定義……〃
八一、說述形容詞の例……51
八二、實質形容詞の例……52
固有名詞となれるも本質は實質形容詞たる實例……〃
實質形容詞の例表……〃
八三、固有形容詞の例……52
同一語にして人にも國にも用ひらるゝ語……〃
八四、現在分詞形容詞の例……53
現在分詞にて形容詞構成の方法……〃

現在分詞形容詞の例表……53
八五、過去分詞形容詞の例 ……53
過去分詞にて形容詞構成の方法……〃
過去分詞形容詞の例表……〃
八六、本質形詞と形容名詞と抽象形名詞 ……54
三形容詞の說明と例語……〃
本質、形名、抽象形名詞區別表……〃
八七、接尾語の特殊用法と特殊意義……54——55
ma のみを用ふる形容詞と熟語……54
pa, po, ba, bo, mo の專用形容詞と熟語 ……55
八八、諸種肯定形容詞……55
諸種の接尾語とその例表……〃
八九、諸種否定形容詞……55——56
諸種否定形容詞の意義と用例……〃
九〇、可能、適應、許可的形容詞 ……56
可能等形容詞の構成法と例……〃
九一、同意形容詞と反意形容詞 ……56——57
同意形容詞と反意形容詞の構成……56
kyang 等三語の連續法則 ……〃
九二、比較形容詞 ……57——58
比較語の構成法と例……〃
比較最上級の構成と例……〃
次第に度量を異にする比較形容詞……58
兩極端の何れにも用ひらるゝ最端比較形容詞及び例……〃

九三、熟　語 ……58——59
熟語の構成法……〃
原形語と熟語の對照表……〃
原形語の忘れられたる熟語……59
九四、否定動詞狀形容詞……59
否定動詞狀形容詞の構成法……〃
九五、否定動詞狀形容詞の表 ……60
九六、相反形容詞の表……61
第四章　動　　詞……(62——99)
九七、動詞の種類 ……62——63
自動詞の定義とその語類……62
自動詞を用ひたる文例……〃
自動詞文例の說明……〃
他動詞の定義とその文例……63
他動詞文例の說明……〃
九八、他動詞に la 義七語の用法 ……63——64
他動詞の力にて客語尾に 'を' の義を表す例 ……63
他動詞に la 義七語の--を添加する文例……64
九九、敬語動詞 ……64
西藏敬語動詞の語形を異にするもの多きこと……〃
一〇〇、普通動詞敬語動詞對照表 ……64——65
一〇一、動詞の性入法……66
各字母に各性、各性に各活用ある說明……〃

一〇二、基、前、後置字の性別表……66
基字性別表……〃
前置字性別表……〃
後置字性別表……〃
一〇三、字母性別の根據……67
發音努力の大小强弱等に據ること……〃
一〇四、字母性入の四法則……67
四法則の說明……〃
一〇五、前置字と基字との結合法……68
前置字とそれに結合せらるゝ基字との表……〃
一〇六、性合法に依る言語構成……68——69
前男字を基男字に結ぶ例……68
前男字を基女字に結ぶ例……〃
前中 ga 字を基の男或は女に入るゝ例……〃
前中 da 字を基の男或は女に入るゝ例……〃
前中 da 字を有結基の男或は女に入るゝ例……〃
前女 a を基の女と中に入るゝ例……〃
前女 a 字を有結基の女或は中に入るゝ例……69
前甚女 ma 基中 kha, cha, tha, tsha に入るゝ例……〃
前甚女 ma を基女の ga, ja, ra, za に入るゝ例……〃
前甚女 ma を基女の nga, ña, na に入るゝ例……〃
一〇七、不合法結合は西藏語不成立……69
前男は基中に、前中は基中に、前女は基男に入るゝを許さゞる例……〃

前男も同組內の基女には入れ能はざる法と例……69
一〇八、男前置 ba 字の表し得る意義……69——70
男前置字用法の法則と說明……69
一〇九、男前置 ba 字他動過去詞の表……70
一一〇、前置中性 ga, da 二字の表し得る意義と例……70——71
中前置字 ga, da の表現する法則と說明……70
ga 前置字を自動現在に用ふる例……71
ga 前置字を他動現在に用ふる例……〃
da 前置字を自動現在に用ふる例……〃
da 前置字を他動現在に用ふる例……〃
一一一、女前置 a 字の表し得る意義と例……71——72
女前置 a 字の表現法則と解釋……〃
女前置 a 字が自動現在に用ひらるゝ例……〃
女前置 a 字が自動未來に用ひらるゝ例……72
一一二、前置甚女 ma 字を總てに等用する法と例……72——73
自動他動三時の總てに等用せらるゝ例……73
一一三、ma 前動詞の語類……73
不規則動詞の特殊なる表示……〃
一一四、無前動詞の二動三時を表す法……73——74
後置字の性別に依て別たるゝ事……73
一一五、後置字の三性と內分……74
男、中、女の三性とそれ等に屬する字母……〃
男に上中下の丈夫と、中に變化二相無相と、女に甚女と純女の二とし、斯く分ちたる理由……〃

一一六、後中の變化、二相、無相の構成 ……74——75
變化中性と名づけらるゝ理由……74
二相中性と名づけらるゝ理由……75
無相中性と名づけらるゝ理由……〃
一一七、純女、甚女の構成と後置基字の結合法 ……75
純女と甚女との區別法……〃
後置十字は基字の何れにも入れ得る法則……〃
再置字と後置字と結合する法則……〃
一一八、後置調音結合三丈夫の例 ……75——76
三丈夫の字性表示結合の例表……75
一一九、後置調音結合法三中性の例表……76
一二〇、後置調音結合法二女性の例……76
一二一、意義に依る結合法 ……77
後置字のみに依て活用が表示せらるゝ例……〃
多くの活用は前置字に依て表示せらるゝ事……〃
一二二、後置字三性八部の時限表示例……78
三丈夫の過去詞に用ふる例表……〃
變化は過、現、二相中は過去、無相中は現在を表す例……〃
純女は過去、甚女は現在を現す例……〃
一二三、不規則動詞 ……78——79
不規則動詞を擧ぐるの根據……〃
a 字を去て成す不規則動詞の例表……79
ba 字を去てなす不規則動詞の例表 ……〃
一二四、語形を異にする不規則動詞の例表 ……79

一二五、後置字を主とする ạ 前動詞表 ……80
一二六、唯一語形不規則動詞等用語類……80——81
ạ 前置字のみの唯一語形不規則動詞の表 ……80
自動現在の ạ 前が二動三時に等用せらるゝ理由 ……〃
ạ 前不規則動詞が二動三時に等用せらるゝ文例……81
一二七、前置字性變三時二動表 ……81——82
一二八、本典の動詞用法に關する注意……83
本典の動詞用法は專ら性入法の法則に據る……〃
性入法に據る根本原理……〃
一二九、後置字を主とする活用動詞……83——84
一三〇、後置字性變三時二動表 ……84
後置字が主となれるを以て ạ 前が解消せしこと ……85
一三一、基字の變化 ……85
基字の變化を示すの根據……〃
一三二、基字性變三時二動表 ……85——86
例表に對する注意の要點……86
一三三、前置再置の有無に對する總括的注意 ……86——87
一三四、前置、再置の有無に依て意義を異にする動詞表…87——90
一三五、肯定動詞 ……90——91
肯定動詞七語の例とその說明……91
一三六、肯定動詞とその例解 ……91
肯定動詞を用ひたる文例……〃
一三七、ạdug, yod, lags, srid, snang の異同 ……91——92
ạdug 等肯定動詞の異同の文例 ……92

lags, snang の用法……92
srid の用法……〃
一三八、肯定動詞となる再攝語結合の例表 ……92
伴攝語の構成……〃
一三九、名詞等に再攝語結合の例表……93
代名詞、形容詞に伴攝語結合の例表……〃
名詞に著く伴攝語は動詞にして動詞に著けば助動詞……〃
一四〇、動詞の根語、動名詞、分詞、不定詞 ……93——94
藏語の動詞、根語の定義……93
現在詞形根語の例……〃
動名詞と分詞と不定詞の構成……〃
分詞、不定詞、副詞となる例……94
一四一、根語、動名詞、分詞、不定詞の表 ……94
一四二、動名詞、不定詞に對する注意……95
現行辭典等には動名詞を不定詞とする事……〃
根本文典の用例に依て動名詞と不定詞を分別す……〃
一四三、動詞の態の別……95——96
[1]直說態、[2]分詞態、[3]接續態、[4]折說態、[5]熟語態、[6]名詞態、
[7]命令態の七 ……95
直說態の定義と例……96
分詞態の定義と例……〃
分詞態の省略的構成と例……〃
一四四、動詞態中接續態……96——97
接續態の定義と例……96

已然と將然との文例……97
一四五、折 說 態 ……97
折說態の定義と文例……〃
談話と文章との異なる例……〃
一四六、熟語態 ……98
熟語の定義と例解……〃
他の動詞と構成する熟語の例……〃
數語を重ぬる熟語の例……〃
名詞と重なる熟語の例……〃
形容詞と連なる熟語の例……〃
一四七、名詞態 ……98——99
名詞態の定義とその構成……98
根語のみを以て動名詞とする例……〃
pa, po, ba, bo, ma, mo を以て動名詞構成……〃
動名詞類語表……99
動名詞に二重接尾語 pa 或は po を添へて持主或は作者を
表す……〃
命令態……〃
命令態の定義と例解……〃
命令動詞は助動詞を附けて其意をなす……〃
第五章 助 動 詞 ……(100——113)
一四八、助動詞の定義と活用 ……100
三時限の完了進行は助動詞に依て成すこと……〃
能相所相は助動詞の添加を要すること……〃

一四九、助動詞添加の必要なる動詞 ……100——101
ạ 前置字の動詞は未來表示する助動詞の添加を要す ……100
西藏には動詞のみにて未來を表す語なきこと……〃
ga, da の二前置字は現在詞なること ……〃
助動詞活用三時限の表 ……101
一五〇、進行助動詞 ……101——102
進行助動詞の種類……〃
現在進行詞の文例……〃
俗語進行詞構成の例……〃
過去進行詞の文例 ……102
未來進行詞の文例……〃
一五一、完了助動詞 ……102——103
十一語の完了助動詞 ……102
完了助動詞は伴攝語と同形なるも性用の異なる事……〃
伴攝語は十語にして to の一語を有せざる理由……〃
完了助動詞が動詞に接合する法……〃
一五二、三時限完了助動詞文例……103
過去完了助動詞文例……〃
現在完了助動詞文例……〃
未來完了助動詞文例……〃
一五三、能相と所相の助動詞 ……103——105
能相助動詞の文例 ……103
能相助動詞の略形とその動名詞使用例 ……104
所相助動詞の文例……〃

所相助動詞の略形とその動名詞使用例 ……105
一五四、ma 前動詞に添加の助動詞 ……105——106
助動詞添加に依て動、相、時限等を明示せらるゝ ma 前動詞の前例 ……105
ạ 前の一語形動詞も助動詞を ma 前と同じく用ふること …〃
一語形なる ba 前、ga 前、da 前、無前動詞も ma 前動詞と同樣なること……〃
一語形が一意義に限れる注意 ……106
一五五、ba 前、ga 前、無前動詞の語類表……106——107
一五六、命令助動詞及動詞と結合法則 ……107
命令動詞構成についての助動詞……〃
命令助動詞 cig, ṣhig, shig, dang の四種……〃
命令助動詞と動詞と結合法則……〃
一五七、ṅga, na, ma, ạ, ra, la の後置命動詞と ṣhig との結合表……107
一五八、ga, da, ba の後置命動詞と命助動詞 cig との結合表 ……107——108
一五九、sa 後命動詞と命助動詞 shig との結合表 ……108
一六〇、十後置 da 强端と dang 及有前助動詞と dang との結合表 ……108——109
十後置字 da 强端と命助動 dang との結合表……108
有前命動詞が命令四助詞と結合の表 ……109
一六一、期願的助動詞とその文例と注意 ……109——110
期願的助動詞語類 ……109

期願的助動詞の文例 ……109
期願的助動詞についての注意……〃
一六二、否定の助動詞及その異用法 ……110——111
否定的助動詞の四種 ……110
否定助動詞が名詞の接尾語となる例……〃
前後の兩語を否定する ma 助動詞……111
否定助動詞と否定形容詞との別……〃
一六三、可能、適應、許容の助動詞 ……111
四助動詞の類語例……〃
一六四、使役相の助動詞 ……112
使役相と能相動詞……〃
一六五、比況の助動詞 ……112
比況助動詞文例……〃
一六六、疑問助動詞 ……113
疑問助動詞類語……〃
疑問助動詞と動詞との結合……〃
疑問助動詞が接續詞となる注意……〃
第六章 副 詞 ……(114——119)
一六七、副詞の意義と原始的副詞……114
副詞の定義と同音異義の語に對する注意……〃
原始的副詞の三種の語根とその成語の例……〃
一六八、副詞語根結合法の法則 ……144——115
この法則に依て成立する文例 ……115

一六九、語その儘副詞なるもの ……115
一七〇、五種の副詞及び場所の副詞 ……116
場所の副詞の類語表……〃
一七一、時の副詞の例……116——117
一七二、度數の副詞と數量の副詞……117
度數の副詞……〃
量の副詞……〃
一七三、性質の副詞 ……118——119
第七章 接 續 詞 ……(120——129)
一七四、接續詞の定義とその基本語と例 ……120
接續詞の基本語の表と例……〃
一七五、dang 接續詞と轉用と實例 ……121
dang を理由と時事との副詞と命令の助動詞に用ふる例……〃
接續詞としての dang 攝開法に用ふる例 ……〃
一七六、開攝法に用ふる接續詞 ……121——122
疑問接續詞として用ひらるゝ gam 等の十一語 ……122
一七七、副詞より轉じたる接續詞の表……122——123
一七八、助辭轉用の接續詞と二類の接續詞 ……123
助辭轉用の接續詞と類語……〃
一七九、同位接續詞 ……123
同位接續詞の定義……〃
同位接續詞の四種類、漸加、撰擇、相反、推理……〃
一八〇、漸加接續詞 ……123——124

漸加接續詞の定義とその文例を擧ぐるについて ……124
漸加接續詞の例文……〃
一八一、撰擇接續詞 ……124
撰擇接續詞の定義と例文……〃
一八二、相反接續詞 ……125
相反接續詞の定義とその例文……〃
一八三、推理接續詞 ……125——126
推理接續詞の定義とその例文 ……125
一八四、屬位接續詞 ……126
屬位接續詞の定義とその例文……〃
一八五、同格接續詞 ……126
同格接續詞の定義と例文……〃
一八六、原因接續詞と結果接續詞 ……126——127
原因接續詞文例 ……126
結果接續詞文例 ……127
一八七、目的接續詞と條件接續詞 ……127
目的接續詞文例……〃
條件接續詞文例……〃
一八八、反對接續詞 ……127——128
反對接續詞の同位と屬位の異なる用法 ……127
反對接續詞の文例 ……128
一八九、比較接續詞 ……128
比較接續詞に同度と不同性との二種……〃
同度比較接續詞文例……〃

不同性比較接續詞文例 ……128
一九〇、廣褒接續詞と時間接續詞 ……128——129
廣褒接續詞文例 ……128
時間接續詞文例……〃
一九一、從屬詞の種々相 ……129
從屬詞の諸種の文例……〃

第八章 助　　辭……(130——146)

一九二、助辭の定義と例 ……130
助辭についての說明……〃
一九三、助辭の大別 ……130
單語助辭語類 ……〃
複語助辭語類……〃
一九四、助辭の類別 ……131
意義を主として助辭の三大類別……〃
第一類助辭表……〃
第二類助辭表……〃
第三類助辭表……〃
一九五、助辭分類について ……132
格語尾となる助辭表……〃

第一類　助辭……(132——140)

一九六、ni 强勢の用法 ……132——133
ni 强勢詞の用法……132

ni 强勢の諸種用法の文例……132
一九七、ni 助辭補足と差別の用法 ……133
ni 助辭を補足詞として用ふる根據證文 ……〃
ni 助辭を强勢詞としたる文例 ……〃
一九八、kyis 等助辭の諸種用法 ……133——134
kyis 等の五の具格助辭が主格に用ひらるゝ例……134
kyis 等の五助辭がその本格なる具格に用ひらるゝ例 ……〃
kyis 等の具格助辭が理由詞に用ひらるゝ例 ……〃
一九九、kyi 等助辭の諸種用法 ……134——135
1. 所有の意を示す助辭と例 ……134
2. 二語の親しき係屬を示す助辭と例……〃
3. （にある）の意を示す kyi 類助辭と例 ……135
4. （と云ふ）の義を示す kyi 類助辭と例……〃
5. （の如き）の意を示す kyi 類助辭と例……〃
6. （に）の意を示す kyi 類助辭と例……〃
7. （けれども）の義を示す kyi 類助辭と例……〃
二〇〇、事物を處分する助辭 ……135——136
la 義七語同義用法の解……135
1. 相對することを示す語……〃
2. 地位を示すところの語……〃
3. 差押へる意にて（と）の意を表するもの ……135
4. 添へる意に用ふるもの……〃
5. （にて）の意に用ふるもの ……〃
6. （のために）の意に用ふるもの ……〃

7. （の如く）の義に用ふるもの……136
二〇一、na 助辭の諸種用法……136——137
na 助辭が業、爲、依、時の四格語尾に用ひらるゝ例 ……136
na 助辭特殊八用法とそれ等の各例 ……〃
二〇二、la 助辭十種の用法 ……137——138
la 助辭が業、爲、依、時の四格語尾に用ひらるゝ例……137
la 助辭六種の特異用法とそれ等の各文例……138
二〇三、事物の方向を示す助辭 ……138——139
su, ru, ra, du, la, tu が事物の方向を示す助辭とその例…138
na 助辭のみは方向を示さずして働く場所を表す事……〃
二〇四、從格と似從格との助辭……139
1. nas と las とは擇ぶ所なく從格に用ひらるゝ事と例 …〃
2. nas と las とは似從格にも擇ぶ所なく用ひらるゝ例 …〃
二〇五、同種中の差別に用ふる助辭 ……139
同種同類中の差別に nas のみを用ふる事と例 ……〃
二〇六、las 助辭の撰擇或は差別用法……140
同基異類を撰ぶ las 助辭 ……〃
複基中の差別に用ふる las 助辭 ……〃
二〇七、nas 助辭略詞と接續詞用法 ……140——141
nas 助辭を略詞に用ふる例 ……140
bar と thug との nas に對する用法の同異と例……〃

第二類助辭 ……(141——145)

二〇八、分合する助辭 ……141

ni 助辭を分合差別に用ふる事……141
ni 助辭、上に差別を、下に差別を、普通差別を表す三例 …〃
二〇九、一致不一致の裝飾と攝用助辭 ……141——142
一致裝飾詞 kyang, yang, ang の三語と例……141
不一致裝飾詞 kyang, yang, ang の三語と例……142
同三語が攝詞に用ひらるゝ例、その說明……〃
二一〇、kyang, yang, ang 三語の結合法則 ……142——143
結合法則の表と例、同語用處の相異を表す ……142
二一一、指定する ni 助辭 ……143
格語尾の指定說明語となる ni 助辭……〃
二一二、詩歌に於ける ni 助辭用法 ……143——144
ni 助辭が詩歌に於て補足語として用ひらるゝ事と例 ……143
二一三、助辭の rang と tsam の用法……144
（のみ、ばかり）の意に用ひらるゝ rang と tsam の例 ……〃
rang を副詞として（如し）或は（の通り）の意に用ふる例 …〃
tsam を副詞として（ほど）の意に用ふる例 ……〃
二一四、疑問の助辭 ……144——145

第三類助辭……(145——146)

二一五、豫想文中條件的に用ふる助辭 ……145
na 助辭を（ならば）の意にて條件的に用ふる例 ……〃
二一六、抑へて意を飜す助辭 ……145——146
抑へて飜意する助辭には na-ang, na-yang の二語 ……145

na 助辭を（を）或は（に）の意に用ひて飜意する例……145
la 助辭を（に）或は（が）の意に用ひて反意を表す例……146
二一七、理由、必要、時等を示す助辭 ……146
dang を助辭として時の意に用ふる例 ……〃
（の爲に）の意を示す語は副詞にして助辭に非る事……〃

第九章感歎詞 ……(147——150)

二一八、感歎詞について ……147
感歎詞の格に入れし事とその本分……〃
二一九、感歎詞の種類 ……147
二二〇、上流下流に對する呼聲……147
上流人に對する呼聲……〃
下流人に對する呼聲……〃
二二一、喜悅、哀愁、讃歎、同情の歎詞 ……148
四歎詞各種の語類表……〃
二二二、驚歎、返事、贊成是認の歎詞……148——149
驚歎の語類表 ……148
返事の語類表……〃
贊成是認の語類表……〃
二二三、不幸不快、愛情、痛苦の歎詞 ……149
不幸不快の語類表 ……〃
愛情の語類表……〃
痛苦の語類表……〃
二二四、疲勞、冷感、熱感の歎詞 ……149

三感各自の語類表……〃
二二五、恐怖、立誓、請願の歎詞……149——150
三情各自の語類表……150
二二六、感歎詞語句文章……150
感歎詞語句文章の例……〃
第三篇 文章篇……(151——225)
第一章 音聲調和法……(151——163)
二二七、西藏文の定義……151
定義の解釋、文章語の構成例解……〃
文章構成は單語後置字の音性に支配せらる……〃
二二八、西藏文は音聲調和を主とす……152
藏文構成の第一要件は後置字と隨行語との性一致或は音聲調和にある事……〃
二二九、音聲調和の法則……152
性入法の音聲の法則と解釋……〃
二三〇、基字、前置字、後置字性別表……152——154
基字性別表……153
前置字性別表……〃
後置字性別表……〃
後置字性細別表……〃
前表に對する注意……154
二三一、基、前、後、三置字性別表の根據……154
發聲努力の强弱に由て性を分つトホンミーの法則……〃

二三二、前舉法則の說明……154——155
特に後置字は續行言語に對して音聲調和の主となれる事……155
二三三、後置字の男性字が男性字を引く例表……155
二三四、中性後置字が中性語端を引く例表……155
二三五、女性後置字が女性語端を引く例表……156
二三六、音便を主とする結合……156
同性に依らずして音便調和を主とする結合の例……〃
二三七、同性結合のために用字を代へし例……156——157
rgya dkar を rgya gar とせし例解……157
後續字の性を代へたる例解……〃
二三八、助辭、及び格語を引く方法……157——158
格語尾及び助辭を引く法則……158
二三九、格語尾等引用法則の說明……158
二四〇、同性結合と音便結合について……158——159
同性結合と音便結合との多寡の比例……158
屬格語尾との結合について兩者の多寡例……159
開合詞の助辭と前行語の結合について兩者の多寡例……〃
二四一、同性、音便併用結合の歌……159——160
實例として淨音海の作歌……160
二四二、合性音便併用の文例……160
ミラレェバ傳の一節とそれの音調の說明……〃
二四三、後置字の特質……161
トホンミーの後置字四法の結合に對する注意……〃

二四四、普通作文にも合性音便は必要……161——162
合性音便の正當なる例と不正當なる例……161
二四五、音便を知るの法……162——163
音便熟通に必要なる參考書（譯書の分）……162
同前參考書（西藏人著書の分）……〃
第二章　文章の分解……(164——203)
二四六、文章の種類と構成……164
單文の構成と例……〃
聯構文の構成と例……〃
複文の構成と例……〃
二四七、單文の構成要素……165
四要素より成る單文と二要素のみのもの……〃
二四八、單文四部の釋義……165
二四九、四部を含める單文分解の表……165——166
表についての注意……166
二五〇、主辭の構成……166
七樣の主辭構成と例……〃
二五一、主辭結合語の種類……167
主辭結合語の六種類と例……〃
二五二、賓辭動詞の副詞的添加……167——168
副詞的添加の七種類と例……167
二五三、分解のための單文例……168

二五四、上記單文分解表……168——169
二五五、分解すべき單文の例……169
二五六、鳩王とその從屬軍隊……169——171
二五七、鳩王と軍隊の談(二)……171
二五八、鳩王と軍隊の談(三)……172
第三章　聯構文の分解……(173——184)
二五九、聯構文と四類接續詞等……173
聯構文の定義とその說明……〃
四類接續詞の名目とその例文……〃
二六〇、關係代名詞と副詞との聯合文例……173
關係代名詞聯合の例文……〃
副詞にて聯合の文例……〃
二六一、省約文章……174
主辭の省約文例……〃
賓辭の省約文例……〃
撰擇的省約文例……〃
反對的省約文例……〃
推理的省約文例……〃
二六二、dang の語を(と)接續詞に用ふ……174——175
複合的主辭の例……175
dang 接續詞にて結合したる二主辭の分離し難き例……〃
二六三、單一の事實と二主辭……175——176
二六四、二の名詞、句等の結合……176

yang na の結合に二語が主辭となる例……176
同結合にて二語の一が撰び取らるゝ例……〃
二六五、接續詞 dang の省略……176——177
dang の省略可能なる附加的接續詞の事 ……176
dang の省略したる偈頌の例……〃
名詞間の dang 省略は可能にして動詞間には無き事……177
二六六、西藏文の一特質 ……177
珠數一貫の如き連續西藏文……〃
連續文飜譯についての注意……〃
二六七、レェチュンパ說法勸請の序……178
二六八、說法勸請の本文……178——179
二六九、ミラレェパ尊者說法の序……179
二七〇、レェチュンパ再勸請說法 ……179——180
二七一、一文の切目とその意義……180
二七二、他の弟子の說法勸請 ……180——181
二七三、連續長文の分解的方法……181
二七四、聯構文分解の例文……181——182
例文についての注意 ……182
二七五、聯構文分解の規則 ……182——183
二七六、聯構文分解表 ……183
二七七、分解を要する聯構文例……184

第四章 複文の分解……(185——203)

二七八、複文の定義と從屬文の釋 ……185
二七九、從屬文の種類 ……185
三種の從屬文とそれ等の定義……〃
二八〇、名詞分詞引用の種類 ……185——186
同位、關係代名、關係副詞、疑問代名、疑問副詞の例 ……186
二八一、名詞文句について ……186
名詞文句が名詞の作用をなす五狀態……〃
二八二、文句の動詞に對する主辭 ……186——187
文例に對する解釋 ……187
二八三、動詞に對する目的 ……187
文例の解說……〃
二八四、動詞に於ける附加文句……187
附加文句の實例と解說……〃
二八五、名詞に對する同位句……188
同位句の例と解說……〃
二八六、名詞文句の分解とその文例 ……188——189
名詞文句分解の順序と文例 ……188
二八七、形容詞文句とそれの結合 ……189——190
形容詞文句と名詞との結合方法と文例 ……189
文例の解說 ……190
二八八、關係代名詞の省略 ……190
二八九、形容詞文句の文例 ……190——191
二九〇、副詞文句……191

副詞文句の定義と注意 ……191
二九一、副詞文句を有する文の分解……191——192
分解の例文集 ……191
二九二、副詞文句の文章の分解すべき文例 ……192——193
二九三、雜種文について ……193
雜種文の定義と文例……〃
二九四、雜種文分解の表 ……194
二九五、分解すべき雜種文の例……195
ミラレェバ傳、尊者の父の臨終前……〃
二九六、父の遺言と逝去……195——196
二九七、伯父伯母の財產管領强制……196——197
二九八、伯父伯母の横暴殘虐 ……197——198
二九九、生母の困難とジェセー兩親の同情 ……198——199
三〇〇、財產返還請求の準備 ……199
三〇一、財產返還請求の宴會 ……199——200
三〇二、生母の席上雄辯……200——201
三〇三、伯父伯母の暴言暴行 ……201——202
三〇四、生母の哭泣 ……202
三〇五、親族の慰籍と生母の勇斷 ……203

第五章 文章の構成……(204——208)

三〇六、文章構成について ……204
文章構成の方法と例解……〃

三〇七、他動詞を用ふる文章構成 ……204
三時限を用ふる他動詞の文章構成と例解……〃
三〇八、主辭に形容詞、句を用ふる單文構成法 ……204——205
形容詞句を用ふる單文構成と例解 ……204
三〇九、賓辭に副詞を加ふる文の構成 ……205
三一〇、二單文を一單文にする法 ……205——206
分詞を用ひて二單文を一單文とする例 ……206
三一一、一文を絕對句として單文の構成 ……206
三一二、不定詞を以て二文を單文に構成 ……206——207
三一三、同位名詞句にて二文を單文に構成……207
三一四、副詞句を以て二文を單文に構成 ……207——208
三一五、單文構成雜種の文例……208

第六章 聯構文構成 ……(209——219)

三一六、聯構文の構成と內別 ……209
聯構文の定義と其れの五樣式……〃
三一七、附加接續詞にて聯構文構成と例……209
三一八、關係代名詞に依て聯構文構成 ……210
三一九、撰擇接續詞の聯構文構成 ……210
その文例と構成上の注意……〃
三二〇、反對接續詞の聯構文構成 ……210——211
三二一、諸例規に依る聯構文構成 ……211
三二二、諸例規に依て聯構文を構成すべき例……212

猫上人と鼠……212——219

第七章　複文の構成……(220——221)

三二三、聯構文と複文との相異……220

三二四、名詞文句として結合する復文構成……220——221

同位格名詞文句として ste 語にて結合する複文の例……220

同位格にて關係代名詞を用ひて結合する複文の例……〃

三二五、名詞句として複文構成の文例……221

三二六、形容詞として複文構成の例規……221——222

形容詞句として結合する例式……221

例文の解說……222

三二七、形容詞句として複文構成の文例……222

三二八、副詞句として複文を作る例規……222——223

三二九、關係代名詞に依て複文とせらるゝ例式……223

三三〇、副詞句に依て複文構成の文例……223——224

三三一、單文を複文とする雜種の文例……224——225

備　考　篇……(227——252)

一、文字文典創作者の精神と組織の根據……227

二、根本文典三十偈と性入法の無視と誤解……227

三、新舊兩譯の文典根據たる三十偈と性入法……228

四、文法變化の異論者の言を說破す……228——229

通俗語發音變化の著名なる事と例……228

文語として一千有餘年不變なりし事……〃

俗語もそ(　　ホンミーの法則に據れる事……229

五、西藏文法根本的四特質……229

一、字母單位の特質……〃

二、字母性別の特質……〃

三、各性各別表作の特質……〃

四、文章構造の特質……〃

六、字母單位の特質……230——231

西藏語一字一音の根據……230

a 字は明成音（子音）なる事……〃

a 類四音 i, u, e, o は獨立したる文字なきこと……〃

四音は韻として符號のみ存すること……〃

四韻符が明成三十字に加つて百二十字となること……231

七、西藏語阿字についての實話……232——235

サラツト氏著藏英大辭典の韻字表について……232

著者サラツト氏に藏語には全く韻字なく符號のみあることを指示す……〃

獨立字形ある a 字を符號のみなる韻に入れたる失策……〃

サラツト氏の反駁、一切の語に a 字は母音との主張……〃

a 字を亦子音中に入れたる同氏著の辭典を指示して反證す……233

サ氏は子音中に a 字を入れたるは誤謬として子音二十九說を主張す……〃

尙ほサ氏はングルチユ文典の子音二十九說に依てトホンミーの三十說を否定す……〃

その否定の根據無きを詳說し、トホンミーの原則を確說す……234

サ氏はその說を了會して遂にその改說を自著の西藏文法集錄の序に發表す ……235
八、字母性別の特質 ……235——236
三十字母を基字として、男、中、甚女、石女の五性に分つ……235
後置十字を男、中、女（小分八性）、前置五字を男、中、女、甚女の四に分つ事 ……236
九、字母に性を分つの根據 ……236
トホンミーの四法則中の第三律の原文……〃
第三律の說明……〃
性の差別は發聲努力の强弱等に依ること……〃
一〇、各性各別表作の特質……236——237
前置字の性に準じて二動三時を表すこと ……237
前置字なき動詞は後置字の性に依て表さるゝこと ……〃
一一、文章構造の特質 ……238——239
助辭を用ひざる文例 ……238
助辭を用ふる文例……〃
自動詞にて標準語ある例……〃
自動詞にて標準語なき例……〃
他動詞にて標準語なき例……〃
他動詞にて標準語ある例……〃
形容詞を用ひて構成する文例……〃
形容詞を連體法に用ふる例……〃
西藏語文章構造法は我國文構造法に酷似す……〃
藏文構成に於ける特殊なる異點……〃

言語聯續の間に於て音聲の調和を主とすること ……238
調和の文例と不調和の文例、その理由 ……239
一二、綴字法の特質（枝末的四特質の一）……239——241
西藏語には一字一語の觀念語なき事 ……239
成語には少くとも基字と後置字の二を含む事 ……240
現今後置字なき基字のみの語も其用法や發音には後置字の音のあるを自表す……〃
綴字法は縱重橫列の二法を一綴中に用ふる語のある事例 ……〃
一三、梵語表音の特質（枝末的特質の二）……241——243
西藏文字は梵語用ナーガリ字體に準じて作りし事 ……241
梵、藏、假名、羅馬の四字體に依る對照表……〃
現行梵音と一致せざるチャ等の西藏語發音 ……242
梵語成語に對する梵、藏、國、羅の對照表 ……243
一四、敬語法の特質（枝末的特質の三）……243——249
sku（御身）を（御）として普通語に加へて敬語とする語類表 ……244
phyag チャク（御手）を（御）とし手の類語に加へて敬語とする表……〃
dbu ウー（御頭）、ṣhab シャブ（御足）を（御）として用ふる敬語 ……245
貴人に屬する物品、家舍等に用ふる敬語表 ……246
每語その語形を異にする敬語表 ……247
動詞にも語形の異なる敬語の多きこと ……248
一五、形式語の特質（枝末的特質の四）……249——252

國語の形式語と藏語のそれとの順序樣式の相似せる事 ……249
形容詞の位置及び助辭が我國語のに酷似せる例と解……〃
（の）を（にある）の意に用ひて前行名詞を形容詞とするは
國、藏同一なる事 ……250
（の）の藏語に五語あること、その音調法……250
la 義七語にも音聲調和法のあること……251
形式語特質は文章構造特質の部分的なること……〃

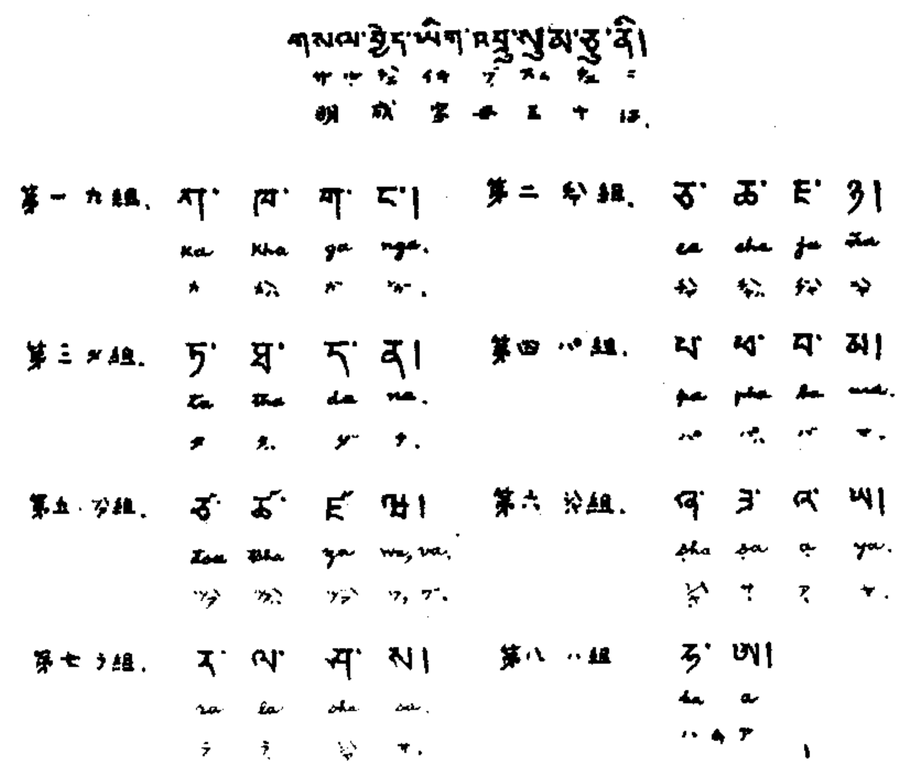
索　引 ……253

西藏文典

第一篇　文字篇

第一章　字母と發音

一、字母。西藏文字は表音字にして、三十の字母と四個の韻符號あり。それ等は以下の如し。



（例えば例にカとか、ケとか認せれば、カとハとを別々に發音するべき筈。カと發音すると同時に、ハが響く程度にkhと發音すべし。kh、gh、ngh などと同樣なりと知るべし。第六組のsh、s、hの三字の發音假名の下に"點を附したるは、同一假名文字の點を附せざるものに比して、その發音の努力の強きことを表せるものなり。これ等の基準は、發音努力の強弱のみを考へたるものにして、聲の出所等は同一なり。例へばsh、s、h（ha）は聲の強き喉音なるに、sh、s、hは基本的強き喉音のアはなれし。）

韻字符號。 gi gu　shabkyu　agrengku　naro.

二、明成字と韻字符號との合同

ཀི་ཀུ等の符號が何れの明成字と結合するも、ヘキクは イとなり、ヘクッ、ヘクは ウとなり、ヘケンは エとなり、ヘコ、ヘコは オとなる。其他例以下の如し。

ki ku ke ko.	khi khu khe kho.	gi gu ge go.	ngi ngu nge ngo.
キ ク ケ コ.	キヒ クフ ケヘ コホ.	ギ グ ゲ ゴ.	ンギ ングゥ ンゲ ンゴ.
ci cu ce co	chi chu che cho.	ji ju je jo.	ñi ñu ñe ño.
チ ツ ツェ ツォ	チヒ チュ チェ チョ	ヂ ヂュ ヂェ ヂョ	ニ ニュ ニェ ニョ
ti tu te to.	thi thu the tho.	di du de do.	ni nu ne no.
ティ トゥ テ ト.	ティ トゥ テ トゥ.	ディ ドゥ デ ド.	ニ ヌ ネ ノ.
pi pu pe po.	phi phu phe pho.	bi bu be bo.	mi mu me mo.
ピ プ ペ ポ.	ピ フ ペ ポ	ビ ブ ベ ボ.	ミ ム メ モ.
tsi tsu tse tso.	tshi tshu tshe tsho.	dzi dzu dze dzo.	wi wu we wo.
ツィ ツ ツェ ツォ.	ツィ ツ ツェ ツォ.	ヅィ ヅ ヅェ ヅォ.	ウィ ウ ウェ ウォ
zi zu ze zo.	si su se so.	i u e o.	yi yu ye yo.
シ ス セ ソ	シ ス セ ソ	イ ウ エ オ.	ユィ ユゥ ユェ ヨ.
ri ru re ro.	li lu le lo.	shi shu she sho.	si su se so.
リ ル レ ロ.	リ ル レ ロ	シ シュ シェ ショ.	シ ス セ ソ.
hi hu he ho.	i u e o		
ヒ フ ヘ ホ.	イ ウ エ オ.		

三、音の生處と作者と努力

月氏文字經に依れば字母を韻音するに當て、音の生處と、作者と、努力との三を明かに知るべし。西藏字母の各自の生處と作者とは以下の如し。

生處	字母發音	作者
喉	ཀ་ཁ་ག་ང་ཧ་ཨ། ka kha ga nga ha a. カ カハ ガ ンガ ハ ア.	喉
顎	ཚ་ཆ་ཇ་ཉ་ཏ་ཐ་ད་ན་ཤ་ཧ་ཡ་ཨི་ཨེ། ca cha ja ña ta tha da na sha ha ya i e. チャ チャハ ジャ ニャ タ タハ ダ ナ シャ ハ ヤ イ エ.	舌の中央
齒	ཏ་ཐ་ད་ན་ས་ལ་ཟ། ta tha da na sa la sa. タ タハ ダ ナ サ ラ ザ.	舌端
唇	པ་ཕ་བ་མ་ཝ་ཨུ་ཨོ། pa pha ba ma wa u o. パ パハ バ マ ワ ウ オ	唇
舌端頂上	ར། ra ラ	舌端近處
生處未詳	ང་ཉ་ན་ཨ། nga ña na ma. ンガ ニャ ナ マ.	

字母の音が喉或は唇の生處より生ずるものは、各自の生處を以て作者とし、顎に生處を有つ音は、舌の中央を以て作者とし、齒音は舌端を以て作者とし、ラ字は舌端に近き處を以て、作者とすることは表示するが如し。

努力に内外の二種あり。外努力は外部に聲を發するやうに、努力を有する聲なるが故に、然かく名づくるなり。發聲大小の區別に依れば、聲の大なる音聲は

ཀ་ཁ་ག་ང་ཚ་ཆ་ཇ་ཉ་ཏ་ཐ་ད་ན་ཤ་ཧ་ཡ་ཏ་ཐ་ད་ན་ཤ་ཧ་ཡ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ等にして、

カ カハ ガ ンガ チャ チャハ ジャ ニャ タ タハ ダ ナ シャ ハ ヤ ア イ ウ エ オ

ཀ་ཁ་ཅ་ཆ་ཏ་ཐ་པ་ཕ་ཙ་ཚ་ཞ་ཟ་ཤ་ས་等は、その聲小なれば無聲と名づけらる、聲を外部に發する時、呼吸の大小の差別に依て、呼吸の大なるものを སྲོག་ཆེན་（ソックチェン）大生命と云ひ、息の小なるものを小生命と云ふ。大生命の字母は以下の如し。

ཁ་ཆ་ཐ་ཕ་ཚ་འ་ཞ་ཟ་ཧ་གྷ་ཛྷ་དྷ་བྷ་ཌྷ་にして、その他は皆小生命なり。この中ゑて ཁ་ཟ་ཞ་ས་ཧ་等は發聲の時、息ヲ聲を帯ぶるが故に有聲聲と名づけらる。内部努力は咽喉より發聲する必要あるが故に、ཨ字を除いて大生命の字母は皆閉の努力を有す。ཨ字は喉を閉かずして發聲するが故に開の努力を有するなり。ཀよりཛに至るまでの十九字は、その生處に集合の力大なるが故に、集合努力聲と云ふ。ཡ་ར་ལ་ཝ་等はこれ等よりは、集合の努力が緩なるが故ゑ、集合小努力聲と云ふ。

されば此等の文字を讀む時、一々各自の生處と作者と努力とを考慮して、それ等と一致する樣に發聲する事が緊要にして、例せば明成字ཀの(喉)に韻字ེイ(顎)が合同する時、喉と顎との二音が同時ゑ結合して發聲すべし。特に韻字を結びつけし字の發音は十分注意する必要あるを見るなり。ཁམས་(於ゝ西藏)洲の或地方に於ては ཚོ་オ、ཤགས་ཚེ་（シャク ナエ）ウのあるなしに拘らず འ と同一の語方をなせり。」ジッツヱ、スンダツ、エミ、エ四東。我國にても イとエとを誤讀發音するもの多し。能く注意して讀むべきなり。

四、綴字の種類

これ等の文字が二字以上六字以下集合して一綴をなす。一綴ゑて一語をなすものあり。二綴以上五六綴にて一語をなすものあり。その一綴をなすものを文字の數ゑて分てば五種あり。以下の如し。

二字	འཁའ་	Khaa	カー	口。
	ཇའ་	jaa	チャー	茶。
	ཉའ་	naa	ニャ	魚。
	དོན་	don	トン	意味。
	འདི་	adi	ヂー	これ。
	པག་	pag	パク	煉瓦。
	བལ་	bal	ベール	羊毛。
三字	བཀའ་	bkaa	カー	命令。
	བཟང་	bzang	サン	善い。
	མཆོག་	mchog	チョク	最勝。
	གསོལ་	gsol	ソル	申上。
	དོགས་	dogs	トク	恐。
	མགུལ་	mgul	グル	咽喉。
四字	འགོགས་	agogs	ゴク	滅。
	གསུངས་	gsungs	スン	説(敬)說く。
	དབུགས་	dbugs	ウク	呼息。
	གཤགས་	gshags	シャー、シャク	正直。
五字	སྐྱབས་	skyabs	キャブ	保護。
	འགྱངས་	agyangs	ギャン	遷延。
	བསྡིགས་	bsdigs	ヂク	睨視ツケル。
	བསླབས་	bslabs	ラブ	學べき。
	དབྱངས་	dbyangs	ヤン	音調。
六字	བསྒྱུརད་	bsgyurd	ギュル	變へたる、翻譯せり。
	བརྒྱགས་	brgyags	ギャク	富。
	བསྒྲིགས་	bsgrigs	ヂク	整理、序立。
	བསྒྲིབས་	bsgribs	ヂブ	蓋障。

二綴より五綴ゑ至るまでの例は以下の如し。

二綴	ཀུ་ཤུ།	kushu	クシュ	林檎
	ཀླུ་སྒྲུབ།	klu sgrub	ルーツブ	龍樹。(菩薩)
	སྐུ་གསུམ།	sku gsum	クスム	三身。
	དཀོན་མཆོག།	dkon mchog	コンチョク	寶。
三綴	བཅོམ་ལྡན་འདས་	bcom ldan adas	チョム、デン、デェ	世尊、薄伽梵。
	ཀུན་བརྟགས་པ་	kun btags pa	クン タク パ	偏計所執。
	དྲིན་གཟོ་བ་	drin gzo ba	ヂン ソー ワ	報恩者
四綴	ཁ་ལོ་སྒྱུར་བ།	kha lo sgyur pa	カロ ギュル ワ	調御丈夫、御者。
	དེ་བཞིན་གཤེགས་པ།	de bshin gshegs pa	テシン セッ パ	如來
	འཇིག་རྟེན་དབང་ཕྱུག།	ajig rten dbang phyug	ジック テン ワンチュク	世自在。
五綴	ཁ་ན་མ་ཐོ་བ།	kha na ma tho ba	カナマトワ	罪悪。
	ཁ་དོག་མཐའ་ཡས་པ།	kha dog mthaa yas pa	カドク ター イェー パ	諸色。
	རྡོ་རྗེ་རྩེ་དགུ་པ།	rdo rje rtse dgu pa	ドル ジェ ツェ グ パ	九鈷金剛杵。

等の如し。六綴以上のものには、人名書名等ありて、その數甚だ少なけども、一二の例を擧ぐれば以下の如し。

六綴	འཇམ་དཔལ་གཞོན་ནུར་གྱུར་པ།	ajam dpal gshon nur gyur pa	ジャム ペー ション ヌル ギュル ワ	曼殊師利法王子、妙吉祥童子。
	སྲོང་བཙན་སྒམ་པོའི་རྣམ་ཐར།	srong btsan sgam poi rnam thar	ソン ツァン ガム ポイ ナム タル	宗讃岡保王(ソンツェンガンボ)傳
七綴	ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས།	yang dag par rdzogs pai sangs rgyas	ヤン ダク パル ゾッ パイ サン ゲェ	眞全圓滿、正覺者、(漢)正徧知。
八綴	དམ་པའི་ཆོས་པད་མ་དཀར་པོའི་མདོ།	dam pai chos pad ma dkar poi mdo	タム パイ チェー ペッ マ カル ポイ ドー	妙法白蓮華經。(漢)法華經の名。

等の如く、甚しきは二十七八綴を以て、一書の名となすものあれば、注意すべきものなり。

五　文字と言語との區別

古來西藏の觀念語には一字一語のものなし。上記の如く觀念語となれるものは皆二字以上集れるものなり。それが根據となれる法則は以下の如し。

ཇེན་ལས་ཀྱང་ཡིག་ཆུང་ཙམ་ཞིག་ཡོད་ན། ། ཚིག་ཀུན་ཏུ་ཐུན་ཏུ་ཡོད་ཅིང་ཞེས་ཏེ། །

チン ジュク チュ カ マ ジュク ナ 、 ミン ジュン ジュル ワ ヨク ミ ジュク

後置十字(ཀ་ཁ་ག)を入れざれば、他語を結付けることはあり得べからず。

とあつて、基字に後置十字の中、何れかの一字を入れざれば語とならず。未成語には他の語を結びつけること能はざるが故に、文をなす事能はざるなり。然るに現今用ふる經典辭書等の中に、一字一語のもの甚だ多く存在するを見るなり。その例以下の如し。

ཀ 柱。 ཁ 口。 ཁུ 汁。 ང 我。 ངུ 泣く。 ཆུ 水。 ཅ 新聞、分。 ཇ 茶。
ka カ khu ク nga ング ngu ング chu チュ ca チャ ja ジャ

ཉ 魚。 ཏ 編。 ཐ 言葉。 ད 今。 ན 年齢。 ཕ 父。 མ 母。 ཕ 男、牡。
ña ニャ ta タ tha タ tho ト da ダ na ナ pha パ ma マ pho ポ

མོ 女、牝。 བུ 男子。 བ 牛。 མི 人。 མེ 火。 ཚེ 生命、時。 ཚོ 色。 ཝ 紙。
mo モ bu ブ ba バ mi ミ me メ tshe ツェ tsho ツォ wa ワ

ཟ 食物。 རི 山。 ཟ 山羊。 ཡེ 最初。 རེ 望。 ཏུ 角。 ཡོ 時、月、數。 ལུ 坂。
za ザ ri リ za ザ ye イェ re レ tu トゥ yo ヨ lu ル

ལི 銅。 ལོ 年齢。 ཤ 肉。 ཤི 死。 ཤོ 酸。 ས 地。 སོ 歯。 སུ 誰。
li リ lo ロ sha シャ shi シ sho ショ sa サ so ソ su スー

等にして、これ等は皆舊譯時代には、何れか後置字の伴ふものなりしが、新譯時代に至つて省略せられしものなり。但し現今とても實際には何れかのあるが如くに、カー、ターなどと發音せり。文法上は後置字の存する語と同一の取扱ひをなせり。されば西藏の觀念語は二字以上集りたるものにして、一字のみのものは字母なりと知るべし。これに依て、文字と言語との別を見るべし。

六　語句間別の點と線

前記の西藏語には各綴の間に、點を附してその區分を明かにせり。この點を

西藏語にཚེག་ཆུང་と云ふ。綴を分つ點の義なり。句の終りには ཤད 一線の如き一線を置く。これ ཚེག་ཤད 一線と名づけらる。文段の終りか或は詩句の終には ཡིག་ཤད 二線を置き、文章の終には ཚེག་ཤད 四線を置くなり。ཡིག་ཤད は 11 として、ཚེག་ཤད は 11 11 の形狀に置かるゝなり。これ等の線を以て文の小分、中分、大分の別を明かにするなり。但し詩歌偈頌は文章と異なりて、每句の終には二線を用ひ、それ等の最終には四線を用ふるなり。又詩歌等に於て、每聯或は數聯毎の終りに同一の句を繰返すことあり。それ等を誌すこと省いて、逐語讀符として ××××の印を用ひて、同一句を逐語せる符號とせるなり。又古宗赤帽宗の埋藏典籍の文や偈の間には、一線二線の代りに ꠰꠰ の符號を用ふるなり。これは梵語の伊サルガに ꠰꠰ を非ずして、西藏獨得の ཚ་ཡིག ཤད 埋藏線として、普通典籍の一線二線等の代用をなせり。

第二章　綴字法

七　觀念語と形式語との區別

西藏語の觀念語は皆二字以上一綴となつて構成せるものなれども、形式語は一字にてその語を構成するもの甚だ多し。こゝに觀念語と云ふは、西藏語にはཡིན と云ふ術語にて表されたる語にして、字義は名の意なれども、有形無形の觀念を表したる語を云ふ義に用ひらる。されば"この類の語は一語にて獨立したる意義を有するものなり。その例は以下の如し。

ཏ་ཡ 母。 ཕ་ཡ 父。 ཁ་ཡ 母虎。 ཁ 掌。 ཡིད 心。 ཤེས་རབ 想。

形式語はཀྱི ཡོད 即ち助辭にて國語の"てにをは"等に相當する語にして、その語自體にて獨立したる意義を有せず、他の語の間に狹つて、始めてその意を表すものなり。この語は一字のもの甚だ多く、二字一綴のものもあるなり。その例以下の如し。

一字			
།	ལ、ར、ད、ཀ、ན、ཏ、ཡ	ཀ、ག、ང、ཏ、ད、ན	"は、即ち"、又"での義に用ひらる。三語何れも(テ)と發音す。
	にへ、リ、ッ、ク、ッ、ッ、ッ	の、ッ、ッ、ッ、ッ、ッ	

二字 ཀྱང། キャン、 もゞども、 ཡང། ヤン、 〃 ལྕ། チャ、 〃 ཀྱི། キー、 として、 ཁྱི། キー、 〃 ཆ། チー、 〃 ཡི། イー、 〃 ཤ། シー、 〃 の代用 ཡ། ヤ、 〃

八　書語を構成する字母の種類と名

一綴一語を構成する中に發音の主躰となる字母を、ཚིག་གི་ཁ（ツィ・キ）語基或は基字と云ふ。その基字の前行する字母を、སྔོན་འཇུག（ゾン・ジュク）前置字と云ひ、基字の後に續く字母を རྗེས་འཇུག（チン・ジュク）後置字と云ひ、尚はその後に續く字母を ཡང་འཇུག（ヤン・ジュク）再置字と言ふ。その構成に四種あり。一、基字と後置字。二 前置字と基字と後置字。三 基字と後置字と再置字。四 前置字と基字と後置字と再置字とより構成せらるゝなり。これ等を表示すれば

ཁྱེད། キュク 基字	御	ཀློག	求	ས	心	ཁྱབ	保	護しを。
	手。	前置字 基字 後置字	めう。	基字 前置字 後置字		前置字 基字 後置字 再置字		

字母三十字は何れも皆基字となり得るものなれども、その中にて後置となり得るものは、以下に擧ぐる十字のみに限れり。

ག་ང་ད་ན་ཕ་མ་འ་ཤ་ས། にして、この中の ག་ད་ཕ་མ་འ（カ タ パ マ ア）は前置字にも用ひらるゝなり。されば基字のみに用ひらるゝ字母は以下に擧ぐる二十字なりと知るべし。

ཀ་ཁ་ག་ཅ་ཏ་ད་པ་ཕ་ཚ་ཙ་ཟ་ཐ་ད་བ་ཨ་ཡ་ར་ལ། さして、再置字に用ひらるゝものは、ར と ས との二字なり。再置字ར は後置字の ག と ད と ཕ と ཚ との後に置かれ、再置字ས は後置字の ཀ と ཁ と ཏ と ཐ との後に置かるゝなり。

ར再置字の例　ཀྱུར། 旨。 クン 基後再。　ཚོར། 變 ド 基後再。 を。　ཕྱག 前基後再 ゾ 後。

ས再置字の例　ཤྱས། 力。 シュク 基後再。　དཔྱིས 韻 ペン 前基後再。 音韻。　ཐོབ 方 ポク 基後再。 便　ཁམས 界、 カム 基後置。 境、廣。

九　基字と支分と他字母との合成

基字には ཡན་ལаг（ヤン・ラグ）支分として、韻字符號を附くることあれども、前置、後置等には

決して附くることなし。ヘ キッ等の支分は決して一字母とならず。英語の如きは K と i との二字が結合して、Ki の一音となれども、西藏語の ཀི は ཀ 字母に、ི の支分が附加したるのみにて、二字の集合に非ずとそうなり。藏語には イ、ウ、エ、オ に對して特定の文字を有せず。明成字の例に ི 等の支分を添へて、ཨི ཨུ ཨེ ཨོ（イ、ウ、エ、オ）と各韻字を構成するなり。

基字は支分を自し得るのみならず、亦他の字を基字に合するものあり。それの上に置かるゝものあるを、ཚོ་ཐོག（コー・トク）、有頭と言ひ、それの下に置かるゝものあるを 前附字 ཐོག་ཡིག（トク・イク）と言ふ。基字には ཚོ་ཐོག་ཡིག（コー・トク・イク）として頭附両者を有するものあり。頭字となり得るものは、ཀ は ཏ として基字の上に置かれ、ཡ と ཝ と ཟ その儀として同樣に置かるゝなり。頭字はこの三字にして附字も亦三字あり。ཡ と ཀ と ཡ と ཏ と ཝ と ཟ として、これ外に ཡ は ཐ（ヤル）附字として、字母の下隅に置かるゝなり。それの例は次章に擧ぐべし。

一〇　ཚོ་ཐོག　有頭字

ཀ་ཚོ་ཐུང་ངམ་ཅུ་གཅིག་ཏུ། ウンゴ、十二、ニー、ニ。 ウ 頭 十 二（字）は

ཀ　ཁ　ག　ང　ཅ　ཆ　ཏ　ཐ　ད　ན　ཕ　ཡ。 rka, rga, mga, rja, rca, rta, rda, rna, rba, rma, rba, rya.

ཀ　ガ　ン　ジャ　チャ　タ　ダ　ナ　バ　マ　ブ　ヤ

ཀ་ཚོ་ཐུང་དྲུག་ཏུ། エンゴ、十六、ニ。 エ 頭 十 六（字）は、

ཀླ　ཀྱ　ཀྭ　ཁླ　ཁྱ　ཏླ　ཏྲ　ཏྭ　ཐླ　ཐྲ。 kla, kya, kwa, kla, kya, tla, tra, twa, tla, tra.

カ　キュ　クワ　カ　キュ　タ　ダ　ト　タ　ト

ཀ་ཚོ་ཐུང་བཅུ་གཅིག་ཏུ། サンゴ、十一、ニ。 サ 頭 十 一（字）は

ཟླ　ཟྱ　ཟྭ　ཕླ　ཐླ　ཚ　ཚ　ཟ　ཟ　ཟ　ཟ。 sla, sya, swa, pla, tla, tsa, sna, sba, sla, sma, sha.

ス　シュ　スワ　パ　タ　ツ　ス　ス　ス　ス　シャ

一一　ཕྱག་ལན　有附字

ཡ་ཕྱག་ལན་ཕྲུག་ཏུ། ヤ 附 七（字）は、

ཁྱ　ཁྱ　ཕྱ　ཕྱ　ཕྱ　ཐྱ　ཟྱ。 kya, khya, pya, pya, phya, tya, mya.

ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ

ར་ཕྱག་ལན་ཕྲུག་ཁ་ཅིག ラ 附 十、三（字）は、

ཁྲ　ཁྲ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ　ཁ。 kra, khra, gra, tra, thra, dra, pra, phra, bra, mra, shra, sra, hra.

ク　ク　グ　ト　ト　ド　プ　プ　ブ　ム　シャ　ス　フ

ལ　ཕ　ལ　ཕ　ལ　ཕ　ལ　ཕ　ལ　ཕ　ལ。 rla, gla, kla, rla, sla, pla.

ラ　ガ　カ　ラ　サ　パ

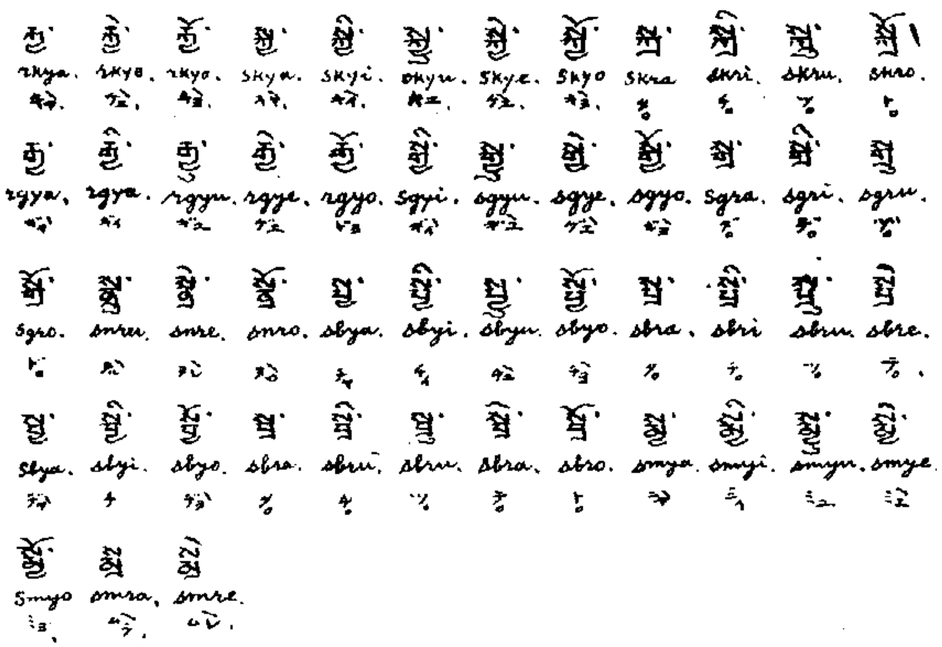
ཀ ཁ ག ང ཅ ཆ ཇ ཉ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཝ ཟ ཡ ཤ ས ཧ ཨ།

ワスル ダクパ 生 ツクニ
ワ 隔 拍 十六(字) は

Kwa, Khwa, gwa, cwa, mwa, Twa, thwa, Dwa, Nwa, swa, zwa, lwa, shwa, swa, hwa.

カ、ホ、ガ、ツ、ニヤ、タ、ダ、ツ、ニ、サ、ヤ、ラ、シ、サ、ハ、ハ

この外ヲ ཨ་ཀ་ཏ་ཡ་ནམ་ཏ། 頭、拍、両者を有する基字は以下の如し。



rkya. rkyo. rkyo. skya. skyi. skyu. skye. skyo skra skri. skru. skro.

rgya. rgya. rgyu. rgye. rgyo. sgyi. sgyu. sgye. sgyo. sgra. sgri. sgru.

sgro. smru. smre. smro. sbya. sbyi. sbyu. sbyo. sbra. sbri sbru sbre.

sbya. sbyi. sbyo. sbra. sbru. sbru. sbra. sbro. smya. smyi. smyu. smye.

smyo smra. smre.

第三章 讀方法、藏梵字母對照

一二 西藏讀方の習得法

基字と後置字とのみの語は、例へば ར་བ の如きは rab と讀み、ཨ ར の如きは bar と發音す。それを綴る時の讀方は ba-ra = bar。ra-ba = rab。と云ふ。前置字ある時はその前置字より u を附けて讀むこと、以下の如し。

ཨ་ཀ་ཧ は ba-u-ka-a = ka-ra。(ཨ前置ヲ ཀ基字及後置ガ付いて ཨ་ཀ་ཧ となるの意)

ད་ཀ་ན da-u-ka-naro. ko, ko-na-kon. と云ふ意は ད前置ヲ ཀ基字ヲナ ཨ を添へて ཀ コとなり、コヲ ན を添えて ད་ཀ་ན となるの義なり。

ཨ་ཕ་ཟ は ba-u-sa-gata-ga. ga-ra-ta da. da-shabchu-du. du-ba-sa. dub. と云ふ。即ち ཨ と ཟ で ག と ར と ཏ と ཟ の六字と一支 u とが集つて dub と云ふ發音となるなり。前記の綴りの讀方にて、ཨ前、ཟ頭、ག基、ར附、ཤ支、ཨ後、ཟ再置字と綴れる一語の音を dub と發音するなり。

(上記中、下ヲ圓點の附されたる字は舌を上顎ヲ當て、ﾀ と發音すべし。下ヲ、のある語は濁音の印されたれば舌端を高ク書て、ﾀ と發音をべし。)

一三 藏梵両字の對照表

西藏文字ヲ以て寫せるサンスクリット語(梵語)及び眞言等を讀む為ヲ、藏字と梵字との對照表を次に擧ぐべし。

ཡིག་ཆུང་ངུ། 韻字

ヤン イク

梵	अ	आ	इ	ई	उ	ऊ	ऋ	ॠ	ऌ	ॡ	ए	ऐ	ओ	औ	अं	अः
藏	ཨ	ཨཱ	ཨི	ཨཱི	ཨུ	ཨཱུ	ཨྲི	ཨཿ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ
	a	ā	i	ī	u	ū	ṛ	ṝ	ḷ	ḹ	e	ai	o	au	aṁ	aḥ
	ア	アー	イ	イー	ウ	ウー	リ	リー	リ	リー	エ	アイ	オ	アウ	アン	アク

གསལ་ཡིག། 明成字

क	ख	ग	घ	ङ	च	छ	ज	झ	ञ
ka.	Kha.	ga.	gha.	nga.	tsa.	tsha.	ya.	zha.	ña.
カ、	ホ、	ガ、	ガハ	ンガ、	ツァ、	ツァハ、	ヤ、	ザハ、	ニャ、
ट	ठ	ड	ढ	ण	त	थ	द	ध	न
ta.	tha.	da.	dha.	na.	ta	tha	da	dha	na.
タ、	タハ、	ダ、	ダハ、	ナ、	タ	タハ	ダ	ダハ	ナ、
प	फ	ब	भ	म	य	र	ल	व	
pa.	pha	ba.	bha.	ma.	ya	ra.	la.	wa, va.	
パ、	パハ、	バ、	バハ、	マ、	ヤ、	ラ、	ラ、	ワ、	ヴァ、
श	ष	स	ह	क्ष					
sha	sha	sa	ha	ksha					
シャ、	シャ、	サ、	ハ、	クシャ、					

第二篇　品詞篇

第一章　品詞敬語敬詞

一四　品詞の名と性

西藏國語の文法に於て、それ意義、形式、職能の上より品詞を見て、九種に分類をすること以下の如し。

1. ཟླ་མིང། 名詞。　2. མིང་བཏགས། 代名詞。　3. ཁྱད་བྱེད། 形容詞。
4. བྱེད་ཚིག། 動詞。　5. ཕྲད་ཚིག། 助動詞。　6. རྣམ་ཚིག། 副詞。
7. མཐའ་ཟླ། 接續詞。　8. ཚིག་ཕྲད། 助辭。　9. དགོད་ཚིག། 感動詞。

この中、名詞、代名詞、形容詞、動詞の四は觀念語にして、助動詞、助辭は形式語なり。副詞は少數の形式語を混入されども、それ多くは觀念語なり。接續詞と感動詞は他の觀念語に準ずべきものなり。

一五　觀念語と形式語その文に於ける例解

觀念語はその語自體に於て獨立したる意義を有するものなることは、既に説明せし所なるが、尚はその意義を明示するために、文章に於て例解すべし。

ངའི་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཡང་ཏེ། 我は金剛座に行くなり。　ཕྱི་དགོ་ཟླ་ཕ་ཆེ་ཆེ་ལ་ཨུཏ་པལ་ཁ་ཕྱེ། 明朝蓮の花は開くなり。

この二文に於て線の引きたる語即ち我、金剛座、行く、明朝、蓮、花、開く、と云ふ語は、一々各自に獨立したる意義ありて、一の觀念を完全に表し居るを以て觀念語と名づけ、その他の、は、に、なり、の、は、なりん、と云ふ語の如きは、他の觀念語に從屬して初めて意をなす。獨立して意味をなさざる語なれば形式語と名づけらる。但し形式語にても一の獨立したる意義ある語として用ひらるゝ時は、觀念語となるなり。例へば ཡིན ならん、或はなりんと云ふ義の形式語が ཡིན 像すと云ふ義を表す時は、一の觀念語として用ひらるゝが如し。されはそれを用ひたる語義に違ひて、その何れに屬するかを決定すべし。

一六　名詞構成と接尾語

名詞には接尾語を附加して構成するものと、附加せずして基語のみにて名詞なるものとあり。ཟླ་མིང། 即ち名詞なる語、本來の名詞は、大抵接尾語なしにその名詞の義を表すものなり。動詞的名詞、形容詞的名詞は二語以上の連續を除くの外は、皆接尾語を附して構成するなり。稀に一語のみにて動詞的名詞等を用ふることあるは、その接尾語を略せられたるものなり。接尾語なき名詞の例は以下の如し。

མི། 人。 རྟ། 馬。 སྟག 虎。 གཟིག 豹。 ཁྱི་ཟུག 狐。 ཁྱི་ཏོ 狼。

ཤིང 木。 མེ 火。 ཆུ 水。 ལྕགས 鐵。 ཆུ 水。 མེ་ཏོག 花。

ཟས། 食。 ཡིད 意。 སེམས 思想。 དུས 時。 ཁང་པ 家。

等にして、これ等の語に接尾語を附する時は、派生語となりて異なる意義を生ずるなり。例へば ཆུ ni を添へて ཆུ་ནི と言へば衆馬者となり、ཆུ་ཀ と云へば河となり、ས་ཕྱོགས 住地人、ཞི ཁ ཁ 北的、ཏུ ཁ 曲處、ཟས ni 思ふ事、ཁ ཏི ཟ 美女となるが如し。

一七　接尾語を有する名詞

接尾語には諸の種類ありて、單に物或は事を表す接尾語には、པ་ཏ ありて以下の如し。

ཆགས་ཡོད། 達なる事。　ཀུན་ཏུ 生ふ事。　ཏ ཏ ཏ 質物

等の如し。人或は持主等を表すには པ或は ཏ又は ཏ或は ཏ を附するさとあり。その例は以下の如し。

ཕ ཏ ཏ 父(生みたる人)。 ནག ཏ ཏ 黑人(黑き色者なる人)。 རྒྱལ ཏ ཏ 勝者(佛陀の一名煩惱に勝つ者)。

ཕ ཏ 敎生人(生れ出る者)。 ཐོས ཏ ཏ 聞く事。 ཐོས ཏ ཏ ཏ 聞く人。 ཏ ཏ ཏ 主人。

ཟ と ཟ とは女性を表す語なれども、中性接尾語の如くに人或は物を表すのみならず時の義を表するも用ひらるゝこと以下の如し。

ཟླ་ཕེ་ཟླ་を女性に用ふる例。

གཉེ་ཟླ 女友。 ཁྱུ་ཟླ 龍女。 ཟླ་ཁ 月子。 ཟླ་ཁ 美姫。 ཟླ 妃。

ཟླ་ཁ་ལྷ་ཟླ 美女。 ཟླ་ཟ 牝糠。 གསང་བ་ཡབ་ཡུམ་ཟླ 秘密王女(後夫王の妻)

等の如し。ཟླ接尾語を人或は者の義に用ふる例。

ཀོང་ཟླ 王帝、皇帝。 ཁྱུ་ཟླ 普通なる者。 ཆང་ཟླ 酒賣商人。 ཤ་ཟླ 茶商人。

ཆུ་ཟླ 古宗洲諸。 ཟླ 上人、教師。 གསང་ཟླ 秘密教師、自在天。

等の如し。接尾語ཟླ或はཟླ を物、事、時等を表すに用ふる例。

ཁ་ལ་ཟླ 恒星。 ཏ་ལ་ཟླ 釜。 ཀུ་ཟླ 笑ふ事。 ཁ་ཟླ 善事、善い経験。 ཕ་ཟླ

ཁ ཟླ 天秤。 ཁ ཟླ 腸。 ཉ ཟླ 晝。 ཚ ཟླ 夜。 ཟ ཟླ 湿い事。

以上接尾語の中ཟླ ཟླとは、何れの後置字に接ぶ所なく、續けおくことを得べし。ཟླ ཟླは主ては、調音の關係上後置字に對する一定の法則に從つて置くことを要するなり。その法則は次節に擧るが如し。

一八　接尾語結合の法則

ནང་ལ ཡོད་ཚད་ལ་ལ་ཟླ ། བདག་ཡིན་ཐུན་ཆགས་ཀ་དེ་ནི །

ナロ、ヨー　ツェ　パ　ッラ　ダク　ギン　ツェ　チャ　ガ　デ　ニ

ナロ、ヨのあるなしに拘はらず、ཟླとཟླとは(それぞれ異はれ)ཟླ ཟླ ཟླ ཟླ

主語(持ち主を表す語)として即ち(その主語は何に續くかと云へば後置字の)ཀ ང ད ན

ཕ ཟླ ཟླ ད ཏ ཟླ ཟླ ལ ། ང ལ ར ལ ཟླ ཟླ ལ ། །

パ　ラ　ダン　ネク　ダル　パ　ング　ル　ン　ガー　ネ

ロとཟླとཟླ を弾端(末尾語)にはは ཟླを置くなり。(ཟླを置かずに前段の如し)

(後置字)ロ ド ル と ス と ン と ン を無端(後置字なくして基字に終れる)語と称

ཕ ད ཀ ཟླ ཟླ ད ད ནི ། ཆ ལ ཟ ཟ ཟླ ཟ ལ ལ ། །

ダク　ギ　ヤル　キュル　パ　ダン　ニ　　ツェ　ネ　パ　ゾン　ニュル　ワ　ト　ク

主語が重複せしもののみは ཟ(を續け置くことなる)して

同對語(接尾語が二語配合する場合)にはは ཟ を同對に置くことは適當なり。

ཟླ ད ལ ཟླ ཟ ཟ ལ ལ ཆ ལ ལ ། ། ཟ ནི ད ཟ ལ ཟ ལ ལ ད ད ཟླ ། །

ミン　ガ　ィ　パ　パ　ァン　パ　ル　チェル　ダ　ン　ニ　ネ　ン　ガ　ン　ダン　ニュル

語端の ཟ も ཟ も大方は同一なり。(それは普通名詞の後置字に續け置かれ ཟ も ロ も大方は前段と同一規定に依て置かるゝなり。)

接尾語ཟ は不定にして何れの場合とも一致して結合せらるゝなり。

一九　接尾語結合法例解一

ཟ ཟ ཟ ཟ ཟ の主語が、何れの後置字に續けるかと云ふに、それ法則は後置字の ཀ と ཏ と ཁ と ཕ と ཟ と ཟ と強端として ད再置字との次には、ཟ或は ཟ を置くべし。それ等の例は以下の如し。

ཡ ཟ ཟ ཟ 乘騎牛者。 ཟ ཟ ཟ 又は ཟ ཟ ཟ ཟ 作者。 ཟ ཟ ཟ 教師、教主。

ཟ ཟ ཟ 拍手、打手。 ཟ ཟ ཟ 接吻する事。 ཟ ཟ ཟ ཟ 佛教徒。

ཟ ཟ ཟ 順序。 ཟ ཟ ཟ 飜譯したもの。等の如し。

後置字の ད と ཁ と ཏ と ཟ と ཟ と無端語に置く接尾語は ཟ或は ཟ なり。それ等の例は

ཟ ཟ ཟ 秘事。 ཟ ཟ ཟ 喜ぶ者。 ཟ ཟ ཟ 解脱。脱れる事。 ཟ ཟ ཟ 勝者、聲聞。

ཟ ཟ 作業名づける者。 ཟ ཟ 黒子等の如し。主語の ཟ或は ཟ に重置せらるゝ語は ཟ なりと云ふ例は ཟ ཟ ཟ 黒行者。 ཟ ཟ ཟ 寺の者と云ふ如し。

同對語に對しては ཟ を結ぶと云ふ例は以下の如し。

ཟ ཟ ཟ 亡者。 ཟ ཟ ཟ 有命者。 ཟ ཟ ཟ 作者。 ཟ ཟ ཟ 知者。

二〇　接尾語結合法例解二

普通一般の名詞に附着する接尾語なる ཟ ཟ も、大方は主語と同じ法則に隨つて置くべし。とは一般の名詞に接尾語を附する時は、主語の後置字に一致する方法に隨つて續くなり。例せば

ཟ ཟ ཟ 莊嚴。 ཟ ཟ ཟ 模範。 ཟ ཟ ཟ 寺。 ཟ ཟ ཟ 偉大。 ཟ ཟ ཟ 傳。

ཟ ཟ ཟ 思想。 ཟ ཟ ཟ 恐怖。 ཟ ཟ ཟ 食事、物。 ཟ ཟ ཟ 結合、準備。 ཟ ཟ 病氣。

ཟ と ཟ と定則なく何れの語端にも、場合に應じて結合せらるゝことは既に説明したるが如し。ཟ或は ཟ と云ふ語が或地方の住人たることを表す場合に限り、無端語及び ད と ཏ と ཟ ཟ の後置字に對しても用ひらるゝなり。

ཟ ཟ ཟ 藏人。 ཟ ཟ ཟ シガツェ人。 ཟ ཟ ཟ 内地者、佛教徒。 ཟ ཟ ཟ 北原牧人。

[illegible] 溝台地住人。 [illegible] 垂細垂土耳古人。 [illegible] ラパール人。

等の如し。但し [illegible] や [illegible] の二はパと發音せずして、ワと發音せり。それ故に大抵の人はパと誤まりて [illegible] などと讀せり。これは梵語の混入なれば根據なしと知るべし。

二一　形容名詞狀の接尾語

形容名詞狀の接尾語に、[illegible] の二語あり。俱に有する者、具ふる者如き者、と云ふ意義に用ひらる。[illegible] は [illegible]、[illegible]、と讀まずして、一般に [illegible]、[illegible] と讀む。それは [illegible] の前にある [illegible] は [illegible] を變じて讀むことを習慣法とせり。それ等の例は以下の如し。

[illegible] 念怒數面者。 [illegible] 沙の如き者。 [illegible] 強硬なる者。

[illegible] 印度教徒。 [illegible] ポン教徒、ポン教の如き者。 [illegible] 功德者。 [illegible] 技術者。

[illegible] 技倆者。 [illegible] 強硬なる者。 [illegible] 勝敵強力者、世尊の異語。

[illegible] 歡喜具者、幸ある者、觀世音菩薩、勢至菩薩。 [illegible] 言辭者、具德者。 [illegible] 有學者。

[illegible] 有慧者。 [illegible] 有力者、偉大なる者。

[illegible] は中古よりの文學及び現代の俗語に用ひらるゝ語にして、事物及び動詞に附着して、その語の事物或は作用の持主たること表すなり。例は

[illegible] 道を知る者、宗教人。 [illegible] 土をつくる農人、新作者、農家。 [illegible] 行く者、旅行者。

[illegible] 來る者。 [illegible] 註釋者。 [illegible] 新人、童男なる者。

[illegible] 踊り手。 [illegible] 舞踊者。 [illegible] 技藝を學ぶ人。

[illegible] 狩人。 [illegible] 船頭。 [illegible] 金の細工人。

[illegible] 驛傳者。 [illegible] 靴工。

等の如し。

二二　時、場所、人を表す接尾語

時、場所、人を表す接尾語として、[illegible] が用ひらるゝなり。

時を表すものは、[illegible] 春。 [illegible] 夏。 [illegible] 秋 [illegible] 冬 [illegible] 時。

場所、[illegible] 廣場(廣さの者)。 [illegible] 地名。 [illegible] 土地。 [illegible] 尼連禪河の名。

[illegible] 地名。 [illegible] (地名、[illegible] の意味あるあり) [illegible] 船着場。 [illegible] 錢、道。 [illegible] 沈。

[illegible] 墓地 [illegible] 放牧場。 [illegible] 牧場。 [illegible] 堤沼。 [illegible] 畑。 [illegible] 蓮池。

[illegible] 銀鑛。 [illegible] 金鑛。 [illegible] 山頂。

人、[illegible] 夫、良男、人。 [illegible] 大丈夫。 [illegible] 親戚。

二三　小禽、事物等に用ふる接尾語

小禽、[illegible] 鶴 [illegible] 白色の鶴。 [illegible] (特)鶴。 [illegible] 雲雀。

[illegible] 鳥 [illegible] 燕。

物事、[illegible] 鉄色。 [illegible] 佩囊。 [illegible] 天秤 [illegible] 繩。 [illegible] 鐵鎖。

[illegible] 胡桃。 [illegible] 理、筆 [illegible] 印。 [illegible] 印。

[illegible] 袍。 [illegible] 糸、絲。 [illegible] 十、メ、絲線。 [illegible] 樺皮。

[illegible] 樣子、隱語。 [illegible] 切株、切株の株。 [illegible] 樣語。 [illegible] 言

[illegible] 印。 [illegible] 喜鵲、佛教の雜。 [illegible] 小池。 [illegible] 石理、[illegible]の墓。

[illegible] 針 [illegible] 俳優の服。 [illegible] 畫像。 [illegible] 財物。

[illegible] 柱。 [illegible] 燕麦。 [illegible] 神の小鈴。 [illegible] 強壯男。

[illegible] 裂傷、疵痕。 [illegible] 秘密。

二四　數及び事情等の接尾語

數、[illegible] 數、[illegible] 單一、唯一。 [illegible] 兩者、二つ。

གསུམ་ཀ། | གསུམ་ཆ། 三つとも。 ཆར་ཀ 全部。 ཕྱེད་ཀ 半分。

事情等。 ཐུགས་ཀ 諧謔。 ཁྲེལ་ཀ 譴責。 ཚད་ཀ 價値。 ཕན་ཀ 利 ཆགས་ཀ

ཐོབ་ཀ 訴訟。 ཅིག་ཀ 注意。 ཆུང་ཀ 少要、寡大。 ཏེ་ཀ 呼 ཁ 傲慢、作法。

དེ་ཀ 意慾。 ཏེ་ཀ | ཏེ་ཀ その者。 གདམ་ཀ 撰定。 ཚར་ཀ 善係、爲然。

གསོལ་ཀ 醍醐。 ཆ | ཆ་ཀ 過失、失望、紅面を悔む時の數詞。

二五　接尾語 ཀ་ཁ་ག の異なる用例

以上挙し例に依て ཀ་ཁ་ག の三字は、大抵その意を異にせずして、用ひられ居るを見るべし。ཕྱེ་ཀ の ཀ་ཁ་ག の三字の如きは、何れも同じ意に用ひらるゝなり。然るに接尾語 ཀ 類の異なるに隨ふて、その意義を異にするものあり。その例以下の如し。

ཏ་ཁ 芝地。 ཏ་ག 放牧場。 ཐ་ཆ་ཁ 煙筒。 ཐ་ཆ་ག 印。

ཁ་ཤ 画像。 ཁ་ཤ་ག 刻目、銀盃狀。

二六　小なる者を表す接尾語

甚だ小さき者を表す接尾語に ཀ་ཏ་ཏ་ཕ་ཆ の五あり。その例以下の如し。

ཏ་ཀ 系譜。 ཕ | ཕ་ཀ 小兒。 ཕ་ཀ 筆。 ཆ་ཏ 數。 ཆ་ཏ 少い者

ཐ་ཏ 下劇の葉根。 ཀ་ཤ 童子。 ཏ་ཀ 鈴。 ཏ 系 ཀ 蓋子。

ཀ 小刀。 ཐ 香線 ཐ 矢鏃。 ཏ 小豆。 ཕ 小牛。 ཆ 多。 ཆ 絶人。

二七　敬語名詞の多數なる事

西藏語には名詞、代名詞、動詞、助動詞、等み敬語あり。それ敬語の多き事、我國語以上なして、我國語のは眼を御眼と言へば敬語となれども、西藏語はその語基を異にするもの多し。普通敬語に眼は ཡིག と云ひ、敬語には ཕྱག と言ひて、その語基を異にするを見るべし。

その語形が異なるもの、多數なること以下の表にて知らるべし。我國語み敬語の多數なるを以て、國語の特長なりとする學者の説に隨へば、西藏語も亦敬語の多數なるを以て、その特長なりと云ふことを得べし。

普通語と敬語との對照表

普通語	譯	敬語	普通語	譯	敬語
ཕ་ཀ	亭主、主人。	ཕ་ཀ	ཐ	子息、御子。	ཐ
ཆུང་མ	妻、夫人。	ཕ་ཆུང་ཆུང	ཕ	息女、御娘。	ཕ
ཀུ	弟、舅様。	ཕ	ཕ	兄弟、御兄弟	ཕ
ཕ	父、實父。	ཡབ	ཕ	賢、御賢。	ཕ
ཨ	母、御母。	ཡུམ	ཕ	女主、御女主。	ཕ
མིང	名、御名。	མཚན	ཀ	身、御身。	ཕ
ཀ	身体、御体。	ཕ	མགོ	頭、御頭。	ཐ
ཕ	髮、御髮。	ཐ	ཕ	髮、御髮	ཐ
ཐ	歯、御歯。	ཐ	ཕ	頭、御頭	ཐ
ཕ	頭字、御頭字。	ཐ	ཕ	無頭字、草書。	ཐ
ཕ	身体、御體。	ཕ	ཕ	上半、御上部。	ཕ
ཕ	身の下部、御身の下部。	ཕ	ཀ	背、御背。	ཕ
ཕ	背、御背。	ཕ	ཕ	眼球、御眼玉。	ཕ
ཐ	胸、御胸。	ཕ	ཕ	睫毛、眼の毛。	ཕ
ཐ	腹、御腹。	ཕ	ཕ	眼瞼、御瞼。	ཕ
ཤ	肉、御肉。	ཕ	ཕ	眉毛、御眉毛。	ཕ
ཁ	血、御血	ཕ	ཕ	耳、御耳	ཕ
ཕ	涙、御涙。	ཕ	ཕ	耳朶、御耳朶。	ཕ
ཕ	耳垂、御耳垂。	ཕ	ཕ	耳ガ聞ク、御耳ガ聞カル。	ཕ
ཕ	手、御手。	ཕ	ཕ	足、御足。	ཕ
ཕ	足指、御足指。	ཕ	ཕ	足底、御足底。	ཕ

普通語	譯	敬語	普通語	譯	敬語
[illegible]	足底。	[illegible]	[illegible]	靴。	[illegible]
[illegible]	足袋。	[illegible]	[illegible]	鐘。	[illegible]
[illegible]	足跡。	[illegible]	[illegible]	心。	[illegible]
[illegible]	歩行。	[illegible]	[illegible]	喉。	[illegible]
[illegible]	小便。	[illegible]	[illegible]	門。	[illegible]
[illegible]	傷所。	[illegible]	[illegible]	馬。	[illegible]
[illegible]	馬種。	[illegible]	[illegible]	駿馬。	[illegible]
[illegible]	馬銜。	[illegible]	[illegible]	大棟梁。	[illegible]
[illegible]	著物。	[illegible]	[illegible]	小棟梁。	[illegible]
[illegible]	盤。	[illegible]	[illegible]	口。	[illegible]
[illegible]	唐。	[illegible]	[illegible]	舌。	[illegible]
[illegible]	食物。	[illegible]	[illegible]	耳。	[illegible]
[illegible]	湯。	[illegible]	[illegible]	眼。	[illegible]
[illegible]	前腕。	[illegible]	[illegible]	肩。	[illegible]
[illegible]	手の指。	[illegible]	[illegible]	拇指。	[illegible]
[illegible]	爪。	[illegible]	[illegible]	手首。	[illegible]
[illegible]	書物。	[illegible]	[illegible]	手袋。	[illegible]
[illegible]	手杖。	[illegible]	[illegible]	杖。	[illegible]
[illegible]	慧眼。	[illegible]	[illegible]	人類。	[illegible]
[illegible]	清淨。	[illegible]	[illegible]	睫毛。	[illegible]
[illegible]	熟眠する。	[illegible]	[illegible]	仕事。	[illegible]
[illegible]	夢。	[illegible]	[illegible]	書状。	[illegible]
[illegible]	水。	[illegible]	[illegible]	病氣。	[illegible]
[illegible]	火。	[illegible]	[illegible]	尸體。	[illegible]
[illegible]	年齢。	[illegible]	[illegible]	畫食。	[illegible]

二八　數詞の表

數字	名稱	譯	數字	名稱	譯
๑	[illegible]	一	๒	[illegible]	二
๓	[illegible]	三	๔	[illegible]	四
๕	[illegible]	五	๖	[illegible]	六
๗	[illegible]	七	๘	[illegible]	八
๙	[illegible]	九	๑๐	[illegible]	一〇
๑๑	[illegible]	一一	๑๒	[illegible]	一二
๑๓	[illegible]	一三	๑๔	[illegible]	一四
๑๕	[illegible]	一五	๑๖	[illegible]	一六
๑๗	[illegible]	一七	๑๘	[illegible]	一八
๑๙	[illegible]	一九	๒๐	[illegible]	二〇
๒๑	[illegible]	二一	๓๐	[illegible]	三〇
๓๑	[illegible]	三一	๔๐	[illegible]	四〇
๔๑	[illegible]	四一	๕๐	[illegible]	五〇
๕๑	[illegible]	五一	๖๐	[illegible]	六〇
๖๑	[illegible]	六一	๗๐	[illegible]	七〇
๗๑	[illegible]	七一	๘๐	[illegible]	八〇
๘๑	[illegible]	八一	๙๐	[illegible]	九〇
๙๑	[illegible]	九一	๑๐๐	[illegible]	百
๑๐๐๐	[illegible]	一千	๒๐๐๐	[illegible]	二千
๑๐๐๐๐	[illegible]	一百万	๑๐๐,๐๐๐	[illegible]	十万
(七位)	[illegible]	一百万	(八位)	[illegible]	千万
(九位)	[illegible]	億	(十位)	[illegible]	十億
(十一位)	[illegible]	百億	(十二位)	[illegible]	千億
(十三位)	[illegible]	兆	(十四位)	[illegible]	十兆
(十五位)	[illegible]	百兆	(十六位)	[illegible]	千兆
(十七位)	[illegible]	京	(十七位)	[illegible]	大種

[illegible]。これ[illegible]數ふ。[illegible]數ふまなり。[illegible]は百二十八位[illegible]數ふまなり。

二九　基数の呼稱語法に關する異點

一より九までは只前表の如く数を呼稱するのみなれども、十に至て བཅུ་ཁ་ཕྱེད། 滿十と呼稱し、十一以上は བཅུ། ཅིག། 等を添へて國語の数へ方の如し。只その中異なる點は十五と十八とを、ལྔ་ཕྱེད། བཅུ་ཕྱེད། と誌さずして、音便上 ལྔ་ཁ། ལྔ་ཕྱེད། と誌稱するなり。二十以上百までの滿数には一々 ཁ། 字を附すること下表の如し。二十一以上の数へ方は十一より十九までの数へ方と同じやうに数ふることは毎月の日数を数ふる時に用ひらる。例せば ཚེས་པ་གཅིག 一日。ཚེས་པ་བཅུ་གསུམ 十三日。ཚེས་པ་ཉི་ཤུ་ལྔ 二十五日。と誌稱するかの如し。其他の普通の数を數ふるには、二十と單数との間には ཉིས། が這入り、三十以上九十九を重ねるまで挿入語のあることは以下の如し

ཉི་ཤུ་ཉིས་གཅིག　二一。ཉི་ཤུ་ཉིས་གཉིས　二二。ཉི་ཤུ་ཉིས་གསུམ　三三。

ཉི་ཤུ་བཞི་ལྔ　四一。ཉི་ཤུ་ལྔ　五五。ཉི་ཤུ་ལྔ་དྲུག　五六。

ཉི་ཤུ་རྩེ་ཉིས　六六。ཉི་ཤུ་ཐུན་ཉིས　七七。ཉི་ཤུ་ཕྱེད　八八。

ཉི་ཤུ་ལྔ་ལྔ　九九。ཉི་ཤུ　ལྔ　ཐུན　と云ふもその数を表す。

上表中 ལྔ も ཐུ も同じく十の意を表せり。これは音便上 ལྔ は無端語の後に於て用ひられ、ཐ は有端語（ང字重字を除く）に用ひらる。

十位より九百に至るまでの滿数各位に於て、ཕྲག ལ が用ひられ、一千より九千までの滿数各位に於て ཁྲི ལ が附加せられ、一万以上九十万までの滿数に於ては ཁྲ が用ひられ、百万以上は單に数詞のみが用ひらる。例せば

ལྔ　ཕྲག　ལ　滿十。ལ ལ　ཕྲ　ལ　滿五十。ལ　ཕ　ལ　滿百。

ཐ　ཕ　ལ　滿三百。ཁ　ཁ　ལ　ཅ　滿一千。ཁ　ལ　ཅ　滿八千。

ཁ　ཁ　ལ　滿三万。ཁ　ཁ　ལ　ཅ　滿十万。ཁ　ཁ　ལ　滿五十万。

ཁ　ཁ　ལ　一百万。ཁ　ལ　五千万。ཁ　ཁ　ལ　ཅ　二億。

等の如し。各位に数を表す数詞を間入語を用ひずして、その数を表す事は以下の如し。 ཀ　ཁ　ག　ང　ཅ　ཆ　ཇ　ཉ　と國語の数詞と同樣なる筆むなり。

三〇　倍数、自乗数、数形容名詞、数副詞。

倍数を表す方法は、数字に ལྷག 倍と云ふ語を附加して構成するなり。例せば ཉིས་ལྷག　ཐུ　ལ　ལ　ལ　ལ　ལ　ལ　二倍、三倍、十倍 などとして表すなり。

自乘数の表し方は ཅིག　ཅིག　唯一、單一。ཐ　ལ　ལ　ལ　三三（九）ལ　ལ　ལ　ལ　五三（一五）　ལ　ལ　ལ　ལ　七七（四九）ཕ　ལ　ལ　ལ　八六（四八）とを。

基数より構成する形容名詞は接尾語 ཅ 或は ཉ 或は ཐ を附加して構成せらるゝなり。例せば ཅ　ཅ　ཅ 獨自、一を有つ者。ཉ　ཅ　ཅ 二個、二を含む者。ཐ　ལ　ཅ 三人、三個。ལ　ལ　ཅ　ཉ 三十個。ཆ　ལ　ཅ　ཐ 四章、四つの章を割。

同じく基数よりの数副詞は、ཐ　ལ 或は ཆ　ལ を数詞の前に加ふることに依て構成せらるゝなり。例せば ཐ　ལ　ཅ　ཅ 或は ཆ　ལ　ཅ　ཅ 二度。ཆ　ལ　ཅ 十度。ཐ　ལ　ཅ 百度。ཆ　ལ　ཅ　ཅ　ཅ　ཅ 一千遍 と云ふが如し。

三一　序数の構成

序数は大抵基数に པ を附加することに依て構成せらるゝなり。時には ཐ を以て置かるゝことあり。最初の序数を ཅ　ཅ　ཅ　ཅ と誌さずして、ཏ　ཅ　ཅ　ཅ 第一と云ふ。然れども其他は全く規則的なりして、第十一を ཅ　ཅ　ཅ　ཅ　ཅ と云ひ、第二十五を ཉ　ལ　ལ　ལ　ཅ と云ひ、或は ཉ　ལ　ལ　ལ　ཅ と云へり。第三十三を ལ　ལ　ལ　ལ　ལ　ལ　ཅ 或は ལ　ལ　ལ　ལ　ཅ と云ふ。單に ལ　ལ　ལ　ཅ と云へば第三十を意味し、書籍の名として ལ　ལ　ལ　ཅ と云へば数形容名詞として三十個を表す名となるなり。

序数の接尾語に ར 或は ལ を添加することにより、序数の副詞を構成するなり。例せば ཏ　ཅ　ཅ　ཅ 或は ཏ　ཅ　ཅ　ཅ 第一に、最初に、第一の場所に。ཉ　ཅ　ཅ　ཅ　ར　ཉ　ཅ　ཅ　ཅ　ལ 第二に、ཐ　ལ　ལ　ལ　ར 第三に等の如し。俗語には ར 或は ལ を添へずして、数詞の前に ཐ　ལ　ཅ と云ふ語を置いて序数なるを示せり。例せば ཐ　ལ　ཅ　ཅ　ཅ　ཅ 第三番。ཐ　ལ　ཅ　ཅ　ཅ　ཅ　ཅ 第十五番 と云へるが如し。

三二　字母にて序数を表す法

字母を以て数を表すに用ふることあり。ཀ を一とし、ཁ を二とし、その順序に

てཨを三十とし、ཀིを三十一とし、ཨིを六十とす。ཀུ六十一とし ཨུ を以て九十とし、ཀེ九十一、ཨེを百二十とし、ཀོ百二十一、ཨོを百五十とす。これを序数として用ふるには、པを添加して ཀ་པ 第一。ཁ་པ 第二。ཨ་པ 第三十。ཨི་པ 第六十とするが如し。これ等を序数副詞とするには ར 或は ལ を添加して、ཀ་པར་ 又は ཀ་པ་ལ 第一にとなるなり。百五十より三百までは下に挙ぐる表示法に依るなり。

ཀྲ — ཨྲ 表現数は 151–180. ཀྲི — ཨྲི 表現数は181–210.
ཀྲུ — ཨྲུ 〃 〃 211–240. ཀྲེ — ཨྲེ 〃 〃 241–270.
ཀྲོ — ཨྲོ 〃 〃 271–300.

これ等の標数詞は序数として書籍の番號、巻数、函数等に用ひらるゝなり。

三三 性について

西藏語はその構成する字母には一々その性を有すれども、梵語の如くその語自体に性を有し居ることなし。自然に存在する男女の区別に随ふて、その性を表すに過ぎず。されば自然界に於て男女両性の表れざる物品等に対しては、それ等の語にも性を表すことなし。

指尾語 པོ と བོ とは或る語に附いて男性を表し、མ と མོ とは女性を表す。その例は以下の如し。རྒྱལ་པོ 王、རྒྱལ་མོ 女王、王妃。སྲས་པོ། རྒྱལ་སྲས 貴公子、王子。སྲས་མོ། རྒྱལ་སྲས་མོ 貴公女、王女。བུ 息子。བུ་མོ 娘。ནུ་བོ 弟。ནུ་མོ 妹。མནའ་མ 嫁。ཨ་མ 母。རྒྱ་ནག་པ 支那男子。རྒྱ་ནག་མོ 支那婦人。བལ་པོ ネパール男子。བལ་མོ ネパール婦人。བོད་པ 西藏男。བོད་མོ 西藏女子。

動物に対しては ཕོ を男性に用ひ、མོ を女性に用ふ。例せば

ཕོ་གཡག 牡犛牛。མོ་གཡག 又は འབྲི་མོ 牝犛牛。犛牛。རྟ་ཕོ། ཕོ་རྟ 牡馬。རྟ་མོ། མོ་རྟ 牝馬。བྱ་ཕོ 牡鶏。བྱ་མོ 牝鶏。ཕོ་ལུག། ལུག་ཕོ 牡羊。མོ་ལུག། ལུག་མོ 牝羊。ཁྱི་ཕོ 牡犬、ཁྱི་མོ 牝犬の如し。

種牛、種馬（去勢せざる者）には、ཕ をその語の前に置いて表示す。例は

ཕ་གླང 種牛。ཕ་རྟ 種馬。ཕ་གཡག 種犛牛。ཕ་ལུག 種羊等の如し。性の不明なるものを表すには、མ 或は མོ を用ふることあり。例せば

སྒོ་མོ 戸。ཐིགས་མ 滴。ཚང་མ 皆。ཁ་མ 石を容るゝ小袋（ヒマラヤ山に住む）。སྣག་མ 墨の如し。

三四 པ་བ་པོ་བོ を限定指尾語に用ふ

པ་བ་པོ་བོ の指尾語が普通名詞、或は形容詞、又は動詞等に添加せらるゝ時は、もの、こと、このもの、これ の意を表し、その観念語に対して限定したる意義を与ふるものなり。例せば ཀ་ཁ་པ と云へば ཀ་ཁ 字母 པ 習ふ者即ち字母を習ふ者となる。又 མགར་བ と云へば鍛冶屋となる。མགར は鍛冶する又巧みなる བ は事をする者の義なり。ཆེན་པོ 大なる者。ལུས་པོ 身体、この身。མི་བོ 此人。མགོ་པ 棟梁、頭。འགོ་པ 村長。འགོག་པ 滅する事。ཕོ་ཉ་གཏོང་བ 使者を送る事。བྱེད་པ 作事。བྱེད་པོ 作者。བྱེད་པ་པོ 作事者。ཚོང་པ 賈者。འདོར་བ 捨る事。རིང་བ 長い物。ཐུང་བ 短い物。སྒྲ 業 སྒྲ་བ も義なれども後の བ は同意を強めて云ひしものなり。རྣ 耳。རྣ་བ 耳と云ふも同じく後の བ は、この耳と云ふ様に強めて云ひしものなり。こゝに注意を要すべきことは、動詞につきし པ と བ とは、その動作の事柄と人物とを表すことありて、同語形なれどもその意の異なるものあり。例せば འགྲོ は行くと云ふ語根なるが、འགྲོ་བ་དང་འོང་བ་དང་། （行くと来ると）の འགྲོ་བ は行くの義にして、འགྲོ་བ་རིགས་དྲུག་གི （衆生六趣にて）の འགྲོ་བ は衆生の義を表せり。又 སངས་རྒྱས་ཀྱི་དམ་ཆོས་སྟོན་པའོ། （仏陀の正法を示すなり）の སྟོན་པ は示すの義にして、སྟོན་པ་ཤཱཀྱ་ཐུབ་པ། （教主釈迦牟尼）の སྟོན་པ は教主の意を示せり。勿論後文の སྟོན་པ は動詞状名詞にして、前文の སྟོན་པའོ は སྟོན་པར་བྱེད་དོ། （示すことをなすなり）と云ふ文の པར་བྱ （ことをなす）の語が省略せられたるものなり。斯の如く同語異義のもの多くあれば、その用法を文の前後と文法とに照らしてその実義を取るべし。

三五 不定指尾語その結合法

不定指尾語に ཅིག་ཞིག་ཤིག の三語ありて、英語の不定冠詞 a・an の如き意を有するものにして པ་བ の このもの と云ふ義あるに反して、「或者」或は「一」の義

を有せり。これも三語は隨他意語なるが故に、後置字、再置字の云何に隨かて、三語の中何れかが用ひらるゝなり。その置入の用法は以下の如し。

後置字 ཀ་ག་ང་བ་ད་པ と無端語とには……ཞི།

〃 〃 མ་ན་ཏ と ར強（とはその再置字を有する語）とには……ཅི།

〃 〃 ས には……ཤི།

を用ふるなり。それ等の例を擧ぐれば以下の如し。

ཅི་ཞིག 或者、何果。 ཆུ་ཞིག 或流り、一流。 ནམ་ཞིག 或時。

ཤ་ཞིག 或者。 གསར་ཞིག 或新聞、一新聞。 སྦྲུལ་ཞིག 一蛇、或蛇。

མི་ཞིག（ミーシッ） 或人。 རྟ་ཞིག 或馬、一馬。

བཀའ་ཅིག 一言、或語。 ཤེལ་ཕྲེང་ཅིག 一鎖、一器、一鎖。 ཁྱིམ་ཅིག 一家、一某舍。

མདོག་ཅིག 一彩色。 ཐོག་ལས་ཤིག 一耕演。等の如し。

これ等の外はその構成の法則を異にするものあり。それ等の例は

ཡང་ཅིག 或者。 དུས་ཅིག 一時。 ལྷན་ཅིག 同一、同處、同時。

ལྷ་ཅིག 陛下、殿下。の如きは熟語なれば特種の構成なり。

三六　格語尾に用ふる助辭

名詞、形容詞、數詞、代名詞、分詞等が格語尾を隨はゝ時は、何れも同一の變化規定を據るものにて、別に異なる法を用ふることなし。それ等は皆同一の助辭（てにをは）にて表さるゝなり。名詞などに於て、それ等が關係する接尾語のあるなしに拘らず。具格、與格、屬格に於ける助辭は主辭の終字を隨ふて、その法則を一致するものが撰定せられざるべからず。他の格等に於ても、助辭の隨他意語なるものを除いては、皆一樣に助辭は主辭の終字に一致したるものを用ふべきなり。

三七　主格及び強勢法

名詞等が主格として用ひらるゝ語は、何の助辭をも附せらるゝことなしに、單にその語のみにて構成せらるゝなり。例を擧ぐれば以下の如し。

ཐུགས་ཀྱི་ཁ་ལོ།　ལྷ་ཁང་ཆེ་ཤོས།　ཉི་མ་ཤར་ཏོ།　ཤིང་ཏོག་ཡལ་ལོ།

強勤は衆歎れた　寺は 美く 高き　日は 上ってゐる。　果物が熟してゐる。

主辭、賓辭。　主、賓。　主、賓。　主、賓。

これ等の主辭なる西藏語には件國語の「が」字は存在せず。單に ཐུགས་ཀྱི་ཁ 強勤と誌してその位置にて「強勤は」の義となつて主辭を表すこととなるなり。但しこの主辭を強調する時は主辭に ཀྱང་ を添へてその強意を表すこと以下の如し。

ཁོ་ཀྱང་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁ་ཅིག་ལ་ཐུག་ཡོད།　ཁོ་ན་ཡ་ཀྱང་ཐུགས་ཡོད།

彼こそ 敵を 彼こそ 依處なれ。　善女(女王)こそ 虔敬の 心 ありけれ。

この西文中の三の ཀྱང་ と云ふ辭は何れも國語の「こそ」と云ふ意を表して、その語勢を強め居ることを見るべし。

三八　ཡི་ཀྱང་ཀྱི་ཅེས་པ།屬格具格語尾

ཡི་ཀྱང་ཀྱི་ཅེས་པ（イ・デン・ギ・ナム・ペー）即ちイ具格とは、それ等の助辭が ཀྱི་ ཀྱིས་ ཡི་ と何れも皆へ即ちイを具ふる助辭なるを以て、へ、イを具ふと名づけられたり。この五語は何れも屬格助辭を用ひらるゝ語にして「の」の義を表せり。この五語に一々 ས 字を添加する時は、ཀྱིས་ ཀྱིས་ ཀྱིས་ ཡིས་ ཡིས の具格助辭となつて、何れも「に依て」「を以て」「にて」等の意を表す語となるなり。これ等の語は皆隨他意語にして以下に擧ぐる法則に隨ふて結合せらるゝなり。

後置字 ཀ་ ག་ ང་ ཏ་ には ཀྱི། 具格には ཀྱིས།

〃 〃 ད་ ན་ ཟ 〃 は ཏི། 〃 〃 ཏིས།

〃 〃 ཁ་ ཅ 〃 〃 ཁི། 〃 〃 ཁིས།

〃 〃 ཀ 無端には ཅི་ ཡི། 〃 〃 ཅ と ཡིས།

屬格の例、 འཇིག་རྟེན་ཀྱི་མགོན་པོ། 世界の救主。　ནམ་ཀྱི་ཀུན་ཕྱེད། 夜の中間。　ཐུགས་ཀྱི་ལྷ་མོ། 敬愛の女神。

ཡུལ་ཀྱི་རྒྱལ་པོ། 國の主。　ཆུ་ཀྱི་ཏ་ཀི 勝作の園(孫苑)　ཡབ་ཀྱི་ས་གནས། 御父の地所。　ཆོས་ཀྱི་བདག་པོ། 法の主人。

ཕྱག་གི་ནོར་བུ། 御手の寶珠。　ཤིང་གི་ཡལ་ག། 木の枝。　ཐུགས་ཀྱི་གཏམ། 命令の言語。　དགེ་བའི་ཁྱིམ། 善の僧。

具格の例、 རྟོག་ཀྱིས་ཤན་ཏུ། 義を以て說明に。　ཐུགས་ཀྱིས་ཅི་ཡང་ཐུབ་ཡོ། 思量を以て達せられぬ事(不可思議)　ཐོག་ཏུ་ཡིས་དགའ་ཅེས། 演劇を以て喜ばしめる

滅罪 を依て 瞻礼した。　草露として 湧す。　神父に依て 誅かれた。　法 をもて 教化した。

眼 をて 見たり。　木 として 壁へる。　手 をて 持つ。　石 を以て 打つ。

の如く具語尾の五語は、その前行の後置字と一致して用ひられたるを見るべし。

三九　ལས་ཀྱི་རྒྱན་ལས་ཀའི་ཁྱད་ཆོས　と義七語の用法

業格、為格、依格、は、ལས་ཀྱི　の七助辞を以て構成す。ལས་ཀྱི　の七助辞とは、ནི་ཏེ་ཅེས་ནས་ལས་ཀྱི　の七語をして、その義は「を」「に」「を」「のために」などの意味なる　ལས　語と同義なれば　ལས　七語と云ふ。これ等七語の中の何れかが、名詞、代名詞、形名詞、動名詞等を所随して、業、為、依の何れかの格を構成するものなり。

これ等の七語尾中、ནི　と　ལ　とは隨自意語なるが故に、何れの後置字に對しても、擇ぶ所なく用ふることを得べし。その他の　ཏེ　ཅེ　ནས　ཀྱ　の五語は、隨他意語にして其の添入法は以下の如し。

後置字　ང　ད　ན　མ　ར　ལ　には　ཏེ

〃　〃　ཀ　ཁ　強辞(ङ再後置字の後)　〃　〃　ཅེ

〃　〃　ཟ　ཤ　－　－　－　－　〃　〃　ནས

〃　〃　ཨ　弱辞(後置字なき時)　〃　〃　ནས或は ཅེ

四〇　ལས་ཀྱི　業格助辞の例と實例

とは添入の法則に隨ふて、業格の例を擧ぐれば以下の如し。

手 を 拳 を 持つ。　種は 世界 を 生ずるなり。　手 を 玉 を 持つ。

美食 を 喜ぶ。　佛 陀 を 歸依し奉る。　果物 を 上 に 置く。

空 を 蓋かむ。　世尊 の 前 を 禮す。　空 を 散す。

上 を 行く　国 を 去る。　座位 を 離ふ。　背 を 負ふ。　南 を 行く。

南 を 去りき。　命令 を 成就した。等の如し。

西藏文法では立の實辞中、目的語が助辞なくしてそれを用ひらるゝものあり。上例中　ལག་ཏུ　を　ཁྱེར　とあつて　ལག　の次に目的助辞たる　ཏུ　に相當する語なし。單に　ལག　を　ཁྱེར　と誌して　ཁྱེར　なる他動詞の力に依て目的語　ལག　を處分する故に　ཁ　を持つと云ふ義を表せるなり。西藏文にはこの例甚だ多ければ典文中一二を擧ぐべし。

初 に これ(を) 學ぶ。　意情 觀 樓(を) 完全に 持つ。

それを 了 系(の) 第二(の)(を)持ぶ　隨説者は この總て(を) 了解せず。

等の如く、皆動詞の前に來る目的語の助辞等　「を」と訳せらるゝ語はなくして、唯だ他動詞に依て、その目的語の助辞たる　「を」の表されきたるを見るべし。稀に　ནི　を助辞に相當する　ཅིག　ཅར　(てに)　の用ひられたるものを前例中にも見るべし。

命令 を 成就す。　座位 を 離ふ。　黄金 を 好む。　の如きこれなり。

四一　རྒྱལ　具格助辞の例と主格轉用

眼 をて 見る。　手 をて 持つ。　木 を以て 壁へる　石 を以て 打つ。

等とかれども、この具格語尾がその實主格語尾に轉用せらるゝことあり。それ等の實例は西藏語用法の標準たる三十個と其添入法とは以下の如き例文あり。

學 に 精勤する人間 は　初 に 字音 等 を 學ぶ。

語 端(後置再後置字) は　依格 や 呼格 の語 を も 引く。

私 が 書く。　私 が 引く。　須菩提 が 申上げき。

是の如く主格が具格語尾を用ふることは、中性的動詞を用ふる場合にそれが他動詞と用ひられたることを明示せんが為に具格語尾がそれの主格に用ひられたるなり。斯く同形語尾に對して、主格と具格とを分つには主格は、その語は「は」「が」の義を表し。具格は「を」「をもて」「に依て」の義を

表すを以て知らしむべし。

四二　[illegible]為格助辞の例

為格助辞は業格の之同じく体言に付く。[illegible]格助辞は体の外を用ふるものにして書名れども、それは俗語の用法に属せられたる者にして、文語の用法は下に挙ぐるが如く古語とも用ひらるゝものなり。

[illegible]　注を仏に[illegible]　[illegible]

[illegible]　上人と謂[illegible]

[illegible]　成就の為[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　木をもかるる[illegible]が書る。

[illegible]　[illegible]

[illegible]　不ト木をきいく。　[illegible]

[illegible]　僧　仏ト　[illegible]

四三　[illegible]従格助辞と例

従格助辞は[illegible]の三語みして、より或は「から」の義を表せり。[illegible]の従格は愛樫にその物の出でたる起源を示すが故に、[illegible]くるなり。亦この助辞は何れも隆自意語なるが故に、何れの種類[illegible]も模ふ所なく置かるゝなり。例せば以下の如し。

[illegible]　法　より　聖　の　[illegible]園。　金　鏡　から　金。

[illegible]　海　から　[illegible]来。　象　園　より　[illegible]　界　を　得。

[illegible]　[illegible]から　多し。　[illegible]　浮　書　から　智。

似従格は事実物の出でたる起源を示すに非ざれども、或事柄がそれより出でたるかを表さるゝ。故に似従格と云ふ。例せば

[illegible]　馬　より　落つ。　[illegible]　山から　下る。　[illegible]　[illegible]より　[illegible]。　[illegible]　[illegible]より　[illegible]。

[illegible]格と[illegible]比較の助辞と用ひらるゝ。同類中の比較とは[illegible]が用ひらるる。

[illegible]　一　[illegible]　の　中　より　金　が　最勝。　次　の　中　から　白　[illegible]が　梅百。

[illegible]比較には[illegible]を用ふ。例せば以下の如し。

[illegible]　人と[illegible]神・[illegible]。　[illegible]　[illegible]より　[illegible]ハ　ス(ナリ)

[illegible]と用ふる場合は[illegible]を用ふることは以下の如し。

[illegible]　[illegible]から　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]の用法。[illegible]が指[illegible]詞として「[illegible]」の義と用ひらるゝこと多し。

注意を要する事は[illegible]ば、い、ゝ、ゝ三の例を挙ぐべし。

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

四四　[illegible]属格助辞と例

[illegible]の五助辞は同一様なる「の」の義と用ひらるゝことは既説の如し。その結合とその種類とは以下の如し。

一、主分と主分との結合。二、所属と所属との結合。三、自性同一の結合。四、持主と所属との結合。それ等の例は以下の如し。

一、[illegible]　木　の　枝。　[illegible]　キ　の　[illegible]。　[illegible]　馬の　[illegible]。

二、[illegible]　田　の　神。　[illegible]　里　の　人。　[illegible]　キ　の　[illegible]。

三、[illegible]　[illegible]　の　水　[illegible]　[illegible]　の　[illegible]。　[illegible]　白　[illegible]　の　枝。

四、[illegible]　[illegible]　の　[illegible]。　[illegible]　[illegible]　の　[illegible]。　[illegible]　私　の　妻。

四五　作具助辞の異なる用法

ཀྱི་等の助辞が属格語尾より異なる義に用ひらるゝことあり。その意は「なるに」或は「なるが」又は「なるも」の逆説的意義に用ひらるゝ故なり。例せば

འདི་ནི་བདེན་གྱི་གཞན་ནི་གཏི་མུག་གོ། 　これは実なるに他は愚昧なり。

བདག་ཅག་གི་སྐྱབས་ནི་སྟོན་པ་སངས་རྒྱས་ཡིན་གྱི་དྲག་པོ་ལ་སོགས་པ་མ་ཡིན་ནོ། 　我等の帰依処は教主仏陀なるがルッドラ(シヴァ)などには非ざるなり。

འདི་ལྟར་བདེན་མོད་ཀྱི་འོན་ཀྱང་ཁོས་ཡིད་མ་ཆེས་སོ། 　是の如く真実なるも然かも彼は信ぜざるなり。

四六　རྟེན་གནས་ 依格助辞と例

依格助辞は業格語尾と同じくལ義七語が択ぶ所なく用ひらるゝなり。俗語の依格は大抵ན助辞が用ひらるゝを以て、ན助辞が依格専用の如くに用ふる者あれども、正しくは七語の何れも択ぶ所なく用ひらる。例へば

ཤར་ཕྱོགས་སུ་འོད་སྣང་། 　東方に光が見る。
མེར་མེ་ལྷ་གནས། 　火に火神が住む。
ལྷོ་རུ་གནོད་སྦྱིན་འདུག 　南に夜叉天が居る。
ལྟེ་བར་རྫིང་བུ་བཅས། 　臍に小池が俱る(ある)
ལྷ་ཁང་དུ་མཆོད་རྟེན་ཡོད། 　仏堂に舎利塔がある。
ས་འོག་ཏུ་སྟོབས་ལྡན་གནས། 　地下に具力者(阿修羅)が住す。
གཟུགས་ཁམས་ན་ཚངས་པ། 　色界に梵天。
ལྕགས་ལ་གསེར་འབྱུག 　鉄に金象嵌。
ཉི་ཟླ་ལ་འོད། 　日月に光。
の如し。

四七　ཚེ་སྐབས་ 表時法とその例

依格は主としてそれ依れる場所を表すものなるが、それが依れる時を表すものあり。その助辞は同じくལ義七語を用ひて依格中に説明せり。

これをཚེ་སྐབས་表時詞と言ふ。その例は以下の如し。

སྔོན་དུས་སུ་སངས་རྒྱས་བྱོན། 　昔時に仏陀は来給へり。
ད་ལྟའི་དུས་སུ་བླ་མ་བཞུགས། 　今の時に上人が居らるゝ。
ཉི་མ་ཤར་བར་ལངས། 　日が上つた時起る。
མ་འོངས་པའི་དུས་སུ་བྱམས་པ་འབྱོན། 　未来(時)の時に弥勒は来られん。
འཆར་ཁ་རུ་དུས་གདབ། 　日出に時を決める。
རྟག་ཏུ་ཁ་ཏ་བྱེད། 　常に暗論をなす。
ནམ་ལངས་པ་ན་ཆོས་སྟོན། 　夜が明けた時法を示す。
སྲོད་ལ་བདུད་བཏུལ། 　夕べに悪魔を降伏した。

四八　དེ་ཉིད་ཀྱི་དཔེར་བརྗོད་ 作境同性格の例

この格は業格に属するものにして、主たる作用と客たる所作の境とが同一の自性を有するものにして、西蔵語にདེ་ཉིད་とはそれ自体と云ふ義なり。この格の助辞には七語の中ནとལとは用ひられず。その他のསུ་རུ་ར་དུ་ཏུ་の五語が用ひらるゝなり。例は以下の如し。

མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས། 　三宝を帰依処と知る。
ལྷར་གསལ། 　神に明照(なり)
ཆུ་རུ་འཁྱིལ། 　水に渦巻く。
འོད་དུ་འཚེར། 　光に輝く。
སེམས་སུ་ཤེས། 　心に知る。
གློག་ཏུ་འཁྱུག 　電光に奔る。

この格の意は少しく解し難き点あれば説明せんに、མཆོག་གསུམ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་のམཆོག་གསུམ་はཤེས་即ち知ると云ふ作用の境にして、その知る作用は三宝なる帰依処そのものなれば、それ境とその作用とは同一性なり。མེར་འབར་も亦燃ゆる作用の境なる火とその燃ゆる作用と同一性なれば、境が作用それ自体にてあることを示すを以て、དེ་ཉིད་それ自体と名づくるなり。

四九　格と否定詞構成

以上七格の動詞に否定詞を加ふれば、これ等の作用が否定せらるゝ故に、否定詞の添加せらるゝものは、これ等の諸格に非ずと云ふ者あり。例を挙ぐれば以下の如し。

主．མི་མི་འདུག། 　人は居らず。
業．ཤར་དུ་མི་འགྲོ། 　東に行かず
具．རྡོས་མི་བརྡུང་། 　石にて打たず。
為．དབུལ་པོ་ལ་ནོར་མི་སྦྱིན། 　貧人に財を施へず。
従．བ་མོ་ལས་འོ་མ་མི་འབྱུང་། 　母牛から乳が出ない。
属．རྒྱལ་པོའི་མཛོད་མི་འདུག། 　王の蔵はなし。
位．ཆུ་ལ་ཉ་མེད། 　水に魚なし。

これ等の文は何れもその表さるゝ意義が否定せらるゝが故に、その格までもなしとする者あれども、これ等の文の構成は否定詞のあるなしに拘らず、これ等格語尾の構成は動詞に基づいて期成せられしものなるが故に、否定詞の添加に依て格の語尾まで否定せらるゝものに非ず。故にこれ

等の文例は依然として それ等が處せる格を表せるものなりと知るべし。

五〇　呼格 ཁྱད་ཕྱེ と その例

呼格は語尾なく主格と同じく、主語のみを以て表すものにして、唯だその異なる點は、主語の前に ཨ་ 或は ཁྱོད་ 或は ཁྱེ་ の語を加へて呼詞たることを表すにあり。但し語前に添加すと云ふは、普通の文に對して言ふことにして、詩偈等には語の後に添加せらるゝものもあるなり。この格は格語尾たる助辭なく、又格より生活用もなく、もし活用ありとすれば主格と同一のものなれば、別に格を立つるを要せずとする者あり。語形の上より見ればこの説誠に然るが如し。意義の上より見れば ཨ་ཡིག་ཅན་ "オー 佛よ" と云ひて呼び掛の目的を表示するものなれば古來第八格として擧げし意を隱して此を格として取るものなり。その前加の例は以下の如し。

ཨ་ཐམ་ཡོངས་ཀྱི་ཁྱབ་བདག་ཆེ། ཨ་ལྷ་ཡི་ལྷ། ཨ་ཁམས་ཀུན་ཏུ་ཡོད་ཅིང་ཡང་ཞེ།
オー 大 王 よ。　オー 神の神よ。　オー 調御 者よ。

以上の ཨ་ は敬語を以て呼びし者として、敬語を用ひざる者には、ཁྱེ་ 或は ཁྱོད་ 或は ཁྱ など を用ふるなり。例は

ཁྱེ་ཡི་ཕ་ཏ། ཁྱ་ཡི་ཤེ་ཤས། ཁྱ་ཤ་ཁ།
オイ 獅師よ。　オイ 漁夫よ　オイ 牧人よ (西藏語に種々ほゞ同意語類の多き。)

呼詞を後に添加する例は以下の如し。

ངའི་ཡི་ཁ་ནས་ཤེ་ཤ་ཁ།། ཁྱོ་ཁ་ཁ་ཅིག་ལ་ཤ་ཤ།།
私を 思ひ給へ、主よ あ。　憐れと見給へ 變人よあ。

五一　數

名詞の數は單數、兩數、複數の三ありて、單數は名詞のみを以て表し兩數は名詞の後に ཁྱད་ と云ふ語を添加して表し、複數は ཚོ་ 或は ཚན་ が用ひられ、口語の人稱複數としては、ཚོ་ 或は ཚོ་ཚན་ 或は ཚོ་ が最も多く用ひらる。この中の兩數 ཁྱད་ は梵語を譯する時の便宜を設けたるものにして、本來西藏語には兩數なきが故に、ཁྱད་ が西藏文に用ひらるゝ時は複數なりと知るべし。これ等の例を擧げれば以下の如し。

西藏文數の別	單		複		
梵語訳文數の別	單		兩		複
	ཚུན	妹	ཚུན་ཁྱད་	二妹	ཚུན་ཚོ	妹等。
	ཡབ	姉	ཡབ་ཁྱད་	二姉	ཡབ་ཚན	姉等。
	ཆུ	人	ཆུ་ཁྱད་	二人	ཆུ་ཚན	人等。
	ཡབ	兄	ཡབ་ཁྱད་	二兄	ཡབ་ཚ	兄等。

これ外諸種物品等の數を表すには、以下に擧ぐる語がそれ等の複數を表すために用ひらる。これ等は皆複數を表すに用ひらるゝ雖も、一々その語義に異なるものあれば、それ等各語の直訳を附すべし。

ཀུན། 等。　ཀུ། 九。　ལས། 等。　ལམ་ལས། など。　ཁ། 百。　ཁ། 等。　ཆགས་ཁ། 邊 等。

ཐམས་ཅད། 一切。　ཡོངས། 全體。　ཚོགས། 等集。　ཚོགས། 集會。　ཁ་ཤས། 大數。

これ等について用例を擧ぐれば以下の如し。

ཡོད་ཅིང་ཡང་ཞེ། 在在者等(結義)。 ཐམ་ཁ། 總ての生物。 生九(字) 衆生。　ཁ་ལམ། 犬など　ཆ་ལ་ལ། 人 等。
たる所の總て。(字義)。

ཟླ་ཞ་ཁ། 御名等。 ཁ་ཁ། 樓二人。 樓等、(梵語義) ཞ ཁ ཐ 等(字) 世界 等(字)　ཐམ་ཅད། 一切世界。

ཆ་ཤ་ཁ། 人等。 ཐམ་ཅ་ཤ་ཁ། 衆生等。 ཚ་ལ་ལ། 集會等。
人 皆、　一切 衆生、　集會 總員。

ཁ་ལ་ལ། 諸馬等。 ཁ་ལ་ལ། 軍隊。 ཁ་ཁ། 等の如し。
馬などの集。　軍の集、　敵 軍。

五二　名詞の格次格名語尾について

以上擧げし所の名詞の諸格は次第ありて、第一格 ཚ་ཁ ཁ ཁ ཁ より ཚ ཁ ཁ ཁ 第八格に至り、第一格は主格にして、第二業格、第三具格、第四、爲格、第五從格、第六屬格、第七位格、第八呼格となり、それ等に一々助辭あることは、既に說せるが如し。これ等を一括して西藏文法の術語を擧げて對照して表示すべし。

名詞の格次格名格語尾對照表

格次名	同藏語名	格名	同藏語名	語尾
第一格	རྣམ་དཔྱད་དང་པོ།	主格	དངོས་མིང་།	無語尾 ''(接續詞)ནི།
第二格	" " གཉིས་པ།	業格	ལས་བྱེད་ཀྱི།	བྱ་བཏུ་ར་ཏ་ལ་ཏ།與格尾。
第三格	" " གསུམ་པ།	具格	རྒྱུ་བཀོད་ཁྱད།	ཀྱིས་གིས་ཀྱིས་ཡིས་ཡིས།ཁྱས།
第四格	" " བཞི་པ།	爲格	དངོས་ཆེད།	ལ་བཏུ་ར་ཏ་ལ་ཏ།
第五格	" " ལྔ་པ།	從格	འབྱུང་ཁུངས།	བཏས་ ལས།
第六格	" " དྲུག་པ།	屬格	འཐེལ་ལས།	ཀྱི་གི་ཀྱི་ཡི་ཡི།
第七格	" " བདུན་པ།	位格	རྟེན་གནས།	ལ་བཏུ་ར་ཏ་ལ་ཏ།
第八格	" " བརྒྱད་པ།	呼格	བོད་ཁྱད།	ཀྱི་ ཀ་ཡི་ ཤ།

五三　諸格數語尾表

格名	單	譯	複	譯
主	ཨོན་ཏན།	佛は,が。	ཨོན་ཏན་རྣམས། 或は ཏོ།	佛等は。
業	ཨོན་ཏན་ལ།	佛に,を。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ལ།	佛等に,を。
具	ཨོན་ཏན་ཀྱིས།	佛を以て。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ཀྱིས།	佛等に依て。
爲	ཨོན་ཏན་ལ།	佛に,の爲る。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ལ།	佛等に,の爲る。
從	ཨོན་ཏན་ལས།	佛より。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ལས།	佛等より。
屬	ཨོན་ཏན་གྱི།	佛の。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ཀྱི།	佛等の。
位	ཨོན་ཏན་ལ།	佛に。	ཨོན་ཏན་རྣམས་ལ།	佛等に。
呼	ཀྱེ་ཨོན་ཏན།	ア~佛よ。	ཀྱེ་ཨོན་ཏན་རྣམས།	ア~佛等よ。

こゝ擧げたる格語尾なる助辭の活用に異なる意義を表すものあることは、既に二三說せし所なるが、これ等は格語尾に誤解し易きを防ぐ爲め擧げしのみ。尚ほこれ等の外の助辭の種々異なる活用ある諸語のついては、助辭の章の項にて明かにすべし。

第二章　ཚྭ་ཡིན། 代名詞

五四　人稱代名詞普通語と敬語の對照表

人稱代名詞に自稱、對稱、他稱の三ありて、その一々に普通語と敬語とあり。それ等を表示すれば以下の如し。

自稱 普通語	敬語	對稱 普通語	敬語	
ང་ 私。	ངའི་ 私の。	ཁྱོད 汝	ཁྱེད 貴方。	
ངའི "	" "	ཁྱོད་ཀྱི "	ཁྱེད་ཀྱི 貴下自身。	
ངའི "	" "	ཁྱོད་ཀར "	ཁྱེད་ཀར " "	
ངར "	" "	ཁྱོད་ནས "	ཁྱེད་ཀྱི " "	
ངར་ངའི "	" "	ཁྱོད་ཀྱི (ཁོ་ལ)	ཁྱེད་ཀྱི 貴方のみ。	
ང་ཉིད 我自身	ངའི་ཉིད 我自身。	ཁྱེད་ཀྱི "	ཐུགས་ཀར 閣下。	
ངའི་ཉིད " "	" " " "	(ཆེ་ཆུང་ཁ་ཁ)	ཏོན ཏོ་ཆ 貴座下	
ངས 私が	ངའི་ཡིས 我が。	" "	" "	

他稱

ངའི་ཁོ 我のみ	ངའི་ཁ 我の方のみ。	ཁོ 彼	ཁོང 彼方。	
ནི ནི 私が	ངའི 我が。	ཁོ ཡ "	ཁོང ཡ "	
ཁ་ཤ ཁ ངའི 彼の方のみ。		ཁ ངའི 彼自身	ཁ ངའ 彼方自身。	
ངའ ངའ 私自身	" " " "	ཁ ཉིད 彼自身	ཁ ཉིད 彼方自身。	
ངའ ཉིད " "	" " " "	ཁ ཅ 彼彼。	ཁ ཅ 彼彼方。	
ཐ ན 僕。	ངའ ཐ 我が。	ཁ ཅ ཉིད 彼自身	ཁ ཅ ཁ ཅ 彼彼一人。	
ཐ ན ཉིད 僕自身	ངའ ཐ ཉིད 我が自身。	" " " "	ཁ ཅ ཉིད 彼彼自身。	
ཨ 亭	ངའ ཨ 我が女。	ཁ 彼女	ཁ ཁ 彼貴女。	
ཨ ཉིད 亭自身	ངའ ཨ ཉིད "	ཁ ཁ "	ཁ ཁ ཉིད 彼貴女自身。	

これ中他稱のཁ ཁ ཉིད ཁ ཁ ཁ等は、本來それと云ふ指示代名なるが、人稱代名詞を屢々用ふるを以て、こゝに擧ぐるものなり。人稱が指示かは文の前後の關係を自づから明かなるべし。

五五　人稱代名詞格語尾變化表

	自稱		對稱		他稱	
主	བདག	我は	ཁྱོད	汝は	ཁོ	彼は
	ངས	我こそ。	ཁྱེད	汝こそは。	ཁོང	彼こそは。
業	བདག་ལ	我を，我を。	ཁྱོད་ལ	汝を，汝を	ཁོ་ལ	彼に，彼を。
具	བདག་གིས	我によって，我が。	ཁྱོད་ཀྱིས	汝によって，汝が。	ཁོ་ཡིས། ཁོས	彼によって，彼が。
為	བདག་ལ	我を，我ために。	ཁྱོད་ལ	汝を，汝の為を。	ཁོ་ལ	彼に，彼の為を。
從	བདག་ལས	我より，から。	ཁྱོད་ལས	汝より，から。	ཁོ་ལས	彼より，から。
屬	བདག་གི	我の。	ཁྱོད་ཀྱི	汝の。	ཁོའི། ཁོ་ཡི	彼の。
位	བདག་ལ	我を。	ཁྱོད་ལ	汝に。	ཁོ་ལ	彼に。

この表に依て代名詞の格語尾變化は名詞の格語尾變化と同一なることを知るべし。

五六　人稱代名詞複數及び語尾

人稱代名詞の複數構成は代名詞の後に、複數語を附加して成すなり。複數語は ཚོ། དག། ཚོགས། ཀུན། ཐམས་ཅད། 等の如し。

自稱	對稱	他稱
ངའི་ཚོ། ངའི་ཚོགས། 我等，我等連。	ཁྱེད་ཚོ། ཁྱེད་ཚོགས། 汝等，汝等たち。	ཁོ་ཚོ། ཁོ་ཚོགས། 彼等，彼等たち。
ང་བཅས་ཚོ། ང་བཅས་ཚོགས། 我等，我等たち。	ཁྱེད་ཀུན། ཁྱེད་ཀུན་ཚོགས། 貴方等，貴方がた等。	ཁོ་ཚོ། ཁོ་ཚོ་ཚོགས། 彼方等，彼方等たち。

これ等複數の語がこの儀として主格として用ひらるゝことは、名詞の用法と同一なり。尚ほ格語尾を附することは、名詞と同樣なすべし。例せば ངའི་ཚ། 我等よ。ངའི་ཚ་ལ། 我等連よりて、我々等が。ཁྱེད་ཚ་ཡི། 汝等の為よ、ཁྱེད་ཚ་ལ་ལས། 汝等連より。ཁོ་ཚ་ཡི། 彼等の。ཁོ་ཚ་ལ་ལ། 彼等連よ、等の如し。

五七　近稱指示代名詞

近稱指示代名詞は指示者自身の近くよある物品、場所等を示す所の代語よりて此、ཤུ と云ふ語を以て表さる。ཤུ を強勢的よ用ふる時は、ཤུ་ཡི། これこそと云い、ཤུ（これ）よ接尾語を添ふることよ據て

諸種の義を表すことは以下よ學ぐるが如し。

ཤུ་ཡ། この物、この人。ཤུ་ངང། これ自身。ཤུ་ཐུན། これ自躰。

ཤུ་ཁོ་ན། この真實。ཤུ་ཁོ་ན་ཐུན། この真實自躰。等にして ཤུ་ཐུན

以下の三語は代名詞中の強勢語よ用ひらるゝことあるが故よ、此よ編入されども、元義は道理の實躰として實名詞よ用ひらるゝ語なり。尚ほこの物、この人を表す語も實名詞中よ入るべき性あれども、此よは代名詞を主として強く表したる語の用法を示す為よ代名詞中よ入れたるものなり。場所よ用ふる近稱代名詞は下の如し。

ཤུ་ར། こゝ、ཤ་ཅ། ここ、ཤ་ར། 此よ、ཤ་ཁ（ここら）。

ཤ་ཕ་ར། こゝよ　ཤ་ཁ་ར། こゝよ、

この外よ ཤ་ཁ། ཤ་ཁ། ཤ་ཁ の三語は、皆同一の義に用ひらるゝなり。その義は、此處の者、此國の者、此宗派の者、此業の者、この職業の者、の如し。

五八　遠稱指示代名詞

遠稱代名詞は指示者自身より遠くよある物品、場所、人等を指示す時の代語なり。その語は དེ それ、にして、物品や人等を示し、ཕ彼處は場所を示すよ用ひらる。དེ が強勢して用ひらるゝ時は ཁོ་ཡ それこそ、となる。དེ に ཡ 等の接尾語を附すれば以下の如し。

ཁོ་ཡ その物、その人。ཁ་ངང། それ自身、ཁ་ཐུན 其れ自躰、

ཁ་ཁ་ན その實。それのみ。ཁ་ཁ་ན་ཐུན その真實自躰。

場所を表す遠稱指示代名詞は以下の如し。

ཕ་ར 彼處よ。ཕ་ཁ 彼方。ཕ་ཁ་ར 彼方よ。ཕ་ཅ 彼處。ཕ་ཅ་ར 彼處よ。

ཁ་ར そこよ。ཁ་ཅ 其處。

この外よ ཁ་ཁ ཁ་ཁ ཁ་ཁ は何れも同義に用ひらる。その義はそこの者、その國の者、その宗派の者、その業の者、その職業の者の義を有するなり。以下これ等格語尾の説明よ移るべし。

五九　近稱指示代名詞格語尾變化表

	單		複		
主	འདི་ これは。	འདི་ཡི་ これこそは。	འདི་དག	འདི་རྣམས	འདི་ལ་ཁོལས	これ等は。
業	འདི་ལ これに。	འདི それを	འདི་དག་ཏུ	འདི་རྣམ་པ	འདི་ལ་ཁོལ་ལ	これ等に。
具	འདི་ཀ། ཕྱིར་ これによって、これが。		འདི་ཁས	འདི་རྣམ་ཀྱིས	འདི་ལ་ཁོལ་ཀྱིས	是等によって。
爲	འདི་ར།	འདི་ལ このために、これを。	འདི་དག་ཏུ	འདི་རྣམ་པ	འདི་ལ་ཁོལ་ལ	是等の爲。
從	འདི་ནས། ལས་	これより、これから。	འདི་ནས	འདི་རྣམ་ལས	འདི་ལ་ཁོལ་ལ་ནས	これ等より。
屬	འདི།	これの、この。	འདི་ནས	ཁ་ཅིག	འདི་ལ་ཁོལ	これ等の。
位	འདི་ལ	ここ、これ。	འདི་ནས	ཁ་ཅིག	འདི་ལ་ཁོལ	これ等に。

遠稱指示代名詞の格語尾變化は、前表のようその主語を異にすることを除いて、その他は皆同一なれば、それを表示することを略すべし。

六〇　疑問代名詞

疑問代名詞に人稱專用の語は、ཅི '誰' と言ふ語にして、人事物情一切の事に通じて用ふるものは、ཅི '何' と言ふ語なり。その他に人を除きて事物、容式、度量、情態等に用ひらるゝ語に、ཅ 或は ཇ と云ふ二語あり。單にこの語のみの意を云へば、'何' '幾許' と云ふ義あり。この二語は各自熟語として、異なる接尾語を結合するなり。

ཅ には　ཅི། 或物。ཅི ある。 ཅ། ぜ、どう。 ཅ་ 如何。 ཅ 何の為。

ཇ には　ཅི ある有。ཅི 譬、如き。 ཅི་ལྟ 如し。 ཅ 何ぞ。 ཅ 程、のみ。

ཅི། 或時。 など と云ふ語と結んで特種の熟語となる。それ等の意義は、量等の疑問代名詞の所に書かん。

六一　疑問代名詞の語尾について

疑問代名詞の格語尾なる助辭に就ては、人稱代名詞や指示代名詞の語尾と同一なれば、それ等に依て準知することを得べし。唯だこゝに注意すべきことは、人稱疑問には必ず ཅི 誰と云ふ語を用ひ、

事物、情態等の總てについては、ཅི 'なに' と云ふ語を用ふべきなり。例を挙げれば、

ཁོ་ཅི་ལྟ་ཡིན་ནམ། ཇི་ལྟ་ཡོད་ཁམ་ནས། ལྷ་ཅ་ལྟ་ཅི་ཡིན་ཤེ་ན།
その人は誰であるか。 そこに誰が居るか。 誰と誰であるか 我は知らねばならぬ。

ཁོ་ཅི་ཞིག་ཡིན་ནམ། ཇི་ལ་ཞིག་ཡོད་ཁམ། ཞིང་ཅ་ཞིག་ཡོད་ཅ་ལ ཁ་ལག་ཅ་ཞིག་ཡོད།
その人は何であるか。 そこに何が起つてゐる！ 何と何であるか 我は其細部の事を知らねばならぬ

ཆ་ལག་ཅ་ཞིག་ཡིན་ནམ། ཁྱོད་ལ་ཕྱི་ནས་ལས་ཞིག་ཡོད།
その道具は何であるか 貴方には仕事は何がある。

これ等の例にて ཅ は人稱專用の疑問詞にして、ཞིག は事物情態の何であるか。或は人に聞いて云へばその人の身分、職業、行為等についての疑問詞を用ひらるゝを見るべし。

六二　量形式理由等疑問代名詞熟語

量、形式、情態、理由等について熟語となれる疑問代名詞あり。その例は以下の如し。

ཅི་ཞིག 何物、何か或物。 ཅི་ཕན 何の為 何が故。 ཅ 併しも、いかで。

ཅ་ལ་ 如何、何かなれば。 ཅ་ལ 何がある故 何の為る。 ཅ་ལ 何を依てもどうにても。

ཇ་ཙམ 何程(距離、遠い) 何時間程(長い)。 ཇ ཙམ 是の如く、何と云ふ。

ཇ་ལྟ 如何の様なる。 ཇ ལ 如何のやうに、如何なる状態。

ཇ ཙམ 何程(度量) 幾何(數) 何の位(面積の大さ) ཇ ཞིག 何時か、或時。

六三　關係代名詞

關係代名詞は大抵二語を以て構成す。又單式に一語を成すものあり。それ等の例は以下の如し。

ཁ……པ　ཅ……པ　ཅ……ཀ　ཅ……ཞིག
する所の人、者。 する所の者。 する所のそれ(事) する所の或者。

ཅ……ལ　ཁ……ལ　ཅ……ཙམ
する所の状態に。 する所の者。 何程かある所のそれ程。

ཇ……ཙམ　ཇ……ཙམ
あるだけそれだけの量。あるだけそれだけの容積。
あるだけそれだけの距離。

の類に用ひらる。それ等の實例は以下の如し。

གང་ལ་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ་བའི། ། དགེ་འདུན་ཆོག་ཏུ་ལུས་གཅལ་ལོ།། 根本文典
功德最勝を 持ちたる、 僧伽最勝(宝)なる所の者に礼拝し上る。

གང་ཟེར་བཤད་པའི་ཡ་མཐའ་ན། ། ཐུ་ལེང་ག་ཡི་ཐུ་ཚེ་པ། །
語を説く 上 端に於て、 女 性(字定詞)の語なき

དེ་ལ་ཐུ་ལེང་ག་ཐལ་ན། ། དགག་པའི་ཀན་ལྡན་ལེས་པར་ཕྱེ། ། 根本文典 三十偈。
所のそれに女性(字)結ぶなれば、否定の 顔 を 知るべきなり。

ཅི་ཞེག་བསམ་པ་དེ་ཁྱབ་ནས། ། ཕ་ཁྱར་བདེ་བ་དེ་ཁྱར་ཏེ། །
思惟 する所の事を成就して、 幸福 なる所の情態に

ཚུལ་བཟང་ལྡ་ཡིན་ནི་འགྲོ་ཞུར།། 同上シャ[illegible]
宿 善 ある所の人が 行くなり。

これ等の例に於ある如く、ཀང་ལ と དེ་ལ との間に多少の語あつて構成するが一般なれども、それ等の間に何の語もなく、ཀང་ནི (する所の者) と直ちに續けて用ふることあり。その例は以下の如し。

ལྟ་ནས་ཀང་ནི་ནགས་ཀར་ཕྱིར། ། ཕྱིག་ཅན་ལ་ནི་ཉན་ཐོས་ཀ་ཆེ་ནི། །
行ふ 所の事が 邊鄙 となる。 罪業を有する所の者は 聲聞 や 獨覺 となる。

六四 省略關係代名詞

前例の關係代名詞は、ཀང་或は ཅི又は ཇི を初頭に置きたるが、それを文句の終りに置いて、ནི の語を畧して關係代名詞として用ふることは以下の如し。

ལམ་ལམ་ལོ་ཕྲག་ཏུ་ཐུབ་པ་ཀང་། ། ལམ་ལམ་ཡུན་ཙམ་ཅིག་ཀྱང་ཤེས། །
或者が 百年間に修得した所の事を、或者は 一瞬間 程 を 知る。

ལམ་ལམ་ཆགས་ཀ་ཡར་ཐུ་ཀང་། ། ལམ་ལམ་ཆུང་ངུ་ཡིན་ཀའི་ལམ་ལ་ཞུགས།། ﾁｭﾝﾁﾞﾊﾞ
或者が學者なりと自負する所の者を 或者は 善知識の (世)位置に 建立する。

こゝに注意すべきことは ཀང་と云ふ語を除いて、ནི と云ふ語のみを以て、關係代名詞を構成し得るかと云ふに、文章の表現順序に於て、關係代名詞の如くに見ゆるものあれども、その本ゐより見れば指示代名詞なることは以下の例文に依つて知るべし。

ལམ་ཀ་ལྟ་ནི་ཅི་ལྟར་ཡ་ཆད་ཡོད་ཕྱིར། ། ངོ་ཀ་ཕ་ཅ་ནི་ད་ནི་ངོ་ཤེས་ཤིག
善い 行為それが 大 結果 となる。 明日の 食物それは、今日準備をなせ。
(その善行為が)

第三章 ཆོག་ཏུ་ 形容詞

六五 ཐུ་ཚེ་ཀ་ལས་ཆོག་ཏུ་ 形容詞の種類

形容詞に三種あり。(1) ཚིག་མིང་ཀྱི་ཆོག་ཏུ་ 代名形容詞。(2) གྲངས་ཀྱི་ཆོག་ཏུ་ 數量形容詞。(3) ཡོན་ཏན་གྱི་ཆོག་ཏུ་ 特質形容詞なり。

(1) 代名形容詞の例は、བདག་གི་ཁྱིམ། ཀང་གི་མེ་ཏོག ལུག་དེ་ཅ། 我の 家。 何の 花。 誰の 本。

དེ་ལྟ་ཡི་ཤན། ཁ་ཅི་ཤ་ཅ། ཀང་ཞིག་ཀ་ཁོར། そのような 箱。 どんな人。 どちらの 蓋れか。

(2) 數量形容詞の例は、ལོ་གསུམ། ཕྲག་མང་ཤོ། དགེ་ཆུང་ངུ། 三 年。 多くの 用ゐ。 少數なる 善人。

དངུལ་ཆུ་ཡོ། ཉིན་མཚན་ཀུན་ཏུ་ཟླ་བ་ཕྲག། ཁྱིམ་ཆུང་ངུ། 湧出なる 銀。 日 夜 三 十 ヶ 半月。 少い 智。

(3) 特質形容詞の例は、མི་བཟང་ཡོ། མཛེས་ཆ། ཉམ་ལྡེ། ཁན་ཆེ། 善い人。 美 女。 雖 行。 老 女

ལེགས་ལ། ཁྱི་ཆེན་ལྡེ། ཕན་ཚུན་ཆ། 善 說。 狂 犬。 互の美しい女。

六六 代名形容詞の四種類

代名形容詞に四種あり。屬格形容と指示形容と疑問形容と關係形容なりて、これ等は何れも皆四種の代名詞に依て構成せらるゝなり。

(1) 屬格的形容詞 …… 人稱代名詞

(2) 指示的形容詞 …… 指示代名詞

(3) 疑問的形容詞 …… 疑問代名詞

(4) 關係的形容詞 …… 關係代名詞 の如し。

六七 屬格形容詞の例

こゝに例は代名說明の時、屬格語尾について、說き盡したれば、こゝに說くの要なきも、代名詞の屬格語尾が屬格的形容詞として用ひらるゝことを明にする為め、こゝに二三の例を擧ぐべし。

བདག་གི། བདག་ཅག་གི། ཁྱོད་ཀྱི། ཁྱོད་དག་གི། ཁོའི། ཁོ་ཚོའི།
私の 私等の 汝の 汝等の 彼の 彼等の

འདི་ཡི། འདི་དག་གི། དེ་ཡི། དེ་དག་གི། མོའི། མོ་རྣམས་ཀྱི།
これの。これ等の。それの。それ等の。彼女の。彼女等の。

六八 指示形容詞の類

指示形容詞に二類あり、限定指示形容詞と不定指示形容詞なり。それ等の例を挙ぐれば以下の如し。

限定指示には འདི་ དེ་ པ་ ཕ་ ཚུ་ ཕ་ 等が用ひられ；

不定指示には ཅིག་ ཞིག་ ཤིག་ འགའ་ 等が用ひらる。

これ等の語が之れのみにて指示形容に用ひられ、或は他語に結んでその語を限定し或は不定の意を表すこと以下の如し

限定. མི་འདི། མོ་དེ། རྒན་མོ། གཞོན་པ། གྲང་བ་འདི། ཕའི་ཕོ།
この人。その女。この老女。若い者。この寒気。彼方の男。

不定. མི་ཞིག སྐྱེ་བ་ཅིག ཆོས་ཤིག བུད་མེད་འགའ། 等の如し。
或人。或生。或法。或女。

六九 限定形容詞と不定形容詞の例

初に限定形容詞の實例を挙ぐべし。

མི་འདི་སུ་རེད། སྐྱེ་བ་འདི་ནས་གཟུང་སྙིང་ནས་ཆོས་སྒྲུབ། སོག་པོ་དེ་དད་པ་ཆེའོ།
この人は誰である。此生より心に期して正法を修む。その蒙古人は大信心なり。

བསྐལ་པ་འདི་བཟང་པོ་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ནོ། སྔ་མའི་དུས་དེ་ན་སངས་རྒྱས་བྱོན་ནོ།
この劫波(カルパ)(大時)は賢と名づけらるなり。古昔のその時に佛が出られたりき。

ཚུ་རོལ། ཕ་རོལ། は代名形容詞に用ひ、ཚུར་ཤོག ཕར་སོང་།
此岸 彼岸 こゝに来れ。彼處に去れ。

は代名副詞に用ひらる。限定形容詞として不明なる嫌ひある語なれども矢張り限定形容詞に屬するものあり。その例以下の如し。

(1) མི་འདི་འདྲ་གང་ཤེས། (2) མི་དེ་ནི་གཞན་པ་མ་རེད། の如し。(2)は前
ミーデン ダーカン シェ。 ミーデニ ジェンパマレ
このやうな人は何を知らぞ。その人は他の者ではない。

前の指示限定に入るべし。

不定形容詞の例は以下の如し。

ཁ་ཅིག་ན་རེ། མི་རེ་རེ་ཁྱི་རར་དགའ། ཁ་ཅིག་དགྲ་ཕམ་པ་ལ་སྨོན།
或者は云へり。或人は狩獵を好む。或者は敵を敗ることを望む。

འགའ་ཞིག་རྔ་བརྡུང་བ་ལ་མགུ། དེ་ཞིག་གཅིག་བུ་མོ་འགའ་ཞིག་གིས་རོལ་མོ་སྒྲོག་པ་ལ་དགའ་བར
或者は太鼓を打つを歡ぶ。或時或娘は 音樂を奏すること歡喜

རངས། ནམ་ཞིག་གྲོས་ཤིག་གདབ་ཅེའོ།
雀躍せり。一夜協議せよ,と云ふなり。

七〇 不定指示形容詞

不定指示形容詞は、或特種の人又は或人即ち話し手にまで知られし所の或人、又は知られざる所の或人を指示する形容詞なり。

(1) བདག་གིས་ངོ་ཤེས་པའི་མི་ཤིག་གིས་དེང་སང་ལྷ་སར་འགྲོ་བར་འཚལ་ལོ།
私が知れる所の或人が近日拉サに行かんと欲するなり。

(2) ཁོས་ན་རེ། སློབ་ཕྲུག་ཅིག་གིས་གཞུང་པའི་ཕྲིན་ལས་ཐོབ་པར་འདོད་དོ།
彼は云へり。或修士が官吏の御職を得る事を願へり。

(1)の例は話者の知れる人なれども、特別に指示せられずして、彼の知れる中の或人を指示せり。(2)の例は局限的なれども、話者には少しも知られざる人なり。

七一 不定指示形容詞の語類と例

その語類は以下の如し。

ཅིག ཞིག ཤིག གང་ཞིག ཅི་ཞིག སུ་ཞིག རྟ་ཞིག
或,一つ。" "。" "。何某,何か或,何れかの一つ。或事。誰か或者,とある者。或馬。

བདུད་ཅིག སངས་རྒྱས་ཤིག
一の悪魔。或佛陀。

これ等語類の例は以下の如し。

གསལ་ཞེས་མཛེས་ཤེས་ཞེད་ཅིག་མདའ།།
明瞭と云ひ,美麗と云ふは或思量の矢(なり)

གང་ཞིག་རྟག་ཏུ་སྙིང་པོའི་དོན་བསམ་པས།།
何某は常に要義を思惟する者なるが故に

གང་ཡང་དམན་པར་འགྱུར་བའི་གནས་དེ་ཅི།། 何れにても卑賤となるらん理由は何ぞ。

七二　個別形容詞

個別形容詞は不定指示形容詞の一種にして、誰と定めず個々の人或は物を指示形容する語なり。その類語と例とは以下の如し。

저저　一々、各自、各々、それぞれ。　저저　別々、各々。

마다　매　매　매　매　매　매　매　매　매　매　매

我は一人一人を悲しみ　無～ではなく。

각각　각각　각각　각각　각각　각각　각각　각각　각각　각각

各々の　花　は各別の花　と果々供養した。

七三　疑問形容詞

疑問形容詞として多く用ひらるゝ語は何に「가」、何に「어」の「何れの」と云ふ二語よりして、両者とも人、或は物を通用せらるゝ事なり。その例は

누가　누가　누가　누가　누가　누가　누가　누가　누가　누가

その人は何で来る。

무엇　무엇　무엇　무엇　무엇　무엇　무엇　무엇　무엇　무엇

書き　は　何れの　人を　求められて　あるか。

무엇이　무엇이　무엇이　무엇이　무엇이　무엇이　무엇이　무엇이

書方は　神々　阿鼻羅　の　何れを　やる人で　かゝる　か。

누군가　누군가　누군가　누군가　누군가　누군가　누군가　누군가

その　物は　何者(誰か)　持　主は　沒が　誰が　最　く　忘れる。

其外は疑問代名詞を参照して知るべし。

七四　関係形容詞

関係形容詞は関係代名詞を仮て構成せらるゝ形容詞として、

마다……는　何かする所の　それ。何なる所の者。或は要する所の者(物)。

의……는　〃　〃　〃　〃　〃　〃

何か或は何々を為らはこれ等の何に或はるゝ後行する所の文意を示せるものなり。それ等の例は以下の如し。

어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한

七　重　塔。　三ヶ月。　ホトケ。　七通　門。

어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한　어떠한

最初(第一)の　仏　陀。　第　二　の　意子。　大　地　第　三　一ヶ月(ハツカ)の　月。

の如く限数、序数より転じてその形容せらるゝ語が限定せられたるを以て、限定数量形容詞と名づけらるゝなり。前例中の四四は四一を踏襲す。一方は四分の三十を一ヶ月と称する相当す。普通は三十を四四と呼ぶなり。

七五　数量形容詞類語

数量形容詞は数と量と程度とを表すものにして二種あり。不定数量形容詞と限定数量形容詞なり。

不定数量形容詞の類語は、以下の如し。

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

多い　多数　多量、多、　多数。　多く、許多。　大　〃

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

大いに。少々。　僅少。　少い。　少。　小。小数。小量、

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

僅一ヒ(数量)　僅、量、　僅、量、　僅、量、　僅、量、　僅、量、　僅、量、　僅、量、

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

僅個、幾何量、何程。　無(数詞)　定量。　無(数量)　定数。　大多数、量。

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

より多数、量。　最多数、量。　最大(数、量)　十分(数)　十分、温度、(量)　澤　山。

조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이　조금이

大　量。　多　量。　大多数。　大多量。　最少数。

조금이　조금이　조금이　조金が(この三語は総凡てついたものを去る)

限定数量形容詞の類語は。基数、序数に属する数詞にして、これ等の数詞は形容せらるゝ語を前か或は後に添加して、限定数量形容詞を構成するなり。その例は以下の如し。

일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱

七　重　塔。　三ヶ月。　ホトケ。　七通　門。

일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱　일곱

最初(第一)の　仏　陀。　第　二　の　意子。　大　地　第　三　一ヶ月(ハツカ)の　月。

の如く基数、序数より転じてその形容せらるゝ語が限定せられたるを以て、限定数量形容詞と名づけらるゝなり。前例中の四四は四一を踏襲す。一方は四分の三十を一ヶ月と称する相当す。普通は三十を四四と呼ぶなり。

七六　不定数量形容詞の例

不定数量形容詞はそれ等を以て、その形容せらるべき語に添加して構成す。

例は ནས་མང་། 多くの麦。 འབྲས་བུ་མང་པོ། 多数の果物。 ཆང་ཡོ་ལང་། 多量の酒。 བུད་མེད་ཡོ་མ་སུ། 多数の婦人。

ལྟད་མོ་འགའ་ཆེན་འདུག། 見せ物が幾何かある。 ལུས་པོ་ཆེ། 大なる身体。 མིག་ཆེ་བ། 大なる眼。 ང་རྒྱལ་ཆེན་པོ། 大我慢。

མཁས་གྲུབ་པ་ཉུང་། 少い学徳者。 འབྲས་ཉུང་བ། 少い米。 ལྟད་མོ་མཁན་ཉུང་ཉུང་། 僅少なる見物人。 ཕྱག་ལ་བ་ཉུང་ངུ་། 些少なる贈物。

སེམས་ཆུང་། 小心。 བུ་ཆུང་བ། 小子。 དུས་རྟེན་ཙམ་གྱི་རྒྱལ་པོ། 少時の王。 ཨ་རག་འབོལ་ཆོད། 大量なる焼酎。

の如し、以上は熟語句の例なるが以下に文例を挙ぐべし。

ངས་འགའ་ཆེན་སྨྱུ་གུ་དགོས་པ་ཡོད། 我は許多の筆を要求する。 ཁྱེད་སྣག་བུམ་ཇི་ཙམ་ཉོ་གྱིན་ཡིན་ནམ། 貴方は墨壺を幾個買いますか。

མཛེས་པའི་སྒྱུ་རྩལ་ནི་ལག་ལེན་གྱི་མཁས་པ་ལྟང་ཆོད་དགོས་སོ། 美術は熟錬の巧妙を十分要ずるなり。 ངས་ཁྱེད་ཀྱི་ཞབས་ཕྱག་ལས་ 私は貴方の御仕事

དེ་ལ་དཀའ་བ་ཇི་ཙམ་མེད་པར་མཐོང་ངོ་། それに困難は何程もなしと見るなり。 ཁོ་ནི་མ་ལབ་པར་ཉིན་གང་འདས་སོ། 彼は無言にて終日過したりき。

གཟུགས་མེད་ཁམས་དང་ལྷ་མ་ཡིན་གྱི་གནས་དང་སྣང་བ་མཐའ་ཡས་ཀྱི་ཞིང་ཁམས་ནི་ལྟ་མི་གཅིག 無色界と阿修羅の住処と無量光の国土は種数不同

གནས་སོ། の住所なり。 ཁོས་བོད་སྐད་ཐམས་ཅད་ཤེས་ནུས་སམ། 僕は西蔵語を総べて知り能ふか。 བུ་ནི་ཇི་ཙམ་ཡོད་ན་འགྲིག། 子供は何人程あれば善いか。

ཁྱོད་སྒྱུ་རྩལ་དེ་མ་ཤེས་ན་དེ་ལ་ཐེད་ཁ་ལག་མ་རྒྱག། 汝はその技術を知らなければそれに一切手を着けるな。 ཆང་ནི་ག་ཙམ་འཐུང་ན་འདང་། 酒は何程飲めば十分か。

རྒྱ་མིས་བོད་སྐད་བསླབ་པ་ཤིན་ཏུ་ཉུང་། 支那人が西蔵語を学ぶ者は甚だ少し。 རིག་པའི་མེ་ཏོག་སྣ་ཚོགས་དང་ 智のもろもろの花と

བསོད་ནམས་ཀྱི་རིན་ཆེན་མང་པོས་བརྒྱན་པར་བཀོད་པའི་རྣམ་པར་སྣང་ 福の宝の多くを以て荘厳建立したる毘盧遮

མཛད་ཀྱི་དག་པའི་ཞིང་ཁམས་སོ། 那の清浄なる国土なり。 མ་རྙོག་མི་ལྟུང་དགེ་བ་ཅན།། 無濁無落有徳者。

ཇི་སྙེད་བདེ་དང་ལྡན་ནོ་ཡི།། シッツ性入法註解八四頁。
ある程の幸福を持つ者ぞかし。

七七　基数を数ふる特異法

基数を数ふる普通の方法は、既に数詞の所に誌したれば、就いて参照せらるべし。金銭物品、年月日時を数ふるに特種なる方法あり。例せば西蔵通貨価格の単位を一円 Kha（我が国貨の四銭に相当す）と云ひ、六カを以て一タンカとし、四十カを以て དངུལ་སྲང་（ヂンサン）一と五十ヂンサンを以て རྡོ་ཚད་（ドーツェ）一とす。四一より ཏང་ཀ་ 一までの呼称は以下の如し。

普通呼方、	実数	邦貨相当価
ཁ་གང་།（カ ガン）四 満。(一円)	ཁ་གཅིག 一カ	四銭。
སྐར་མ་ལྔ།（カルマ ンガ）星 五。	ཁ་གཉིས 二カ	八銭。
ཕྱེད་ཀ（チェッカ）半分。(一タンカの)	ཁ་གསུམ 三カ	十二銭。
ཞོ་གང་།（ショ ガン）沙満。(ショウは量の名)	ཁ་བཞི 四カ	十六銭
ཁ་བཅད།（カプ チェッ）カが欠ける。(一タンカより一カを欠く)	ཁ་ལྔ 五カ	二十銭
ཏང་ཀ་གཅིག（タンカ チッ）	ཁ་དྲུག 六カ	廿四銭
དངུལ་སྲང་གཅིག（ヂンサン チッ）一銀両。	ཁ་བཞི་བཅུ 四十カ。	壹両（支那通貨に準す）
རྡོ་ཚད་གཅིག（ドーツェ チッ）石量(ドツェ)一	དངུལ་སྲང་ལྔ་བཅུ 五十ヂンサン	五十両

もし此等の数に随いて半位を数ふるに当て一タンカ半を ཏང་ཀ་（タンカ）གཅིག་དང་ཕྱེད་ཀ་（一と半）と云はずして、ཏང་ཀ་ཕྱེད་དང་གཉིས（タンカ半にて二）と云ふ。十五タンカの時にも ཏང་ཀ་ཕྱེད་དང་ཉི་ཤུ（タンカ半にて二十）と云ふ。亦四百五十タンカの時には ཏང་ཀ་ཕྱེད་དང་ལྔ་བརྒྱ（半にて五百）と此り順序にて千位も十万位も千万位も数ふべし。この半数の数へ方は金銭に止らず人事物件等にも用ひらるゝなり。経に一千二百五十人とある གཅིག་སྟོང་ཉིས་བརྒྱ་ལྔ་བཅུ་ཐམ་པ（一千二百五十備）と多くは誌さずし

て、[illegible]（百が十三まして千三百なるか、百の半、五十を以て達するの義なり。

年月日の数へ方は、その紀元を時輪経入蔵の年西紀一千二十七年、[illegible]（勝生）丁卯（ラブチュン）の年を初め置き、その年より一千五六十年間を以て[illegible]（勝生）[illegible]（第一）とし、次の六十年間を[illegible]（勝生）[illegible]（第二）とし、此順序を隠ふして算定すれば、本年昭和十一年は藏暦に[illegible]（勝生）[illegible]（第十八）[illegible]（而）[illegible]（子の年）。

七八　序数について

序数は第一を[illegible]とえふを除いて、その他は皆基数[illegible]を添はして、その数を含む番號の形容詞として用ひらるゝなり。然るに[illegible]はお單なその表せる基数を含む形容名詞として表さるゝことあり。その例は以下の如し。

[illegible]　主典　根本三十偈。　[illegible]　般若八千偈。

序数を呼ぶに通俗語としては、[illegible]（番號）と云ふ語を初め稱へて、次に序数を呼ぶこと以下の如し。

[illegible]（第一番）。[illegible]（第十番）。の如し。

又字母三十の韻符四個を添加して、第三百迄で數ふる序数については既に数詞を示されたいこと再言せず。[illegible]を序数に用ひずして、最善、或は最上の意を用ふることあり。例せば

[illegible]（その人は最善である。）　[illegible]（この米は最上である。）の如し。

七九　限定数詞を不定数詞に轉換

限定数詞を不定数詞とするには、[illegible]と云ふ語を基数詞の語尾に附することを以て構成す。その例は

[illegible]（三つ程。）[illegible]（五程。）[illegible]（百程。）の如し。

又複数語尾を附しても不定数詞となるなり。その例は

[illegible]（十等。）[illegible]（百等。）[illegible]（多数百千）の如し。

又[illegible]は千倍の定数なれども、不定的な大多数を表すにも用ひらる。

又[illegible]を單一に用ふる時は、只だ九と云ふ限定数を表すに過ぎざれども、他の語と合して用ひらるゝ時は、[illegible]は不定数詞となること以下の如し。

[illegible]（三界衆生。）　[illegible]（一切智者。）　[illegible]（諸説。）　[illegible]（各々様々。）

[illegible]
不行為を多くなす。（何でも構はずにおれこと）

八〇　特質形容詞の種類

特質形容詞[illegible]には三種あり。(1)説述形容詞 (2)實質形容詞 (3)固有形容詞なり。

(1)説述形容詞は物或は賦態の性質を説示するものにして、形容詞の大部分は、この中に包含せらるゝものなり。

(2)實質形容詞は實質名詞をその儘に形容詞として用ひらるゝものなり。或は屬格形容詞として屬格助辭を添加して用ふるものあり。

(3)固有形容詞は固有名詞を由て構成せらるゝ語にして、人名、地名等の固有名詞が、或名詞或は接尾語を前行して、それ等の語を形容し賦性するものなり。

八一　説述形容詞の例

(1) [illegible]（四角なる柱。）　[illegible]（軽い度船。）　[illegible]（無常なる世界。）　[illegible]（精進なる学僧。）

[illegible]（白塩（白ルコヨ））　[illegible]（老女。老人、村等。）　[illegible]（深い海。）　[illegible]（大なる鍋。）　[illegible]（意鍋。）

[illegible]（無邊なる虚空。）　[illegible]（無明時。）　[illegible]（黒水。）　[illegible]（晴日。）　[illegible]（善鍋。）　[illegible]（鬼子。）

[illegible]（小子。）　[illegible]（長女（第一の妻））　[illegible]（善慧。）　[illegible]（赤い花。）　[illegible]（美女。）

[illegible]（演劇　興味　恍惚なる。）　[illegible]（高い山。）　[illegible]（仕易い業。）　[illegible]（熟したる果。）

[illegible]（正　体　他。）　[illegible]（明瞭なる鏡。）の如し。

八二　實質形容詞の例

實質名詞を以て人名、地名を構成して、固有名詞となれるものあり。例せば ཐོན་ཀ། 學師、ལྷ་ས 神土 の如し。斯の如く實際の用法より見れば固有名詞として其人、其地の特稱なれども、その語源より見れば ཐོན ぶ と云い、師と云い、神と云い、地と云ふも、皆實質的普通名詞なれば、その點より見て實質形容詞として、この中に數ぐるものなり。

(2) ཤིང་གྲུ། 櫂船。　ཤིང་ཏ། 櫂船　ཤིང་ཐལ་ཁ། 床敷枕頭。　ཁྱིམ་ཚེ། 家 眼（宝）　ནོར་ཁྱུ（新郎新婦位の愛と幸福）　ཐང་ལས། 書 山。

རྡོ་རྗེ་ཁ་ཟས། 金剛石の首飾り　ལྕགས་ཤིང་ཏ། 鐵 櫂。　ལྕགས་ལས། 鐵 棒。　ཆུ་ཚོད་ཀ（水で計る器械、金の時計）ཁ ぶ 金のもの

ལྕགས་ལམ། 鐵 道。　ཆུ་ཤིང་། 水木芭蕉。　ཆང་ཁང་། 酒 群。　ཁ་ཅིག（馬鹿者の様）　ཏོ་རྗེ（金剛杵）　རྡོ་ཤེལ། 石 像。

མིག་ཕྲན། 眼 藥。　ཐོན་ཀ། 學 師。　ནམ་མཁའ（虛空 藏）。　ཡ（父系）。　མ（母系）　ཕ（父兄弟）（父の兄弟）

མ（母兄弟）。（父の姉妹）　ཕ（父系親族）。　ཨ（母系親族）。　ཕ（父の遺産）。　ནོ（贈物、土産）。　ཕ（狐毛皮）。

ཆང་ཁང་། 酒 店。　ཐོ（西 師）。　ཁ（山城）。　ཀ（金 瓶）。　ཀ（金 庫）。　ཀ（口（物の）入口）

ཁ（有 頂（世界の最も上にあるもの））。　ལྷ（神土）（西藏の名稱として佛土の義）　の如し。

八三　固有形容詞の例

(3) རྒྱ་གར་སྐད། 印度 語。　རྒྱ་གར་པ། 印度人(男)。　རྒྱ་གར་མོ། 印度婦人。　རྒྱ་ནག་པ། 支那人(男)。　རྒྱ་མ། 支那人。　རྒྱ་མ། 支那婦人。

རྒྱ་ནག་སྐད། 支那 語。　བལ་ཡུལ（ネパール）ཡུལ། 國。　བལ་མོ། ネパール婦人。　བལ་སྐད། ネパール語。　བོད་སྐད། 西藏 語。

བོད་པ། 西藏人。　བོད་མོ། 西藏婦人。　ཨིང་ཁྲི་ཁ་ལུ་ཡི（英國の語）　ཨིང་ཁ（英國人）。　ཨིང་ཁ（英國婦人）。　ཏུ་ར（土耳古語）

ཏུ་ར（土耳古人）　ཏུ་ར（土耳古婦人）。　ཧོ（ホ）ཧ（ホ）　ཧ（ホ人）　ཧ（ホ婦人）　ཧ（ホ）ལ（ལ）ཡ（ཡ）ལ（ལ）（赤色露西亞人。國）

等の如し。この中ཧ（ホ）ལ（ル）ཡ（ヤ）の三字は人にも國にも用いらる語なりと云ふべし。

八四　現在分詞形容詞の例

動詞狀形容詞は現在動詞より成立したるものと、過去動詞より成立したるものとの二あり。先づ現在動詞を用いたる例を擧ぐべし。これは現在動詞に ཀ 或は ཏ を添加して動詞狀名詞となし、それに助辭ཀ を添へて現在分詞となし、それに形容せらるべき語を添加して現在分詞形成するなり。例せば以下の如し。

ཟློས་ཀ（興味を增加する音）樂。　ཡིད（悅意）ཕྲ（美しむる）ཁ（顏色）。　ཁ（粧する美）ཡ。

ཚོད（愛用する）ཀ（印標、校秤、著作）。　ཐབ（不可思議をなす）ཀ（器械）。　ཀ（結合する）ཀ（情態）。

ཀ（困難する疑問）。　ཆུ（走る）ཀ（水）。　ཉི（昇る）ཀ（日）。　ཟླ（入る）ཀ（月）。　ཆུ（沸く）ཀ（水）。

ཨ（然ゆる）ཀ（火）。　ཆུ（滿ちる）ཀ（水）。　ཟླ（輝く）ཀ（光）。　ཕ（樓に）ཀ（ある）ཕ（牛群）。

ཏ（香を放散する）ཀ（香）。　ཤ（敬む所の）ཀ（地）。　ཁ（導きする）ཀ（家、外者）。　ཁ（閃める）ཀ（電光）。

ཁ（喧嘩を）ཀ（勸奮する）ཀ（大無賴漢）。　ནོ（財を與へる）ཀ（富者）。

八五　過去分詞形容詞の例

現在分詞を構成すると同じく過去動詞に ཀ 或は ཏ を添へて過去分詞となし、それに助辭ཀ を添へて形容詞として用ふるなり。例は

ཁ（水となりし）ཀ（水）。　ཕ（破壞せし）ཀ（水瓶）。　ཁ（罪を淨めし）ཀ（菩薩）。

ཁ（旅行せし）ཀ（人）　ཆ（大きくなりし）ཀ（息子と）ཀ（娘）。　ཁ（降伏せし）ཀ（敵）。

ཕ（樣立てし）ཀ（燈明）。　ཁ（隔りし）ཀ（空）。　ཡ（書きし）ཀ（文字）。　ཐ（撚りし）ཀ（糸）。

ཐ（擦破れし）ཀ（衣）。　ཀ（著く）ཀ（讀みし）ཀ（人）　ཁ（寒冷せし）ཀ（人）　ཁ（教育せられし）ཀ（娘）。

八六　本質形容詞と形容名詞と抽象形名詞

本質形容詞は形容原詞とも名づけて、形容のみを表す語なり。例せば ཆེ། 大。དཀར། 白。མཛེས། 美。等の如し。形容名詞はこれ等の本質形容詞に接尾語の པ། ཏ། མ། ར། ས། 等の一を添へて即ち ཆེན། 大なる事、者。དགེ། 善い者、事。དཀར། 善い事。ཁྱད། 善き者。དཀའ། 難事。等となり、抽象形容名詞は形容名詞に ཉིད། (自性、その物自体) を添附して構成するなり。例せば ཁམས་ཉིད། 山嶽、象性。ཁ་ཡིས་ཉིད། 善性、善良、善自体。とするなり。

本質形名、抽象形名詞區別表

本質形容詞		形容名詞	〃 〃	抽象形容名詞。	
藏	譯	藏 接尾	訳 語	藏 語	譯
དཀའ	難い	དཀའ་ཆེ	難い事、仕難い仕事。	དཀའ་ཉིད	難性、難事。
དཀར	白い	དཀར་པ	白い事、白い物、善事。	དཀར་ཉིད	白性、純善。
ངན	悪い、面悪い。	ངན་པ	悪い事、拙い物、劣者。	ངན་ཉིད	悪性、凶悪。
དགེ	愛敬、善がる。	དགེ་བ	善る事、善が事、愛人。	དགེ་ཉིད	愛性、善自体。
ནག	黒い、悪い。	ནག་པ	黒い事、黒者、悪事、悪人。	ནག་ཉིད	純黒、悪性。
བྱ	易い。	བྱ་ཆ	易い事、仕易い仕事。	བྱ་ཉིད	容易、安易。
ཐོ	古い、年い、高い。	ཐོ་ལ	古い事、古い時代。	ཐོ་ཉིད	往古、古代。
མཛེས	美しい、麗はしい。	མཛེས་ཆ	美しい物、美婦人。	མཛེས་ཉིད	美性、佳美。

八七　接尾語の特殊用法と特殊意義

或形容詞は接尾語 ཆ のみを用いて、他の接尾語 པ། ཏ། ཀ། ཅ を用いざるものあり。以下之等くるが如し。

ཐོ་ཆ། 古時、前の者、先の者。ཕྱི་ཆ། 後の時、後の者、遷れた者。ནང་ཆ། 内室 内側、内の者。ཕྱི་རོལ་ཆ། ཕྱི་ཆ། 外の側、後の者。སྟེང་ཆ། 上の者 (主神皇帝の稱) འོག་ཆ། 下の者。མཇུག་ཆ། 尾の者、ཤུལ་ཆ། ཕྱི་ཆ། 背後の者。ཀུན་ཁྱབ་ཀྱི་ཆ། 極の註釋、 ཀུན་ཁྱབ་ཀྱི་ཐུགས་ཆ། 古昔の註釈家等。ཐོ་ཆ། 上人、上世。

これ等の例は熟語として、接尾語が或語と結合せられて、こゝる表せる如き特種の意義に用いらるゝなり。もし此接尾語を更ゆるに、ཀ། ཏ། ཅ の一語を以てする時は、各語異なる意義を表すものあることは以下之等くるが如し。これ等の各語も一々他の接尾語に更ゆる能はざることは、接尾語に於けると同一なりと知るべし。

ནང་ཀ། 内道者、佛教徒。　ནང་ཏ། (未成不用語)。　ནང་ཅ། 家族の一人、親戚。

ཕྱི་ཏ། 外道者、非佛教徒。　ཕྱི་ཀ། 大モルモット。(俗ヨ ཕྱི་ཀ ト云フ)　ཕྱི་ཅ། 遷れたこと (俗)。

ནང་ཅ། 内室、内の人、朝。

ཕྱི་ཅ། 祖母、遷れた事、者。

斯の如く接尾語の異なるがために、同語と云へども全然異なる意義を表すことあるが故に、接尾語の総てが者或は事を表す同一の義を有されども、その形容語の異なるを以て、上記の如く特殊の意義を表すものあれば、能く注意すべし。

八八　諸種肯定形容詞

諸種の肯定形容詞は接尾語の ཅན། 有する者。ལྡན། 具ふる者。ཁྱད་ཅན། 特徴ある者。ཁྱད་ལྡན། 特徴を具ふる者。ཁམས་ཅན། 俱なる。ཁམས་ལྡན། 俱なる者。ཡོད། 有する。ཡོད་པ། 有する者。等の語を實名詞に添加して、その語を形容詞化せしむることに依て構成せらるゝなり。例せば

དཔྱ་ཅན། 頭を有つ者、有頭字、改書。མགོ་ཅན། 頭を有つ者。ཆོས་ལྡན། 富者。ཚེ་ཁྱད་ལྡན། 壽を具ふる者、具壽、長老。ཀུན་ཏུ་ལྡན་ཅན། 遍潤に満ちたる者。

ཉེས་པ་ཁྱད་ཅན། 罪悪と俱なる者。有罪者。ཉེས་ཀ་ཅན། (同前) ཁྱད་ཡོད་པ། 有罪者。

ཡོན་ཏན་མཁས་པ། 有徳者、技術家、才能者。　ཤུགས་ཅན། ཤུགས་ལྡན། ཤུགས་ཡོད། ཤུགས་ཡོད་པ། ཤུགས་ཅན། ཤུགས་ཁྱད་ཅན། ཤུགས་མཁས་པ། ཤུགས་མཁས་ཀ། は皆有力、有權、有力者、有權者等の意に用いらるゝなり。

八九　諸種否定形容詞

否定形容詞は名詞を否定する形容詞にして、ཀ། མེད། ཅ། མེད། ཏ། ཁྱད།

ཀ།ཁ།ག།ང།། として始の二語は、單になしと云ふ意を表はし三の ཁ། は空の義として、その物が空しと云ふ意として否定の形容詞となり、ག は離るの義として、その物が離れて不在なるの義を表せり。ང། は盡滅するの義として、その物が盡滅して無となれることを云ふなり。ཡོ། は無或は離るの意として否定の義を表せり。その例は以下の如し。

ཁ་ཅོག་ཟ་ཡ་ཡོ།།	ངན་ལེན་ཡ་ཡ་ཡ།།	ཏེ་ཧ་ཡ་ཡ་ཡ།།
この聖人は居ない。	我が邪見でなし。	それは空虫である。
ཉོན་ཡོངས་ཀྱ་ཡ།།	ཟག་པ་ཟ།།	ཐམ་ཕ་ཡ།།
無煩惱(全煩惱を離る)	無漏(全煩惱を盡す)。	無邊(全邊際を離る)
དཀར་ཡ།།	ཨཀ་ཡ།།	
無量(計量を離れ)	無數(數を離る)。	

等として多く構成することを得べし。

九〇　可能適應許可的形容詞

これ等の形容詞は可能、適應、許可等の意を以て、構成するものとしてその語類は以下の如し。

ནུས། 為し能ふ、適する。རིན། 價値ある、適當する。

རུང། 適する、屬する、許す ཆོག 許す、十分なる

これ等は助動詞或は動詞として用いらるゝ語なるが、此語又は等の接尾語を附加して、動名詞となし、それに助詞 ཀ を添加して動詞状形容詞として、用いらるゝことは以下の如し。

ཐེག་ཆེན་ཡི་ཆོས།།	ཐུགས་ཡར་ཏོན་ཡི་ཚུལ།།
聽聞に適する正法。	修行に適當なる思惟道。
ལུང་ཡང་ཞུགས་ཡར་རུང་བ་ཡི་ཆོ།	ཆགས་ཡ་ཡ་ཏོང་ཆོག་ཡི་ཆོས།།
誰にでも入るに適する門。	盛慶なれば入ることを許さるゝ法門。

の如く動詞状形容詞として用いらるゝを見るべし。

九一　同意形容詞と反意形容詞

同意形容詞は同意なる二形容詞の間に、ཀྱང་或は ཡང་或は ཏུ ど云ふ一語を入れて、その語を、も、亦、加えても、の義に用いて、その形容語

の意義を強大なるものなり。以下の例に依て見るべし。

ཁ་ཅོག་ཏུ་ཆགས་ཀྱང་ཆགས།།	ཟ་ཏཱ་ཏ་ཀ་ཡང་ཡང།།
處女の裝飾は美なるにも美なり。	白沙の女王は白い上にも白い。
ཅང་ཀ་ཀི་ཀ་ཀ་ཐུང་ཡང་ཐུང།།	ལངས་ཀ་ལ་ཀ་ཀ་ཏ་ལ་ཆེ་ཆེ།།
雁の足は短いにも短い。	佛陀の頂相は高いにも高い。

の如く、これを西藏語で ཚིག་ཅན་ཆགས་ཡ། 同意形容詞と云ふ。これに正反する意義の用法を、ཚིག་ཅན་ཆགས་ཆ། 反意形容詞と云ふ。この用法は ཀྱང་ ཡང་ ཏུ の三語をけれども、が傳し、の意に用ふ。例は

དམ་ཆོས་ལགས་ཀྱང་ཆོག་ལ་ཡང་ཐུགས།།	ཁ་ཅོ་ཤ་ཏ་ཡ་ཡ་ཡ་ལ་ཆ།།
正法を說くが傳し邪まる行ふ。	顏は白い(ぬい)けれども思想は黑い(惡い)
ཤ་ཅ་ཁ་ཟ་ལ་ཏ་ཀ་ཏ་ཏ་ཆ།།	
肉は食るけれども悲愍を思ふ。	

ཀྱང等の三語は皆隨他意語なれば、前行語の後置詞と一致することを要するなり。その連續法は以下の如し。

後置字 ཀ ད ཏ ན と強調字とは ཀྱང།

〃 〃 ང ཅ ཆ ཞ ཡ は ཡང།

〃 〃 ཤ と無端語と ཡ は ཏུ།

を以て添加するものなりと知るべし。

九二　比較形容詞

比較形容詞は比較せらるゝ語に、ལས། より、ཡི། より。ནས། より。と云ふ接尾語を連接することに依て構成せらるゝなり。例は以下の如し。

མི་ལས་ལྷ་ཕྱུ་ཏ།།	ངའི་ལས་ཆེ་ཆ།།	ཁོ་ལས་ང་ཆུང་ངུ།།
人より神は幸福なり。	我より法は大なり。	彼より我は小なり。
ཁྱི་ལས་སེང་གེ་ཤུགས་ཆ།།	གསེར་ལས་གསེར་དཀར་ཏོ་ཆ།།	
虎より獅子は力大なり。	黃金より白金は高價なり。	

この比較語を以て比較最上級語を作るには、ཐམས་ཅད། 悉皆、或は ཀུན། 一切、と云ふ語を ལས། に前置して構成するなり。例は

མི་ཐམས་ཅད་ལས་དམ་པ་ཆོག་ཏུ།།	སེམས་ཅན་ཀུན་ལས་སངས་རྒྱས་ཆ།།
悉皆の人より聖人は最勝なり。	一切衆生より佛陀は最上なり。

尚は異なる意義の比較形容詞あり。一物を他の物と比較するに非ずして、その物自身が次第を異なる状態を表する事を對して、形容するを「次第次第なる語を被形容詞の前に添加して構成するなり。その例以下の如し。

ཤིང་ཀུན་ལས་ཤིང་ཆེ་ཆེ་ཆེ་ལགས། ཁྱོ་ཟླ་ཡི་གཟུགས་ལས་ཆེ་མཆོག་ལ་ལགས།
樺の樹幹は次第々々に大きくなる。 その娘の身躰は次第に高くなる。

ཐོག་ཁ་ལྷན་ཅིག་ཆེ་ཆེ་ཁ་ལས་ཁ་ལས་ཤོར། ཆེ་ཤ་ནི་ཆེ་ཁ་ཆ་ཆ་ཆ།
電氣の燈火(電燈)は次第により明るくなれり。 その人は次第により良くなる。

最極度を表す語に ཤོས 最も、と云ふ語あり。この語は形容される語に添加せられて、最も何々なる者の義を表す。この語は最勝、最大、最上等の義のみに用ひらるに非ずして、又最劣、最小、最下等の義にも用ひられて、思想の両極端を表すものなることは以下の例について見るべし。

ཁ་ཆེ་ཤོས་ཤོས། 一番老いたる兄、長男。 ཆུང་ཤས་ཆུང་ཤོས། 一番小さき妹、末女。

ཁྱིམ་ཤེ་ཤས་ཤོས། 最良なる市人。 རྒྱང་ཤེ་ཤ་ཤོས། 最悪なる山人。

ཐུན་ཁ་ཆ་ཤོས་ལ་ཐུན་ཤེ། 時間最大の時間。 の如し。

九三　熟語。

文法上助辭接尾語等を完備して意義を成しをれる語を、其等の助辭等を省除して、簡單なる語に作成して、熟語として用ふるものあり。それが原語形と熟語とを對照して擧ぐべし。

原語形	熟語	原語形	熟語
ཀུན་ཏུ་ཁ་ཕྱིན་པ། 総てに到達する者。	ཀུན་ཁ་ཕྱིན། 達	རྒྱལ་ཏུ་ཁ་ཕྱིན་པ། 最勝に達した者。	ཁ་ཕྱིན། 最勝者。
ཁས་ལེན་ཁ་ཅིག་ཅེ་ཤ། 御說の中の最善。	ཁས་ལེན། 善說。	ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཟིན་པ། 総てを持つ者(法王の記憶力の)。	ཐམས་ཅད་ཟིན། 総持者。
ཤ་ཀ་ཏ་ཏ་ཡ། 最も潔みなる者。	ཤ་ཀ་ཏ། 最潔。	ཡིག་ཆ་ཤེས་ཀ་ཡ། 大梵語學者	ཡིག་ཆ་ཤ། 大梵學者
ཐམ་ཁ་ཡི་ཤིང་ལ། 虛空の藏。	ཐམ་ཤིང་ལ། 虛空藏。	ཀུན་ཏུ་ཁ་ཕ་ཡ། 普徧に蓋ふ者。	ཀུན་ཁ། 普蓋。

ཁ་ཅོ་ཏ་ཁ་ལྷ་ཁང་ཏ་ཁ་ཁ་ཁ་ལ་ཏ་ཁ་ཁ་ཁ་ཁ། ཁ་ལ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ཁ།
セ ラ ダン ガン チン タン ガン パ スム。 セ ラ ガン スム。
荊林に 寺 五 と 敬善具との 三(大)寺 荊寺 敬 三。

ཟག་ཡོད་ཏ་ཁ་ཅ་ཡ་ཁ་ཆ་ཆ་ཏ་ཟག་ཡ། ཟག་ཁ་ཅ་ཡ་ཁ་ཆ་ཆ་ཆ། ཟག་ཁ་ཅ་ཡ་ཁ་ཆ་ཆ་ཆ།
漏を有する所の諸法 と 漏無き所の諸法。 有漏 無漏諸法

こは外助辭、接尾語を略せられざりしかの如くに遍用する熟語あり。それ等の例は以下の如し。

ངན་ཁ་ཕ། 出家、(原)ངན་ཁ་ཕ་ཡ། 最勝に出た者。 ངན་ཁ་ཁ། 開眼、(原)ངན་ཁ་ཁ་ཁ། 最勝に住する人。 ཏ་ཁ། 汐滿。 ཏ་ཁ་ཁ་ཕ། 確實に出た者。 ཀུན་ཁ། 一切智者。(原) ཀུན་ཏ་ཁ་ཁ། 一切を知る者。 ཐ་ཁ། 一切智者、 ཐ་ཁ་ཁ། 何でも知つてゐる者。 ཏ་ཁ་ཁ། 博士、善知識。 ཏ་ཁ་ཁ་ཁ། 善德の親戚。

この例に擧げられたる熟語は、廣く一般に用ひらるものにして、その語源の如きは大抵は知らずして用ふるなり。

九四　否定動詞狀形容詞

否定動詞狀形容詞は ཨ 或は ཨ(無)'不'の語を、動詞語根の前に置き、それ等語根の後に ཁ 或は ཏ を添加する事に依て構成せらるゝなり。例せば ཏ 即ち信ずと云ふ語根の前に、ཨ否定詞を置いて、ཨ་ཏ 信ぜずと云ふ否定動詞となし、それに ཁ を添加して動詞狀形容名詞となる。即ち ཨ་ཏ་ཁ 信ぜざる者となる。この語に被形容詞なる ཁ 人間と云ふ語を前置する時は、ཁ ཨ་ཏ་ཁ '信ぜざる人間'となる。これは西藏語に最も多く用ひらるゝ順序の規定なり。この順序に反して形容語を名詞の前に置く時は、屬格形容詞として ཨ་ཏ་ཁ ཁ ཁ '不信の人間'、或は不信なる人間となるなり。此に ཁ と云ふ語は前例に多く擧げし如く'なる'と云ふ形容語尾の義に用ひらるゝなり。若し ཨ་ཏ་ཁ と云ふ語を動形容詞とせずして、單に動詞狀名詞に用ふる時は、ཨ་ཏ་ཁ は不信者と云ふ意の語となるなり。同形の語が動名詞に用ひらるゝか、動形容詞に用ひらるゝかを區別するには、その形容せらるゝ語のある時は動形容詞にして、なき時は動名詞なり。

九五　否定動詞狀形容詞の表

མི་ཏོག་མ་ཀུན་ཏུ།	雜花なる花。	མགོ་མ་ཁོ་ནས་ལ།	頭はなりし頭。
ཀུན་ཏུ་ཚ་ཐུང་ལ།	熱せざる林檎。	ལྷ་ཟ་ཁ་ཟས་ལ།	食はなりし食物。
ཁ་ཅོ་ཆ་ཐུང་ལ།	語らざりし娘。	ལས་ཀ་ཆ་ཕྱུ་ལ།	為さざりし仕事。
ཀུན་ཏུ་ཆ་ཐོ་ལ།	聞かざる話。	ལག་ལས་ཆ་ཆད་ལ།	為されざる術業。
ལྟ་ཡོ་ཆ་ཆགས་ལ།	見ざる見世物。	ཁང་པ་ཆ་ཁྱིམ་ལ།	買はなりし家。
ཆོ་ལེ་ར་ཆ་ཆད་ལ།	壓制せられざる人民。	ཕྱིན་པ་ཆ་ལངས་ལ།	墜けなりし施物。
ལམ་ཆ་ལས་ཀ་ལ།	遮断せざりし道。	དོན་ཆ་ཐུབ་ཀ་ལ།	成就せざる目的。
ཐྲོད་ཆ་ལ་ཀ་ཏ་ལ།	満たなざりし器。	ལྷན་ཆ་དག་ལ།	清淨ならざる身体。
ཀ་ཏ་ལ་ཀ་ཆོད་ལ།	満たなざる盃。	མེ་ཏོག་པདྨ་ཆ་ལ་ལ།	開かざる蓮華。
ཐུན་ཆུ་ལ་ཆ་ཀོ་ཆ་ལ།	練習せざる技術。	ཆུ་ཆ་ལ་ཆགས་ལ།	濁らざる水。
ཁ་ལ་ཀ་ཆ་ཐོ་ཆ་ལ།	習はざり し語路。	དངུལ་ཆ་ཁ་ཟོ་ལ།	借らざりし銀貨。
ཆུ་ལ་ཡ་ཆ་ལ་ཁ་ལ།	即位せざりし王。	ཏེ་ཀ་ཁ་ལ་ཆ་ལ་ལ།	習はなりし科學。
ཆ་ལ་ཆ་ཆ་ཀ་ལ།	知らざる學處。	ཐ་ལ་ཆ་ཏ་ལ།	剃髮なりし猿。
ཐེ་ཚོམ་ཏ་ལ།	問はなりし疑。	ཨ་ལ་ཁ་ཆ་ལ།	燃さざりし薪。
ཁ་ལ་ཀ་ཆ་ལ།	交らざる夫婦。	ཕ་ཆ་ཁ་ཏ་ལ།	捕へざる狐。
ཤ་ལ་ཆ་ཆ་ལ།	不定なる證命。	ཆ་ཁ་ཏ་ལ་ལ་ཏ་ལ།	請待せざりし客人。
ཐ་ལ་ལ་ཆ་ཀ་ཆ་ལ་ལ།	不良樣なる妻。	ཏ་ཀ་ཐ་ཆ་ལ་ལ།	等連ならざる希望。
ཀ་ཆ་ལ་ལ་ཏ་ལ།	来ざりし盜賊。	ཏ་ལ་ལ་ཏ་ལ།	過ぎざりし時。
ཆ་ཀ་ལ་ཆ་ཐ་ལ।	集らざる會。	ཏ་ཀ་ཆ་ཐ་ལ।	贈はざりし生命。
ཀ་ཏ་ལ་ཆ་ཏ་ལ।	不作法なる僧侶。	ཟ་ལ་ཆ་ལ་ལ।	消化せざりし食。
ཆ་ལ་ཏ་ཡ་ཆ་ལ་ལ।	考へざる教世主。	ལ་ལ་ཏ་ཏ་ཆ་ཁ་ལ।	不頼なる要漢。
ཏ་ཏ-ལ-ཆ་ཀ-ལ।	不動なる見識。	ཆ་ཆ-ལ-ལ-ལ।	知らざる人。
ཞ-ལ-ཀ-ཆ-ཆ-ལ।	耕さざる畑。	ཆ-ཆ-ལ-ཐ-ལ।	氷結せざる水。
ཐ-ལ-ལ-ཆ-ཐ-ལ।	無興味なる演劇。	ཏ-ལ-ཆ-ཏ-ལ।	無常なる聲。
ཏ-ལ-ཆ-ཆ-ཏ-ལ।	時味ならざる粥。	ཐ-ལ-ཆ-ལ-ཏ-ལ।	不淨なる村。
ཀ-ཏ-ལ-ཆ-ཀ-ལ-ལ।	誤らざる註釋。	ཆ-ལ-ཆ-ཏ-ལ-ལ।	病弱せざる人民。

九六　相反形容詞の表

形容詞る相反の思想を表す語あり。左右前後等の如く熟語として用ひらる。例を表示す。

ཆ-ཐ-ད-ཆ-ད।	高、低。	ཆ-ཁ-ཆ-ཆ-ཁ-ཆ।	詳、不詳。
ཀ-ཆ-ཆ-ཀ-ཆ।	同、不同。	ཀ-ཆ-ཁ-ཀ-ཀ-ཆ-ཁ-ཆ।	有為、無為。
ཆ-ཆ-ད-ད।	大、小。	ཁ-ཡ-ཆ-ཁ-ཡ-ད।	右、左。
ཐ-ཆ-ད-ད-ད।	善、悪。	ཀ-ཇ-ཆ-ཐ-ལ।	柔、粗。
ཐ-ཆ-ཐ-ལ।	太₁、細₁。	ལ-ད-ཐ-ད-ད।	長、短。
ལ-ཐ-ལ-ལ।	豊、歉。	ཆ-ད-ཐ-ད-ད।	多、少。
ཡ-ད-ཐ-ལ।	軽₁、重₁。	ད-ཀ-ར-ནག-ལ।	白、黒、善、悪。
ཐ-ད-ཀ-ཆ-ལ।	鋭₁、滑₁。	ཐ-ད-ཐ-ཐ-ལ।	鈍₁、鈍₁。
ཀ-ད-ཐ-ལ।	寒₁、暖₁。	ལ-ཀ-ཀ-ལ-ལ।	薄₁、厚₁。
ཐ-ད-ཆ-ཐ-ལ-ལ।	正真、婉曲。	ཆ-ཇ-ཆ-ཆ-ཆ-ཇ-ཆ।	美、醜。
ད-ལ-ད-ལ।	後曲、前曲。	ཐ-ལ-ཆ-ཐ-ལ।	聲嗄、不聲嗄。
ཐ-ད-ད-ལ-ལ।	定、拔勃。	ཁ-ཆ-ཆ-ཁ-ཆ।	旨味、不味。
ད-ལ-ཆ-ད-ལ।	喜、怒、哀、不哀。	ད-ལ-ཆ-ད-ད-ད-ཆ-ལ।	有權、無權。
ཐ-ལ ཐ-ད-ལ।	近₁、遠₁。	ད-ལ-ལ ཐ-ལ।	難 易。
ཐ-ལ ཐ-ལ।	濃厚、稀薄。	ཐ-ལ ལ-ལ।	深₁、浅₁。
ཐ-ཆ-ལ-ལ-ད।	乾燥、濕潤。	ཆ-ལ-ཆ-ད-ཆ-ལ-ཆ-ད-ལ।	廣大 狹小。
ད-ལ-ལ ལ-ལ।	粗大、細微。	ཁ-ཇ-ད-ལ-ཐ-ད-ལ।	賢、愚。
ད-ལ-ཡ-ད-ལ-ལ।	狭₁、廣₁。	ལ-ཐ-ལ-ལ-ད-ལ-ཐ-ལ-ལ-ད-ལ।	有身無身。
ད-ལ-ཆ-ད-ལ।	淨、不淨。	ད-ད-ཡ-ཐ-ལ-ལ-ལ।	瘠、肥。
ཐ-ལ ཐ-ལ।	古、今。前、後。	ཆ-ད-ལ-ད-ཆ-ད-ལ-ད-ལ।	有色、無色(ウルパ)
ལ-ལ ལ-ད-ལ।	外、内。	ལ-ད-ལ ལ-ལ।	上、下。
ད-ཐ-ལ-ཐ-ལ।	貧、富。	ཐ-ད-ཆ-ཐ-ད।	盛名、醜名。
ད-ལ-ཆ-ད-ལ।	常、無常。	ཐ-ལ-ད ཐ-ད।	上方、下方。
ལ-ལ-ད-ད-ལ।	今、古。	ཐ-ལ ལ-ཆ।	勝、負。
ཐ-ལ-ལ-ཐ-ད-ལ।	濁、清	ཡ-ཆ ། ཡ-ཆ ། ཆ-ད །	上、下。上ゴ下ゴ。

第四章 བྱ་ཚིག 動詞

九七 བྱ་ཚིག་གི་རིགས། 動詞の種類

總ての動詞はその動作の性質に從つて、これ等を大別して二となす。即ち自動詞 བདག་སྒྲ と他動詞 གཞན་སྒྲ となす。

自動詞はその表す動作が他の事物を處置せずして、動詞自らに止まるものなり。されば動作の目的となる客語を有せず。動詞のみにてその意義の通ずるものなり。その語類を擧ぐれば以下の如し。

འགྱུར་ なる、変はる。 འབྱུང་ なる、生ずる、出る。 འགྲོ་ 行く。 འཕུར་ 飛ぶ。

འདུག་ ある、居る。 གདངས་ 癒えたり。 གསུངས་ 說き給へり。 དགོད་ 笑ふ。

དགའ་ 喜ぶ、うれしがる。 མཁྱེན་ 知り給ふ。 མགུ་ 喜ぶ、楽む。 འཛེན་ 自粛する。

འཛད་ 消盡す、盡滅する。 འཛག་ 漏る。 མཆོར་ 踊る。 འཛེམ་ 遠慮する。

འཇིག་ 破れる、破滅する。 འཇིགས་ 恐る。 འཇུག་ 入る。 འོང་ 来る

འདུག་ 居る、坐る。 འདུར་ 歩行する。 འགོང་ 行く。 འཐོན་ 出行く。

等にして、これ等を文中に入れて用ふるときは、自動詞の作用を表すことを以下の例に依つて見るべし。

ཕྲུ་གུ་ཆེན་པོར་འགྱུར་རོ། 小児大に なりき。 འཁོར་བ་ལས་འབྱུང་ངོ། 輪廻より出でたき。 སློབ་གྲྭར་འགྲོའོ། 學校に行けり。 བྱ་ནི་འཕུར་རོ། 鳥は飛べり。

ང་ནི་འདིར་འདུག 私は此に居る。 ནད་ནི་གདངས་སོ། 病は癒へたりき。 རྒྱལ་པོ་ཆོས་གསུངས་སོ། 王は說き給ひた。

ཁོ་རང་གད་མོ་དགོད། 彼は笑ひを笑ふ མོས་དགའ་འོ། 彼女は喜べり。 སངས་རྒྱས་མཁྱེན། 佛は知り給ふ。

སེམས་སུ་མགུའོ། 心に樂めり。 ཆུ་འཛག་གོ། 水は漏るなり。 ཁོས་མཆིད་དོ། 彼は云へり。 མགྲོན་པོ་འོང་ངོ། 客人は来たれり。

སྒོར་འཇུག་གོ། 門に入れり。 མ་འོངས་པ་ན་འཇིག་རྟེན་འཇིག་པར་འགྱུར། 未来時に於て世界は破滅するならん。

等の如く、これ等の文章に用ひられたる動詞の動作は、何れも皆その作用が動詞自らに止まるものにして、鳥が飛ぶと云へばそれのみにてその意は能く通ずるなり。斯の如くその作用が動詞自體に止るが

故に自動詞と言ふなり。然るに上例中、ཕྲུ་གུ་ཆེན་པོར་འགྱུར་རོ། [小児 大に なれり。] と云ふ文の「大に」と言ふ語は「なれり」と云ふ動詞の補足語にして、他動詞の如き目的語に非ず。故に上掲例文中の動詞は他の事物を處置するが如き目的語を有せざるなり。此に居るの「此に」の語も、單に居る動詞の意義を補足したるに過ぎざるなり。

他動詞はその作用が動詞自體に止らずして、他の事物を處置することを表すが故に、必ず客語ありて、その動詞の動作に處置さるゝことを示せり。その例以下の如し。

གོས་བགོ་བ། 衣を覆へり。 ལག་པ་བརྐྱང་། 手を伸せり。 ལམ་བཀག་གོ། 通行を禁ぜり。 ཁལ་བཀལ། 荷物を乗せたり。 གཞུ་བཀང་། 弓を張りき。

སྐུད་པ་བཀལ། 糸を繰げり。 གོང་དུ་ཁལ་བཀུར། 上に荷を運びき。 ཁྲལ་བཀལ། 税を徴せり。 ས་ལ་ཆུ་གཏོར། 地に水を撒く。 མདའ་རྒྱག 矢を放つ。

ཁོས་གཅིན་པ་གཏོང་། 彼は尿を放つ。 ཨེམ་ཆིས་ཁྲག་གཏོང་། 醫師が血を出す。 ཇག་པས་ནོར་བསོག 盗者が財を集める。 དམག་དཔོན་གྱིས་རྟ་བཏང་། 將軍が馬を出す。

ལྷ་ལ་མེ་ཏོག་མཆོད། 神に花を供へる。 ཉེས་ཅན་ཕྱིར་བསྐྲད། 罪人を外に追放す。 ཇག་པས་རལ་གྲི་དབྱུག 劫盗が剣を振舞す。 རྒྱ་མཚོའི་གཏིང་དཔོག 海の底を測る。

ཀོ་ཡུགས་མཁན་གྱིས་ཀོ་བ་མཉེ། 皮工が皮を鞣す。 བཙུན་མོས་རྒྱལ་པོར་ཕོ་ཉ་མངགས། 王妃が王に使者を送る。

以上の例中「上に荷を運びき」「神に花を供へる」「王に使者を送る」「罪人を外に追放す」とある文中の上に、神に、王に、外に、とある語は、何れも各文にある他動詞の補足語なり。その他動詞が處置する目的語は何れも「を」と云ふ助辭を以て表され居るを見るべし。

九八 他動詞に於ける七語の用法

前節の例に表れたる如く、他動詞の客語となれるものには、何れもその語尾に形式語なる「てにをは」を有せず。我國語に「手を延ばせり」とあるに對して西藏語には ལག་པ་བརྐྱང་། [手 延ばせり] 「を」助辭に相當する語なし。只他動詞が目的語を處置するが故に、ལག་པ が「手を」云ふ意義を有することゝなるなり。西藏語の他動詞の大部分は、助辭「を」に相當する語を用ひずして、他動詞の目的語は皆「を」の義を表すものなりと知るべし。然れども目的

語の助辭'ga'と相當する語即ち四義七語の一を用ひたるものを，屢々古代の名文中に見出さるゝなり。二三の例を挙ぐれば以下の如し。

ཁོ་ཚོ་ཀུན་ཏུ་ཆོས་ལ་ཡོན་ཏན་ཀྱི། ། འདོད་དགུ་ཐོབ་ཕྱིར་ཡང་ཁ་ཅིག ／ 誰かが 恢らずに一切の徳 諸願欲 を 得ふる者は古公の主(佛陀)

ཁམས་ཀྱི་ལས་ཀུན་ཤེས་ཤིང་ཐེག ། དེང་ཕལ་ཆེ་ལ་ཤེས་ཤ་ཟ ／ 法界に精進する人間は 初に 経を 等 を 学ぶ

ཤེས་རབ་ཀྱི་ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན ། ལེ་ལོ་ཁ་ལེ་ཡ་ཅ་ཟ ／ 教師 その方 を 持って 怠惰 懶惰を全全に捨てたり

以上の例文中に四義七語中の'ར'ལ'ཏ'の三語が，普通用法の に，へ，の義に用ひられずして，'を'の義に用ひられたるを見るべし。

九九　敬語動詞

我国語の動詞には多くの敬語あれども，西藏語の如く全くその語形を異にするものは甚だ少し。国語の語形を異にする例を云へば，為を御ばすと云ひ，見る→御覧遊ばす。貰ふ→召し上がる。言ふ→仰せられる。寝る→御休遊ばす。などの如き少数の語にして，その多くは普通動詞に御の字を前置するか，御ばすの語を後置して，敬語動詞を構成するなり。下賜に云へば御と遊ばすとを前後に附けて構成する例は御覧遊ばすの如し。御貰ひ，御歩み，御笑ひ，御怒り，御泣き等の如し。この外特殊な　上述一人に對する語形の異なる敬語の多く存することは，我国語の特有なるが，西藏語に至ては一般用ふる普文語に異なる語形の多く存することは，次表に挙ぐるが如し。

一〇〇　普通動詞敬語動詞對照表

此に挙ぐる表に於て，譯語は普通動詞に對するもののみを挙げて，その敬語に對する譯語は省けり。これは普通動詞の語に由て，それの敬語も知り易けければ挙げざるなり。又動詞を根語のみ挙げずして，不定動詞の語形を挙げたり。これは西藏語動詞の根語は名詞の基語と形容原詞即ち本質形容詞とに誤り易き語形なるを以て特に不定動詞の語形を撰んで用ひたるものと知るべし。

普通動詞	譯語	敬語動詞	普通動詞	譯語	敬語動詞
འདུག་པར། ཕེབ་པར།	居るべく。居るべく。	མཆིས། མངའ་བར།	ཡོད་པར། རེད་པར།	有るべく。	གདའ། ལག་ཁ་ཤར།
སྡོད་པར།	あるべく。	ཞོལ་པར།	གནས་པར།	住まべく。	གཞུག་ས་ཤར།
བྱེད་པར།	為すべく。作すべく。	མཛད་པར།	ཐུབ་པར།	為すべく。作すべく。	བཀྲོད་ཤར།
སྐྱེ་བར།	生るべく。	གཞུལ་ནས་ཤར།	ཐོན་ཏེ་ཤར།	生るべく。	ལག་ཏུ་ཤར།
འཚོ་ཤར།	生活すべく。	གཅེས་ས་ཤར།	ཉམ་ཤར།	死すべく。	ལན་ཏོ་ཤར།
ཤི་ཤར།	死すべく。	ཀུན་ཏུ་ཤར།	ལག་ཏུ་ཤར།	〃 〃	ཐུ་ཚོ་ཤར།
ཁྱད་ཤར།	〃 〃	ཞོ་ཤར་ལག་ལེན་ཤར།	ཆ་ལུ་ཤར།	老ゆべく。	ཕ་ཁྲ་ཤར།
ཟེར་ཤར།	言ふべく。	ཁས་ལན་ཤར།	ཟླ་ཤར།	言ふべく。	ལན་ཏོ་ཐུ་ལུ་ཤར།
ལན་ཤར།	〃 〃	ཞོ་ལ་ཤར།	ཐུ་ནར།	聞くべく。	ཁ་ལན་ཤར།
ཐོག་ལ་ལན་ཤར།	坐すべく。	ཁ་ཤུ་ལན་ཤར།	ལན་ཏུ་ཤར།	起つべく。	ལག་ཁ་ཤར།
ཉལ་ཤར།	臥すべく。	ཆགས་ཤར།	ལན་ཁ་ཤར།	歩むべく。	ལམ་ཁ་ཤར།
ཕན་ཤར།	走るべく。	ཁ་ཤུ་ཤར།	ཏོ་ཤར།	来るべく。	ཕེབ་ཏེ་ཤར།
ཐལ་ཤར།	達すべく。	ཕེབ་ཤར།	ཐོན་ཤར།	生るべく。	ཕལ་ཆེ་ཤར།
ཁ་ཏོན་ཤར།	與ふべく。	ཐུགས་ཤར།	ཕུལ་ཤར།	施すべく。	ཁ་ཏོ་ཤར།
ལེན། ཐུགས་ཤར།	取るべく	ཁ་ལན་ཤར།	ཐུགས་ཤར།	受くべく。	ལ་ཤེས་ཤར།
ཁྱད་ཤར	議論すべく。	ཁ་ཀ་ཆགས་ཆོད་ཀྱི།	ལ་ཁྱེ་ཤར།	註すべく。	དཀོན་ལ་ལ་ཁ་ཤར།
ཁས། ཆགས་ཤར།	見るべく。	ཁ་ཤེ་ཁས་ཤར།	ཤེས། རིག་ཤར།	知るべく。	ཆགས་ཏ་ཤར།
ཁ་ཉིད་ལོག་ཤར།	眠るべく。	ཁ་ཤེ་ཆགས་ཤར།	ངལ་ཤར།	疲るべく。	ཆགས་ལ་ཤར།
དུ་ཤར།	泣くべく。	ཀུ་ཆགས་ཤར།	ལན་ཏོ་ཤར	招待すべく。	ཐུགས་ཁ་ཏན་ཤར།
ལན་ཏོ་ཤར།	招待すべく。	ཐུགས་ཏུ་ཤར།	ཐོས་ལོ།	招待したりき	ཐུགས་ཏུ་ཤར་ལོ།
ལ་ཏེ། ལ་ཆོས་ལ་ཤར།	喜ぶべく。	ཐུ་ཤར། ཁ་ལོ་ལ་ཤར།	ཁ་ཏོ་ཤར།	絶すべく。	ལ་ཐུ་ལ་ཤར།
ཐ་ལོ་ལ། ཐ་ལ་ལ།	喜ばしたりき。	ཐུ་ལ་ལ། ཁ་ལ་ལ་ཏ།	ཁ་ཏ་ཏོ།	絶したりき。	ཐ་ལ་ལ།
ཁ་ཏ་ཏ་ཁ་ཤར།	驚嘆すべく。	ཐ་ཁ་ལ་ཆ་ཟ་ལ་ཤར།	ཁ་ཏ་ཆ་ཤ་ཤ	憐むべく。	ཐ་ཁ་ལ་ཆ་ཤ་ཤ།
ཆོ་ལ་ཆ་ཆ། ཤ་ཤ	夢見るべく。	ཆ་ཤ་ལ་ལ་ཁ་ཤ ཐ་ལ।	ཁ་ལ। ཁ་ཤ	未だ嘗てべく。	ཤ་ཤ ཐ ལ ཁ ལ ཐ ལ
ཏ ལ ཁ ཤ ཁ ལ	馬の嘶くべく。	ཆ ཤ ལ ཁ ཤ ཁ ལ	ཆ ལ ཁ ཤ ཁ ལ	火の燃ずべく。	ཐ ཁ ལ ཁ ཤ ཁ ལ
ཏ ལ ཁ ཤ ཁ ལ	戸の鳴るべく。	ཐ ལ ཁ ཤ	ཆ ཤ ཁ ལ	雷の轟くべく。	ཐ ཁ ལ ཁ ལ ཁ ལ

一〇一　動詞の性入法

西藏文典中རྟགས་ཀྱི་འཇུག་པ性入法として、一部門を設置せられたる程に、緊要なるものなり。西藏語の特色として、その語を構成する一々の字母に、性の區別ありてその各字母の活用を異にせり。その語にはそれが自然に有する特性の外、別に梵語に於けるが如き、言語自體の性あることなし。各字母はそれが構成せられたる言語中の位置に於て、一々その性別を異にせり。されば字母全體としての性別は、明成音字三十が男性にして、四の韻字は女性とせらるゝなり。然るに基字の性別は明成三十字を男、中、女、甚女、石女の五性に分つなり。次に後置十字は男、中、女の三性に分たれ、前置五字は男、中、女、甚女の四性に分たるゝなり。これ等の性別は誠に肝要なるものにして、この性別を無視しては、言語音聲の調和せる文章は勿論、動詞自他の二相三時限は成立せられざるなり。故に初に基字、前置字、後置字に於ける各字の性を熟知し、次にそれ等の性字が云何なる性字に入れらるゝかの法則を知ることを必要とするなり。

一〇二　基前後置字の性別表

基字性別表

男	ཀ་ཅ་ཏ་པ་ཙ།
中	ཁ་ཆ་ཐ་ཕ་ཚ།
女	ག་ཇ་ད་བ་ཛ་ཝ་ཞ་ཟ་འ་ཡ་ཤ་ས།
甚女	ང་ཉ་ན་མ།
石女	ར་ལ་ཧ་ཨ།
無性	ཨ།

前置字性別表

男	བ།
中	ག་ ད།
女	འ།
甚女	མ།

後置字性別表

男	ག་ད་བ་ས།
中	ན་ར་ལ།
女	ང་མ་འ།

一〇三　字母性別の根據

斯の如く性を分つことは何の根據に由ってなさるゝかと云ふに、各自の字母がそれ等生處の一々より發聲せらるゝ時、その發聲に要ずる努力の大小緩急強度に隨ふて、その性を別つものなり。その努力の最も大にして急なるものを男とし、それより幾分か大と急との度の低きものを中とし、それより少しく努力の少にして緩なるものを女とし、それより尚ほ努力の小にして緩なるものを甚女とし、それよりも尚ほ甚だしく小なるものを石女とするなり。然るにཨ字は石女性中にありながら無性と云はるゝは、ཨ字發聲の時、殆んど發聲の努力を要ぜずして、咽喉を開きしまゝにて自然に發生せられ得るが故に、無性即ちམ་ཉིང་ཨ་མེད་とも名づけらるゝなり。されば字母性別の根據は、各字母發聲時の努力の大小緩急にあることは、以上の説明に依て明かに知らるべし。

一〇四　字母性入の四法則

性を分たれたる各字母が、言語に構成せらるゝに當て、四の法則が用ひらるゝなり。その四法則は以下の如し。

དེ་དག་རེ་རེ་འང་བཞི་བྱེད་དེ། །གང་ལ་འཇུག་བྱེད་གང་གིས་བྱེད། །

それ等一々にも四(法則)をなして、(1)何に入れなす、(2)何を以て入れなす、

ཇི་ལྟར་འཇུག་བྱེད་ཅི་ཕྱིར་བྱེད། །　(かくして性入法。)

(3)何の様に入れなすと、(4)何のために入れなすと。

これ四法則の始の二法則を一つに合して説明すれば、前置の何字を以て、基字の何字に入れなすか、と云ふことゝなるなり。亦後置字の何字を以て、基字或は後續語の何字に入れるかと云ふ義にも用ひらるゝなり。第三法則はこれ等前置後置の字類が、云何様なる情態に於て基字に入れるかを決定したるものなり。第四の法則は前置字、後置字は、何等の意義のために入れらるゝかと云ふことを決定したるものなりと知るべし。

一〇五　前置と基字との結合法

四法則の第一第二法則の適用に於て、前置字の何を以て基字の何字に入るかについて説くべし。前置男性の ཀ 字は、基字の男性字と女性字とに入れ、前置中性 གི ད の二字は、基字の男性字と女性字とに入れ、前置女性の ཁ 字は、基字の女性と中性字に入れ、前置甚女の མ 字は基字の女性と甚女性の字に入るべきなり。これ等を表示すれば以下の如し。

前置字	結合せらるべき基字
男 ཀ	男 ཀ ཁ ག ང ཅ ཆ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཞ ཟ ཡ ར ལ ཤ ས ཧ ཨ
中 ཀི	男 ཁ ག ཅ ཆ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཞ ཟ ཡ ར ལ ཤ ས ཧ ཨ
中 ད	男 ཀ ཁ ག ཆ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཟ ཡ ར ལ ཤ ས ཧ
女 ཁ	女 ཀ ཁ ག ང ཅ ཆ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཞ ཟ ཡ ར ལ ཤ ས ཧ ཨ
甚女 མ	中 ཀ ཁ ག ཆ ཏ ཐ ད ན ཕ ཚ ཟ ཡ ར ལ ཤ ས ཧ 甚女 ང ཅ ཞ ཨ

これ等の前置字を以て、その結合せらるべき基字と結合して、次に後置字を添加して、語を構成するなり。

一〇六　性合法に依る言語構成

前男字を基男字に結ぶ例。 ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ

前男字を基女字に結ぶ例。 ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ

前中性 ཀ を基の男女に入る例。 ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ

前中性 ད 字を基の男女に入る例。 ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད

前中性 ད 字を有結基字の男女に入る例。 ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད ད

前女 ཁ 字を基女字に入る例。 ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

前女 ཁ を有結基の女と中に入れる例。 ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

前甚女 ཁ を基中の ཀ ཅ ཏ ཆ に入れる例。 ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

前甚女 ཁ を基女の ཀ ཏ ད ཐ に入れる例。 ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

前甚女 ཁ を基甚女の ང ཅ ཆ に入れる例。 ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

一〇七　不合法結合は藏語不成立

西藏語は字母の二三が集れば必ず語が成立することとなるに非ず。上に挙げたる法則に依るに非ざれば、語は成立せざるなり。上記の例によって明なるが如く、前置男性 ཀ 字は基字の男と女とに入れたれども、中性字に入ることを許さず。又前置中性 ད ད の二字は、基字の男と女とに入れたれども、中性字には絶對に入れられず。又前置女性 ཁ 字は女と中とに入れたれども、男性字には決して入れられず。又各自組成の字なれば男字 ཀ と雖も基字の女、或は甚女に入ることは許されず。もし強いて入れれば以下の流のとなって語を作さず。又各前置字が入ることを許されざる基字に入るものも亦語をなさざることは以下の例の如し。

ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ ཀ
男中、 中中、 中中、 女男、 男女、 男甚女、 中中、

ཀ ཀ ཀ
中中、 女女、 等の如し。

これ等の各類は規定の法則に反して、結合することを許されざるものを、強いて結合したるものなるが故に、西藏語とはならざるなり。されば云何様に結合するかと云ふ性の法則を知らざれば正當に西藏語を文字に表はさざる者なりと知るべし。

一〇八　男前置 ཀ 字の表し得る意義

これ等前置字の性の區別は何の為に用ひらるかと云ふに、初に男前置 ཀ 字が何の意義を表すかについて、その法則を挙ぐべし。

[illegible] 性入注。
[illegible]
男は過ち と 他動を成す為(なり)

とあって、前置男性四字は、三時(現在中に於ては)過去を表す為に用ひられ、三動に於ては、他動詞を表す為に用ひらる。それは四前置字の用ひらる動詞は、過去時を表すと同時に他動を示すものなりと知るべし。

一〇九　前置男性四字他動過去詞の表

[illegible]	山に登る。	[illegible]	花を([illegible])折った。	[illegible]	水を割った。
[illegible]	枝を伐採した。	[illegible]	5を張りを。	[illegible]	葉を[illegible]。
[illegible]	網を張りを。	[illegible]	花を[illegible]。	[illegible]	枝を[illegible]。
[illegible]	鮮を[illegible]。	[illegible]	水を[illegible]。	[illegible]	手を伸ばした。
[illegible]	生命を[illegible]。	[illegible]	5ント([illegible])を[illegible]した。	[illegible]	蓋を開した。
[illegible]	網を[illegible]。	[illegible]	人は[illegible]安心した。	[illegible]	玉を[illegible]。
[illegible]	水を[illegible]。	[illegible]	結びを組く。	[illegible]	皮を[illegible]。
[illegible]	木を[illegible]。	[illegible]	名を[illegible]。	[illegible]	剣を[illegible]。

前置中性四字の二字は自動と他動との両者を、時限は現在を表すために用ひらるゝものなり。それ等の例は以下に挙ぐるが如し。

四前置字を自動現在に用ふる例

[illegible]	山に登る。	[illegible]	花が([illegible])咲く。	[illegible]	水が割れる。
[illegible]	枝が伸びる。	[illegible]	5が張りを。	[illegible]	葉が[illegible]。
[illegible]	網が張りを。	[illegible]	花が[illegible]。	[illegible]	枝が[illegible]。
[illegible]	鮮が[illegible]。	[illegible]	水が[illegible]。	[illegible]	手が伸びる。
[illegible]	生命が[illegible]。	[illegible]	5ント([illegible])が[illegible]する。	[illegible]	蓋が開く。
[illegible]	網が[illegible]。	[illegible]	人が[illegible]安心する。	[illegible]	玉が[illegible]。
[illegible]	水が[illegible]。	[illegible]	結びが組く。	[illegible]	皮が[illegible]。
[illegible]	木が[illegible]。	[illegible]	名が[illegible]。	[illegible]	剣が[illegible]。

四前置字を他動現在に用ふる例

[illegible]	木を切る。	[illegible]	名を割る。	[illegible]	身を置く。
[illegible]	花を摘む。	[illegible]	網を張く。	[illegible]	魚を惜む。
[illegible]	山に登る。	[illegible]	花を[illegible]。	[illegible]	水を[illegible]。
[illegible]	手を伸ばす。	[illegible]	蓋を開く。	[illegible]	玉を[illegible]。
[illegible]	人は[illegible]安心する。	[illegible]	結びを組く。	[illegible]	皮を[illegible]。
[illegible]	名を[illegible]。	[illegible]	木を[illegible]。	[illegible]	剣を[illegible]。

四前置字を自動現在未来に用ふる例

[illegible]	山に登る。	[illegible]	花が咲く。	[illegible]	水が割れる。
[illegible]	枝が伸びる。	[illegible]	5が張りを。	[illegible]	葉が[illegible]。
[illegible]	網が張りを。	[illegible]	花が[illegible]。	[illegible]	枝が[illegible]。
[illegible]	鮮が[illegible]。	[illegible]	水が[illegible]。	[illegible]	手が伸びる。
[illegible]	生命が[illegible]。	[illegible]	5ント([illegible])が[illegible]する。	[illegible]	蓋が開く。
[illegible]	網が[illegible]。	[illegible]	人が[illegible]安心する。	[illegible]	玉が[illegible]。
[illegible]	水が[illegible]。	[illegible]	結びが組く。	[illegible]	皮が[illegible]。
[illegible]	木が[illegible]。	[illegible]	名が[illegible]。	[illegible]	剣が[illegible]。

四前置字を他動現在未来に用ふる例

[illegible]	山に登る。	[illegible]	花を摘む。	[illegible]	身を置く。
[illegible]	木を切る。	[illegible]	名を割る。	[illegible]	網を張く。
[illegible]	魚を惜む。	[illegible]	花を[illegible]。	[illegible]	水を[illegible]。
[illegible]	手を伸ばす。	[illegible]	蓋を開く。	[illegible]	玉を[illegible]。
[illegible]	人は[illegible]安心する。	[illegible]	結びを組く。	[illegible]	皮を[illegible]。
[illegible]	木を[illegible]。	[illegible]	名を[illegible]。	[illegible]	剣を[illegible]。

一一〇　前置中性四字の二字の表し得る意義と例

前置中性四字の二字は例のごとくスハらるゝかなを云へば

[illegible]

一一一　女前置四字の表し得る意義と例

前置女性の四字は例のごとくスハらるゝかを云へば

[illegible]
女([illegible])は自動現在未来の為めに。

とあって、前置女性の四字は、自動と現在と未来とを表す為に用ひらるゝものなり。

前置女性四字の表し得る意義と例

གནས་སུ་འཁྲུ། 場所に倚る。　བྲོ་འཁྱབ། 踊,歸る。　ཆུ་རྒྱུ་འཁྱིལ། 水に渦巻く。　ཁྲི་སིང་གིས་ཤིང་ལ་འཁྲིལ། 蔓が木に巻く。

དབང་པོས་འཁྲིག། 根にて交構す。　ཕྱག་འཚལ། 禮拝し上る。　ཆུས་འཛག། 水が漏る。　ཡོན་ཏན་གྱིས་འཚོ། 功德(技術)にて生活す。

前置女性འ字が自動未來に用ひらるゝ例

前置女性のའ字が自動未來詞として、用ひらるゝ例は以下に擧ぐるが如し。

མ་འོངས་པའི་དུས་སུ་བྱམས་པ་འབྱོན། །དུས་ཕྱི་མར་ཁོ་ནམས་རྗེ་གཅིག་ཏུ་འགྱུར།
未來時に彌勒は來られん。後時に彼等は一業になりん。

འབྲེལ་བར་སྨྲ་བའི་མཆོག་ཏུ་འགྱུར། །མགོ་བོ་ཨར་ཇ་ཀའི་ཡལ་ག་བཞིན་དུ་འགས། །
作文に関詩の最勝とならん。頭は柘榴の果の如くに裂けん。

の如くའབྱོན來らん、འགྱུར་ならん、འགས་裂けんと、一語にて未來時を表す語ありと雖ども、元來འ前置字のある語は皆現在と未來とに用ひらるゝ規定なれば、一語にて未來詞たることを明示する語を除いては、大方はཔར་འགྱུར། 或はབར་འགྱུར། と云ふ未來明示助動詞を附して、それが現在詞に非ざることを明示すること以下に擧ぐるが如し。

ཁྱིམ་ལ་འཁོར་བར་འགྱུར། 家に執着するならん。　གཞན་དུ་འཁྱར་བར་འགྱུར། 外に踏み迷ふならん。　ཡུལ་དུ་འཁྱམ་པར་འགྱུར། 國に彷徨するならん。

འོད་འཁྱིམ་པར་འགྱུར། 光が包み廻らん。　གཡོག་ཏུ་འཁོལ་བར་འགྱུར། 奴隷に奉仕するならん。　ངང་བཞིན་འཁྲུན་པར་འགྱུར། 自然が呻吟するならん。

གློག་འཁྱུག་པར་འགྱུར། 電光が閃めくならん。　སྐུ་འཁྲུང་བར་འགྱུར། 御身が生れ給ふならん。　འཁོར་བར་འཁོར་བར་འགྱུར། 輪廻(リンネ)に輪廻するならん。

とあって明かにའཁོར་འཁྱར་等の動詞が未來詞に用ひられたることを示せり。もしこれ等の動詞にして、助動詞の附せられざる時は、大方は現在時に用ひられたりと知るべし。例せばཁྱིམ་ལ་འཁོར།(家に執着す) གཞན་དུ་འཁྱར(外に踏み迷ふ)とあって、外に未來助動詞の添ふものなければ、現在時を表す語となるなり。

一一二　前置甚女མ字を総てに等用する法と例

前置の甚女性なるམ字は、何の為に用ひらるゝかと云へば其の法以下の如し。

ཤིན་ཏུ་མོ་ནི་མཉམ་ཕྱིར་རོ།
甚女(མ字)は平等の為めなり。

と云ふ意は、前置甚女のམ字が表す活用は、自動、他動、過去、現在、未來に通じて據ぶ所なく、平等に用ひらるゝなり。随ってそれが差違を別つには助動詞に依て明示せらるゝなりそれ等の例を擧ぐれば以下の如し。

自　ཁོས་རང་བཞིན་གྱིས་མཁས་སོ། 彼が自性は通達せり。
他　ཁོས་བསླབ་གསུམ་མཁས་པར་བྱེད། 彼は三學を學びなす。

過　ཁོས་བསླབ་གསུམ་ལ་མཁས་པར་གྱུར། 彼は三學に通達しき
現　ཁོས་བསླབ་གསུམ་ལ་མཁས། 彼は三學に通達す

未　ཁོས་བསླབ་གསུམ་ལ་མཁས་པར་འགྱུར། 彼は三學に通達するならん。

斯の如くམ前置字のある動詞は、皆一様に二動三時を構成するなり。

一一三　མ前動詞の語類

མཁོང་།	མཁས།	མཐུད།	མཁྱེན།	མཁྲིག།	མཁོ།	མགར།	མགུ།
嫌厭す。	學ぶ。	圍くす。	知る。	纏囲みす。	要す。	鍛冶す。	喜ぶ。
མགྱོགས།	མངལ།	མངག།	མངོན།	མཆེད།	མཆོད།	མཇལ།	མཆི།
急ぐ。	在る。	使遣す。	現證す。	様ぐ	供養す。	謁遇す。	行く。
མཉན།	མཉམ།	མཉེས།	མཉེན།	མཉེ།	མཐུད།	མནན།	མཐོ།
聞く。	等しくす	喜ぶ。	柔かにす。	鞣す。	延長す。	壓服すれ	高くす。
མཐུན།	མཐོང་།	མཐོལ།	མདུད།	མཛོད།	མནམ།	མནར།	མཛོས།
一致す。	見る。	懺悔す。	結ぶ。	構成す。	嗅ぐ。	驚く。	若づく。
མཚུངས།	མཛད།	མཛའ།	མཛེངས།	མཛེས།	等の如し。		
一致す。	作し給ふ。	愛す。	達を(望む)	美くす。			

これ表中མགྱོགས་ མཉམས་ མཚུངས་ མཛེས་の四語は、普通なればས再置字を有するを以て、過去詞となる筈なれども、これ等は不規則動詞にして一語形よりなき語なれば、特に過去詞とせられずして、མ前等用の語根として、現在詞として用ひらるゝものなり。

一一四　無前動詞の二動三時を表す法。

上述せし所は前置字の異なるに随ふて、その動詞の活用の異なることを示せしものなるが、それが前置字なき動詞は、云何にして二動三時を表し得るかと云ふに、これ等は主として、後置字の性別に依

て表示せらるゝなり。その外一語形よりなき不規則動詞もあれば、一概に後置のみに依つて決定する能はざる例外の語も、少しは存在することをも後に明示する所に依て知るべし。

一一五　後置字の三性と内分

ཇི་ལྟར་ཡིན་ཀྱང་ཕན་ཚུན་ཁ་ཁྱད་ཡོད། ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁ་ཕྱད་ཀ་ཡང་ཡོད།
後置字十を男、女、中(性)の三に分つ

と性入法の文典にあつて、即ち後置十字、ག་ང་ད་ན་ཕ་བ་ཙ་ཝ་ཡ་ས་ལ་ཤ の十字を、男性と女性と中性の三つに分つなり。その三性に分たれたる字は以下の如し。

男、ག་ང་ད་ན། 中 ཙ་ཝ་ཡ། 女 ཕ་ཀ་ལ

と分たれたるが、又この三性を内分して、男を上丈夫、中丈夫、下丈夫の三とし、中を変化中性、二相中性、無相中性の三とし、女を純女性と甚女性との二に分つて、八部となるなり。斯の如く後置十字を三性八部に分つことは、後置字として各字が有する聲の大小強弱に據るものにして、この中最も大意なるは、男性中の第一に置かれる ག字にして、次第に小となり、終となりて、最も小にして終なるものは女性字の終のみある ཤ字なりと知るべし。最強中の第一なる ག字を後置字とし、その第二の ད字を再置字として構成せられたる語は、最強と強と合して強中の強となれるを以て上丈夫と名づけられ、次に男の第三位なる ན字に同性 ད を再置して、最強の次なれば中丈夫とし、ད或は ན の後置字のみあつて再置字なき語も、ཏ或は ད の後置字のみに依て構成せられたる語とは、強中の弱なるを以て下丈夫と名づけらるゝなり。

一一六　後中の変化二相無相の構成

中性後置 ཙ ཝ ཡ の三字が、男性基字の後にあつて、それに再置字あるか或はなきかに選かれ、又は女性基字に従ふて再置字なしに選かるゝ時、その聲は中程度の強か弱かに変ずるが故に、変化中性と名づけらるゝなり。

女性基字の後に中性後置字あり。又その次に男性の再置字のある語は、中性中強弱の二聲を有するが故に、二相中性と名づけらるゝなり。基字が中性の後に中性後置字が入れらるゝ時は、その聲が中性より強弱何れともならざる故に無相中性と名づくるなり。

一一七　純女甚女構成と後置基字の結合法

女性後置中の ཀ ལ の二字に再置字ある時は、弱中の強となるが故に、純女にして、その二字に再置字なきものに、後置 ཤ 字のみある語では、その聲甚だ弱なるが故に甚女と云ふなり。

前置字と基字との結合に四法ある如く、後置字と基字の結合にも、同四法が行はるゝなり、初の"何字に入るゝか、"何字を以て入れるか、の二法を合同して云へば"

གང་ལ་ཡོད་ཀྱང་ཐམས་ཅད་ཀ་ཤ་ཏ་ཏ་ཀ།། ཁ་ཅིག་ཏུ་ཐ་ཏ་ཏ་ཀ།།
何に(云へば)總ての文字に、何を以て(云へば)それ等の十字を以て(結ぶ)

とあつて、後置十字を以て基字には接ぶ所なく、何れの字にも入れらるゝなり。但し再置字は何れの後置字にも入れらるゝに非ず。ད 再置字は、ཙ と ཝ と ཡ との三後置字に結ばれ、ན 再置字は ག と ད と ན とのみの後置字に入れらるゝものなり。ད 或は ན 再置字のある動詞は、前置字の有無に拘はらず。後置再置結合の力に由て、不規則動詞の例外を除いて、總べて過去詞とせらるゝなり。

一一八　後置調音結合法三丈夫の例

何のやうに後置字を入るゝかについては二種ありて、その中の第一は音聲の大小強弱等に依て、三性八部に分かるゝ中、第一の男性後置について表示すれば以下の如し。

上丈夫　ཁ ཏ ཏ ཀ། 輝せり。(自)　ཁ ཏ ཏ ཀ། 暗くき。　ཁ ཏ ཏ ཀ། 擾乱しき。　ཁ ཏ ཏ ཀ། 傳へき。

〃　〃　ཁ ཏ ཏ ཀ། 示りし。　ཁ ཏ ཏ ཀ། 寛言しき。　ཁ ཏ ཏ ཀ། 讃じき。　ཁ ཏ ཏ ཀ། 上りき。

中丈夫　盛り。　出し。　流し。　成し。
男男男　男男男男　女中男男　女男男

〃　〃　来りき。　潜り隠れき。　著く(体)。　伸し出せり。
中男男　女中男男　基基男男(本基男)　男基男男

下丈夫　結ぶ。　止めき。　学ぶ。　導く。
男男　男男男　基中男　女中男

〃　〃　得き。　早く。　言ふ。　話ふ。
女男。　基男　基男　基男

一一九　後置調音結合法三中性の例

変化中性　示せ。　遊む。　迎へし。　拭く。沖む。
男中男　男中　男中男　男中

〃　〃　ゑみなりき。　求めき。　長引く。　動く。歩く。
男中男　男中　女中　女中

二相中性　移りき。　飾りき。　なりき。表りき。　結びき。
女中男　女中男　女中男　女中男

〃　〃　踊りき。　開きし。清除き。
女中男　女中男

強相中性　行し。　一致す。　解脱き。
中中　中中　中中

〃　〃　撒ず。　化現せり。　語る。
中中　中中　中中

一二〇　後置調音結合法二女性の例

純女性　満ち。　引上き。　彫りき、画げき。
女男　女男　女男

〃　〃　過れき。　歩みき。　恐れき。
女男　女男　女男

甚女性　満ち。　湧く。　満ち。
女　女　女

〃　〃　満す。　輝く。　早くす。
女　女　女

一二一　意義に依る結合法

意義の如何に隠ふて結合する方法に二ありて、(1)後置字の前行即ち基字がどの様に変ずるかと言ふ事と、(2)後置字の随行なる語の字母が何の様に変ずるかと云ふ事にして、それが初の分は以下の如し。

前行は五前置字の如くに結ぶ。

前行と云ふは、後置字の前行なる基字にして、その基字に対して後置字は、前置字の義の如くに用ふべしと云ふ義なり。此に注意すべきは動詞が二動三時の活用を表すには、その多くは主として前置字に依るものなれども、前置字なきものは勿論後置字に依て、その活用が決定せらるゝなり。又前置字あるものと雖ども、後置字なしと後置字なしと同じくその両置字ある語とは、過去時を表すものなり。又前置字が現在を表す女性の字の存在といへども、過去を表す男性後置字の存在することに依て、前置の能力は解消せられて、後置字のみに依てその活用が表示せらるゝものあり。例せば

運ぐ(現)。　過ぎし(過)。　救つ(現)。　救ちき(過)。

注ぐ(現)。　注ぎし(過)。　準備す(現)　準備しき(過)。

等の如し。これ等は前置字の現在を表すには、後置字に解消せられし例なるが他に前置字の有無に拘らず後置字のみに依て過去詞たることを、表す例を挙げればいと下の如し。

なせし。　備へし。　脱れき。　見し。

結びし。　整理せり。　讃じき。　なりき。　賜りし。

狂ひき。　載れき。　敷きし。　集めき。

等の如くなれども その数多く存在するに非ず、その多くの活用は前置字に決定せらるゝものと知らるべし。尚ほ三性八部の後置字が云何なるその時限を表すかについては以下に説明をべし。

一二二　後置字三性八部の時限表示例

後置男性の上中下の丈夫を屬する語を總べて過去詞を用ふる例

上丈夫　[illegible]| 試驗しき。[illegible]| 結びき。[illegible]| 碎きし。

中丈夫　[illegible]| 成就しき。[illegible]| 保護しき。[illegible]| 疊みし。

下丈夫　[illegible]| 止めき。[illegible]| 見き。[illegible]| [illegible]。[illegible]| 切りき。

後置中性の變化、二相、無相を於て、再置字[illegible]のある語は過去を表し、それのなき語は、現在を表すこと以下の如し。

變中性（過去）　[illegible]| 示しき。教へき。[illegible]| 廻りき。[illegible]| 玉ちみなりき。

〃　〃　[illegible]| なりき。變りき。[illegible]| 變へき、譯しき。[illegible]| 變へき、まはれき。

變中性（現在）　[illegible]| 示す、教ふ。[illegible]| 廻る、廻す、[illegible]| なる、かはる。[illegible]| 濕る。

〃　〃　[illegible]| 遲延する。[illegible]| 別れる。[illegible]| 動く、震ふ。[illegible]| 揚がる。

二相中（過去）　[illegible]| 持ちき。[illegible]| 飾りき。[illegible]| なりき、かはりき。[illegible]| 結びき。

〃　〃　[illegible]| 踊りき。[illegible]| 開きし、淨除しき。

無相中現在　[illegible]| 一致す。[illegible]| 解脫す。[illegible]| 數す。[illegible]| 分ける。

〃　〃　[illegible]| 謂る。[illegible]| 行く。著く。[illegible]| 運ぶ。

後置女性の強き純女は過去を表し、弱き雌女は現在を表す。その例は以下の如し。

純女性（過去）　[illegible]| 滿しき。[illegible]| 引上き。[illegible]| 開りき。曲げき。

〃　〃　[illegible]| 違れき。[illegible]| 歩みき。[illegible]| 恐れき。

雌女性（現在）　[illegible]| 滿ちる。[illegible]| 濕く。[illegible]| 歩む。[illegible]| 滿つ、滿ちる。

〃　〃　[illegible]| 輝く。[illegible]| 咲く。[illegible]| 含ぶ。[illegible]| 痛む。

一二三　不規則動詞

燒失せられし根本文典六部の中には、不規則動詞の説明も、別に存せしものなることは疑を要せざれども、現に遺存する三十偈文性入滅の二典には存せず。故に已むを得ず、これ等二典の用法と、他の根據ある古典の用法とに依て、不規則動詞を擧ぐれば以下の如し。

現在	過去	現在	過去
[illegible]| なる、かはる。	[illegible]| [illegible]| なりき。かはりき。	[illegible]| なる、生ず。	[illegible]| なりき、生じき。
[illegible]| 成立する、成就する。	[illegible]| 成立し、成就しき。	[illegible]| 切離す。	[illegible]| 切りき、切離しき。
[illegible]| 得る。	[illegible]| 得し、獲得しき。	[illegible]| 渡る。越ゆ。	[illegible]| 渡りき、越えき。
[illegible]| 飛ぶ。	[illegible]| 飛びき。	[illegible]| 切られる。	[illegible]| 切られりき。

これ等は現在を表す女性前置[illegible]字を取りまることに依て、過去詞を表す動詞となるなり。然るにこれに反して、過去を表せる男性前置[illegible]字を除きまることに依て、過去詞が現在詞となることは、以下に擧ぐるが如し。

過去	現在
[illegible]| 變じき、飜譯しき。([illegible]の他動)	[illegible]| 變する、飜譯する。
[illegible]| [illegible]| 學びき、習びき。	[illegible]| [illegible]| 學ぶ、習ふ。
[illegible]| [illegible]| 完成しき。([illegible]の他動)	[illegible]| 完成する。
[illegible]| [illegible]| 保護しき、求めき。	[illegible]| 保護す、求めふ。
[illegible]| 親しき。	[illegible]| 親ふ。
[illegible]| [illegible]| 教へき、示しき。	[illegible]| 教ゆ、示す。
[illegible]| 見き。(この一語は前置を後置も除去をまることに依て現在を表す)	[illegible]| 見る。
[illegible]| 生みき（[illegible]生じきの他動）	[illegible]| 生む（[illegible]の他動）

一二四　語形を異にする不規則動詞

前節に擧げし不規則動詞の外に、全く語形を異にする不規則動詞あり、例を擧ぐれば以下の如し。

現在	過去	現在	過去
[illegible]| 降伏す。	[illegible]| 降伏しき。	[illegible]| 行く	[illegible]| 行きし、去りき。
[illegible]| 説明す。	[illegible]| 説明しき。	[illegible]| 死す	[illegible]| 死みき。
[illegible]| 破る。	[illegible]| 破りき。	[illegible]| 乳搾る	[illegible]| 乳搾りき。
[illegible]| 置く。(物を)	[illegible]| 置きし。	[illegible]| 切る、斷る。	[illegible]| 切りき。

一二五　後置字を主とする前動詞表

現在前置字のある物いまだ過去を表す後置字或は再置字のあるものあり、過去詞となれるものあり。その例以下の如し。

現在	過去	現在	過去
過ぐる。	過ぎし。	動く、震ふ。	震ひき。動きし。
動く。	動きし。	準備する、適應する。	準備した、適應した。
咳する。	咳しき。	呼ぶ。	呼びき。
上る。	上りき。	放つ。	放ちき。
注ぐ。	注ぎし。	準備する。	準備した。

一二六　唯一語形不規則動詞等用例語彙

或動詞は唯だ一の語形を有するのみにて、二動三時に對して異なる語形を有せざるものあり。その中前置字を有する動詞のみを擧ぐれば以下の如し。

	蓋を開ける。	坐る。	執着する。	抱く。	脱ぎる。	巻く。
結合する。構る。	繋ける。	死す。	……	愛する。	後悔する。	競ふ。
撒布する。	伴ふ、結合する。	繋ぐ、連繋する	引く。	懺悔する。	書める。	覆へる。
坐す、ある。	欲する。	努力する。	燃ゆ。	抜く(毒を)	上る、超出する。	氾濫する。
結合する。	重る。	恐る。	微笑する。	滑べる。	接石する。	憐む。
上る(山を)。	誤る。	混ぜかへす。	言ふ。			

以上擧げし所の三十七語は、皆前の語なるが故に、その性質上自動と現在と未來とに用ふることを得るものにして、他動と過去とには用ひ得ざる語なり。然るにこれ等の諸語は、二動三時に對して一語形より有せ

ざるが故に、これ等各自の一語形よりなきを以て、それ等を依て二動三時の總てに應用せざるべからず。是等の各動詞が二動三時を明示する為には、前置字を有する動詞に於けるが如く、助動詞を附して構成すべし。例せば

自動　蓋は樺の樹の巻皮。　他動　字体は明瞭を抱く。

過去　大蛇が次の足を巻きたりし。　現、未　巻く。巻くなれば。

の如く、これ等上記の動詞數語は、適當なる文句を附して文例を構成すべし。これ外に一語形のみを有する多くの動詞あり。それ等は助動詞の所にて説明すべし。

以上は大方の動詞は、字母性別の変化に依て、二動三時の活用が表示せらるゝことを明かにしたるものなり。次に前置字の變化を主とせる語について、統括したる三時二動の表を擧ぐべし。

一二七　前置字性變三時二動表。

過去	現在	未來	自動	讃	他動	讃
				止まる。		止める。防ぐ。
				滿つる。		張る、滿たす。
				縛せる。		縛み。
				余る。		余せる。
				燃える、結ける。		燃る、結ぐ。
				破れる。		破る、裂く。
				失す。		滅す、殺す。
				教へる、事へる。		教へる、使役する。
				出る。		出す、放つ。
				散る		散らす。
				説ける。		説明する、註す。
				生行する。		導く、案内する。

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	洗われる。	[illegible]	洗ふ（[illegible]）。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	讀まれる。	[illegible]	讀む（[illegible]）。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	盜まれる。	[illegible]	盜む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	伸ばる。	[illegible]	伸ばす。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	濡つ。	[illegible]	濡らす。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	助かる。[illegible]	[illegible]	助ける、[illegible]る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	滴[illegible]、中心に集まる。	[illegible]	中心に集める、[illegible]。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	屋む	[illegible]	屋める。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	煮へる。	[illegible]	煮る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	歩む。	[illegible]	歩ます。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	開く。	[illegible]	開ける（[illegible]）
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	教へ上る。	[illegible]	教ふ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	積まれ、[illegible]る。	[illegible]	積む、[illegible]する。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	笑ふ。	[illegible]	笑ふ（[illegible]）。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	思惟す。	[illegible]	思惟す（[illegible]）。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	切れる。	[illegible]	切つ、[illegible]つ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	隠れる。	[illegible]	隠す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	風[illegible]る。	[illegible]	放つ（[illegible]）
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	入る。	[illegible]	入れる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	浸める。	[illegible]	浸む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	求められる。	[illegible]	求む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	陰なる。	[illegible]	陰がる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	打たる。	[illegible]	打つ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	解ける。	[illegible]	解く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	爽ず。[illegible]す
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	かはる、なる	[illegible]	[illegible]

一二八　本典の動詞用法に関する注意

此に特に注意すべきことは、現今世間一般に行はるゝ文典辞典には、本典に著はしたる三時限の規定と異なるものあることゝ是れなり。一般文典辞典には、男性前置ロ字は性入法規定の如く、過去詞に用ひられたるは、本典と一致する所なれども、性入法規定の外なる未来詞として用ひたること甚だ多し。

又一般の文典辞典には、中性前置の可字と久字を未来を表すものとせり。又女性前置ロ字は未来時限を表すべき規定なるに現在時限に属したることとされなり。斯の如き一般文典辞典の用法は、古文の誤解と、誤用せられたる古文例に基づくの外に何の根據もなきものなれば、本典には用ひざりしものなり。

本典が文典規定の根據とする所は、西藏語の文字文法の創立者、トンミー、サンボタの著なる根本文典性入法の確定法則に據るものなり。その法則は前掲の如く「男は過去と他動を成ずるためのものとあつて決して未来に用ひられざることを表示し、「中は自他の二と現在の居に」とあつて、これ又未来に非ざることを明かに示し、「女は自動と現在と未来のためのもの」とあつて、現在時に限られず、未来時をも示す語なることを規定せられし者なり。

これ等の性入法は トンミー著の根本文典を外にして、他の文例等に據ること能はざる理由は、トンミーの性別原理は各字母の本性に基づきて、その性を區別し、その用法を決定したるものなるが故に、これを外にする時は各字母の本性に背反することゝなれば なり。故に本典は動詞の活用については、全くトンミーの性入法を根據としたるものなることの、注意を喚起するものなりと知るべし。

一二九　後置字を主とする活用動詞

後置字を主とした る字性の活用に依て、三時二動の表れたる語を總括

的み表示をべし。その用法は前置字の四法則と略ぼ同一にして、全く前置字なき語と、前置字ありてもその能力は後置字の活用に依て、消滅せられたる語のみを挙ぐることとなるなり。

一三〇　後置字性變三時二動表

	過去	現在	未来	自動	譯	他動	譯
1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	詰める。	[illegible]	詰む。
2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	迎える。	[illegible]	轉ばす、迎ふす。
3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	氷る。	[illegible]	氷らす。
4	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	傳える。	[illegible]	傳ふ。
5	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	歌い出す。	[illegible]	宣言せ。公布せ。
6	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	急ぎ上がる。	[illegible]	急ぎ上げす。
7	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	沈黙する。	[illegible]	考へる、思惟する。([illegible])
8	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	割る。	[illegible]	壊せ。
9	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	持てる。	[illegible]	持つ。
10	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	働動する。(動ら)益る。	[illegible]	動かす。利益せ。
11	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	注入る。	[illegible]	注入れる。
12	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	味へる。	[illegible]	味ふ。
13	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	嚙める。	[illegible]	嚙む。
14	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	来る(敬)	[illegible]	到達す。(敬)
15	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	淨める。	[illegible]	淨める、淨む。
16	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	解脱する。	[illegible]	解脱させる。
17	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	行く。	[illegible]	行かす。
18	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	為る作る。*為る作る。	[illegible]	為す、作づく。
19	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	抜ける。	[illegible]	抜める。
20	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	示える。	[illegible]	示す、教ふ。
22	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	出立る。	[illegible]	出す、出立てる。
23	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	為られる。	[illegible]	為さしむ(敬)。
24	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	する、作る。	[illegible]	作す([illegible])。

前表中3、4、9、の過去詞の第二語は、前置字は女性の字なるが故に、それを主とすれば、その本性上現在或は未来詞となるべきなれども、此るは後置字再置の活用に依て、前置字の能力は解消せられたるが故に、過去時を表す語となれるなり。その他は何れも皆後置或は再置字が強力なるを以て、過去時を表せるなり。

一三一　基字の変化

基字の性變三時二動表を挙ぐるに當て、前後置字の変化を見ることは必要なれども、基字の變化あることも就いて見ざるべからず。それの変化もそれが字母各組内に於ける位置を異にして、外の組の字に変じたるが如きものあることは是れなり。例せば下に表示すち如く、第二組の西基字が第六組の何に変じたる如き(1、9、10)、又第七組の四基字が西或は西に變じたる(2、3、4、5、6、23)如き等、異なる變化ある点見るべし。斯の如き基字の変化の法則については、現今遺存せる性入法にも三十個に示さゐる所なれども、これ等根本文典及び他の權證ある古文例より推して、その変化のあることを表示して、その用いられたる意義の如何を示すに止るのみ。

一三二　基字性變三時二動表

	過去	現在	未来	自動	譯	他動	譯
1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	捨る	[illegible]	捨す。捨伏す。
2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	撒れる、洗はれる。	[illegible]	撒る、洗ふ。
3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	説かれる。	[illegible]	説明す。
4	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	照る	[illegible]	照らせ。
5	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	逃げる。	[illegible]	逃がす。
6	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	追へる	[illegible]	追ひかける。
7	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	追ひ逃げる。	[illegible]	待伏せる。
8	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	味へる	[illegible]	味ふ。
9	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	入る。	[illegible]	入れる。

10	བཏུན།	གཏུན།	འདུན།	གཏུན།	馴れる。	བཏུན།	馴らす(獣類などを)
11	འཇ�s།	གཏངས།	འདངས།	གཏངས།	身震いする。	གཏངས།	身震いさす。
12	བཞག།	གཞག།	འཇོག།	གཞག།	置ける。	བཞག།	置く。
13	གཅོག། / ཕྱེ་ཁ།	གཅོག།	འཇོག།	བཅོག	裂ける、割れる。	བཅོག།	裂く、割る、かける。
14	ཆུ་ཁ། / ཆུ་ཁ།	གཆུ།	འཇུ།	གཆུ།	漏る。漏れる。	ཆུ།	漏らす。
15	ཟད།	འཇད།	འཇད།	འཇད	下りゆく、減じゆく。	ཟད།	減衰す。
16	བཟའ།	གཟའ།	འཇའ།	གཟའ།	喰べる。	བཟའ།	喰べさせ。
17	ཐོགས།	གཞོགས།	འཛིན།	གཞིགས	持てる。	ཐོགས།	持つ。
18	ཐེག / ཐུགས	ཐུགས	འཛུགས	ཐུགས	抵ける。	ཐུགས	抵へる。
19	བཀབ།	ཁེབ།	འཇེབ།	ཁེབ།	閉ちる。(眼が)	བཀབ།	閉づ。(眼を)
20	ཁེངས	ཁེངས	འཇེངས	ཁེངས	傾ける、遠慮する。	ཁེངས	過を慎へる。
21	ཁྱེར	འཕེར	འཕེར	འཕེར	差出る。	ཁྱེར	差出さ。
22	ཕྱིར / ཕྱིར	ཕྱིར	ཕྱིར	ཕྱིར	歸る。	ཕྱིར	歸す。
23	ཁམས	ཁམས	ཁམས	ཁམས	懺悔する。	ཁམས	懺悔す。
24	ཐུར	ཐུར	ཐུར	ཐུར	墮ちる。	ཐུར	墮とす。

以上挙げし例に依て、前置男性の ད字は、基字の男女何れに拘らず必ず過去と他動とを表せることは、1、2、3、7、8、10、12、13、16、17、18、19、21、22、23、の例に依て知らるべし。又前置字及び基字が女性なれば、當然現在或は未来を表すものなるが、後再置字の活用は解消せられて、過去詞となれるは、11の例に於て見るべし。又 4、5、13、14、15、18、22の各第一語は、前置字なきも、後置字の男或は再置の ད強調に依て、皆過去詞となれることを見るべし。唯だ24の過去詞は、後置字は男女性なれども、基字が ད男字なるを以て、過去詞とせられたるなり。

一三三　前置再置の有無に對する總括的注意。

ད前置字のある語は再置字なくとも、その前置字のみに依て、過去詞なることは、固よりその性の然らしむる所なれども、ད前置字あるとき

又は別の再置字ある語は、その過去詞なることを強めたるものなる者ものなるが、この場合それが再置字なき語は、他動詞としてその本分を表せることを見るなり。されば ད前置字と再置字ある語は過去詞として、再置字なき語は再置字ある語に對して、他動詞なりと知るべし。又本来 ད前置字ある語なれども、それを除去したる上に、再置字なき時は現在詞なることは、既に明示したる所なり。又 ད前置字はこれあるのみに、現在詞或は未来なれども、これを除けば過去詞となることも、已述せし所なり。斯の如く ད前置字のなき語にして、現在或は未来を表し、ད前置字のなき語は却て過去を表せり。斯の如き語が多數なるにして、紛れ易く又誤り易きが故に、それ等の誤用で混雜なからしむるために、以下にそれ等を一括したる表を挙ぐべし。

一三四　前置再置の有無に依て意義を異にする動詞表

現未.	他動	過去	譯	現未自.	過去	譯
ཐོ།	ཐཝ།	ཐཝ།	借る	ཐོབ།	ཐོབ།	置く、知る。
ཕྱེ།	ཕཡེ།	ཕཡེ།	開る。	ཕཡེ།	ཕཡེ།	手拭する。
ཕྱུ།	ཕཡུ།	ཕཡུ།	減ず。	ཕཡུ།	ཕཡུ།	走る。
ཕྱེ!	ཕཡེ!	ཕཡེ!	投る、まる。	ཕཡེ!	ཕཡེ!	運ぶ。
ཕྱེ།	ཕཡེ།	ཕཡེ།	生む。	ཕཡེ།	ཕཡེ।	持上がる。
ཕྱེ།	ཕཡེ।	ཕཡེ।	運ぶ。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	導ける。
ཕྱེ།	ཕཡེ।	ཕཡེ।	守護す	ཕཡེ।	ཕཡེ।	怒る。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	楽らしける。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	浮る。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	保護す。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	なる、がある。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	注ぐ。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	分つ。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	持つ。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	抓める。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	組立る。	ཕཡེ	ཕཡེ।	割る、破る。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	暗くす、腐る。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	離れる。
ཕྱེ।	ཕཡེ।	ཕཡེ।	巻く。	ཕཡེ।	ཕཡེ।	立つ。確定す

現未	他動	過去	譯	現未自	過去	譯
[illegible]	[illegible]	[illegible]	結ぶ、離脱する。	[illegible]	[illegible]	傳る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	七日祭。言い聞かす。	[illegible]	[illegible]	授ける。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	成る。	[illegible]	[illegible]	出立る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	討論する。	[illegible]	[illegible]	混ぜる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	宣言する。	[illegible]	[illegible]	出立る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	放ふ。解脱する。	[illegible]	[illegible]	打撃てる、撃ち出す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	渡る。	[illegible]	[illegible]	破る、犯す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	飾る。	[illegible]	[illegible]	暴める。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	傳授する、命ずる。	[illegible]	[illegible]	巻く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	傳る。	[illegible]	[illegible]	引く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	縫る。	[illegible]	[illegible]	結ぶ、刺繍する。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	置いる。	[illegible]	[illegible]	痛める。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	無結める。	[illegible]	[illegible]	引く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	吹く、大口を開く。	[illegible]	[illegible]	頁く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	裏ずに訳する。	[illegible]	[illegible]	逆化す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	拉致る、ひっくりかへす。	[illegible]	[illegible]	飛ぶ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	かくす、隠匿む。	[illegible]	[illegible]	與ふ、たてまつる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	別樣する、ガセへる。	[illegible]	[illegible]	增す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	讃する。	[illegible]	[illegible]	打つ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	対向する。	[illegible]	[illegible]	對抗する。違る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	怒らる。	[illegible]	[illegible]	遷くる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	霧かす。	[illegible]	[illegible]	遇ふ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	切ずる、千切れむ。	[illegible] (自)	[illegible] (他)	別る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	発見する、さがし出る。	[illegible]	[illegible]	減る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	溜らる、こまらる。	[illegible]	[illegible]	撞く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	説明する。	[illegible]	[illegible]	劫奪する。

現未	他動	過去	譯	現未自	過去	譯
[illegible]	[illegible]	[illegible]	拙下する、ほろぼす。	[illegible]	[illegible]	與ふ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	貴位る。	[illegible]	[illegible]	下がる、張つ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	見る。	[illegible]	[illegible]	完あける、嚥む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	示る。	[illegible]	[illegible]	捨つ、消失せる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	食いる。	[illegible]	[illegible]	吸く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	信任する。	[illegible]	[illegible]	引張る、流される。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	離る。	[illegible]	[illegible]	上つる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	冒険する。	[illegible]	[illegible]	飛ばる、下らしめる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	伴ふ。	[illegible]	[illegible]	引張く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	呼る。	[illegible]	[illegible]	呼ぶ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	結ぶ。	[illegible]	[illegible]	打違る、投棄てる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	打つ。	[illegible]	[illegible]	洋める。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	混雑る。	[illegible]	[illegible]	拔く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	持つ(敬)。	[illegible]	[illegible]	溢る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	説明る。	[illegible]	[illegible]	滑走す、すべる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	附加する。	[illegible]	[illegible]	生れる、出る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	調合する。	[illegible]	[illegible]	別つ、離る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	洗める	[illegible]	[illegible]	開く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	算ふ。	[illegible]	[illegible]	注ぎ出る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	直立する、築く。	[illegible]	[illegible]	延る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	積む、重ね。	[illegible]	[illegible]	書む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	縫上げる、はしる。	[illegible]	[illegible]	洗めける。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	先導する。	[illegible]	[illegible]	来る。(敬)
[illegible]	[illegible]	[illegible]	議論する。	[illegible]	[illegible]	與ふ。道を作る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	初刈る。	[illegible]	[illegible]	撫く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	洗濯する。	[illegible]	[illegible]	打つ、息と補ふ。

現未	他動	過去	譯	現未自	過去	譯
[illegible]	[illegible]	[illegible]	減ず。	[illegible]	[illegible]	減ず。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	自負を誇る。	[illegible]	[illegible]	傷機を、誘惑を。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	祝福を。	[illegible]	[illegible]	合配す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	衣を覆ふ。	[illegible]	[illegible]	刻を、包む。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	鞭を、打つ。	[illegible]	[illegible]	機質を、調べる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	泣く、泣かす。(涙を)	[illegible]	[illegible]	剃る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	比較す。	[illegible]	[illegible]	迎る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	集む、酔ふ。	[illegible]	[illegible]	押出む、詰こむ。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	温まる。	[illegible]	[illegible]	焼く。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	急ぐ、思ふ。	[illegible]	[illegible]	鋭りだす。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	清浄せしむ。神聖にする。	[illegible]	[illegible]	侵入す、初る。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	離す、撒ぶ。	[illegible]	[illegible]	入れる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	樹を生ずる、植樹す。	[illegible]	[illegible]	集る、巻す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	讓る。	[illegible]	[illegible]	渦巻きする、まかる。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	顔料	[illegible]	[illegible]	消費す。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	離せる	[illegible]	[illegible]	植を。
[illegible]	[illegible]	[illegible]	焼く。			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	負つ。			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	着く。			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	裏返を。顛倒す。			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	學ぶ。			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	贖ふ			

一三五　肯定動詞

肯定動詞は何かの存在を肯定する動詞なりて、'ある'と云ふ意を表すものにして、その語は数種ありて、以下に挙ぐるが如し。

[illegible]ある。[illegible]ある。[illegible]ある、居る。[illegible]ある、居る、有つ、存在を。[illegible]ある。[illegible]ある、あり得る、なす。[illegible]ある、御座りまを。

この七語は同一様に現在詞なりて、'ある'と云ふ義を表す語なれども、用法に多少の相違あることは、以下に挙ぐる所の例に依て知るべし。これ等の'ある'と云ふ語は、英語の如き人稱、時限、數等に於て異なるものあるに非ず。自稱のあるも、對稱、他稱のあるも皆同一にして、複數單數にも皆同一なり。[illegible]が差別なく用ひらるることは、國語のあると云ふ語に同じきなり。時限を表すには同じく'ある'と云ふ語に、過現未の助動詞を添加して、その意義を表すことは、國語のあると云ふ語とその用法同じきなり。

一三六　肯定動詞とその例解

前例の一二は肯定的説明に用ふる動詞なりて、單にそれは何々で'ある'と云ふ義の'ある'なりて、存在の意義を表さず、又單に助動詞に用ひらるることあり。それ等の例を挙ぐれば以下の如し。

[illegible]
サケ　標（蟲）智　薄　埃　なり　讀む　の為に　学ぶもの　なり。

[illegible]　農夫は　畑に　種を　播く者なり。　播きつつ　あり。

この四例の中初の三例は何々である、とか何々する者である、とか云ふ説明的動詞なりて、終の一句のあるは、播くと云ふ動詞の活用を助ける語として、用ひられたるを見るべし。これ等の動詞が助動詞として用ひらるる多くの例は、助動詞の章に於て説明すべし。

一三七　[illegible]の異同

これ等の肯定動詞は一般に'ある'と云ふ義を表す點は同一なれども、それ等の語に特種の意義あるものあり。例せば[illegible]と云ふ語は'ある'と云ふ一般の義の外に、居る、坐を　と云ふ意あるが如し。これ等の例を挙

ぐれば以下の如し。

དེར་གང་འདུག། そこに何がある。　འདིར་སྟག་མོ་འདུག། ここに母虎がある。　ཁོ་གང་ན་འདུག། 彼は何處に居る。　འདི་པ་སུ་ཡོད། この者は誰である。

འདུག་འདུག་ཕྱལ་བ་མེད། 居れ、居れ、急ぐことはない。　སངས་རྒྱས་ནི་རྡོ་རྗེ་གདན་དུ་འདུག་པར་གྱུར་ཏོ། 佛陀は金剛座(伽耶村)に坐せられたりき。

འདིར་སུ་ཡོད། ここに誰が居る。　ཁྱེད་ལ་བུ་མོ་ཡོད་དམ། 貴方に娘があるか。　ངས་དཔེ་ཆ་ཀློག་གི་ཡོད། 私は本を讀んでゐる。　ངའི་ལག་པ་ཁྲམ་ཡོད། 私の手は胝がある。

ལགས་はཡིན་の敬語なり。されば ཡིན་の用法と同じと知るべし。

དགེ་སློང་དེ་སུ་ལགས། 彼の比丘は誰で御座るか　ལྷ། དེ་བཞིན་ལགས་སོ། 御前よ、その通りで御座ります。　ལགས་མ་ལགས་ངས་མི་ཤེས། 御座るか御座らぬかは私は知らぬ。

སྣང་はアムド地方にて用ひらるゝ語にして、ཡོད་又はའདུག་と同義に用ひらるゝ語なり。その例を擧ぐれば以下の如し。

ཁྱོད་ལ་རྩམ་པ་ཡི་སྣང་། 汝に燒麦粉はあるか。　ང་ལ་རྩམ་པ་མི་སྣང་། 私には燒麦粉はない。　「ཡི་はアムド地方の疑問詞」(持つか持たないの意)

སྲིད་は同じく「有る」と云ふ動詞に用ひらるゝ語なれども、多くは「あり得る」とか「あり能ふ」の義に用ひらるゝこと多し。その例以下の如し。

ཐེ་ཚོམ་ཐམས་ཅད་སྤངས་པ་ག་ལ་སྲིད། 疑念を一切捨てることは云何にあり得ようぞ。　ཡོན་པ་ཞིག་སྲིད། 効能は一あり得ん。

ཁོ་ཡིན་པ་འང་སྲིད། 彼であるかも知れぬ。　སྐྱེ་བ་དང་འཇིག་པ་འགྲོ་བ་ཀུན་ལ་སྲིད་ན། བདག་གྲོལ་ཐར་བར་ཕྱིན་པ་སྲིད། 生と滅とは一切衆生にあれば、私が解脱することもあり得る。

一三八　肯定動詞となる再擷語

名詞、代名詞、形容詞の語端の同一なる文字に、ོを添へたるその語が「ある」と云ふ説明的或は存在的の意義を表す動詞となるなり。その語に十個あって以下の如し。

གོ་ངོ་དོ་ནོ་བོ་མོ་འོ་རོ་ལོ་སོ།

而してこれを西藏語にསླར་བསྡུ།再擷語、或はམཐའ་སྡུད་伴擷語と云ひて、一は前行語の後置字を再び擷したる意義を表し、他は前行語の後置字の伴字を擷したる義を示せるものなり。これ等を名詞の終に用ふるときは以下の如し。

一三九　名詞等に再擷語結合の例表

ལག་གོ། 手である。　རྐང་ངོ། 足である。　བདུད་དོ། 悪魔である。

གདོན་ནོ། 病魔である。　ཁབ་བོ། 王城なり。　ཁྲོམ་མོ། 市場である。

བཟའ་བའོ། 食物である。　གུར་རོ། 天幕なり。　བཙུལ་ལོ། 潤沢である。

རས་སོ། 綿布である。

これ等を代名詞或は形容詞に用ふる時は以下の如し。

བདག་གོ། 我である。　བཟང་ངོ། 善くある。　ཁྱེད་དོ། 貴方である。

གཉན་ནོ། 近くある。　ཟབ་བོ། 深くある。　གསུམ་མོ། 三つである。

ངའོ། 私である。　ཁོའོ། 彼である。　སུའོ། 誰である。

འདིའོ། これである。　དེའོ། それである。　གསར་རོ། 新しくある。

གསལ་ལོ། 明かなり。　རྒས་སོ། 老いてゐる。

以上後置字のགに伴擷語のགོが随行し、ངにངོ、དにདོの随行することを見て、その他は推して知るべし。これ等の伴擷語が動詞の後に用ふる時は、རྫོགས་ཚིག་即ち完了詞となって、助動詞の作用をなすものなり。これには十語の上にཏོの一語が加って、十一語となるなり。それ等は次に擧ぐる所の助動詞の章に於て説明すべし。

一四〇　動詞の根語動名詞分詞不定詞

西藏語に於ける動詞の根語は、接尾語を附せずして、動作或は存在を表す語なり。多くの根語は單純なる現在詞にして、稀には根語その儘にて過去或は未來を表すものあり。根語སོང་は過去詞にして、又は未來詞なるが如し。こゝに多数なる現在詞形根語について例を擧げんに、འགྲོ་行く。ལབ་言ふ。は根語にして、これ等の語に接尾語བ་或はཔ་を附して、འགྲོ་བ་行く事、動物。ལབ་པ་言ふ事、言語。と云ふ動名詞となり、བའི་或はཔའི་と云ふ接尾語を附すれば分詞となり、བར་或はཔར་と云ふ語を附すれば、不定詞となり、又時として副詞となることあれば注意を要するなり。これ等の例を擧ぐれば以下の如し。

分詞となる例、ཁྱོད་ཀྱི་ཡིན། 行く所の人。旅行人。ཁོ་ལན་ཀྱི་ཡིན། 講話する人。演說家。

不定詞となる例、ཁྱོད་ཀྱིས། 行くべく。　ཁོ་ལན་ཀྱིས། 言ふべく。

副詞となる例、ཁྱགས་ཀ་ལས། 旅行中よ。ཁྱད་པ་ཅི་ཡང་ཀ་ལས། 變化なしに。不變に。

の如し。この副詞の說明については、副詞の章に於て詳說すべし。以下に副詞となる項を除いて、根語より不定詞となるまでの例は以下の如し。

一四一　根語動名詞分詞不定詞表

根語.	譯.	動名詞.	譯.	分詞.	譯.	不定詞.	譯.
རྒྱུ།	走る。	རྒྱ་ལ།	走る事。競爭。	རྒྱ་ལའི།	走る所の競爭の。	རྒྱ་ལར།	走るべく。
ཁ།	攪廻す。	ཁ་ལ།	かきまはすこと。攪拌。	ཁ་ལའི།	攪拌する所の。	ཁ་ལར།	攪拌べく。
ཞུ།	塩る。	ཞ་ལ།	塩る事。	ཞ་ལའི།	塩る所の。	ཞ་ལར།	塩るべく。
ཟླ་ལ།	護る。	ཟླ་ལ།	護る事。保護。	ཟླ་ལའི།	護る所の。	ཟླ་ལར།	護るべく。
ཁྱབ་ལ།	滿す。	ཁྱབ་ལ།	滿す事。	ཁྱབ་ལའི།	滿す所の。	ཁྱབ་ལར།	滿すべく
འགྱུར།	なる、かはる。	འགྱུ་ལ།	なる事、變化。	འགྱུ་ལའི།	なる所の、かはる所の。	འགྱུ་ལར།	なるべく。かはるべく。
འགྲོ།	行く、	འགྲོ་ལ།	行く事、動物。	འགྲོ་ལའི།	行く所の。	འགྲོ་ལར།	行くべく。
ཐུག	打つ、當る。	ཐུ་ལ།	打つ事、打擊。	ཐུ་ལའི།	打つ所の。	ཐུ་ལར།	打つべく。
ཁ་ལ།	開く、剪る。	ཁ་ལ།	開く事、剪る。	ཁ་ལའི།	開く所の。剪る所の。	ཁ་ལར།	開く、剪るべく。
འཆད།	說明する。	འཆ་ལ།	說明。	འཆ་ལའི།	說明する所の。	འཆ་ལར།	說明べく。
རྩ།	交撰する。	རྩ་ལ།	交撰。	རྩ་ལའི།	交撰する所の。	རྩ་ལར།	交撰すべく。
རྙ།	得る。	རྙ་ལ།	得る事。	རྙ་ལའི།	得る所の。	རྙ་ལར།	得べく。
གཅིག	遇る。	གཅི་ལ།	遭遇、會合。	གཅི་ལའི།	遭る所の。	གཅི་ལར།	遇るべく。
ཐེག	了解す。	ཐེ་ལ།	了解。	ཐེ་ལའི།	了解する所の。	ཐེ་ལར།	了解すべく。
ཟད།	失る。	ཟ་ལ།	失ること。	ཟ་ལའི།	失る所の。	ཟ་ལར།	失るべく。
ཐར།	解脫す。	ཐ་ལ།	解脫。	ཐ་ལའི།	解脫する所の。	ཐ་ལར།	解脫すべく。
ཁས།	答える。	ཁ་ལ།	答える事	ཁ་ལའི།	答ふる所の。	ཁ་ལར།	答すべく。
ན།	病む。	ན་ལ།	病氣。	ན་ལའ	病む所の。	ན་ལར།	病むべく。
ཁ་ལ།	與る。	ཁ་ལ།	與へる事。	ཁ་ལའ	與ふる所の。	ཁ་ལ	與るべく。
ཐོབ།	修む。	ཐ་ལ།	修行。	ཐ་ལའ	修行の、	ཐ་ལ	修むべく。

一四二　動名詞不定詞に對する注意

こゝに注意すべき要點は、一般に現今行はる藏英文典及び辭典等には、吹に擧げたる動名詞を動名詞として擧ぐることあれども、その大多數は不定詞として擧げ居れることと是れなり。例へば ཕྱགས་ཕྱི་ལ を譯して「to meet with」會合をべく、と云ふ不定詞と擧げ居れり。然るこの語は英語よ meeting と訳をべき動名詞なれば、不定詞となしたるは全く誤解なりと云ふべし。然れども藏英文典辭典の先驅者チョーマ氏の文典には、動名詞は ཕྱགས་ཕྱི་ལ 又は ཕ་ལ となし居れるを見るなり。然らば何故に同氏の辭典には ལ 或は ར を附して、不定詞となしたるかと云ふに、チョーマ氏の云ふ所に依れば、「西藏人等は動名詞を現在動詞として用ふるものあるが故に、辭典に於て動詞の語形を定むるために、これを用ふるを便宜とす。尚ほ吾人の思想はそれ（動詞の語形）を不定詞とする方、一般に通じ易きを以て、動名詞を以て不定詞として表すことは、余の屢々為せし所なり」とあり。斯の如く西藏人等の思想に便宜なるが故に、動名詞を以て不定詞として辭典等に表示すと云ふ。されども、斯の如くせられたるを以て、西藏辭典文典等に於て、動詞と名詞との區別は判然と認識せられず。往々誤解を起さしむるものあり。故に吾人は文法上その區別を判然たらしむるために、動名詞には ལ 或は ར を附し、不定詞には ར 或は ལ を附して、根本文典の用例に依て構成したるこを注視すべし。

一四三　動詞の態の別

動詞の態 ཐ་ཚིག་ཁ་ཕྱིས། 動詞の習慣法とも訳せらるべきものにして、それの區別は七態ありてその名は以下の如し。

一、直說態。　二、分詞態。　三、接續態。　四、折說態。

五、熟語態。　六、名詞態。　七、命令態　なり。

一、直說態。これは動作をありのまゝに説いて、文の末を結ぶ態にして、動詞の本分を表すものなり。例せば

དཔེ་ཆ་ཀློག།	ལས་ཀ་བྱེད།	མེ་ཏོག་ཤར།	ཟླ་བ་མཐོང་།
書を讀む。	仕事を作す。	花が開く。	月を見る。
དཔེ་ཆ་ཞིག་ཀློག་ཤིག།	ལས་ཀ་ཞིག་བྱོས་ཤོག།	མེ་ཏོག་ཞིག་གཏོར་ཞིག།	ཟླ་བ་ཞིག་མཐོང་ཞིག།
書をこそ讀め。	仕事こそ爲れ。	花こそ散れ。	月をこそ見よ。

二　分詞態。これは他の名詞に連るものにして、即ち動詞の分れて、形容詞の形容態の如くになるものなり。例せば

ངས་ཀློག་པའི་དཔེ་ཆ།	ངས་བྱེད་པའི་ལས་ཀ།	མེ་ཏོག་གཏོར་བའི་ཚེ།
私が讀む(所の)書。	私が作す(所の)仕事。	花が散る時。
ཟླ་བ་མཐོང་བའི་མི།	དཔུང་ལ་གསལ་པའི་གནས་སྐྱེ།	の如し。
月を見る人。	戦(家臣)を率へる女將(林館の)、	

この文例中のཔའི་或はབའི་を省除して、根語そのまゝを分詞として用ふる例は以下の如し。

ཀློག་དཔེ།	བྱེད་ལས།	བྱ་ལས།	གཏོར་ཚེ།	མཐོང་མཁན།
讀む書。	作す仕事。	作業(作さるゝ仕事)	散る時。	見る人。

以上の例中、བྱེད་は作の能動根語にして、བྱは作の所動根語なり。即ち働き手の仕事には能動のབྱེད་ལས་を用ひ、受身の仕事には所動の語བྱ་ལས་を用ふるなり。མཁན་は「する人」の義にして、廣く用ひらるゝ語なれど、མིの代りに用ひたるなり。

一四四　動詞態中接續態

三、接續態。これは豫想の語句を設けて、他の主となる語句に接續附加せしむる時に起るものにして、ན ば、それは、ならば、など云ふ語を附加するなり。この文態に二種ありて、「已に然るに言ふ」と「將に然らんとする」に言ふとの別なり。これを已然言、將然言と云ふ。

已然　དཔེ་ཆ་བཀླགས་ན་ཤེས་པ་འཕེལ་ལོ།
書を讀めば知識を增すなり。

將然　དཔེ་ཆ་ཀློག་པར་འགྱུར་ན་ཤེས་པ་འཕེལ་བར་འགྱུར།
書を讀むならば知識を增すならん。

已然　ལས་ཀར་བརྩོན་ན་དོན་དེ་འགྲུབ་བོ།
仕事に勵めば目的が成ずるなり。

將然　ལས་ཀར་ནན་ཏན་བྱེད་འགྱུར་ན་དོན་དེ་འགྲུབ་པར་འགྱུར།
仕事に努力するならば目的が成ずるならん

已然　མེ་ཏོག་བཏོར་ན། འབྲས་བུ་སྐྱེའོ།
花が散れば果は生ずるなり。

將然　མེ་ཏོག་འཐོར་ན་འབྲས་བུ་སྐྱེ་བར་འགྱུར།
花が散るならば果は生ずるならん。

已然　ཟླ་བ་མཐོང་གྱུར་ན་དོན་ལ་བསམ།
月を見れば物を思ふ。

將然　ཟླ་བ་མཐོང་འགྱུར་ན་དོན་ལ་བསམ་པར་འགྱུར།
月を見るならば物を思はん。

一四五　析說態

四、析說態、これは文章の間にありて、その意を暫らく言ひ留め置いて、その後に來る動詞の態に照應して、その意を共にするものなり。

例、

དཔེ་ཆ་ཀློག་(ཅིང་)ལམ་ནི་སློབ་བོ།	ལས་བྱེད་(དེ་)དོན་འགྲུབ།
書を讀み(て)道を學ぶなり。	事を勤め(て)目的を成ず。
མེ་ཏོག་གཏོར་(ཏེ་)བྱིའུ་སྐད་སྒྲོག།	ཟླ་བ་མཐོང་(ཞིང་)དོན་ལ་བསམས།
花は散り(て)小鳥が鳴く。	月を見(て)物を思ふ。

西藏語に於て對人の談話中には、この括弧内にあるལྷག་བཅས(して言葉)と云ふを用ひず。して言葉の前の語話を少時止めて、次の文句を云ふ故に國語の析語法と同一なり。但し文章に誌す場合には大抵ལྷག་བཅས་を用ひ、或はལྷག་བཅས་とその意義の似しきལ或はནས或はདང་の語を用ふるなり。例せば以下の如し。

དཔེ་ཆ་ཀློག་(ལ) ལས་བྱས་(ནས) དོན་འགྲུབ་པ་དང་སེམས་དགའོ།
書を讀み(て)事を作し(て)目的を成じて心に喜ぶなり。

མེ་ཏོག་གཏོར་ལ་བྱིའུ་སྐད་གཏོང་ནས་མི་ཡང་གླུ་ལེན་པ་དང་ནགས་ཀྱི
花は散り(て)鳥は鳴き(て)人も亦、歌を歌ひ(て)林苑の

དགའ་སྟོན་རྫོགས་པར་གྱུར་ཏོ།
宴會は終りなりき。

一四六　熟語態

五、熟語態。これは他語と組立て一熟語となる時に用ひらる。例せば ཐུགས་ཀྱི་ཁ 教ひよ ཁ་ཏོག 入れると云ふを、ཐུགས་ཀྱི་ཁ་ཏོག と云はずして、ཐུགས་ཁ་ཏོག 教授として熟語とするが如し。

他の動詞と組立つるものは以下の如し。

ཐོས་ཐར།	ཉན་ཏན།	རྒྱུ་འབྲས།	ཐུགས་ཀར་ཟུངས། 持って 帰る	ལས་ཀྱི་ཐོག།
見 聞く。	願れ思ふ。	因 縁		業 行。

教語を連ぬるものあり。以下の如し。

ཐོས་བསམ་སྒོམ་གསུམ།	ཕྱིར་ལངས་ཁོངས་ཏེ།	などの如し。
聞 思 修 (の) 三	飛び立ち 去れり。	

他の名詞と合するものあり、例は以下の如し。

ཐོས་ལམ།	ཀློག་མཁན།	ཆུ་ཀླུང།	ཁ་ཤད་ཀྱི་ཡིག
見 道。	読み人。	下る水(河)	説明する経典。

形容詞と連なるものは以下の如し。

ཐོས་དཀའ།	ཀློག་ཟླས།	ཁ་ཏོག་ཏུ།	ཕ་ཟླ།
見 難し。	読み易し。	入れ難し、	為し易し。

一四七　名詞態

六、名詞態。これは動詞の名詞となる態なり。西藏語には上述の如く動詞より或は ན を添えて動名詞となるものなれども、亦根語のみにて動名詞となるものなり。例せば

ཡིག་ཏུ	ཀློག	ཁ་ཤད	ཐུགས	ཕ	ཟླ
書き(と)	読み(と)	説明を	などの	間を	思ひ示す ためみ 結ぶ。

これ等の動詞は皆根語にして ཡིག 書く事、ཀློག 読む事、ཁ་ཤད 説明する事と読して動名詞となるものなれども、上例の如く、單み根語のみを読して、動名詞として用ふることあるを知るべし。又こゝに挙ぐる動詞より のみを読して名詞となるのみならず ཀ ཏ ད ས ཟ の何れかの一を加へて名詞とすること

以下の如し。

ཀློག་ཁ	讀む事、讀數。	ཁ་ཏོག	流る事、流。	མཐོ་ཁ	樹木。	ཁ་ཟས	食ふ事、食物。
ཁ་ཏོག	著る事。	ཁ་ཟས	飲む事。	ཡ་ཁ	貪ふ物。	ཕ་ཁ	飛ぶこと(鳥)上ぼる事(日)
མཁའ་ལྡིང	空を行く者、杜鵑鳥。	ཀུན	根本、因縁の事。	ཁ་ཏན	依頼をなす者(地神)。	ཐོ་ཆེ	下方貴き者、高き事。
ཁ་ཐུ	事を為す男。	ཐ་ཚ	破れた物。	ཚ་ཁ	震動する事。	ཁ་ཡ	借る物。
ཟླ	生まれる者、人間、動物。	ཁ	念る者、念慧明王。	ཁ་ཡ	喜ぶ者、歌者。	ཁ	見棄する事。
ཁ	念る女、念慧明妃。	ཁ་ཆུ	貞操を破る女、婦人。	ཁ	愛する者。	ཁ	美しき女子。

既上樣尾語に分て表示せし如く、上例中の ཁ 或は ཏ ..... を添加されば、その動詞の表者に用を行ふ人となることは ཀློག་ཁ 讀數人、ཡ་ཁ 食ふ人となるが如し。然るに西藏樣尾語 ཁ を附せずして、人或は者を表す語あり。ཟ で表す語は稍や多數なれども、ཁ で表す語は甚だ少し。例せば ཁ་ཤ 御者、ཚང 商人。ཏ་থাগত ཏ ཐ ག ཏ ཡ ཏ ཡ ཏ ཡ

第五章 ཐོག་ཚིག། 助動詞

一四八、ཐོག་ཚིག་གི་མཚན་ཉིད་དང་ཕན་པ། 助動詞の定義と活用

西藏語の動詞は前章既説の如く、規則的に前後置字の性に依て三時限と自他の二動とを明示し居れり。然れども尚ほ三時限中の更分に就ては、助動詞を添加するに非ざれば、それが完了か進行か能相か所相かをも明かに分別せること能はざるものなり。

又動詞章中に於て注意せし如く、語中、前後基字に変化なく、三時限等に對して一語形のみを有する動詞あり。それの語形が過去を表すべきものあり。現在或は未来を表すべきものあり。それが何れかの時限を表すべき語形なるや拘はらず。一様に現在詞として、それに三時の助動詞を附して、それの時限を分別するに資するなり。

又能相所相の如きは、その二相の何れに屬するかは、働き様と受身の助動詞を添加することに依て、明かにせらるるなり。斯の如く助動詞は動詞の三時限と進行と完了と能相と所相とを明かする作用を有するものなり。

一四九 助動詞添加の必要なる動詞

過去と現在の動詞の多くは、動詞自体にその時限を表すが故に、助動詞の添加なしに、動詞のみにて、その時限を表し得るなり。但し口前置字の語は現在と未来とに用い得る、規定の語なるが故に、その語のみにて両時限の何れかを表し得べしと雖も、多くは助動詞の添加に依て、その時限は明かにせらるるなり。西藏語には未来のみを表す動詞なし。ᠬ或は ᠬ 前置字を未来を表す動詞として文典辞典にあれども、これ等の動詞は皆現在詞なることは、性入法の規定なりと知るべし。又現在詞は絶對に助動詞を用いずと云ふに非ず。場合に由ては現在動詞に助動詞を添加して、現在時限を示すものあり。國語の「あるのである」の用語の如し。それ等の用例を挙ぐれば、—

助動詞活用三時限の表

無助過去。	有助過去。	無助現在。	有助現在。	有助未来。
ལམ་དུ་བཏང་། 道に去れり。	བཏང་བདུག། 去ってゐる。	ལམ་དུ་འགྲོ། 道に行く。	འགྲོ་བདུག། 行ってゐる。	ལམ་དུ་འགྲོ་བར་འགྱུར། 道に行くならん。
ཁྱིམ་དུ་འཁོར་ཅི། 家に執着しき。	འཁོར་བར་གྱུར། ཁྱིམ་དུ་འཁོར། 執着するなりき。家に執着き。	འཁོར་བདུག། 執着してゐる。	ཁྱིམ་དུ་འཁོར་བར་འགྱུར། 家に執着するならん。
འཁོར་བར་ཕྱིན་ཅི། 輪廻に廻りき。	ཕྱིན་པར་གྱུར། 廻りたりき。	འཁོར་བར་ཕྱིན། 輪廻に廻る。	ཕྱིན་བདུག། 廻ってゐる。	འཁོར་ཁ་ལས་ཕྱིན་ཁ་ལ་ཕྱིན་པ་ལ་ཕྱིན་ཅ། 輪廻に廻るならん。
ཁྱིམ་ཏུ་ཁ་ཕྱིས་ཅ། 国に吟行遊き。	ཁ་ཕྱིས་ཕྱིན་ཅ། 吟行するなりき。	ཁྱིམ་ཏུ་ཁ་ཕྱིས། 国に吟行き。	ཁ་ཕྱིས་ཕྱིན་ཅ། 吟行してゐる。	ཁྱིམ་ཏུ་ཁ་ཕྱིས་ཁ་ལ་ཕྱིན་ཅ། 国に吟行するならん。
ཆུ་འཁྱལ་ཅ། 水が涌き	ཆུ་ཁ་ལ་ཕྱིན་ཅ། 涌き出たりき。	ཆུ་ཁ་ལ་ཕྱིས། 水が涌く。	ཆུ་ཁ་ལ་ཕྱིས་ཁ་ལ་ཕྱིན་ཅ། 涌いてゐる。	ཆུ་ཁ་ལ་ཕྱིས་ཁ་ལ་ཕྱིན་ཅ། 水が涌くならん。
ཟླ་བ་ཕྲུག། 電光が閃き。	ཕྲུག་ཅ། ཟླ་ཕ་ཕ་ལ ཕ ཕ ཕ

ཟས་བཟས་ཀྱིན་འདུག།	མདོ་དོན་བཤད་ཀྱིན་འདུག།	དུས་ཕྱིས་ཀྱིན་འདུག།
食物を食いつつあり。	經義を説明しつつあり。	時は遇れつつあり。
གློག་ཟླ་ཀྱིན་འདུག།	ཡུལ་དུ་ཕྱིན་ཀྱིན་འདུག།	ཁོས་འདིར་ཀྱིན་འདུག།
電光は閃きつつあり。	國へ 赴 行いつつあり。	彼は 来 つつ あり。

未来進行詞の例は以下の如し。

གླུ་ལེན་ཀྱིན་ཡིན་པར་འགྱུར།	ལམ་དུ་འགྲོ་ཞིན་ཡིན་པར་འགྱུར།	ཡུལ་དུ་ཕྱིན་ཀྱིན་ཡིན་པར་འགྱུར།
歌を歌いつつあるならん。	道へ 行きつつあるならん。	國へ 之きつつあるならん。
ཆུ་ཀློལ་ཀྱིན་ཡིན་པར་འགྱུར།	འཁོར་བར་འཁོར་ཀྱིན་ཡིན་པ་ལ་ཡང་ངེ།	ཟས་ཟས་ཀྱིན་ཡིན་པ་ལ་ཡང་ངེ།
水は渦巻きつつあるならん。	輪廻を廻りつつあるならん。	食物を食いつつあるならん。

上例を挙げるが如く、過去進行詞は過去動詞を用ふる點のみが、現在進行詞と異なれり。未来進行詞は現在動詞を用いて、それに ཡིན་ཡིན་པར་འགྱུར の未来進行助動詞を用いて、それが未来進行詞たることを示せり。

一五一　完了助動詞

西藏語は ཇི་ཙམ་ཕྱིན་ 完了詞を云ふは、過、現、未、三時限の動作の完了を用いられ、又動詞、副詞、助動詞等の言語にて終れる文章の終を結ぶ時にも用いらる。それ等は皆完了助動詞にして、十一語あり。以下の如し。

ཀོ། ཏེ། ཏོ། ཅོ། ཏུ། ཚེ། ཏེ། ཙེ། ཤེ། ཚེ། ཏུ།

これ等は皆動詞に添加して用いらる助動詞にして、動詞が表す作用の完了せしことを表示するものなり。前章に挙げたる ཐོག་ 再構語又は ཁ་ཕྱི 伴構語として挙げたる十語は、此に挙げたる十語(終の ཏ を除く)とその語形は同一なれども、その語性に於て異なるものなり。再構語は名詞、代名詞、形容詞等を肯定説明する動詞にして、完了詞は動詞の表義を助けて、その活用を完了せしむる助動詞なれば なり。又 ཁ 完了詞が再構語に存せざる所以は、名詞、代名詞、形容詞には ཁ 強調語の存せざるを以て、ཁ 語を用ふるに由なきを以てなり。次に完了助動詞が動詞に接合する法は以下の如し。

ལ་ཏུ་ཀོ།	ཁ་ཅེ་ཏེ།	ཁ་ཚ་ཏེ།	ཆད་ཏ་ཙེ།	ཁ་ཐོ་ཏ་ཏ།	ཁ་ཤ་ཆ་ཚེ།
あるなり	持ちしなり	説明した。	一致するなり。	得るなり。	思ふなり。

ཟད་ཏ།	ལན་ཏེ།	ཁ་ལམ་ཚེ།	ཕ་ལམ་ཚེ།	ཐུགས་ཏ།	ལན་ཏ།
尽きなり。	なるなり	申上るなり。	名づけしなり。	喜ぶなり。	示せしなり。

一五二　三時限完了助動詞文例

過去完了助動詞の例は以下の如し。

ལམ་ཁ་ཀོ་ཀོ།	རབ་ཏུ་ཕྱུང་ངེ།	དཀར་ཆོས་ལན་ཏ་ཏ།	མདོ་དོན་ལན་ཏ་ཏ།
通行を禁じたりき。	出家したりき。	正法を説明したりき。	経義を示したりき。
ཞིང་ལ་ཏ་ཏ།	ངན་ཀུན་ལན་ཏ་ཏ།	(ལ 接置詞の連語 ー なし)	རིག་ཀུན་ལ་ཁ་ཤ་ཆ་ཚ་ཏ།
米を植へたりき。	一切の敵を降伏したりき。		手段學問を知り得たりき。
ལྟ་ཕྱ་ཕ་ལམ་ལ་ཏ།	ཅ་ལ་ཆུ་ཀུ་ལ་ཏ།	ཟླ་ཀ་ཟ་ཆ་ལ་ལ་ཕ་ཏ།	
罪障を減じたりき。	喜みて競爭したりき。	三宿(秋月、名月、星名月)より期間限したりき。	

現在完了助動詞の例は以下の如し。

ཐག་ཕ་ལ་ཕ་ཕ ཏ ལ ཏ །	ལག་ལ་ལ་ལ ཏ ཏ །	ཆོས་ལ ཏ །	ཆུ ཆ ལ ལ ཏ །
細かて結びたり。	動索にて縛りたり。	法を説明すなり。	潮を流すなり。
ངོ་ལ ལ ལ །	ལེ ཆ ལ ལ ཏ ཏ །	ཕ ལ ལ ལ ཏ ཏ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ ཏ །
目的を成するなり。	衆生の利益を思ふに。	衆生利益の正法を博むに。	銭を金に変ずるなり。
ཚེ ལ ལ ལ ལ །	ཐ ལ ལ ལ ལ །	(現在語の ཏ は ཏ 再構語なる事を識 語なきを以て ཏ には関係なし)	
生命を奪ふに至れるなり。	空性義を解するなり。		

未来完了助動詞の例は以下の如し。

ཁ ལ ལ ལ ལ ལ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ །	ཆ ལ ལ ལ ལ ལ །
家に執着するならん。	闘に至るならん。	水が渇くならん。
ཀ ལ ལ ལ ལ ལ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ །	ཐ ལ ལ ལ ལ ལ །
下僕に使ふならん。	身に沐浴するならん。	電光が閃くならん。
ཐ ལ ལ ལ ལ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ །	(未来助動詞の場合 再構語なきなし)
術策が説くならん。	輪廻に廻るならん。	

一五三　能相と所相の助動詞

能相動詞 ཐ ལ ལ を構成するには、動詞に ལ ལ 或は ཐ のみを添加することに依て成ぜらるゝなり。又所相動詞 ལ ལ ལ を構成するには、動詞に ལ ལ 或は ཐ のみの語を、添加することに依て成ぜらるゝなり。その中能相動詞の例は以下の如し。

ཐ ལ ལ ལ ལ ལ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ །	ལ ལ ལ ལ ལ ལ །
糸を紡績する(紡ぐ)	相互に相撲する。	糸が 宜 する。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一五五　四段動詞の語幹表

| | | |

命令動詞は語幹に直接語尾を付けるもの及び數種の特殊なものを除くほか、凡て第一の目的動詞と結合する時は、第一の目的動詞の末尾音を有する少數の動詞を除くほか、凡て第二の目的動詞と結合する。

見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる

一五九　第二種命動詞と命動動詞との結合法

見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる

一六〇　第二種命動詞と命動動詞との結合法

見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる
見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる	見せる

命令動詞は語幹に直接語尾を付けるもの及び數種の特殊なものを除くほか、凡て第一の目的動詞と結合する時は、第一の目的動詞の末尾音を有する少數の動詞を除くほか、凡て第二の目的動詞と結合する。

見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる

一六一　期限的目的動詞とその文例

期限的目的動詞は、命令的動詞に從ひ、自らの心に期して限りなき時を期する。それ等の目的動詞は下の如し。

1. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる
2. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる
3. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる
4. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる
5. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる
6. 見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる　見せる

期限的目的動詞の注意。　第一の例は グルチェ(怪)・ヘリ(虫)・ヘリ(虫)の注解

を作らに當て、トゥンミー著の文典三十偈について、それの精粋要略を説明すべしと、期願的に宣言せしものなり。されば こゝに用ひられたる ཡོད་ の助動詞は固より期願願的なること明かなり。然るに本来これを未来詞として用ふるもの甚だ多し。尚は གཤེགས་ の ཤེགས་ までも未来詞として慣用せり。然れども ཤེགས་ は元来過去詞にして、それが現在詞で未来詞とは、ཡོད་ と云ふ語なることは、根本文典の性入法に明示せる所なり。又 ཤེགས་ の如き異性前置字ある語類を、未来詞に用ふるものなれども、何等の根據なきものにして、性入法に反するものなりと知るべし。

一六二　否定の助動詞及それ異用法

否定の助動詞として普通に用ひらるゝ語は、མ་ མ་ མ་ཏ་ མ་ の四語にして、何れも皆'不'或は'無'と言ふ打消の義を表せり。これ中 མ་ と མ་ との二つの二語は、動詞の前に着き、མ་ と མ་ との二語は、動詞の後に着く。それ例以下の如し。

མ་ཡིན།	མ་ལགས།	མ་མཐོང་།	མ་ཡིན།
あらず。	ならず。	見ない。	そはない。

གསེར་ལ་ཁ་ཟས་ཡོད་ཀ། ཁོ་ནས་ཤེས་ཤེ་ཁ་ལས་ཡོད།
黄金 を 云ふものがない。(所有しないの義)。 彼は 博士と云はれない。

四個の否定詞について注意すべきことは、ཡོད་ と云ふは ཡོད་ 即ち存在の否定詞なるが故に、無存在の義に用ひられ、ཡོད་ は ཡོད་ の否定詞にして、それが何であるとかないとか云ふ指示的説明に用ひらるゝ否定詞なり。

上記の如く ཡ と ཡ との二語は、動詞の前に置かるゝ時は、必ず打消の助動詞となれども、動詞、名詞或は形容詞の後に置かるゝ時は、必ず名詞を構成する接尾語となりて、決して否定詞とならざることは、以下に挙ぐるが如し。

ཆང་ཡ།	རྒྱ་ཡ།	ཆུ་ཡ།	ཐང་ཡ།	ཐོག་ཡ།	ཟ་ཡ།
酒書人。	茶商人。	春。	遠地。	上人。	食物
ཀུ་ཡ།	ཡུལ་ཡ།	ཐོན་ཡ།	དཔལ་ཡ།	ཁང་ཡ།	ཕ་ཡ།
美那人。	遠境人	[illegible]村人。	軍人。	冬人(冬稲)。	夫婦。

前後の両語を否定する ཡ助動詞。ཡ否定助動詞を名詞と名詞との中間に入れる時は、前後両語の何れをも否定することとなりて、その両者の中間の義を表すことは以下の如し。

ཀ་ཡ་ཏ། 支那人と西藏人との雜種。(ཀ は ཀ་ཡ の省略にして支那人の事、ཏ は ཏ་ཡ の省略にして西藏婦人の事、ཡ は ཡ の省略にして否定助動詞なり。支那人を父とし西藏婦人を母とした子は、支那人にも非ず、西藏人にも非ず、両者の間の子と云ふ義なり)。

ཡ་ཡ་ཕ། 山羊と羊との雜種。(ཡ は山羊、ཕ は羊、ཡ は否定助動詞、山羊にも非ず羊にも非ず両者の間の子たることを表せるなり)。

これ等の外に否定詞として、ནམ་ 空。ཕྱི་ 離、ཡ 盡。ཡོད 無。の語あれども、これ等は否定詞なれども助動詞に非ず、既に否定形容詞として、否定形容詞にしてその項に挙げたれば就いて見るべし。

一六三　可能適應許容の助動詞

これ等の助動詞は、ནུས་ ཤེས་ ཐུབ་ ཆོག་ の四語にして、これ等が獨立して動詞に用ひらるゝ時は、初の三語は何れも殆んど同義にして、能ふ、かなふ、ふさふ、の義に用ひられ、終の一語 ཆོག は許さの義に用ひらる。而してこれ等は助動詞としては「る」「らる」の語義に用ひらる。俗語に出来る、適するゝと云ふ意を表せるものなり。その例以下の如し。

ཤོག་ནུས། 来らる。(ゆ) 来られる、来ることが出来るの意なり。

ཟ་ནུས། 食物が食へる。食物は食ふことが出来るの意なり。

རྟོག་ཤེས། 讃へ得る。讃歎に適する義なり。

ཕྱག་ཤེས། 願い得る。願いに適する義なり。

ཁ་ཐོབ་ཏུ་ཐུབ། 貴られ得る。貴るに適してゐる義なり。

ཕྱག་རྒྱ་ཏུ་ཆེ་ཐུབ། 教師となれぬ。(なるに適しない)

ཆང་ཟ་ཐུབ་ཀས་ཆོག། 酒を飲んではならぬ。

ནང་ལ་ཤོག་ཆོག། 内に行かれる。(行くことが許されてゐる)。

一六四　使役相の助動詞

使役相の助動詞は、ཁྱེར་ せしむ、བཏུལ་ せしめたりき。བྱེད་ さす、なさしむ。の三語にしてその例は以下の如し。

གཅིག་ཆད་ཀྱི་ཁ་ལ་ཏ་ཡན་ཏན་ཁྱེར་ནས་ཀྱང་ངེས།
大　兄　を　に　出　家　せしめよと　説かれき。

ཡུལ་པ་རྣམས་ནི་ཐུན་མོང་གི་ནོར་ཁྱིམ་ལ།
村　人　等　は　公共の屋　する　財産の　問題　について、

ཐམ་ཅད་ཐ་མར་ཐམ་པར་དོན་ཡོད་ཅིང་ཐམ་ཅད་ཀ་ནས་ཐམ་ཅད་ཐ་ལར་ཁྱེར།
一　致　する　を　能はざりしが　故に　長官が　到着して　一　致　せしめたりき。

རྨུགས་ཆེ་ལར་བྱེད།　　ཕ་ཆར་ཕན་ནི་མ་ལར་བྱེད།
痛　を　大　ならしむ。　子供に　その　薬　を　食はしむ。

本表 བྱེད་ と云ふ語は、「作す」或は「言ふ」と云ふ動詞なれども、助動詞に用ひらるゝ時は、「す」「する」と云ふ能相助動詞となり、又時に使役相の助動詞となることは、既に挙げたるが如し。文中に於けるこれ等の区別は、前後の文脈に依て、その何れに用ひられたるかを知るべし。

一六五　比況の助動詞。

比況の助動詞は、ལྟ ごとし、似たり。ལྟར་ ごとし、似たり。ཁྱད་ཙམ་ ごとし、ありのまゝなり。にして、その用例は以下の如し。

ཁོ་ནའི་ཁ་ཕྱི་ནས་ཚངས་པའི་སྐྱང་ལར་ལྟ་བུ།
彼の顔光は　梵天　の　光明に　似たり。

སྤྲེ་ཡི་བྱེད་ལྟར་ནི་མིའི་བྱ་ལར་ལྟ་ལར་ཟིན་ཏུང་ངོ།
猿　の　作し　方　は　人の　行為に　似たりと　言い得るなり。

མཁས་པ་ཞིག་ནི་ནད་ཀྱི་ཁམ་ལྟར་ཐུ་ཏང་ལ་ཐུན་ཙམ་ཡོད།
或　学者は　　三　村　老　の　種　感　の　如くに　現るなり。

མི་ཤེས་པའི་ཏ་ཁོ་ནི་ཤེས་ཡོ་ཟེར་ཡོ།
知らないなゝに　彼は　知れりと　云い　き。

བདག་ཉིད་ཐུགས་མངའ་ཤིན་ཏུ་ཁྱབ་ཀྱི་ཟླ་བ་ལ་ལྟ་ཆེ།
我　自身は　神通　広大なる　観　自　在　の　如きに　非ず。

一六六　疑問助動詞

疑問助動詞は十一語あり。その中の十語は後置十字の各字と同じ字にམ字を添へて、構成すること以下の如し。

གམ། ངམ། དམ། བམ། མམ། རམ། ལམ།

བམ། ཧམ། ཨམ།

にして、これ等の外に ཏ強調語には、ཏམ を附して、十一語となる。これ等は何れも皆疑問を表す語にして、'か' 又は 'や' の義を有す。これ等の語が前行語に続く方法は、完了詞と同じ方法に依る。その例は以下に挙ぐるが如し。

ལངས་ཀྱང་ཀམ། ཐོན་ངམ། ཡོད་དམ། ཡོད་བམ། ཐུགས་ཀམ། ཁ་ལམ་ལམ།
あるか居るか。　出たか。　有るか有つか。　あるか。　痛むか。　考へるか。

ཟས་ཧམ། ཁྱད་ཨམ། ཐུ་ཡ་ལམ། ཤེས་ལམ། ཟིན་ཏམ། ཟེར་ཏམ།
食ふか。　異へるか。　勝つか。　知るか。　示したか。　謂したか。

これ等の如きは動詞に続いて、疑問助動詞となれること上例の如し。然れどもこの同じ語類が名詞に続く時は、疑惑を表はして接続詞となる用法あり。又單なる接続詞となることあり。それ等の用法は第七章に於て説明すべし。

第六章 གྲགས་པའི་ཚིག། 副詞

一六七　副詞の意義と原始的副詞

副詞は動詞或は形容詞或は他の副詞を副いてその意味を言い添へるに用ふる語なり。故にགྲགས་པའི་ཚིག 添へる語と云ふ。助辭の部に擧ぐる所のཞན་ཕན་ཚིག 強勢詞とは異なり。これは西藏語に同音異義異文の語なれば注意までに誌しおくなり。

原始的副詞に三種の語根あり。それは、ཅི། と ཤེ། と ཤ། との三なり。これ等は皆同義を有する語にして、'さう'又は'左樣'と言ふ意なり。これ等の三語根は以下に擧ぐるが如き、後置字或接尾語或は助辭を附して、原始副詞を構成するなり。

後置字 པ། 接尾語 པོ　助辭 ཏེ། なり。 བམ། 或は。 ན། 如何。 これ等は

三語根を附して構成されば原始的副詞を構成すること以下の如し。

ཅི་པ། ཅི་ཏེ། ཅི་ན། ཅི་ཡིན། ཅི་ཡིན་ཏེ། ཅི་ཡིན་ན།
さう、左樣。〃 〃 〃 〃 さうである事。左樣なら。〃 〃

ཅི་ཞེ་ན། ཅི་ཞེ་ཏེ། ཅི་ཞེ་ན། ཅི་ལ། ཅི་ནི། ཅི་ལ།
と云ふが如き。〃 〃 〃 〃 (と云ふならば) 〃 〃 〃 〃

然るにこの中ཅི་ཡིན 左樣、ཅི་ཡིན་ཏེ 左樣なる事、と云ふ語は、異義ありて、それ異義は、'知る'、'知ること'と云ふ義にして、廣く用ひらるゝが故に、後置字ནའི 後はཅི་ཡིン 或はཅི་ཡིン་ཏེを用ふる時は、文法に合致すれども、'知る'、或は'知ること'と云ふ義と誤讀し易きを以て、後置字ནའི 後はཅི་ནི 又はཅི་ཡ を用ふるなり。

一六八　副詞語根結合の法則と實例

副詞語根が隨他意語なるを以て、前行語の後置字と合音調和する規定あり。先づその規定を擧ぐれば以下の如し。

ཀ་ད་བ་དང་ཏ་ཏ་ཁ་ཟ། ।ཅ་ཚ་ཆ་ཤ ।ཐ ।ཟ ।ཆ ।ཅ ।ཆ ।
ガ ダ バ ダ タ タ カ ザ　ツ チャ チャ シャ　ト　ザ　チャ　ツ　チャ

ཏ ।ན ।ཟ ।ལ ।ར ।ཡ ।ད ।　　ཁ ।ཀ ।ཆ ।ཏ ।ཟ ।ཤ ।ཡ ।ཏ ।
タ　ナ　ザ　ラ　ラ　ヤ　ダ　　カ　ガ　チャ　タ　ザ　シャ　ヤ　タ

後置字の記けた語端さい

ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।　　ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।
シ　シ　シ　シ　シ　シ　シ　　カ　カ　カ　カ　カ　カ　カ

ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।　　ཁ ।ཁ ।ཁ ।ཁ ।ཁ ।ཁ ।ཁ ।
シ　シ　シ　シ　シ　シ　シ　　カ　カ　カ　カ　カ　カ　カ

を得る。　　語語末は誤解を除くため ཀ を用ふるを陪いて、

ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।　　ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।
カ　カ　カ　カ　カ　カ　カ　　カ　カ　カ　カ　カ　カ　カ

を結ぶなれば誤解の恐れありと云ふ事を生ずるなり。

ཏ ।ཀ ।ཏ ।ཀ ।ཏ ।ཀ ।ཏ ।
作られと說かれたりき。

（これは後置字ནའི の後は ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।ཅ ।と云ふ語を用ふるを例とすれども、語末とと云ふ語を誤り易きを以て ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।ཀ ।を用ふるなり）

これ等の規定を實例を擧げて表示すれば以下の如し。

ཐ ।ཀ ।ཏ ।ཀ ।ཏ ।　　ཐ ।ཀ ।ཏ ।ཀ ।ཏ ।
苦を　滅して。　　菩提を生ずる種と說かれき。

ད ।ཆ ।ཆ ।ཆ

一七〇　丸種の副詞及び場所の副詞

副詞には丸種ありて、場所の副詞、時の副詞、度数の副詞、量の副詞、並び下に質の副詞にして以下に挙ぐるが如し。

場所の副詞の例

（以下副詞のみを挙ぐべし、それ等の文例は前に挙げし用例にて知るべし）。

마도히 마도히 마도히다이 마도히지 마도히지만지이 마도히지만지이
何方へも。 何方へも。 何方へでも。 何方へでも。 何方へでも。

마도히 마도히 마도히지 마도히지 마도히지만지이 마도히지만지이
故郷に。 故郷から。 故郷でも。 どこへ。 どこから。 どこへでも。

마도히 마도히 마도히 마도히지 마도히지 마도히지만지이
内へ。 内から。 内へ。 外へ。 外から。 外へでも。

오모테히로이 오모테히로이 오모테히로이 오모테히로이 오모테히로이 오모테히로이
外部へ。外部から。新へ。 新へ。 新から。 新へ。

마도히 마도히 마도히 마도히 마도히 마도히
上へ。 上へ。 上へ。 上から。 上部へ。 上部から。

모토히 모토히 모토히 모토히 모토히 모토히
上り坂へ。 上り坂へ。 下り坂へ。 下り坂へ。 近へ。 近くより。

고코니 고코니 고코니 고코니 고코니 고코니
附近へ。 〃 〃 〃 附近から。 附近へ。 〃 〃 〃

요메히도히지 요메히도히지 요메히도히지 요메히도히지 요메히도히지 요메히도히지
最近頃より。下へ。 〃 〃 〃 〃 〃 〃

오모테히오모테히 오모테히 오모테히 오모테히 오모테히오모테히
十方へ 〃 〃 〃 十方より。

一七一　時の副詞の例

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
三度 〃 〃 〃 三度より。

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
遊ぶ時に。 遊ぶ時に。 遊ぶ時に。 此時。 此時より。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
遊ぶ時に。 遊ぶ時に。 遊ぶ時に。 未来時。 未来時。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
今時 〃。 今時 〃。 古代 〃。 昔時。 古い時に 新たに。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
初めて。 中頃。 年後。 夕暮。 朝、夕。 新たに。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
上に。 上に。 上に。 上から。 上部に。 上部から。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
上り坂に。 上り坂に。 下り坂に。 近に。 近くより。

고코니 고코니 고코니 고코니 고코니 고코니
附近に。 〃 〃 〃 附近から。 附近に。 〃 〃 〃

요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니
最近頃に 〃 〃 〃 下から。 十方に。 〃 〃 〃

오모테히오모테히니 오모테히오모테히니 오모테히오모테히니 오모테히오모테히니
十方に 〃 〃 〃 十方より。

요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니 요메히도히니
最近頃に 〃 〃 〃 下に。 〃 〃 〃

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
一度に。 一度に。 一度に。 賛成して。 賛成して。 賛成して。

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
度々に。 度々に。 度々に。 度々に。 度々に。 度々に。

도키니 도키니 도키니 도키니 도키니 도키니
時に。 時に。 時に。 時に。 時に。 時に。

一七二　度数の副詞及び数量の副詞

度数の副詞、 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
何度か。 数度か。 一度。 二度。 三度。 三度

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
一度一度。 一度一度。 賛成して。 賛成して。 賛成して。 賛成して。

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
度々に。 度々に。 度々に。 度々に。 度々に。 度々に。

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
無数の度々に。 無数の度々に。 無数の度々に。 無数の度々に。 無数の度々に。 無数の度々に。

量の副詞、 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
何程。 何程。 何程。 何程。 何程。 何程。

도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니 도키도키니
多量。 多く。 少量。 少く。 多く。 多く。

རྒྱ་ཆེ་ཆུང་ངུ།	ཆོད།	ཆོག	ཆོག་ཆོག	ཇི་ལྟར་ཉན་ཐོས་ཀྱི་ཐེག་པ།
甚だ 多く。	十分。	十分。	十分満足。	何程か生きとしける聞き、生者にての聞。
དཔག་མེད།	དཔག་མེད་པར།	ཆད་མེད།	ཆད་མེད་པར།	
無 量。	無量 に	無量。	無 量 に	

一七三 性 質 の 副 詞

ཀུན་ཏུ།	ཁྱད་པར་ཏུ།	ཁ་རོག་ཏུ།	ཕན་ཚུན་མེད་ཏུ།	ཐ་ལྐེ	ཐ་ལྐེ་ཐ་ལྐེ	
普く、総て。	格別に、特勝に。	沈黙して、默然。	誤りなく。	緩かに	緩やかにして。	
ཏྲི་ལས་པར།	ཅི་ཤོ་ཁ་ལས་ཀ	ཕན་ལས་	ཕན་ལས་ཡ	ངོ་ལས	ངོ་ཚོ་ཁ་ལ	
塵火に。	速に、急に。	様行して。	無 錯 に。	明瞭ザンクチョン自性に依て。		
ངན་ལས།	ངོ་ནས།	ངོ་ནས་ལུགས་ཏུ	ངེ་ལྡར	ངེ་ཏུ་	ཇི་ལྡར	
悪く。	明かに。	現 實 に。平等に、捨に。	その様に(怒忿用)。	"(謀)その様に。		
ཇི་ཏུ་		ཆར་ཆར་ལས།	ཆ་ཆར་ལ	ཆ་ལ	ཇི་ལ	ཆ་ལ
その様に(二語正用)		平等 に。	隨落して。	世に して。	隨従して。	實 して。
ཐ་ཚུལ་ལས		ཐ་ཚ་ཚ་ཚ	ཐ་ལ	ཐ་ལ	ཐ	
世俗的に、俗風に。		疑 惑 に して。	一七に、重宝に。その様に。	その様に	是の如く。	
ཁ་ཏ	ཏ	ཏ	ཏ	ཏ	ཏ	
この情態。	除 く。	光輝いて立派に。	次第々々に	正直に、忠直に。	樂に、喜悦に。	坐して。
ཁ	ཁ	ཁ	ཁ	ཁ	ཁ	
真 實 に。	震 動 して。	疑 念 なく して。	同様に。	略して。	集 略 して。	
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
特別に、全全に。	熟 心 に	大 抵	大 方 は	離離れて、	一緒に。	秘密に。
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
出 教 顕に。	静 寂 に。	特別に、差別なく、	無作法に、猥褻に。	多く。	多く。	全く に、
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
不相應に無使徒に。	無 理 由に。	等しく、同様に。	美しく。	虚 言に。	虚 言して。	通 常に。
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
善く、賢く。	少 々 に。	又 して も	再 び	再び、再び	正しく、完全に	
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
簡 略	自然に 依て、順序に隨って。	合理的に、通常に。	是 も。	望 む 善く。		
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
次第に依て。次第に。	次第に、順序に。	望み 善く に、	教義正しく。可能的に。	甚だ、誠に。	望み 依く	

ལེགས་པར།	ལོག་ཕ	ལོག་ཕ་ལ	ལོད་ཕ	ཤེས་ཕ	ཕ	
善く、優雅に。	邪 に。	邪 に、曲に。	寛大に、緩いて。	知りながらに	盛 に して。	
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
別々に、各別に。	面 に。	面 に。	明 か。	明 か に。	秘 密 に、	
ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	ཐ	
冷 か に。	甚だ、非常に、誠 敬 なく、誘 惑 なく。		極 に。	甚だ に も。	強りに、一 度。	
ཆ	ངོ					
為に 故に。	為に 故に。					

第七章 ཚིག་འཛིན། 接續詞

一七四 接續詞の定義と其基本語と例

接續詞は、語と語との間、或は語句の間、或は文句の間に入りて、それを續け合はす所の語なり。例せば

ནམ་མཁའ་ཁ་ཏོག་ཅན་ལས་ཀ་ཤ་ཡིན། དགུན་གཅིག་ལོ་ཏོག་ཅན་ཡིན།
佛陀と菩薩。 春は過ぎて夏は來れり。

の如し。接續詞は他の語類より轉用する者多けれども、語源的接續詞ありて、その例り以下の如し。

接續詞基本語の表と例

དེ།	ཇི།	དེ།	ཐུན་	ཡང་	ཡང་	དང་	ལས།
ཡ.ཐུགས།	ཡ.ཐུགས།	ཡ.ཐུགས།	然れども。	〃 〃。	〃 〃。	ཡ.ཐུགས།	或は、と。
ངམ།	དམ།	ཏམ།	ལམ།	ཚམ།	ལམ།	ཀྱང།	ཞེས།
或は、と。	〃 〃。	〃 〃。	〃 〃。	〃 〃。	〃 〃。	〃 〃。	〃 〃。
ཞེས།	ཏེ།						
〃 〃。	〃 〃。						

ཁོ་བོ་ཡིག་ཤེས་ཏེ་དོན་ཡང་ཤེས་ཤེས།
彼女は文字を知って意義をも知ってゐる。

ལག་ཏུ་ཁ་ཕྱག་ཏུ་ཕྱིན།
手を振って行く。

དམ་ཆོས་ཕན་ཡོན་དུ་བྱེད་ཀྱང་ཡོད།
正法を說明して利益を成ずるなり。

ཁ་ཅིག་ཀྱང་ལགས་ཀ་ཡོད།
誰かれをも行かしむ。

ཁམས་ནི་དཀར་ཡང་སེམས་ནི་ནག
御顏は白いけれども心は黑い。

ཐོ་ཆོལ་ཆགས་ཡང་ཆོད་ཡལ
頼ふてゐけれども供養を上つる。

ར་ཕ་ལྷག་དང་ར་དང་མཇོ་དང་ཡོད་དོ།
檻内に羊と山羊と犢とが居るなり。

དགེ་ཀུན། ཐུན་ངམ། ལྟུང་དམ། ཐུ་ཏ་ཏམ། ཁ་ཕ་ལམ། ཁ་ཚ་ལམ།
念怒明王或は金剛身或は、惡魔或は、重或は、槍或は、詐謀師或は、

དཔལ་ལམ། ཆ་ར་ར། ཐུགས་ལམ། ལེགས་ལམ། ལག་ཐུར་ཏ། ཐུ་ལས་ཀྱང
菩薩或は、雨或は、化現或は心或は良化せしめたかと言ふも雖も、

འཁོར་བའི་ལྷང་ཁའོ།
輪廻の現れなり。

一七五 ངམ་接續詞と轉用と實例

ངམ་と云ふ語は本來接續詞なれども、副詞として理由と時事とを用ひ、命令助動詞をも用ひらるゝこと以下の如し。

理由. ཤ་ཁ་ལས་ཏ་ཡང་ཐོ་ལ། ཆོས་ལ་ཉན་ཏེ་ཡ.ཐ.ལ.ཐ.ལ.ཐ.
煙あれば火(あり)と知るべし。法を多く聞けば餘(邪)見を增すなり。

時事. ཉི་མ་ཤར་ཁ་ཏ.ངམ་ཆོས་ཀྱི་ཤ.ཏ.ཡ.ཐ.ལ.ཐ.
日が上つた時法會を請待せん。正法を聞く時煩惱が消滅するなり。

命令. ལེགས་པར་ཤེས.ཤ.ཡ.ངམ། ཀ.ཏ.ཐ.ཀ.ཡ.ངམ། ཡིད.ཀ.ཐ.ཀ.ཡ.ངམ།
善く學べよ。讀誦なせよ。心に憶持せよ。

ངམ.ཐ.を接續詞としての本分に用ゆる時は、ཐ.ལ.攝。ཕ.ཐ.ལ.開との二に別れるゝなり。これを總稱して、ཐ.ལ.ཕ.ཐ.ལ.攝開と云ふ。その例以下の如し。

攝 ཡ.ཐ.ལ.ཐ.ལ.ཐ.ལ.ཐ.ལ.ནི.ཆོས.ཡ.ཐ.ལ.
有爲と無爲とは法なり。地と水と火と風とは

ཆ.ཆ.ཀ.ལ.ནི.ཁ.ལ.ཤ.ལ.ཁ.ལ.ཀ.ལ.ལ.ལ.ལ.ནི.ཁ.ཆ.ལ.ནི.
大なり。眼と耳と鼻と舌と身等は根なり。

斯の如く、二語或は數語を接續して、各語を通ずる一義の語を攝ぜらるる故に攝と云ふ。これに反して初め通義の語を擧げて、その語を含める種々の語を、接續羅列せらるる ངམ.を云ふ語を以て、次第にその意義を明開せらる故に開と云ふ。その例以下の如し。

開 ལྷ.ལ.ལ.ནི.ཏ.ལ.ལ.ནི.ལ.ལ.ལ.ལ

問或は攝に用ふる例は以下の如し。

問 གཟུགས་ཏེ།ཕུང་ཁམས། ཚོར་བ་ཡིན།ལས། འདུ་ཤེས་ཡིན།ལས། འདུ་བྱེད་ཡིན།ལས།
蘊は 即ち 色 或は 受 或は 想 或は 行 或は

རྣམ་པར་ཤེས་པ་ཡིན། འདི་ལ་བདེན་པ་གཉིས་ཡོད།ལ་ཀུན་ཏུ་ཡང་
識 なり。 諦 に、即ち 聖 義 諦 と 俗

བདེན་ཡོད།
諦 なり。

攝 ཉན་ཐོས།ལས། རང་སངས་རྒྱས།ལས། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ།ལ
聲聞 と 獨覺 と 菩薩 と

སངས་རྒྱས་ནི་དམ་པ་ཡིན།ཏེ།
佛陀は 四聖 なり。

ཀཱ།ལ等の十一語は疑問接續詞として用ひらるゝことは、直接ま名詞に續く時に多く用ひらる、もし動詞ま續く時は疑問助動詞として用ひらるゝなり。以下疑問接續詞として用ひらるゝ例を擧ぐべし。

ལྷ་ཧ་ལ་ལ་ཡིན།ནམ་མཁའ་ལ། ཁོ་བོ་ཤེས་ཀ།ཡང་ཁ་ཅིག་ནི་ཡིན་པ་ཡིན།ལ།
神か 阿修羅か 我知らず、然れども 一大力者 なりてあることは確實ぞ。

ཐོག་ནམ་ཁ་ཅིག་ཀ།ལ་ཤེས།ལ། ། མི་ཧ་ལ་ལ་ལ།ལ་ལ་ལ་ཡ་ལ།ལ། །
雲か 花か 知らず。 人か 神か 見々と 驚く。

一七七 副詞より轉じたる接續詞の表

ཀཱ།ལ་ཏེ། …… ば。	དེ་ཏུང་། 尚ほ。	དེ་ཏུང་ཡང་། 尚ほ 又。	ཇི་ན། されば。	ཇི་ལྟ་ན། それ故ま。
དེ་ལྟ་ན། それば	ཇི་ལྟ་བས་ན། それ故ま	ཡང་ན་ཡིན་ན། ヤハ。 でもなければ。	ཡང་ན། ヤハ。	ཅི་ལ་ཡ། とえふか或は。
ཞེ་ན་ཡ། とえふか或は。	ཞེ་ན་ཡ། 〃 〃。	ཏེ་ན། 然らば。	ཏེ་ནི། 〃 〃。	ཡིན་ཀྱང་། けれども。ありと雖ども。
ཡིན་ཡང་། 又としても。	ཏེ་ནི་ཀ། 然りと雖も。	ཏེ་ནི་ཏུང་། 〃 〃	ཏེ་ནི་ཏུ། けれども尚ほ。	ཨ་ཏུ་ཀ། とはいへども。 〃 〃
ཅི་ན། どなれば。	ཞེ་ན། 〃 〃。	ཤེ་ན། 〃 〃。	དེ་ལ་ཐུག་ཀ། それのみならず。サクとも。	ཇ་ནི་ཐུ་ལ། それで出来るなれば。
ཀཱ།ལ་ཐ་ཏ་ལ། もし 左様ならば。	ཀཱ།ལ་ཏ། もし	ཇི་ལ། その時。	ཇ་ལ་ཡ་ན། いかやうならば。	ཡ་ཀ་ཏ་ཡ། その様でないならば。

ཀ།ལ། のみであつて。 | ཏ།ལ། でもよし。 | ཀ།ལ་ཡ། 外ともか。 | ལ། 今として。 | ལ་ཡ། それとも亦。 | ལ་ཀ།ལ། その如くして。

ན་ཡ། と雖も | ལ་ཀ།ལ། その如く。 | ལ་ཀ།ལ་ཏ། その如くは、違ひま。 | ལ་ཡ། それ故ま。 | ཤ་ལ་ཡ། 其が爲めまは。 | ཇ་ལ་ཡ། いかやうに

ཇ་ལ་ཡ། いかやう。 | ཅ་ལ་ཡ། 何故なれば。 | ཅ་ན། もしかすると。 | ལ་ཅ་ལ། 勿論まして。 | ལ་ལ་ལ་ཅ་ལ། 勿論 亦何をかまたやまして。

一七八 助辭轉用の接續詞と二類の接續詞

助辭轉用の接續詞は以下の如し。

ཀ།	ཀ།	ཐ།	ཐ།	ན།	ནས།
して。	なるま。	けれども	なれども、	なれば、なるま。	して。

これ等の接續詞の例文は、次ま擧ぐる二類接續詞の例文中に散在すれば此ま略すべし。

接續詞を大別して二類となす。一は同位接續詞にして、他は屬位接續詞なり。

一、同位接續詞は同等の位を有する二個の語或は文章を接合する語なり。

二、屬位接續詞は屬格の文章が高位ある文章ま接合せらるゝ爲ま用ふる語なり。

一七九 同位接續詞

同位接續詞は、同等の位を有する各語或は各句或は各文が他ま從屬せずして、一々獨立したる語或は句或は文章にして、それ等を連結する語なることを意味するものなり。

同位語句或は同位文章は、四種の異なる方法ま依て、構成することを得べし。これ同位に四種の接續詞ある所以なり。それ等は漸加、撰擇、相反、推理の接續詞なり。

一八〇 漸加接續詞

漸加接續詞は、一の事實或は陳述まついて、單ま他のものを加へ續くるものなり。語の漸加の例は、既に攝開或は開攝の接續詞の例ま擧げたれば、此ま主として文章の漸加接續まついて擧ぐべし。

1 漸加接續詞の例文

接續詞	前文	接續詞	後文
དང་།	མི་གཅིག་ནི་གོས་བཟློག་ཅ	དང་	གཞན་ནི་ཀུན་ཁབ་ཏུ་ཕེབས།
そして。	一人は位を得	て	他は官職を得たり。
ཡང…ཡང་།	ཁོ་ནི་ཐུ་ཚན་ཅ	དང	གར་ ཡང	ཆུ་བཏབ་བདུག།
そして…また。	彼は歌を歌ふ	て	踊りも	踊ふた。

(この文中の「踊り」とある語は固より名詞なれども、前後の接續詞あるを以て假りに中央に入る)

ད…ཀ	ཁ	ད	ངའི	ཀ	ཕ	ཁ	ཕ	ཁ	ཕ	ཁ

དེས་ནི།	སེམས་བསྐྱེད་པ་ལ་བྱུག	དེས་ནི	ལུས་ཀྱི་ལུས་ཀྱང་ངན་པར་ཤེས་ཏེ།
それ故に	穢を捨きたり。	それ故に	罪の 生ぜんことは確なり。
ཤེ་ནི།	དུས་ལྷན་ཅིག་ཡིན་ལས་ལགས།	ཤེ་ནི	བདག་ཅག་ལན་ཕྱོགས།
然らば	今 出立 の 時が来た。然らば		我等をして出立せしめよ。

一八四 屬位接續詞

一文のその意義が他の文に從屬する時は、一が他に屬すと云ふ。勿論一文の全意義が他に移つるに非ざるなり。

從屬文が終る時、その終りは從屬接續詞が用ひらるゝこと以下の如し。

ཁྱོད་ཀྱིས་བདག་ལ་གདམས་ངག་ཕུལ་ནས།	ནི	ངས་དེ་ཡི་ཟེ་བཀྲོལ་ཏེ་ལྟ་ཡིན།	
汝が	私 に	教訓を與ふる	ならば 私はその書を讀みましやう。

從屬的文章の主なるものを分てば九種あり。それ等は以下の如し。

1. 同格。 2. 原因。 3. 結果。 4. 目的。 5. 條件。 6. 反對。 7. 比較。 8. 廣廣。 9. 時間。なり

一八五 同格接續詞

同格接續詞を用ふる文は、屬位文中最も單純なるものなり。

1、同格接續詞の文例

同格接續詞	從屬文	接續	主文
དེ།	ཟླ་བཅུ་ལས་ལོ་ཀུན་ཏུ་ཁ་ཅིག་ཡོད་ཀ	དེ	ཁོང་ཏུ་ལས་ཀ་ཡོད།
それを。	昨夜 彼處は雪が降つたと云ふ	噂。それを	彼は我に告げたり。
ཞེས་ཟེར།	ཁོ་ཁ་ཆེ་ལས་ཕ་ཡུལ་ཏུ་ཕྱིན་ཡོད	ཞེ	ངས་ཡིག་ཏུ་བཀོད།
と云ふを。	彼は安穩な故郷に著いた	と云ふを、	私は書き連つた。
ཞེས	ཁོས་ལམ་ལས་ཡང	ཞེས	ཁོས་ཁས་ལེན་ཡིན།
と此樣な。	彼は直に 歸るであらう	と此樣な、	彼は約束をした。

以上擧げし例は、何れも始めの從屬文が、接續詞と同意義を有するを以て、同格接續詞と名づくるなり。

一八六 原因接續詞と結果接續詞

2. 原因接續詞			
དེ་ལས།	ཁོས་ལས[從]ཆེ[大]ཤ[熱]ལ[人]ཁ[口]ཏ[大]ཆ[精]ལ[進]ཅ[者]ཡ[有]ཡ[也]ཡ[也]ཡ[也

6 反對接續詞の文例

反對接續詞	屬文	接續	主文
དེ་ལྟར་ཡང།	ཁོ་ནི་དེ་ལྟར་དགེ་བཅུ་ཡིན	ཡང།	ཆུང་ངུ་ནི་མ་ཡིན་པོ།
その様に。	彼はそのやうな賢人である。	けれども。	賢者ではないのである。
ཇི་ལྟར་ཡིན་ཀྱང།	ཁྱེད་ནི་ཇི་ལྟར་ཤེས་ཀྱང་ངན	ཕན	ཇི་ནས་ཡིན་ལུགས་ཇི་ཕན་ཡོད།
それは すると。	汝は それを どれ程 聡力を	するとも。	それは 愛であるから 自分が 損される。
ཡུན་རིང་ཡོད་ཀྱང།	ཁོ་ནི་ཡུན་རིང་ངལ་ཆུང་ཡིན།	ཡོད	ཁོ་ངང་ངལ་ཞི་ཞིང་ཆ་ཤས་ཡོད།
長い間 けれども。	彼は長い間 疲れたのである。	けれども	彼は休息しなければならない。

一八九　比較接續詞

比較接續詞は同度の比較と不同性の比較あり。同度には གལ་ཏེ། ལྟར། ལྟ་ཅི་ལྟར། より少なからず、等の語を用ひ、不同性には、ལས། より、よりは、の語を用ふ。その例以下の如し。

7 比較接續詞の文例(同度)

同度比較接續詞		接續	
ཇི་ལྟར།	ངས་ཆོས་ལུགས་ཀྱི་ཆོས་ལ་ཡིད་ཆེས་པ	ཇི་ལྟར།	ཁོང་ཡིད་ཆེས་ཤིག་འདུག།
如く	私が正法を信ずる	如く	彼は確信してゐる。
ལས་ཆུང་བར།	ངས་ཁོ་ལ་དགའ་བ	ལས་ལྟར་ཡང།	ཁོ་ལའང་ངལ་ལ་ཐུགས་རྗེ།
より少からず	私が彼を愛する	より少からず、	彼もまた私を愛する。
不同性比較接續詞			
ལས།	རི་ཐོག་ཆགས་ཡོ	ལས།	རྒྱ་མཚོ་ཁ་ཅིག་ཆེ་ཤས་ཆེ་ཡིན།
より	山の頂きは	より	海の一部は大きい所。
ལས།	ཁོ་ནི་ངར་ཕན་ཐབ་ཅ་ཡོ	ལས།	ཁྱད་ཕུར་ལས་ལ་ལ་ཕན་ཐུག།
より。	彼は私に益が著しい	より	優れて著者である。

一九〇　廣廣接續詞と時間接續詞

8 廣廣接續詞		接續詞	
ཇི་ལྟར།	ཁོས་ཇི་ལྟར་ལན་ཕ	ཇི་ལྟར།	ཁོ་ཏོག་ཏུ་ལན་ལ་ཐུ་ཡ	ཡོ
そのやうな	彼が何程か働いた	そのやうな	収穫を刈るであらう。
རྗེས་ནས།	ཕ་ཆུང་ལས་ཀྱི་ངང་ལ	ཕ	ཆ	ཁ	ཁ	ཁ

第八章 ཚིག་གི་ 助辭 天弟遠波

一九二　助辞の定義と例

ཚིག་གི་助辞は我國のてをはと相當するものとして、英語の副詞辞と似たれどもその用法と意義を異なるもの多し。藏文における助辞の用例は、

�ང་ལ་ཁྱད་ཅོ་ཅ་ཡོད་ཀྱང་། །ཡོན་ཏན་དཔལ་ལྡན་ཅིང་ཚར་ཏུ་དགེ་།
何にも過意は有せられずして　功德　曼りなく　有されて

ཐམས་ཅད་ཁྱེད་ཀྱིས་ཐུགས་ཁྲལ་ལས་ཀྱང་། ། དེ་ལ་ཡང་ཀུན་ཏུ་ཐུགས་ཀྱི་ཁ་ཅོ། ། གཞན་ལ
一切智　を　想心有せらるゝ　その上に　また　助伴を　致します。 L.80.

བདག་ཅག་ཅེ་ལ　ཁ　ཅ　ཡ　ཐ　ཅ　ལ　ཁ　ཅ　ཀ　ལ　ཚ　ཀ　ལ　ཁ　ཅ　ལ　ཁ　ཅ　ལ　ཁ　ཅ

一九五　助辞分類について。

以上は一應の分類として、これ等の語の中にも特殊の用法あるものあり。一々表を擧示し難きを以て、後の用法を説明する時に示すべし。前表中の格語尾となる語は、以下の擧ぐるが如し。

主格、ཨོཏ་པལ། ཨོཏ་པལ་ཀྱི།　花は。花は、花こそ。
業格、ཨོཏ་པལ་ལུ། ཨོཏ་པལ་པས།　花を、を。花を、を。
具格、ཨོཏ་པལ་གྱིས།　花を依て、花が。
為格、ཨོཏ་པལ་ལུ། ཨོཏ་པལ་ལས།　花を、のためを。" " "
従格、ཨོཏ་པལ་ནས། ...ལས།　花より、から。" "
属格、ཨོཏ་པལ་གྱི།　花　の。
依格、ཨོཏ་པལ་ཏུ། ཨོཏ་པལ་ན།　花に、に於て。" " "

以上業格、為格、依格の三は、何れにも四義七語の何れかを用ふることを見るべし。但しこの五の一語は依格に多く用ひられ、稀に他の格を用ひらる。又五と四との二語は、同位格を用ひられざることは、既に業格の所にて説明したるが如し。その外、合音の規定を除けば、總べて何れの格をも、七語を通じて用ふることは、根本文典の規定なり。詳細は名詞格語尾の説明を參照すべし。

第一　類　助辞

一九六　ཀྱི强勢の用法

文主を指示する語の中にて、ཀྱི こそ、は强勢詞として必ず文主を指示するに限って用ふらるる非ず。但し文主指示に多く用ひらるゝを以て、此に入れたるまでにして、何れの格語尾にも着いて、その語勢を强むることは以下の强勢詞の例に擧ぐるが如し。併し單に語句を調ふるために、補足詞として無意に用ひらるゝことあり。その場合には單に格語尾の意義を取りて、こそと云ふ譯語を用ひざるなり。

强勢詞としての例は以下の如し。

主 སངས་རྒྱས་ཀྱི། 佛は、佛こそ。(補足) 强勢
業 སངས་རྒྱས་ལ་ཡང། 佛　をこそ。
具 སངས་རྒྱས་ཀྱིས་ཀྱང། 佛に依てこそ。佛こそは

為 སངས་རྒྱས་ལ་ཡང། 佛のためをこそ、
從 སངས་རྒྱས་ལས་ཀྱང། 佛　より　こそ
屬 སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཡང། 佛をついてこそ。(補)佛の。
依 སངས་རྒྱས་ལ་ཡང། 佛を　於てこそ。
呼 ཀྱེ་སངས་རྒྱས་ཀྱི། あゝ、佛　こそ。

一九七　ནི助辞補足と差別の用法

前掲表中同じくནི の語が强勢詞として用ひられたる場合は、こそ、の意を表し、補足詞としては何等の意義を表さずして、單にその前行語の格語尾の意を表すことをえへり。斯の如く用ふる根據は根本文典三十偈と性入法の用例に依るものなることは以下の如し。

主 ཆོས་ནི་ཆགས་པ་ཆགས་ཤིག།། 性入法。
男は…中性に入れよ。
業 ཐུན་གསུམ་ཡང་ནི་ཁོ་ནར་ཤེས།། 三十偈。
再　集詞を…知るべし。
具 མངོན་གསུམ་ཀྱི་དཔེ་ཡིས་ནི།། 三十偈。
教説それ等の力に依て。…
為 གསུམ་པ་ལ་ནི་ཁོ་ནས་ཏོ།། 三十偈
第三のためにこそ語るものは。
從
屬 གང་ཞིག་གི་ནི་ཚིག་ཐམས་ཅད།། 三十偈
何かの語の…上語に於て、
依 ཁ་ཏོ་ཕམ་ཕ་ནི་ཡིད་ལ་ནི།། 性入法。(以下助辞に基く ནི 補足詞)
入れ置くべきものに於て…
དང་ གཅིག་ཀ་ དང་ ནི་ ཕུ་ ལ་ ནི།། 性入法。 གང་ ཡང་ ཡིན་ ནི་ ཆོ་ ཀ་ ར །། 全語
二つの者を…置ふなれば、　何に　も　…なるべきなり。

ནི助辞を强勢詞に用ひたる実例は以下の如し。

ཤེས་ནི་ཁགས་ནི་ཤེས་ནི་ཁ་ཤེས།།　ཟང་ཟིང་ལ་ནི་ཟང་ཟིང་ཁ།　ཆ་ཤུ་ལ་ཆ་ཤ།
沙こそ用途にして沙こそ知識なれ。　素つべきものこそ素てなれ。

ནི助辞は補足詞と强勢詞との外に、差別詞に用ひらる。例は以下の如し。

ཐུན་ཞིག་ནི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ན་ནམ་མཁའ་ཡིན།
遍照天(ཐུན)は諸神の中にて虚空なり。

ཅིང་ཁ་ནི་ལྷུ་ཡང་ལས་ཕྱི་ཁ་ཅིག་ཡོད།
青は緑青より外の色なり。

一九八　ཡིན等助辞の諸種用法

ཡིན་ ཞེ་ ཀྱིན་ ཡིན་ ནི の五助辞は、本来單に格語尾なれども、主格として

用いらるゝこと多し。その用例は以下の如し。

གར་མཁན་ཁྱེད་ཀར་ཆུ་ཡོད། ལྷ་མཁན་མཁས་ལྷ་ལེན་པོ།
舞踊手は舞踊を踊れり。歌い女は歌をうたふなり。

これ等の助辞が同語にて具格を表す本格的用法は、主格が直接に働きかけずして、或何かを以て作用を表す場合に用いらるゝなり。例せば

གར་མཁན་ནི་ཕན་ཚུན་ཁྱེད་ཀར་ཆུ་ཡོད། ལྷ་མཁན་མ་ལྷན་ཁའི་ཤུགས་ལེན་པོ།
舞踊手は扇子を以て風を送れり。謡い女は美しき聲を以て歌を謡ふ。

ཁྱི་བཀྲ་ནི་མི་མདུང་དང་ཐམས་ཅད་དེ། ཁྱོ་ཀས་ལུ་ཏོག་ཁྱིས་ཕྱེ་ནས་ཅན་ཏེ།
獅子は鉄槍を以て鹿を殺した。夫は拳を以て妻をなぐった。

斯の如く具格は主辞が直接に働かずして、何かを以てその働きを表はせり。主格が直接にその働きを表す者は、ཁྱིས等が具格に非ずして、主格を表すものと知るべし。

これ等の具格助辞を動詞に附する時は、理由詞となることは以下の如し。

རྟག་པར་ཡོད་ཁྱིས་མི་རྟག་པར་མ་ཡིན་ནོ། ཐུགས་རྗེ་ཁྱེ་ཁྱིས་ཐོབ་ཀོ།
常なるが故に無常に非ざるなり。得るに通じたりと雖も得ざるなり。

ཕྱོགས་ཏུ་བྱང་ཁྱིས་ཤིག། (この終りのཁྱིས་ཤིག་のཁྱིས་は助辞に非ず動詞なり)
作すに通ずる故に作せよ。

一九九　ཁྱི等助辞の諸種用法

ཁྱི་ནི་ཁྱི་ཡི་ལ の五語は、何れも二語の間を繋ぐ語として、一般に'の'の義に用いられ、格語尾としては属格に用いらるゝことは、既に品詞属格の所にて説明したるが如し。此等助辞の諸種に用いらるゝ例は以下の如し。

1 所有の意を示すもの。　རྒྱལ་པོའི་པོ་བྲང།　　བདག་གི་རྒྱུ་མ།
王の宮殿。　私の妻。

所有の物を省略して'ཁྱི等の'の語のみにて之に代表することあり。例せば

ཁྱེད་ཀྱི་ནི་ཁོ་ན་ཡིན། ཁོ་ན་ཁ་ཅིག་ཁ་ཅིག་ཡིན།
その婦人は私のである。私の物品それは我の伴侶と云ふなり。

2 二語の位置、高低るべからざるを観じる関係を示すཁྱི等助辞。

པད་མ་ཀློག། ཚན་དན་ཁྱི་ཏི་མ། ཁ་ལས་ནི་ལྷ་ཁ། ལས་ཆུ་ཁྱི་ཆོས།
紅蓮の花。白檀の香。牛の糞。佛陀の法。

3. 後の語を省略するもの。　ད་ལྟའི་ཁངས་ཀ་ཡོད་ཁྱོད་ཁྱི་ཡང་ལྷན་ཅིག་ཏུ་ཡོད་ཀོ
今の主人と以前のものも共に居たりつた

4. (ある)場所の義に用いらるゝ ཁྱི類助辞。

བོད་ཡུལ་ཁྱི་གངས་རི། ཀངས་རི་ནི་ཏི་ས་ཁ་ཡི་མཚོ་ཆེ་ཡིན།
西藏國の(にある)雪山。雪山 歓喜峯の前(なる)のマナサロワ湖。

5. (となる)義を示すཁྱི類助辞。　ཐུབ་པའི་ཁྱོད་ཁྱི་ཆོ་ཀ། ཀ་ཏིན(となる)の寺。
釈尊(となる)の大菩提。(カンテンは観世音の聖地)

6. (の如き)義を表す同助辞。　པད་དཀར་ཅོག་ཏུ་ཁ་ཆོས། ལྷ་ཆེ་ཐུ་ཚ་ཆེ་ཡི་ཐ
白蓮の(の如き)妙法。解脱佛母の(の如き)風彩。

ཚེ་ཏོག་གི་ཁ་ཤད། ཁྱོ་ཀ་ལ་ཤ་ཏ
花の(の如き)顔。雷光の(の如き)浮世。

7. (に)の意を表す例。　ཁང་ཀ་ཏོ་ཚེ ཁ་ཏོ་ཆ་ཡིན ཁ་ཏ ཁ ཁ ཁ

3. 差押へる意にて(で)の意を表すもの。　ལྗགས་ལས་ཀུན་ཏུ་ལག་ཏུ། ཤིང་ནི་ཤེས་ལྡན་ཏུ། ཆུ་ནི་ཆུ་ཚོད་ཏུ་ཐལ་ཞིང་།
鈴を金で表す。木が石で化した。水を湯となしたりき。

4. 添ゆる意み用ふるもの。　ཟླ་བ་ལ་ཁྲོན། མེ་ཏོག་ཏུ་ཆར་པ་དང་བྱུང་ངོ། རི་རྩེ་ཏུ་ཆགས་ཤུགས།
月に雲。花に雨と風。山頂に塔。

5. (にて)の意に用ふるもの。　ཁོང་ནི་ཁྱུ་ལས་ལྷ་ཀུན་ལས་ཕལ་ཆེ། ཁྱོད་ནི་ཕོ་ཤེ་ཀ་ལས་ཡིན།
彼が王子にて世に在せし時。汝は丈夫にてあるなれば。

ཕལ་ཆེ་ཐོས་ཏེ་ཚུར་ཕ་ཀུད་ཁྱེ།
彼處にて聞いて此に伝へて送くるをなす。

6. (のある)の意に用ふるもの。　མེ་ཏོག་ཏུ་ཆུ་ཁྱུ། ཀུ་ཐར་ཆེ་ཐ་ཏོ་ཁང་། ཕ་ཤུ་ལ་ལ་ནོ་ཁ།
花に(のある)水を注ぐ。僧侶に抹茶を供養す。貧人に銭を施す。

7. (のごとく)の意に用ふるもの。　རྡོ་རྗེ་ལྟར་ཕ་ར་ཁ་ཆད་ཅིང་ཐུ། ནམ་མཁའ་ཏུ་ཁ་ལ་ལ་ཤ།
金剛を断ずるごとく煩悩を断つ。虚空に(のごとく)掌を見るなり。

二〇一　ནི助辞の諸種用法

ནི助辞は既に格語尾説明せし如く四種の普通用法あり。その外には八種の特別なる用法あり、それ等の例を挙ぐれば以下の如し。

ནི助辞の普通用法。

1. 業、ལག་ནི་ཏ་ཀ་ལས་ཟིགས། 手に箒を持つ
2. 為、ཕ་ཡ་ལ་ནི་ཁ་ལ་ཕུལ། を貧(のため)金を與ふ
3. 依、ཁ་ཙན་ཁ་ནི་ཀ་ཤ་ལ་ཡོད། 客舎に拠客が居る。
4. 時、ཁོ་ལས་ཐོ་ནི་ཆོས་ཤད་ཅེ་ལ་ཤ། 彼が来るならば法を説くべし。

ནི助辞の特種用法。

1. 想に依て差別を立てる意にて、ནི助辞を(においては)(すれば)に用ふる例。

ངན་ལས་ལྟ། 事業に於ては、實際なれば。　ཐུ་ཡ་ཕལ། 要略すれば。　ཡིན་ཀ་ལ། あるとすれば、實有と思へば。

2. 理由の意にして(れば)の意義に用ふる例。

ཁ་ནི་ཡོད་ན་ནི་ཁ་ཐུ། これがあれば、それが出る。　ཐ་ཡ་ཡོད་ན་དུ་ཁ་ཐུ། 火あれば煙が出る。　ཤིང་ཆེ་ན་ཆུ་ཀ་ཀ་ཆད་ཀ་ཁ། 大風が吹けば水管は落つ。

3. 理由の義に依れる事をもて(なれば)を意義に用ふる例。

ཁ་ནི་ཤིང་ཡིན་ལ་ཆེ་ན་ཤིང་ཤ་ཐ་ཐ་ཡ་ཡོད། 此は木なれば木がなりて一あり。

ཁ་ཏུ་ལ་ཐ་ལ་ཡོད་ན་ཆེ་ཏ་ཁ་ལ་ཏ་ཏ། 無為にてあるなれば無常と通ずるか。

4. ནི助辞を(なりしか)とふ意に用ひて、その語の前行語句より後行語句が反對するか或はなしと云ふ意を表しなる例。

ཁ་ནི་ཐ་ཏ་ཏ་ཁ་ལ་ཡ་ཤ་ཏ་ཏ་ནི་ཏ་ཁ་ལ་ཡ་ཤ་ཏ་ཏ། これは前に悪業を行へる者なりしに今は道德に意を用ふるをなせり。

ཁ་ནི་ཕ་ལ་ཏ་ནི་ཕ་ལ་ཏ་ཏ་ཡ་ནི་ཏ་ཁ་ལ་ཡ་ནི་ཏ། これは以前には貧人なりしに今こそ貧者にあらざるなり。

5. 適當に難く即ち不適當なる語か或は程度を保持する點より後の文義を確定義とする為めに(なれば)の義に用ふる例。

ཐ་ལ་ཕ་ནི་ལ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ལ་ལ་ཁ་ནི་ལ་ཁ་ལ་ལ་ལ་ནི་ཐ་ལ། 出家等が家に留着するなれば俗人等は勿論である。

ལུས་ཕ་ལ་ཁ་ཆ་ལ་ནི་ཐ་ལ་ལ་ནི་ལ་ལ་ཁ་ནི་ཅི་ལ། 神が禮拝するなれば人等は何をかえばんやである。

6. 適當なることを抑て確定義とする為に(なるに)の義に用ふる例

ཁ་ལ་ལ་ནི་ལ་ལ་ལ་ཁ་ནི་ལ་ལ་ལ་ནི་ཐ་ལ་ཕ་ནི་ལ་ལ་ལ་ཁ་ནི། 俗人等が見る欲望に切なるに出家等も亦見る欲望に切なり。

ཏ་ནི་ལ་ཁ་ནི་ལ་ཕ་ནི་ཁ་ནི་ཁ་ལ་ཁ་ལ་ནི་ལ་ཏ་ནི་ལ་ཁ་ནི། 畜生等は悪性の性なるに人までもが其の如き者等を見るなり。

7. 疑問的の意に用ふる例.

ས་ནི་ནི་ལ་ཏ་ནི་ལ་ནི་ལ་ས་ཁ་ལ་ཁ་ལ་ཁ་ལ་ལ། 種を翻いたなれば此れより芽は生ずるか生ぜざるか。

8. 願望的の意に用ふる例

ཁ་ནི་ཁ་ལ་ཏ་ཁ་ནི་ནི་ཁ་ཏ། ཐ་ལ་ལ་ཏ་ཁ་ལ་ལ་ནི་ཁ་ནི་ལ་ལ་ཁ། 私が菩提を得るならば何と等からうか。一切衆生が佛陀を有するならばと思ふ。

二〇二　ལ助辞十種の用法

ལ助辞の普通用法は四種と特異用法は六種あり。始に普通用法の例。

1. 業、ཤར་ཕ་ལ་ལ་ཏ། 東方に行く。
2. 為、ད་ཕ་ལ་ལ་ནི་ཁ་ལ། 貧人に(のため)財を與ふ

仮名遣は原文のまゝ。

3. 仮名遣の違ふもの　例

ゆめ　夢　　ゆゑ　故　　ゆび　指　　ゆか　床　　ゆく　行　　ゆき　雪

4. 漢字の違ふもの　例

ゆく　行く　　ゆき　雪　　ゆか　床　　ゆび　指　　ゆめ　夢　　ゆゑ　故

5. 語尾を接する爲めに(ite)の意に用ふるもの。

ゐるにはとりのはねのやうなかみ
羽を上へ入つて真ッ白な髪雅子。

6. 單に動作の二語を接合する爲に用ふる例。

はやくはしりてゆき　　はしりて　行く者。
早く走り行く者。

7. 原動詞を示すに用ふる例。

はるかぜをもとめて　　はるかぜ　春風を求めて。
三鶯　を　尋　く　　鶯　が　春風を求める。

8. 反對の意を示すに用ふる例

はるかぜはあたたかにふきぬれども、一時それより離れ
ては寒く吹く。　　春　は　暖かくふきぬれども。

9. 比較の(より)の意に用ふる例

ちはやぶるかみのいがきをこえ　　ちはやぶる　神の　垣を　越え
千早より　下る　　垣　より　跳ぶ。　　神　より　血を出す。

10. 比較の(ほど)の意に用ふる例

ゆきはあたたかにふりぬれども、　　ゆきはあたたかにふりぬれども、
雪は暖かに降りぬれども。　　雪　は　暖かに降りぬれども。

二〇三　事物の方向を示す助辭

事物の方向を示す助辭は、ゆく、ゆき、ゆか、ゆび、ゆめ、ゆゑ、の一語のみは方向を示す意に用ふることなし。

意味行くべき方向を示す例は、—

ゆく　　ゆき　　ゆか　　ゆび　　ゆめ　　ゆゑ
来る　　行く。　　床　　指　　夢　　故

もし、目的語を用ふるときは、その意義、次項下の格に準ずる。

ゆくに　　ゆきに　　ゆかに　　ゆびに　　ゆめに　　ゆゑに
来て行く　　雪に降る。　　床に寝て居る。　　指に結ぶ。　　夢に見る。　　故に行く。

その他(方向)を示すに、行き、ある場所、ゆゑ、を示す。すなはち。これはそのイ用を行ひつゝあるも、場所を示すも業格として、その働きの向ふ方向を示すいるなり。

二〇四　從格と似從格の助辭

ゐるにはとりは、何れも(より)或は(から)の義ある助辭として、普通の從格とは二語複合する所なく、用ふるゝことは次下の如し。

1. 事物の因て來りし所を示すに用ふる例

かねをもとめて　　もとめて　金を求めて。
金　鑛　から　金。

うみをわたりて　　わたりて　海　から　渡る。
海を渡りて　　海　から　渡る。

はるかぜをもとめて　　はるかぜ　春風を求めて
春　風　を　求めて。

2. 事物そのもの、因て來りし所に非ずとも、一時それより離れ
て場が、或は出でたるを似從格として如きこゝにも、又兩語は複合
所なく用ひらるゝ、なりの例せば、—

うまにのりて　　うまに　乗りて
馬より　降る。

はしりて　　はしり　走りて
走り　降る。

これ等は或は事物の出でたる原因を示すにて、似從格として第四格
中に視ふべきものなり。

二〇五　同種中の差別に用ふる助辭

この外、ゐるにはとりは從格に用ひらるゝ他の義に用ひらるゝものあり。その用法は次下の如し。

3. 同種同類中よりその差別には次の助辭のみを用ふ。

ゐるにはとりのなかにおのれはとりあり
人間學の中より　王　雄　は　考　なり

かねにてこがねにまさるものはなし
金　銀　　の　中　から　金　は　優れて　なり。

ゆきにてはなにまさるものはなし
雪　花　　の　中　から　白　梅　は　最　勝　である。

二〇六　ལས助辞の擇擇或は差別用法

4 同基にして同類ならざるものを擇ぶに用ふるལས助辞

�知識を　供養する　よりは神を供養するこさは善しなり。

ལང་ལོས་ལས་ཐོག་ནས་ཁྱུ་ཁ་ལས་ཆེ།
禍法(地獄の名)より黒繩(地獄)は苦痛　大　なり。

5 僅基中の差別に用ふるལས助辞は、二基或は多基の中より差別しそれ等の中より出でしが如きに非ずして、別に區別を立てる意味にてལས の語を用ふるなり。例せば:—

常　と　物　との諸法　より　眞如は　勝れなり。

ཉ་ལ་དང་ཚོད་པ་དང་ཐུ་ལ་ནས་ལས་ལ་ལས་ལ་ལ་ལས།
衣服と　笑顔と　言ふと　行事など　行事　普通の事より

མཆོད་རྟེན་ལ་ཕྱག་དང་སྐོར་བ་བྱེད་པ་ནི་ལེགས་སོ།
佛塔　を　礼拝，圍繞することは善しきなり。

二〇七　ནས助辞略詞と持續詞用法

6 ལྷ་ས་ནས་གཞིས་ཀ་རྩི་ཀ་བར་དུ། ཁ་ཅིག་ནས་ཐམ་བར་དུ།
羅薩(ラサ)から　歴珂茶(地名)まで。　一　から　百　まで。

མཐར་མེད་ནས་ཕྱི་ནི་ཀ་བར། (この場合は(ラサ)より(シカツェ)までの地名を一々略さずして、それ等を結ぶ略詞なる義なり。一より百までも又無間よりも同じ理由に依て略詞となるなり。)
無間(最下の地獄)より　有頂　まで。

བར或はབར་དུ(ནས)に関聯して、より、までの義を表すこと上記の如くなるが、ཐུག或はཐུག་དུ(ནས)に関聯して、遭もるまで又到るまでの義を表すなり。その異なる點はཐུգ は錄語と連結して副詞となりて助辞となるなり。その例以下の如し

到究竟、辺際に至るまで。　彼處に達するまで。

これ等のནས助辞を用ふるときはདེ་ནས་ཐར་ཐུག་ཏུ། 等となるなり。こ
こより　彼方に達するまで

れ等のཐུգ又はཐུգ་ཏུ副詞なれども、ནས の助辞として略語に用ひられたることは ནས 等の用法と同一なりと知るべし。

7. ནས助辞を接續詞(して)の義に用ふる例

突然　起って　非常に泣けり。　哭泣　して　座　より　起てり。

第二類　助辞

二〇八　分合する助辞

ནི助辞を分合差別せる意に用ふるときは、(は)の義を表す。本来西藏語の主格には、助辞なくして名詞のみにて表すが通常なれども、分合差別の意を明かにするためには、ནि助辞を用ふるなり。

上に差別せる例。　遍照天は諸神の中に　殊勝　なり。

下に差別する例。　荆棘は諸木　の　中　にて　最下なり。

擊は差別を表す例。　紅　蓮花は　青蓮華　より　外　なりけり。

動物　獅子は　動物　虎　より　異なる者なり。

二〇九　一致不一致の裝飾と攝用助辞

མཐུན་པའི་ཚིག་ཅན། 一致の裝飾詞として、ཡང་と ཡང་と ཡང་の三語が用いらる。何れも同義にて(も)の意を表すなり。同じ三語がམི་མཐུན་པའི ཚིག་ཅན 不一致の裝飾としては(でも)の義を表すなり。初め一致の裝飾詞を擧げれば以下の如し

白いも　白いが　美しいも　美しい

明瞭も　明瞭が　光明も　放つ。

これ等の ཡང་ ཡང་ 等は意義の一致したることを表す助辞なれども、同じ語が意義の反したることを表する用いらるる時は、「けれども」と言ふ意となりて、接続詞として用いらるるなり。是れ不一致接続詞にしてその例は以下の如し。

ཁྱོད་ ཀྱང་ ཁོ། 礼すれども怒る。　ཕོ་ཉེར་ ལགས། 親友なれども黙く。　ཤེས་ཤེ་ ཡང་ ཆགས་ ཡོད་ ཀ་ ཆ་ ཡ། 説明者と雖も完全に解せず。

攝詞に用ふる助辞の例は

1. འདི་ པདྨ་ ཡིན་ ཡང་ ཡིག་ ཡ་ ཡོད་ ཡིན།
これは蓮花でもあるが書くもある

2. མི་ ཙམ་ མ་ཟད་ ལྷ་ ཡང་ ཕྱག་ ཚུ།
人のみならず神でも礼拝す。

3. ཁམས་ ཀ་ ཡང་ ཤེ་ ཚིས་ ཤིང་ ཟེ་ ཀ་ ཡ།
この身は美しく光も放つ。

1の文はこの攝詞あり。これ即ちこの花と云ふ一基に蓮花でもあり、書くもあると云ふ二意を、もの語りて攝したるものなり。2の文例はこの行事即ち礼拝は、人のみでなく神でもすると云ふこの義を一のもなる語を以て、攝したるものなり。3の例はこの身と云ふ一基に美と放光の二事を攝したることを見るべし。

二一〇　ཀ་ ཡང་ ཨ་ 三語の結合法則

これ三語は他語有接なれば、これ等の前に来る所の語の後置字と合音一致せざるべからず。その一致の結合法は以下の如し。

後置字 ག と ང と ཏ と ན と ད 強字とには　ཀ་ ।
〃 〃 ཁ と ཆ と ཐ と ཟ と ཧ には　ཡ་ ।
〃 〃 ཨ と 倉頡語とには　ཨ་ ।

とを續け置くものなり、これ等結合の例を挙ぐれば以下の如し。

ཀ་ :— ཅ་ ཀ་ ཀ་ ། 常も、と雖も。　ཐ་ ཅ ། 知るも、知と雖も。　ཟ ཅ ། 震しも、震ふと雖も。　ཕ ཅ ། 作も、作と雖も。

ཀ ཅ ། 示せしも、と雖も　ཨ ཅ ། 結びしも、結びしと雖も。　ཤ ཅ ། 樂へしも、へしと雖も。

ཡ་ :— ལྷ ཡ ། 神も、と雖も。　ག ཡ ། 何でも と雖も。　ཡ ཅ ། 有るも、りと雖も。　ལ ཡ ། 道も、と雖も。

ཆ ཡ ། 雨も、と雖も。　ཀ ཡ ། 明瞭も、明瞭なれども。

ཨ་ :— ཁ ཨ ། 上人も と雖も。　ཁ ཨ ། 〃 〃　ཀ ཨ ། 命令も、と雖も。　ཀ ཨ ། 〃 〃

この三語が上に述べし如く（も）の義に用いらるる場合は助辞なれども、（けれども、と雖ども）の義に用いらるる時は接続詞となれるなり。

二一一　指定する ཀ་ 助辞

ཀ ཁ 即ち ཀ 語は第一類中に於て、強勢する助辞として挙げし語なるが、此に於ては ཀ 語を指定詞として、何れの格にも附着して、それを指定する意義を表示することは以下の例の如し。

主. ནམ་མཁ་ ཀ ། 佛は。　業. ནམ་མཁ་ ལ ཀ ། 佛をは。　具 ནམ་མཁ་ ཀྱ ཀ ། 佛に依ては。

為. ནམ་མཁ་ ལ ཀ ། 佛の為には。　従. ནམ་མཁ་ ལས ཀ ། 佛よりは。　屬 ནམ་མཁ་ ཀ ། 佛の(について)は。

位. ནམ་མཁ་ ར ཀ ། 佛に於ては。　呼. ཨ ནམ་མཁ་ ཀ ། 嗟呼 佛は。

これ等の ཀ 語は所行する格語尾を指すに非ず、それ等の格語尾を指定して、それ等を説明する用に供するなり。故に第一類所属の ཀ 語の如く語を強勢する義は少しもなく、單にその何なるかを指定するに止るものなりと知るべし。

二一二　詩歌に於ける ཀ 助辞用法

ཀ 助辞が詩歌に於て、義別詞、強勢詞、指定詞等に用いらるることは勿論なれども、句文を満すために、補足詞として用いらるるもの甚だ多きを見るなり。その例以下の如し。

རྗེས་འཇུག་ཡིག་ཐུང་ཡོད་པ། ། མིང་ཀྱི་ཁྱད་ཆོས་ཕྱིར་ཏེ། ། ཨ་ཡིག་ཅ་ཅ་ཡ་ཡ། ། ཤ་ཡ་ ཤ ཡ ।

接置十字は。 何れかの語の 頭を結ぶ。

ཀ་ལི་ཐུ་ཏ་ཁ་ཕ ། ། ཏ་ལས་ལ་ལ་ཐོབ་ཏུ་འདུ་ཀ ། ། ཏ ། ། ལ ། ། ལ ། ། ཐ ། ། ཏ ། ། ཀ ། ། ཁ ། ། ཕ ।

梵本文典三十偈

カ一組七組半は。 それより上は 前(頭字)をも入れる。

ལྷག་ཆད་ཐུག་ནི་ཆོ་ཅ་ཐ། ། ར་ཡ ། ། ཆ ། ། ཆ ।

餘の点字は 番を結ぶ。 ラ、ヲ、ハは 右女子として。

ཡེ་ནི་ཆགས་ཆེད་ཅར་ཕ ། ། ཡ ।

アは 無性とも名づける

二一三　助辞のར་と ཙམ の用法

限る意を表す助辞として、ར་のみ、ཙམ ばかり、の意を表すなり。それ等の例は以下の如し。

ར་ :— ཏེ་ར་ཏེ། 　 ངོ་ནི་ལ་ས་ལ་ལ ། ། ར་ལ ।

それのみである。 セラ寺には僧侶のみ居る。

ངའི་ཆགས་ལ་ཐུ་ཡ ། ། ཁ ། ། ཁ ।

我が母子に困難ばかり與へれから。 ཆ ། ། ཁ の條一一下。

ཙམ :— ཏེ ། ཙ ། ། 　 ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ।

そればかりだ。 エンエンの山陽の手、または足ばかり位するなり。

ཀ ། ། ཏ ། ། ཐ ། ། ཙ ། ། ཙ ། ། 　 ས ། ། ཙ ། ། ཡ ། ། ནི ། ། ནི ।

これは名(假名)のみなり。 心のみなりけり。

ཙ ། ། ཙ ། ། を形容詞の義を取るときは、唯の意となりて唯心、唯假名等となるなり。

ར ། ། を條語を副詞として用ふるときは、'如く' 或は、'の通り' の義となりて、全く異なる義を表すこと以下の如し。

ཁ ། ། ཁ ། ། ར ། ། 　 ཏ ། ། ཁ ། ། ར ། ། 　 ཀ ། ། ཁ ། ། ར ।

仰せの通り。 その通り。 この通り。

ཙ ། ། ཙ ། ། を副詞として、'ほど' の意を用ふる例

ཤ ། ། ར ། ། ཙ ། ། ཙ ། ། 　 ཀ ། ། ཙ ། ། ཤ ། ། ཤ ། ། ཤ ।

須彌(山)ほどなり。 芥子粒ほどある。 部分ほど知らけれども。

二一四　疑問の助辞

ཀ ། ། の接續詞が助辞として、疑問詞(か)の意を用ひらるるなり。例:—

ཡ ། ། ཀ ། ། 　 ཏ ། ། ཀ ། ། 　 ཡ ། ། ཀ ། ། 　 ཡ ། ། ཀ ། ། 　 ཐ ། ། ཀ ।

あるか、居るか。 来るか。 あるか、有つか。 あるか。 得るか。

ཁ ། ། ཀ ། ། 　 ཁ ། ། ཀ ། ། 　 ཁ ། ། ཀ ། ། 　 ཐ ། ། ཀ ། ། 　 ཐ ། ། ཀ ।

考るか、思ふか。 考るか。 驚るか。 聞ふるか。 作せしか。

ཐ ། ། ཀ ། ། 　 ཐ ། ། ཀ ། ། 　 ཕ ། ། ཀ ། ། ।

與へしか。 なりしか。 示せしか。

これ等を接續詞に用ふる例は、既にその章に擧げられ居れば、就て見るべし。

第三類　助辞

二一五　豫想文中條件的に用ふる助辞

豫想する意に用ふるもの、中、ན を(ならば)の意に用いて、條件的に用ふる例:—

ཐ ། ། ད ། ། ཐ ། ། ཡ ། ། ན ། ། ། ། ཐ ། ། ཀ ། ། ཀ ། ། ཀ ། ། ཀ ། ། ད ། ། ། །

[illegible]
私がこのやうなる事を行うて汝は聞かないのであるか。

[illegible]
無始より汝は輪廻を廻れるが、何故その点を汝は棄てざる。

[illegible]助辞を(に)或は(が)の意を用いて、反對の意を表す例。—

[illegible]　　[illegible]
これであるがそれでない。　草は乾かぬ地面が陽る。

二一七　理由必要時等を示す助辞

これ等は[illegible]と[illegible]と[illegible]とあり[illegible]とみして、この中の[illegible]と[illegible]とは、これ等の各種の用法を示す中に説明せり。[illegible]は元来接續詞なれども、その用法は大略五種あつて、橋と関と理由と接續とは、既に接続詞の章に挙げたり。命令助動詞としては、これ示助動詞の章に説明せり。[illegible]を助辞として「時」に用ふる例は以下の如し。

[illegible]
日が上る時は[illegible]に行くのであるぞ。

[illegible]
シガツに着く時は パンチェン ラーマに拝謁を願ふ。

その他の用法は各章に挙げし所を参照すべし。

[illegible]と[illegible]と[illegible]との三語は、何れも理由詞にして、又必要を示す語なれども、副詞として助辞に非ざるを以て、何れも副詞の章に於て説明しおけり。唯だこれ等は為格語尾とまぎれ易きを以て挙げしのみ。その理由は、[illegible]の[illegible]は意を取つて、(の為に)と訳されれども、[illegible]は本来(12)の語義を有する助辞にして の為に、と云ふ副詞に非ず。為格の意義を表すためにまた、假りにその訳を附したるこを表すためにまた一言せるのみ。

第九章 [illegible] 感歎詞

二一八　感歎詞について

感歎詞は藏文典に呼格として、第八格に例せりと雖も、それは便宜上然かするのみにして、適當に見れば この語は語格の語尾としての本分を有せず。隨つて此語は一文中に於て、何れの語に對しても文法的關係を有せざるなり。故に根本文典には感歎呼稱を明かにする為の聲として [illegible]呼聲即ち感歎詞と稱して、[illegible]格とは云はざるなり。この語は單に感歎の發聲にして、文の初めに或は中間或は終に於て、他を呼ぶとか或は感覚或は心内衝動の強調を表す所の聲なり。

二一九　感歎詞の種類

感歎詞を類別すること十七種あり。以下の如し。

1. 呼聲。　2. 喜悦。　3. 哀愁。　4. 讃歎。同情。
5. 驚歎。　6. 返事。　7. 賛成肯認。　8. 不幸不快。
9. 愛情。　10. 痛苦。　11. 疼痛。　12. 冷感。　13. 熱感。
14. 恐怖。　15. 立誓。　16. 諸願。　17. 感歎詞的文章語句。

以下隨次にこれ等の例を挙ぐべし。

二二〇　上流下流に對する呼聲

1a 上流人に對する呼聲。	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
發音	Kye.	Kwa ya.	Kye kye.	Kye ho.
和訳	モシ。	モーシ。	モシ、モシ。	モシ、モシ。
〃 〃同上呼聲 〃	[illegible]	[illegible]		
發音	Kye lā	O. lā so.		
和訳	モシ、アナタ。	オー、皆様。		

1b 下流人に對する呼聲	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
發音	Kwa.	Kwa yi.	Kwa i.	e.	ya ya.	wa
和訳	オイ。	オーイ。	オーイ。	ウイ。	ヤイ。	オイ。
〃 〃 〃 〃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
〃 〃	wayi.	a le.	ya o.	muyi.	Kho te.	Khore tsha.
〃 〃	オイ。	・・。	ヤー。	ヤイ。	コラ。	コラコラ。

二二一　喜悅哀愁讚歎同情の歎詞

2. 喜悅.

	ཨ་ལ།	ཧ་ཧ།	ཨ་ལ་ལ།
發音.	a la.	ha ha.	a la la.
和訳.	マー。	ナントト。	マー。

3. 哀愁.

	རྐྱེ་མ།	རྐྱེ་ཧུ།	རྐྱེ་ཧོ།	རྐྱེ་ཧུད།	ཨོ་ཌོ།
發音.	kye ma.	kye hu.	kye ho.	kye hud.	O dod.
和訳.	アー。	悲しい。	〃 〃	〃 〃	ウワー。
〃 〃.	ཧུ་ཧུ།	ཨ་མ་ངན།	ཨ་ན་ན།	ཨ་ར་ར།	
〃 〃.	hu hu.	a mangu.	a nana.	a rara.	
〃 〃。	ウーウー。	困る私は。(悲しい何とかの略)	アー。	アー。	

4. 讚歎同情.

	ཨེ་མ།	ཚེ་ཚེ།	ཨེ་ཨ་ཧོ།	ཨ་ཨ་ཨོ།	ཨ་ཧོ།
發音	e ma.	tse tse.	e ma ho.	a ma o.	a ho.
和訳.	アラ。	アラ。	アーラ。	アーラ。	アナ。
	ཨ་ཧོ་ཨ་ཧོ།	ཨོཾ།	ཨཱཿ།	ཧཱུྃ།	
	a ho a ho.	Om.	ah.	hūm	
	アナカシコ。	嗟呼法報應化三身。アー真俗二諦の妙法を。		諸願成就の和合教よ。	

二二二　驚歎返事賛成是認の歎詞

5. 驚歎.

	ཨ་རེ།	ཨ་ཙི།	ཨ་ལེ།	ཨ་ལ་ལ།
發音.	a re.	a tsi.	a le.	a la la.
和訳.	ナントマー。	〃 〃	〃 〃	コレハ。
	ཨ་ལ་ལ་ཧོ།	ཝ།	ཝ་རེ།	
	a la la ho.	wa.	wa re.	
	コレハ、コレハ。	ナント。	ナントマー。	

6. 返事.

	ལཱ	ལཱ ཨོ	ལཱ ལཱ ཨོ	ཨཱ
	lā	lā o.	lā lā o.	ā.
	ヘイ。	ヘーイ。	ヘイ ヘーイ。	ハイ
	ཨེ་ཨེ།	ཡ་ཡ།	ཨོ།	
	e e.	ya ya.	O.	
	エイ。	ヤー。	ウン。	

7. 賛成是認.

ཨ་ཧོ།	རིག་ཨོ	ཏཱུ་ཏ།	ཡིན་ཡོ།
a ho	rig o	toe to.	yin yo.
コレダ。	道理だ。	謂はんぬ。	アルゾ。

རྔེ་ཨོ།	དེན་ནོ།	ལེགས་ཨོ།	ལེགས་ལེགས་ཨོ།
nge o.	den no.	leg o.	legso leg o.
確實だ。	真實だ。	善い哉。	善い哉、善い哉。
ཨཱན་ཏོ།	ཏ་ཥི་ཎོ།	ཏ་ཥི་ཎ་ཏ།	ཀ་ཏ་ཏ་ཡ།
アントー。	テシンノー。	テ、テシンノー。	カーナーテン。
誠なり。	其の如し。	それはその如し。仰せの通り。	

二二三　不幸不快愛情痛苦の歎詞

8. 不幸不快.

	ཨ་ཁ།	ཨ་ཁ་ཁ།	ཨ་ཁ	ཨ་ཁ་ཁ	ངན་ཐེ།
	a kha.	a kha kha.	a kha	a kha kha.	Ngan tē.
	ヤヤ、	ヤヤヤヤ。	ヤヤ。	ヤヤ、ヤヤ。	ナントショウ。

9. 愛情.

ཨ་ཨོ།	དགའ་ཨོ།	ཨ་ཞེ་ར།	དགོ་ཞེ།	ལུ་ལུ།
a o.	gā o.	ber re.	goe se.	lu lu.
ヤヨ。	嬉しい。	こひしい。(然中を思ひて)	ナヨイト。	ウウ。

10. 痛苦.

ཨ་ར།	ཨ་ལོ།	ཨ་ཐ་ཐ།	ཧ་ཧ་བ	ཧུ་ཧུ་བ
a ra.	a lo.	a ta ta.	ha ha ba	hu hu ba.
痛い。	イメイー。	アイタ、イタ。	苦しい。	苦しい。
ཨ་ཐོ།	ཨ་ཁོར།			
a tho.	a khor.			
エライ。	惱ましい。			

二二四　疲労冷感熱感の歎詞

11. 疲勞.

ཨ་ཡོ།	ཆ་མ་སྲེང།
a yo.	cha ma seng.
ヒドイ。	疲勞はしい、ウルサイ。(わづら)

12. 冷感.

ཨ་ཆུ།	ཨ་ཆུ་ཆུ།
a chu.	a chu chu.
冷めたい。	ネーツメタ。

13. 熱感.

ཨ་ཚ།	ཨ་ཚོ།	ཨ་ཚ་ཚ།
a tsha.	a tsho.	a tsha atsha.
アツイ。	アツイー。	アツツ。

二二五　恐怖立誓請願の歎詞

14. 恐怖　ཨ་ཏྲི། ཨ་ཏྲི་ཏྲི། མི་ལ་མི་ལ།
a tshi. a tshi tshi. mila mila
ア一恐は　ア一恐いや。　怖い、怖い。

15. 立誓　དཀོན་མཆོག་གསུམ། ཇོ་བོ་ལྕི་ཤེ།
kon jō sum. choō si-
三寶よ.(照 覽あれ)　主(佛陀)よ御覽あれ。

初の誓語は一般在俗人の用ふる所にして、後のは出家者用いまる。

16. 請願　སྐུ་བཞེས་མཁྱེན། ཨ་ལ་མ་ཁྱེན། སངས་རྒྱས་ཁྱེན།
ku sho ken. lāma ken. sang gye ken.
(ཁྱེན་は佛教知あつて御助け下さいの義を用ふるなり)
君よ御助け下さい。上人よ御助け下さい。佛よ御助け下さい。

二二六　感歎的語句文章

17. 感歎的語句文章は、強き感動或は情緒を感歎詞の如くみ、語句文章に表すものを云ふなり。例せば以下の如くなるが如し。

ཏ་བདེ་ཨ་ཅེ་བ།	ཏ་ཨ་ངུ།	ངོ་ཚ་ཨ་ཏི་ཨ།
ta dinda ser wa.	ta ma ngu.	ngotsha din da.
サテこんなる云ふとは。(ミラ傳一二T)	そー、泣くな。(全前)	恥かしい、これ等は。
ཕ་ཕ་མི་ལ་མི་ལ།	ཀྱཱ་ཆུང་།	ལེག་པར་ཨོ་ཟ	ཨ་ཨ་ཏ་ལྡང་ཐེ།
pha pha mila mila	yā chung.	leg par on so	a ma dang the.
父よ父よ、怖い、怖い。	出かけた。	善く来られた。	母を別れん。

位置の時の言葉にて、そは牧畜する相違あれば、蓋の母を別れんと嘆きまするなり。

ཁང་ཡཱ་ཡཱ་ཟེ།	ཏ་ཁང་ཇེ་ཡོང་།
Kang yā yā ze.	ta Kang che yong.
ナニ 善い善い。	今、なんとしよう。

གལ་ཆེ་ཅི་ཞིག་ཟན་ཡིན། ། གལ་ཆ་ཅུག་ལ་ཅི་ག་ཤེད་ཀི། །
誠よ何ぞ食べたと申さば、さあならばと仰やつた。

ཐུགས་ཤེས་ལས་ཐོ་ཡོད་ཕབ་ཡིན། ། མཆོག་ཏོ་ལ་ཕུད་ཡོད་ཀུན་ཐུང་། །
お盆ゆゆしきものましようと申さば、早く遇はうと仰やつた。調伏海集

ཨ་ལ་ལ་ལ་ལ་ཏོ། ། ཀུ་ལ་མོ་ལ་ལ་ལ་ཏོ། །
a la la la lalamo. kula mola lalamo.
さて さて、さても、　さても難いことやな。

སངས་རྒྱས་ཐུགས་རྗེ་དཔག་མེད་ཀྱ། ། སེམས་ཅན་ཐམ་ཅད་ཐར་ལ་ཤཱ། །
Sang ge thug je pag med kya. Sem chen tham che thar la shā.
佛の慈悲は量りなくして、一切衆生を解脱せざるべ。

第三篇　文章篇

第一章　音聲調和法

二二七　西藏文の定義

ཅི་ཕྱིར་ཨ་ཡིག་ཡར་ཐེབ་ཅེ། ། ཡིག་གི་ཁ་ཁོངས་ནས་ཚིག་དགུང་ལྟ། །
何の為ぞ(後置字を)入れなすかと云へば、文字の中より名(單語)を出して、

ཚིག་གི་ཁ་ཁོངས་ནས་ཚིག་ལྷུང་ལྟ། ། ཚིག་ཀུན་ལས་ཀྱང་ནས་ལས་ཀ་ཡར་ཐེབ། །
單語の中より言語(文章)を出して、文章より依て意義などを示すなり。

定義の解釋。基字に對して後置字を何のためみ入れるかと云ふに、基字のみにては幾字續けても單語とならず、前置字の有無を拘らず、後置十字の何れかが基字を續け入れざる限り、單語とならざるなり。併しながら辞典中には一の基字のみにて、後置字なしに單語となれる者多く存するを見るなり。これは前にも説明せし如く、新譯時代に省略せられたる語にして、文法上にはその後置字の存するものとして、今尚ほ取極はれ居るなり。されば後置字は無意味の文字より、意義ある單語を作るためみ用ひらるいなり。例せば無意味なる文字のགとདとが結合すれば、ཀད即ち柱と云ふ意義ある語を成ずるなり。これ等を表示すれば以下の如し。

ག十ད＝ཀད柱。　ཇ十ད＝ཇད茶。　ཟ十ད＝ཟད食物。

これを総語に後置字は、文字の中より單語を出すために、入れらるいものなりと云へるなり。單語を文章とするには、それが前後の意義を接續秩序あらしむるために、助辞、接續詞等の語を以て連續せざるべからず。それ等を連續するに當て、語と語とを接續する法の基礎は、皆後置字の性に依て、支配せらるいものなるが故に、文章の構成は後置字の用法を知ることに依て成ぜらるいなり。これを総語に、後置字に依て單語の中より文章を出すと云へるなり。

二二八　西藏文は音聲調和を主とす

西藏文は意義をへ正しく表さるゝならば、云何なる文字をても用ひ得べきかと云ふは然らず。前行語の後置字の音に一致したる性ある字母が隨行語の前端にあるか、或は後置字の音聲に調和したる文字を前端に有する語を、隨行せしむることを要するなり。もし後置字に隨行する語端にある字の音性が不一致なるか、或は音聲の不調和なる時は、假りにそれがその意義を表し得たりとするも、西藏語としての文章とはならざるなり。されば西藏文を作るには、その云んと欲する意義を表すことは勿論なれども、第一要件としては後置字と接觸する語の文字とは、性を能て一致するものか或は音聲の調和ある語を、用ふることを要するなり。

二二九　音聲調和の法則

ཕྱི་མ་དགོས་ན་ནི་ཐོག་མའི། ། ཐོ་ཡིག་ཐོ་ཡི་ཚིག་མཐའ་ཡིན།།

(後置字が)後の字等を引く方法は、(後置字の)男(性字)が男性の語端を引くなり。

མཇུག་ཡིག་ཐོ་ཡི་ཚིག་མཐའ་ཡིན།། མ་ནི་ཁོ་གིས་ནི་མ་ནི་ཁ་ཡིན།། 性入法

(後置字の)女(性字)が女(性字)の語端を引く。(後置字の)中(性字)は中の語端を引くなり。

とあつて、後置字が後の語を引入れる方法は、後置字が男性なれば、次に續く所の基語の字母或は前置字は男性ならざるべからず。女性なれば次に續く字母も女性として、中性なれば次に續く字母も亦中性字を用ふるものなりと知るべし。

二三〇　基字前置字後置字性別表

こゝに明確を主とするためには、基字、前置字、後置字の性別を表として、その細別あるものは亦細別表としてこゝに下に擧ぐべし。

基字性別表

男性字	中性字	女性字	基女性	石女性
ཀ་ཁ་ག་ང་ཚ་ཛ་ཏ་ཐ་ད་ན་པ་ཕ་བ་མ་ཙ་ཝ་ཞ་ཟ་འ་ཡ་ར་ལ་ཤ་ས་ཧ་ཨ	ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ	ཀ་ཇ་ཉ་ཏ་ཐ་ད་ཧ་ཨ	ང་ཛ་ཟ་ཨ	ཤ་ཨ་ཨ ※性、ཨ

前置字性別表

男性字	中性字	女性字	基女性字
ཀ	ཀ་ཏ	ཨ	ཨ

後置字性別表

男性字	中性字	女性字
ཀ་ཏ་ཀ་ཨ	ཆ་ཤ་ཨ	ང་ཨ་ཨ

後置字性細別表

男性字			中性字			女性字	
上丈夫	中丈夫	下丈夫	變化中性	二相中性	無相中性	純女性	基女性
後、為、ཀ ཀ	後、為、ཁ ཀ	各後置字 ཀ ཏ ཀ ཨ	基、後無、男、ཆ ཏ 〃 ཤ ཏ 〃 ཨ ཏ 〃 ཆ 〃 ཤ 〃 ཨ 女 ཆ 〃 ཤ 〃 ཨ	基、後為、女 ཆ ཏ 〃 ཤ ཏ 〃 ཨ ཏ	基、後為、中、ཆ ཏ 〃 ཤ ཏ 〃 ཨ ཏ 〃 ཆ 〃 ཤ 〃 ཨ	後、為、ང ཀ ཨ ཀ	各後置、ང ཨ ཨ

前表に對する注意。前表に擧ぐるが如く、基字の女性字ཀ་ཁ་ང་ཝ་の四字が後置字に於ては男性となり、その中のཁ字のみが前置字に於て男性となり、ཀ་ང་の二字は中性となる。基、前、後の三に通じて同性なるものは、女性のཀ字あるのみ。又基字に於ける基女性のབ字と、石女性のཆ字とは、後置字に於ては中性となれる等、その屬する範圍に隨ふて、同一の字にてもその性を異にするあるを注視すべきなり。斯の如く異なる所以は、次節に説明する如く、それ等の字母が屬する範圍内に於ける各字母の發聲努力の強弱などの比例に基づくものなり。

二三一　基前後三置字性別の根據

云何なる情態に於て、斯の如く文字の性別を分つに至りしかと言ふに、その理由をトンミー・サンボッタは、性入法に於て以下の如くに説かれたり。

發聲努力の強弱に由て性を分つ法則

ཇི་ལྟར་འཇུག་པར་ཕྱེད་ཅེ་ན། །ཕོ་ནི་དག་ཏུ་ཤུགས་ཆེ་ཞིང་།།
何のやうに入れなすかと云ふに、男は強なる情態に依て、

མོ་ནི་ངན་པར་འཇུག་པ་ཡིན།།མོ་ནི་ཞན་པའི་ཚུལ་ཁྱིས་ཏེ།།
中性は中和に入るものなり。女(性)は弱の情態に依て、

ཁྱོད་ཏུ་མོ་ནི་ཉམས་ཕྱིར་རོ། །བདག་ཡུལ་ཡོད་ཀྱི་ཐམས་ཅད་ལས།།
甚女性は甚弱のためなり。自己が(入れる)境なる總ての字母に

འཇུག་པའི་ཚུལ་ཁྱིས་གནས་པའོ།། 性入法。
入れる所の情態を以て住するなり。

二三二　前擧法則の説明

本來文字はその發音上に於て、努力と感觸の最も大きして強きものを以て男性字とし、それ等の最も小きして弱きものを石女となす。ཡ字は石女に屬しながら、努力と感觸とがそれ等の中

にて最も微弱なるを以て、無性と稱せらるゝものなりと知るべし。中性は男と女との中なる努力感觸なるを以て、然かく名づけらるゝものなりと知るべし。甚女性字の努力感觸は女性字よりも尚ほ微弱にして、石女よりも強度にあるものなり。斯の如く強弱に由て性の相異は、何の為に用ふるかと云ふことは、既に動詞の章にて前置字は基字に入れて、三時限と自他の二動を示す為めなりと云ふことは、説明せし所なるが、後置字も亦無前置語等に對して、前置字と同樣の作用を表すと雖ども、後置字は主として、續行言語に對して、音聲の調和を規定する作用をなすが故に、文章構成上その規定を遵守することは、缺くべからざる要道なりと知るべし。

二三三　後置字の男性字が男性字を引く例表

男.男.	男.男.	男.男.	男.男.	男.男.
ཁ|ཁ|ཀ|	ཁ|ཁ|ཏ|	ཁ|ཁ|ཕ|	ཁ|ཁ|ཚ|	ཁ|ཁ|ཅ|
ཁ ka。	ཁ ka。	ཁ ka。	ཁ tsho。	ཁ cho
春。	秋。	正面。	胸。	實際、ずい。
བ|ད|ཀ|	ཐ|ཁ|ཡ|	ཅ|ཁ|ཡ|	ཆ|ད|ཡ|	ཕ|ད|ཡ|
ba ka。	tha ya。	ca ya	cha ya	pa ya
枝。	鐵敷。	羊歯(シダ)。	切斷。	利益。
ད|ངོ|ས|ལ|	ད|ད|ལ|ཕ|	ད|ད|ཕ|ཕ|	ཅ|ཀ|ཅ|	ད|ད|ཀ|ཅ|
ngo sa	de la pa	da da pa	cig cha。	da ga ca
實物。	過去。	檜種。	頻速。	枝等。

二三四　中性後置字が中性語端を引く例表

中.中.	中.中.	中.中.	中.中.	中.中.
ཏ|ན|ཀ|	ད|ག|ན|ཀ|	ད|ཕ|ར|ཀ|	མ|ན|ཀ|	ཀ|ད|ར|ཀ|
ton ka	gan ka	par ka	man ka	dar ka
秋。	冬	夏。	ヒマラヤ山の住地名。(ヒマーラヤ山中)	如意出生王。
ས|ར|ཀ|	ཟ|ས|ལ|ཀ|	ཟ|ཟ|ལ|ཀ|	ཐ|ལ|ཀ|	ཐ|ལ|ཕ|ཀ|
sa ra ka。	za sa la ka。	za za la ka。	tha la ka。	phal la ka。
金鎖元。	9月曜。	本初時名。	羅ら時。	勝つ時
ཆ|ལ|ཀ|	ཅ|ཡ|ཀ|	ཁ|ན|ཀ|	ཁ|ལ|ཀ|	ཀ|ལ|ཀ|
cha la ka	ca ya ka	kha na ka	kha la ka	ka la ka
汗、垢。	祥語	長線。	小鈴。	劍。

二三五　女性後置字が女性語端を引く例表

女.女.	女.女.	女.女.	女.女.	女.女.
ཀཱཏ་ཀ།	ཐཱཏ་ཀ།	གསུང་ཀ།	ཐུང་ཀ།	ཟིན་ཀ།
カン ワ。	トン ワ。	スン ワ。	トン ワ。	ザン ワ。
充滿。	見ること。	言ふこと。	放つこと	善いこと。
ཀཱ་ཀ།	ཐལ་ཀ།	ཐང་ཀ།	ཛངས་ཀ།	ཀུན་ཀ།
ニン カ。	ゲン カ。	ナン カ。	ジャン ク。	スム カ。
心臓。	胸。	空色。	緑色。	三つ巴。
ཕན་ཀ།	ཏཱ་ཀ།	ཚ་ཀ།	ཉི་ཀ།	ཐམ་ཀ།
パン ダ。	ガー マ。	ツァー ワ。	ニィ マ	ダー マ
粕。	愛女。	戀男。	日。	鉢、椀。

二三六　音便を主とする結合

前表の如く後置字が同性なる語端を引くことは、その大態について言ひしものにして、實際上性の一致せざるものゝ結合も、音便上調和の宜ろしきを得たるものは、甚だ多く用ひらるゝことを見るなり。

同性を依りずして音便調和を主とする結合の例。

中.男	中.男.	中.女.	中.女.	中.女.
ཐམ་ཕ།	ཐམ་ཅན་ཕ།	ཐུལ་ཕ།	ཐལ་ཕ།	ཏུལ་ཕ།
ブン パ。	ジン パ。	ダル パ。	ヤル ワ。	ブル パ。
一致。	明確。	淨める事。	勝者。	教化。
女.男.	女.男.	女.男.	女.男.	女.男.
ཏམ་ཕ།	ཐུ་ཕ།	ཀཱ་ཕ།	ཁ་ཕ།	ཏོ་ཕ།
ダム パ。	ブム パ。	カン パ	ガン パ	トン パ
正。	水瓶。	足。	象。	空。
男.女.	中.女.	男.女.	中.女	中.男.
ཐུ་ཏཱ།	ཤལ་ཀ།	ཐ་ཏ།	ཐལ་ལ།	ཏོ་ཕ།
ツ ダ。	シャル ワ。	タ ダ	ス ル ワ。	ドン パ。
指。	愛すること	痛い	捧すること。	價値。

二三七　同性結合の為る用字を代へし例

後置字を繼行する文字が、後置字を同性なりざるためゝ。甚だ言ひ

表し難き語より。それを言ひ易くするために、後續字の性を易ふることあり。例せば"ཏ་ཀ"の如きは、その音ギャー、ツカルとして、甚だ云ひ難きを以て、前綴女性なる代後置字を不適當なる後綴の中性前置の字を省除し、次で代後置字を不當なる後綴基字男性ཀを同族の女性なるཀ字を改めて、ཏ་ཀ"ギャーカル"の語を構成せり。この"ཏ"の語は西藏人が印度國を呼ぶ所の名にして、その意義はཏ"は廣大、ཀ"は白色にして、西藏人が印度國を見るに、廣大なる地方に白衣を着たる人のみ、多く住するを以て印象的に廣大白と名づけしものなり。されば語義より言へば"ཏ"ཀ"と読むが當然なるを、音便上ཏ"ཀ"は言ひ難きを以て、ཏ"ཀ"と言ひ易くなしたるものなり。故に語義は"ཀ"鶴鶴の義を用ひずして原語なるཀ"白の義を表すものとせり。これは女性の後置字に不適當なる中性後續字を省除し、次に女性後置代字を不適當なる男性ཀ字を同族の女性ཀ字に代へて、音便を成立せしものなり。次に擧ぐる例は男性後置字を不適當なる後續女性字を男性に代へたるものなり。

男.女.女		男.男.		男.女		男.男
དཀོན་དཀར་མཆོག།	は	དཀོན་དཀར་ཅོག།	となり	ཐ་ཏ་ལ་ཁ།	は	ཐ་ཏ་ཏ།
コン ク チョク。		コン ク チョク		ダ ダ ケ		ダ ダ ケ。
稀有最勝。		〃〃〃〃。		一 空。		〃 〃。
男.男.		男.男		男.男.		男.男.
ཀླ་ཀློ་ར།	は	ཀླ་ཀློ་ར།	となり	ཤ་ཀ་ལ་ར།	は	ཤ་ཀ་ར།
ラ コル、		ラ コル、		シャ カル、		シャ ル
空鼓、琴。		〃〃〃。		蓮華核。		〃〃〃。

となるが如し。斯の如く西藏語は言語の間ふ於ても音聲の調和を主として、音便みを用ひたるゝことを見るべし。

二三八　助辭及び格語を引く方法

この方法は前説の如く前行語の後置字が、隨行の語端に同性字

か、或は音聲調和の宜しきもの引くことは、同一なりと知るべし。

格語尾及び助辭を引く法則

ཚིད་ཆགས་ཏེ་དག་ཀྱིས་ཀྱི། །དེ་ཀྱི་ཅང་ཀི་ཐུན་ཆགས་པའི། །

(それ等の)語端(後置字と續語の前端)に依て　それが自らの音聲と一致したる所の、

རྩོལ་དོན་ལས་དང་ཕྱིར་པ་དང་། །ཐོག་ནང་འགྲུབ་ཁྱབ་ལས་ཀ་ནང་ཀ།

主格、業格と　具格と　為格と　從格、　屬格

ཁམ་ནང་ཁོ་ལའི་ཐུལ་ལང་ཏུང་། །ཁ་ཤན་ལང་ཐེ་ལ་ཕྱ་ལྷ་ལ་ཅ་ནང་།།

依格と呼格の語(語尾助辭)も引かん、外ほか　再集詞(完了詞)、餘共詞と
(接續詞)

འགྲེལ་ཐུ་ཅན་ནང་ཁ་ཏགས་ཡོ་ནང་།།དགག་ཐུ་ཆེ་ནང་དེ་ལ་ཁ་ཏགས།

關合詞(接續詞)、強勢詞と持主詞と、否定、肯定、莊嚴と時とをも入れらる

ཏེ་ནགས་ཐུ་ཤ་ལས་འདྲེན་པས་འགྲུབ་ཀ།། 性入法。

それ等は前行字の力と引かるる事に依て生ずるなり。

二三九　格語尾引用法則の説明

上来説明せる前行語の後置字と隨行語の前端字母の性が同一なるか、或は音聲の調和宜しきものをもて、第一主格、第二業格、第三具格、第四為格、第五從格、第六屬格、第七依格呼詞の語、語尾用ひる助辭(てをは)を引くべし。此外格語尾或は助動詞等となるべき助辭として用をなす語類即ち再集詞、餘共詞、關合詞(接續詞)、強勢詞、持主詞、否定詞、肯定詞、莊嚴詞、並び時限表示をも用ふべし。それ等も要する前行語端即ち後置字の力に依て、後續語の前端が合宜に引かるゝものなりと知るべし。

二四〇　同性結合と音便結合について

後置字と後續語との結合に就いて、同性結合が多くあるか、音便結合が多くあるかを見んに、十個の後置字に何れが多く所くかを、屬格語尾と關合詞助辭とに結合に就いて見れば、その大要を知ることを得べし。初に屬格語尾との結合は、

女.女　ནང་ཀི། ナンギ、内の。

女.女　མཐའ་འི། ターイ、邊端の。

女.女　ཕ་མའི། ファーマイ、上人の。

女.女　གྲོང་གི། ドゥンギ　町の。

男.男　བཤད་ཀྱི། シェッキ　説明の。

男.男　ཐོ་ཀྱི། トゥキ　除ぐ事、精の。

男.男　བདག་ཀྱི། ダッキ　佛陀の。

男.男　ཀན་ཀ། ケンク、語の。

中.女　ཐུང་ཀྱི། トゥンギ、古昔の。

中.女　མགར་ཀྱི། ガルギ、城の。

中.男　ཚལ་ལམ་ཀྱི། ツァルラムキ、林の

以上十一語の中、同性結合は八語にして、音便結合は三語、あり。

次に關合詞の助辭結合について見るべし。

女.女　མཐོང་ངམ། トンガム、見ると。

女.女　བསམ་ལམ། サムラム、思ふと

女.女　དགའ་ལམ། ガーラム、喜ぶと

男.男　ཁས་ལམ། ケンラム、要更と

男.女　ཁ་ལམ། カラム、穢れと。

男.女　བཤད་ཏམ། シェッタム　説明と

中.女　ཏེ་ནམ། テンナム、教示と

中.女　ཕེ་ནམ། ペンナム、下ると

中.女　ཁོ་ལམ། コルラム、轉ずると

中.女　ལྷ་ལ་ལམ། ラルラム、樂ずると。

男.女　ཤེས་ལམ། シェンラム　知ると

ལེ ལ ཕ ནི ལ ཁ ལ ラルラムキ　ケンリンノ

などは　人等　の　作業なりけり。

前記十一語の中に於て、同性のもの、結合は四語にして、音便結合のものは七語あり。これに上記屬格語尾の十一語を合して、計算等分するに、同性結合のものは十一語にして、音便結合にも十一語あるなり。これに依て見れば、音便結合が同性結合と略ぼ同一程度に用ひられ居ることを見るなり。

二四一　同性音便結合併用の歌。

同性結合と音便結合との併用に依て出來上りたる詩歌は、按國

人をして陶醉せしむるに足りものあり。彼俗謠作家として第一位を占むる六代の法王 ཚངས་དཔྱང་རྒྱ་མཚོ（津音海）の作の一二を之に挙ぐべし。

ཕྱི་ཏེ། ཕྱིད་ཕྱིད་ཏུ་ཁོ། ། ངའི་ལག་ཤོག་ཆགས་ལུ་ཁེ། །
ペテー、ツィンツィン、カル モ、　ガ ラ ショク ツェー ケル タン、
毒白な鳥のお鶴さん、　私の羽根を　借して呉れ、

ཐག་ཅིང་ལགས་ལམ་ཕེ་ཤ། ། ལྷ་ཕུ་ཁ་ལགས་ལ་ཕེ་ཤ། །
ターリン ギャンラ ミンドー　リ ポン コル チー ピデ タン、
遠いところへ行かせぬ　リポン めぐって 歸りましょう。

ལྷང་ཁ་ཐ་ཡ་ལ་ཁམས་ཀ། ། ཐ་ཡ་ལྷང་ཁ་ལ་ཁམས་ཁ། ། ཁམས་ཀ། ། ཁ（ ）は割線の背号
チーウ、セム ジャル。　チーウ ガンガ マル セム　ショル
柳は 小鳥の戀をした、　小鳥は柳の 戀を　知る。

ཁམས་ཀ། ཁ ལ ལ ཁ ཁ ལ ལ ལ ལ ། ། ཕ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ། ། ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ། ། ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ལ ། །

ふして、初のは易た言い易けども、次のは識み云い難し。文法上則み誤りなきものなれども、西藏人みは文章として受取れざる場合の字母合性のことは既み示したる法則み従ふて、文章を構成すべし。

二四五　音便を知るの法

音便を知るの方法は俗語み通ずるを以て第一とす。この方法を外みしては、西藏語の名文を熟讀してその用法み通ずべし。單み文法を知りたのみみては、言調適合の文を作ることと能はず。それば西藏文を作らんとする者みして、俗語み通ずるの便を得ざる者は以下み記せるが如き名文の書籍を熟讀すべし。音便熟通み必要なる参考書。

譯書の分。

1. དམ་པའི་ཆོས་པདྨ་དཀར་པོ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ། དགེ་ཚུལ་ཁོ་ཁ་
妙　法　白　蓮　華　大　乘　経。

2. འཕགས་པ་དཔལ་འཕྲེང་ཅན་ལྷ་མོ་ཡེངས་ཀྱི་ཐེག་ཆེ་ཆེ་ཆེ་ཆེ་ཆ་ཆ
聖　勝　鬘　夫人　獅子吼　大　乘　経。
ཁ ཁ ཁ

第二章 ཚིག་ཡིག་ཁག་གི 文章の分解

二四六 文章の種類と構成

西藏語にて意義完備せる言語を文字に誌したるものを西藏文と云ふ。それは三種あり。單文と聯構文と複文なり。

單文の構成。單文は一の主部と他は一の説述部とより成るものなり。例を挙げれば

主部	説述部	主部	説述部
ཨ་ཡི་ཀ	ཕྱེ་ཐུབ།	ཟླ་བ	ཤར།
花は	開く。	月は	上る。

の如く單一なる文章にて、花と云ふ主辞に開くと云ふ説述を加へたるもの、如きを云ふなり。月は上ると云ふも月と云ふ主辞に、上ると云ふ賓辞説述を加へたる單純なる構成の文章なれば單文と云ふなり。

聯構文の構成。聯構文は從屬的關係に非ずして、二以上の單文が集りて、聯合的に構成したるものを云ふなり。例せば

主部、説部、接續主部、説部、　　主部、説部、主部、説部、

ཨ་ཡི་ཀ ཕྱེ་ནས་ཁྱི་ཀ ཨ་ཡི་ཀ ཕྱེ་ནས་ཁྱི་ཀ = ཨ་ཡི་ཀ ཕྱེ་ནས་ཁྱི་ཀ

花は　開いて　小鳥が　鳴く。　　花は開き小鳥は鳴く。

の如く、獨立したる二文を接續詞にて繋ぐか、或は接續詞なしに二文を意義の上に繋いで構成されるものを聯構文と言ふなり。

複文の構成。複文は一の主文と一以上の從屬文とを聯合して、構成するものなり。例せば

從屬文　　主文

གལ་ཏེ་དེ་རིང་ཆར་ཤི་ན་ཁ་ཡི། ངས་ལམ་ཕྱིན་ཀ་ཡོད་ཀ།

もし今日雨が降らなければ、私は散歩に行きませぬ。

この全文の主文は、「私は散歩に行きませぬ」と云ふにあつて、それの從屬的條件として「もし今日雨が降らなければ」と云へるを見るべし。

二四七 單文の構成要素

簡單なる單文は、前述の如く一の主辞と一の賓辞と集合して成れりと雖も、その各辞に附屬する語を有する單文あり。故にその簡單なる要素と、それに附屬結合するものとを分つときは、四の要素となるなり。それ等は以下の如し。

1. ཀློག་ཏུ་ཆུག། 主辞。
2. ཀློག་ཏུ་ཆུག་ལ་ལས་ལ། 主辞に結合する語。
3. ཟས་ཀྱི་ཆུ་ཀ། 賓辞。
4. ཟས་ཀྱི་ཆུ་ཀ་ལ་ལས་ལ། 賓辞に結合する語。

これ中の第一と第三とは、文にはなかるべからざる要素にして、これなしには文は成立せざるなり。第二と第四とは一文としては、なかるべからずと云ふことなし。それ等の有無は文章の構成には、關係を及ぼさざるなり。

二四八 單文四部の釋義

1、主辞は一文の主にして、名詞か或は名詞と同一の力あるものの何れか云ふなり。2、主辞結合語は形容詞か或は形容詞の力を有するものを云ふなり。故にこれを屬性的結合と云ふ。又時として主辞の廣大したるものを云ふなり。3、賓辞は動詞か或は動詞に含まるゝものを言ふなり。4、賓辞結合語は副詞か或は副詞の力を有する語なることを要す。故にこれ等は副詞的結合と名づけられ、又時として賓辞の廣大したるものを言ふなり。

二四九 四部を含める單文分解の表

先づ初に左例を挙ぐべし。

ཁ་ཅོ་ཉིན་ཀ ཕ་ཅ་ཁ ཡ། ཁ་ཅ ཉ ཀ ཕ ཅ ཁ ཡ ཁ ཡ ཁ ཡ

主辭	主辭結合語	賓辭結合語	賓辭
名詞	形容動詞	副詞	動詞
船 人は 馬 鳥は	おそく 大なる ちいさい 注意して	四ヌ、ネ、ち、 明日 下、ゲ、 今	乏ち、 去れり。 クロ、ラ、ケ、 注ぎ出る。

同類語の結合といふ形容詞は、多くの場合、主辭の性を表はす語なれども、名詞に於て山、島し、海深しと云ふ如く連體形なる場合あり。漢文も主辭の部のみを見て、人大き、馬速しと云ふべし。

二五〇　主辭の構成。主辭は名動詞又は名詞の力あるものなることは、既に說明したところなるが、これ等を依て主辭は下標の構成せらるゝことは、次の如し。

主辭	賓辭
四ネ、ち、 赤鱗は	ロ、ラ、ケ、 必ず。
ヨ、ヤ、ち、ロ、(ヨ) 不通後の(人)は	ロ、ロ、ロ、ユ、ラ、四ヌ、 隨時する人。
四ち、ネ、ち、 洋は	ロ、ヤ、ヤ、ケ、 行かざるなり。
ロ、四ヌ、 歩行せるは	四、ヨ、ヌ、ロ、ち、ヨ、ち、ヌ、ち、 確庫の国なり。
四ヤ、ち、ち、 走らまは	四、ヨ、ヤ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 確庫の信用なり
ち、ち、ち、ち、ち、四ち、ち、ち、ち、 他のやうなるなれば、知らざるなり出来ぬ。	ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 [illegible]
ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 [illegible]	ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 [illegible]
ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 なる所の組となる	ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、 [illegible]

二五一　主辭結合語の種類

主辭に結合して、形容するものは、既說の如く、形容詞が或は形容詞の力を有するものとして、その構成の種類は以下の如し。

1. 形容詞、　ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

3、形容詞、　ཁོ་རང་　ཁ་ཅིག་ཡོད་　འདུག།
彼は　獅子　居る。

4、分詞、　ཁོ་ནི་　ཉོན་མོངས་པའི་དབང་དུ་ཆགས་ཤིང་　རོང་ཁྱེར།
彼は　煩悩けんのう に 執着 して　去った。

5、不定詞、　ངས་　རྟ་ལྟ་བར་　ཕེབས།
私は　馬を見るべく　来れり。

6、副詞的目的、　ཁོ་ནི་　དཔལ་ཆེན་ཁ་ལྷ་ཏ　　ཕེབ་ཀྱི།
彼は　三山宿を　行きたり

7、目的語を有する指示詞、　ཁོ་ནི་　ཁ་ཅིག་ཆུ་མཚོ་ཆེ་ལ　　ལྷུང་ངོ།
その人は　唐の深い海 に　落ちたり。

二五三　分解の爲の單文例

以上學げたる單文の要目たる主辞、主辞結合語、賓辞、賓辞添加語、に依て分解せらるべき文例を初め學ぶべし。

1、ཁོ་ལར་ངས་ཡི་ཀུན་ནས་ཀློག་ཅིང་ལས་ཀ་ཤ། ཡབ་ཀྱི་ཁ་ཀར་ལ་བརྟེན་ནས་དབུས་
ミラ聖パは　書者の時　に　母の仰せに依て中央洲

ཀུན་ཏུ་ཀི་ཡུལ་ཐོག་ཏུ་ཕྱིན་ལ། ཀཱཡ་ཀ་ཏ་ཡ་ཐ ཕ་ཏ ཀ ཏ ཡ ཐ ཕ ཏ
撒洲の行者たち に　蛇縁の苦行をしても好い果兇術

ནས་ཀློ་ལ་ཕན་ཏུ་ཁོན་ལར་ཕྱིན་པ་ཡིན་ནོ།
(魔術の事)を學ぶ必要のために行ったのであった。

2、ངའི་ཕ་མ་ནི་ཕྱི་ཏི་ཁོ་ཐམས་ཅད་ལ། ཡིག་ཆུང་ཐམ་ཡར་ཁབ་ཏུ།
私の母は彼女の縁ての娘 に　獣爵を完全に教えたり。

3、ཚོང་ཕྱིར་ཆོང་ཆུང་ཡོད་པའི་ཆོང་ཁ་ཡོན་ཁྱིམ་ཀྱི་ཀུས་ནོད་ནས་ལྷ
賣るための商品を多く持つ所の或商人は　西藏 に は　鉄

ལམ་ཁ་ཤོར་ཡོ་ཆེ་ཡས་ཀཡཀ་ཕྱེ་ལ་བརྟེན་ནས་ཐོར་ཐམ་ཅད་
道使がないために　犛牛群 に 依て　縁ての商品を

ཕྱེ་ལ་ཡར་ཕྱིན་ཡར་ཤོག།
運送して　ある。

二五四　上記單文分解表

主辞		賓辞			
主辞	主辞に添加する語。	賓辞に添加する語。	形容詞を伴ふ添加。	形容詞を伴ふ語を有する目的。	動詞
ミラ聖パは (所屬命令法)	ཁ་ཤར་ཁ་ཤ 書者の時に	དབུས་ཀུན་ཏུ་ཀི 中央洲(撒洲)の	ཁ་ཡ ས ཐ の	ཐ ཕ ཏ 蛇縁の	ཕ ཏ ཀ ཏ ཡ ཐ 行ったり
།	ཡ ཡ ཡ 母の仰せに	ཡུལ་ཐ ཕ ཏ 行者たち	ཀ ཏ 苦行を	ཐ ཕ ཏ (魔術)を學	ཡ ཐ ཕ ཏ
	ལ ལ 依て	།	ཡ ཏ しても好し	ཀ ཕ ཏ 必要の為	ཡ ཐ ཕ ཏ
		།			ཡ ཐ ཕ ཏ のであった。
ཡ ཡ ཡ 母は	ངའ 私の	ཁ ཡ ཡ ཡ ཡ 彼女の縁ての娘	. . . . .	ཡ ཡ ཡ ཡ ཡ 獣爵を完全	ཡ ཡ ཡ ཡ ཡ 教えた。
ཁ ཡ ཡ ཡ ཡ 人が	ཁ ཡ ཡ ཡ ཡ 賣るべき商品を ཡ ཡ ཡ ཡ 有つ所の	ཡ ཡ ཡ ཡ ཡ 西藏に鉄道使がないために	ཡ ཡ ཡ ཡ ヤク群 ལ ལ 依て	ཡ ཡ ཡ ཡ ཡ 縁ての商品を	ཡ ཡ ཡ ཡ 運送 ཡ ཡ ཡ ཡ してある。

二五五　分解すべき單文例

以下に學ぶべき所の文章を前表の如くに分解すべし。

1、ལྷ་ཐང་ལ་ཆོ་ཀློ་ཡིན་ཕྱི་ར་ཡབ་ཀྱི་ཀུས། ཐུ་ཡར་ཡོད་པ་ལ་ཡོད་ཐུ་ཡ་ཆུ་ཏ།
山原に係譜をかけた所の或猟師は、麝香が来る事多い やうに、
ངའ་ཀུས་ཏོ་ཀ་ཏམ་ཕྱིར་ལོག་ཀློ་ཡ་ཡོ་ཏ།
自分で少しく後へ引退した。

二五六　鵰王とその従屬軍隊

2、ཁྱུ་ཀ་ཡོན་ཏན་ཕལ་ཆེན་ཀལ་ཕ་ཡི་ངམ་ལ་ཕྱེ་ནས་བཅས་ཏེ་ནམ་མཁའ་ལ
鵰の王が彼が従屬の軍隊と倶に虚空に
འཕུར་ནས་ཕེབ་ཀློ་ཏུ།
飛んで行きたり。

3、དེ་ཡི་མཚམས་ཤུ་ཙོ་ནས་ཁོ་ནི་ཐམ་ཅིག་ཏུ་ཡའི་ཐེ་ལར་ཐ་ཅིག་ཁ
その時に彼と彼等は、細の近い地に補鷹網が撒いた所の
འབྲས་ཀྱི་འབྲུ་ཐམ་ཅམ་ཡར་ཐུར་ཏེ།
米の粒などを見たりき。

4. དེ་ནས་ཡུག་རོན་ཀྱི་རྒྱལ་པོས་འབྲས་ལ་དགའ་མཁན་རྣམས་ལ་བདེ་ལྡན་བྱེད་པོས།
時は 鳩 の 王 は 米 を 喜ぶ 者 等 を このやうに 慰めて。

5. ཇི་ལྟར་བདེ་འབྱུང་དགེ་པའི་གནས་སུ་འབྲས་འབྲུ་རྣམས་ཡོད་པ་ཡིན་ནམ།
何故は 新の 繁盛 の 所 に 米 粒 などがあるのであるか。

6. བདག་ཅག་གིས་དངོས་འདི་ཐལ་ཡོང་།
我 等 は この 問題 を 見よう。

7. བདག་ཅག་དོན་འདི་ལ་བརྟན་བརྟན་ཕྱིད་དགོས།
我 等は この事は 注意 せねばならぬ。

8. ཁོ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་ང་རྒྱལ་ཅན་ཀྱི་ཕྱག་རོན་གྱིས་ཀུན་གདམས་རྒན་ཏན་
役等 の 中 から 我慢なる 鳩 が 恐い 勧告

པ་ལྟེར་སོང་།
を 與へき。

9. ཁོས་ཁོ་རྣམས་ཀྱི་ལྟོག་ས་འགྱང་བའི་ཆེད་དུ་འབྲས་འབྲུ་ཡོད་ས་ལ་འཕྱར་
彼は役等 の 訓 を 落す ために 米 粒のある地に 飛

ནས་ཕོབས་ཤེས་ཐེར་འདུག།
んで下りよと 云へり。

10. གདམས་ངག་ངན་པ་འདི་ཉན་ནས་འཕྱར་ཕབ་ཟེ་སོང་བའི་ཁོ་རྣམས་ནི་
この悪い 勧告を 聞いて 飛び下りて 行った所の 役等は

རྒྱལ་པོའི་བཀའ་ལ་མི་ཉན་པར་འབྲས་འབྲུ་རྣམས་ཡར་ལྟེ་ནས་ཁུ་ཏན་ཁ་ཡི་ཁར་
王 の 命 を 聞かずに 米 粒 などを 摘み上げて 嘴下すべく

མགོ་འཇུག་གོ།
始めき。

11. ཡར་ལྟེ་ལ་མགོ་འཇུག་མ་ཐུག་པ་ཁོ་རྣམས་ཐམས་ཅད་ཏུ་ཁོ་རྣམས་ཐུལ་ནས།
摘み上げる初むるやそや 役等 は 総べて 網 を 捕へられたりき。

12. དེ་ནས་ཁོ་རྣམས་ནི་འདི་འདྲ་ངན་པའི་གདམས་ངག་ཉིར་བའི་ཕྱིར་ཁོ་རྣམས
其の時役等 は このやうな悪い 勧告 を 與へられぬに役等を

ཀྱིས་ཐུལ་ནུ་དང་མི་བཅུད་པར་དེར་འོངས་འཇུག་པའི་ཀློག་ཡོ་ནི་ལ
して 捕 み 不注意 な 者ども 来 さしめし所の その 故 み

འཚེ་བ་ཏུ་གར་ཐར་ཐེར་འདུག།
雑責を 厳しく 云へり。

13. འོན་ཀྱང་ཁོ་རྣམས་ནི་ཁོ་ལ་ཉན་པའི་ཆེ་བཅུད་པ་ལ་ཁོ་རྣམས་ཀྱིས་བང་ཉིད
けれども 役等 は 役 の 聞き入れの不 注意を 役等 は 自身を

ལ་འཕྱི་བར་བྱེད་པ་ཡིན།
責むることが適當である。

二五七 鳩王と軍隊の談 (二)

14. དེ་ནས་ཡོས་ཁོ་ནས་ལ་ཁང་འདུ་ཕྱིད་དགོས་པ་ཅི་ལན་ཐུག།
其王 は 役等 に 何のやうに せねばならぬかを 說いた。

15. ཁྱོད་ནས་ཐམས་ཅུས་ཅིག་ལ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཀུན་ཏུ་ཀུག་ནས་ཁ་ཕར
汝等 は 一時 に 総べてが 共同 の 力を 出して 上へ

འཕྱར་ཆོག་ཅིག་དང་།
飛び上れよかし。

（汝は挙げる 16. の欠例は 補文なれば こゝに
挙げべきを 抜かれども 文の連続上 此に入れ 訳）

16. ཆུང་ངའང་ཚང་ཡོས་ཕྱད་ཡར་འགྱུར་ན་དེ་ལྟར་ཆ་ཅང་དྲག་ཡར་འགྱུར་རེ།
小さくとも 多くが 集る ならば それは 非常に 強くなるなり。

17. ཁྱོས་ཡར་འགྱུར་བའི་ཐབ་ཆེན་ཡིན་ནའང་ཆུང་ཆུང་ཙམ་ཡིས་ཕྱད་པའི
狂者 となれる 蟻 なりと 雖も、小さい 等を以て 集めたる

ཐག་ཡས་དེ་ནི་རྒྱུན་ཡར་འགྱུར་འདུག།
細を以て それを 縛ること なるのである。 （本文例を文脈補文に 為す）

18. ཡུག་རོན་ཀུན་ཀང་ཐམས་ཅག་འདི་ལ་ཉན་ནས་ལས་ཁྱད་ཡར་བཙུམས་སོ།
鳩は 皆 この 教 告 を 聞いて、事を 作すべく 始めたりき。

19. ཁོ་རྣམས་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཀུན་ཏུ་ཅིག་ཅར་ཆགས་ཏེ་ཁ་ཕར་ཕྱིན་ནས་ཁོ་རྣམས་དང་
彼等は 総べて 共同して 一氣に 跳び上がるので 彼等と

བཅས་ཏེ་ཐག་ཀང་ཁྱེ་ལ་ནས་ཡར་ནས་མཁའ་ལ་འཕྱར་འདུག།
共 に 細も 運んで 上へ 空 間 に 飛んでゐる。

20. དེ་ནས་ནང་ཡོར་ཐུ་རེད་མཁན་ཁྱེ་ལ་ཁོ་རྣམས་ལ་འདོར་ཏེ་ཕོ་ཡིང་ཐར
時 初めの 捕鳥 家 は 彼等が この地に 歸り来ると

རེ་བ་ཕྱེད་ནས་ཐུག་ཕྱེ་འདུག།
期望して 待つてゐた。

21. ཡོད་ཀྱང་ཁོ་རྣམས་ཐ་ནང་ཐག་ཏུ་ཡར་ཕོབ་ནས་ཁ་ཅིར་ཡང་ཟ་ཡ་ཕྱད་ཟ་ཡ
けれども 彼等の 細 と 共に 彼方に 飛って 見へなくなった。

22. ཁ་ཕྱ་བས་ན་ཐུ་རེད་མཁན་ནི་ཁོ་ཡི་ཐ་ནང་ཡུག་རོན་ཁོ་ནས་ཀྱང
それ故に、捕鳥家 は 彼の 細 と 鳩 なども 亦

ཆགས་ནས་མེད་ཡར་འགྱུར་རེ།
失って 無くなった。

二五八　鳩王と軍隊の談 (三)

23. དེ་ནས་ཕྱག་རོན་རྣམས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་ལ་རེ་རེ། ཁ་ཡི་རྒྱལ་པོ་
時は鳩　等は　彼等の王　を云ふた。オ　王よ、

དེ་ལྟ་ཁང་འདི་ཐེག་དཀའ་ཡོང་བཟོ།
今は何のやうにしたならば置いてしようか。

24. རྒྱལ་པོས་ཀྱི་རྣམས་ལ། ཁང་ཕྱི་ནི་ས་ལའང་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཕྱིན་འདུག།
王　は彼等　に、何処　の地を行くことを命ぜられた。

25. དེ་ནས་ཁོའི་ཕྲག་པ་རྒྱ་ཁའི་རྒྱལ་པོས་ཀུན་ཕན་ལས་ནི་ཐེ་ཚོམ་ཡོད། ཁོས
それから猫の友である鼠の王が住するところを著いて　彼は

ཕྲག་ལ་པོ་ལ་ཐ་བ་ལས་ཐོལ་ཐབས་ཐུ་ཁ་འཚོལ་ཏེ།
朋友　を網から　脱れる方法せられんことを求めた。

26. རྒྱ་ཁའི་རྒྱལ་པོས་ཐ་བ་ལ་ཤོ། རྒྱ་ནས་ཀྱི་རྣམ་ཐམས་ཅད་ཁྱོད་ཀྱིས་ཐ་ལ
鼠の王　は網を噛みとかつて彼等　總てを速かに脱れ

ཐུག་འདུག།
しめた。

27. དེ་ལྟར་ཕྱག་རོན་ཀྱི་ཁམས་ཀྱང་མཉམ་ཕྲག་ལ་ཐ་ལ་ཐོལ་ཐབས་ཐུ་ཁ་ཡིན།
その様な鳩の　軍隊の總ては共同一致の方法に依て脱れた。

28. ཁོ་རྣམས་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཕ་ཤད་ལས་ཕན་ཡོན་ཡར་ལེན་ཡོང་ངེ།
總べての人等はこの夢課から利益を得るであろう。

29. ཤིང་རྟ་འཁོར་ལོ་ནི་འཁོར་ལོ་གཅིག་གིས་འགྲོ་མི་ཕྱེ།
馬車(衛事車)は輪が一つでは行くを出来ぬ。

30. ཤིང་གི་ཤ་ཐག་ནི་དེ་ཡི་ཁུངས་ཡ་ཆེད་ནི་ལ་ལ་ཁ་ཅིག་ལ་ལས་གཞན
葦の木　はそれの依處がないならばなる　什れるより　外

དུ་ཐབས་ནི་མེད་དོ།
る方法はなきなり。

(これ30の文例は複文の例なれども、本題話に属する格言なるを以て挙げたるものなり。)

第三章　聯絡構文の分解

二五九　聯絡構文と四類接續詞等

聯絡構文は二以上の獨立文の聯合る依りて構成せらるいものなり。

聯絡構文に屬する文章は、同等四類の接續詞と、副詞的代名詞等る依て、聯合せらるいものなり。

四類の接續詞とは、1、附加的。2、擇樟的。3、反對的。4、相理的接續詞との四あり。これ等の例は以下の如し。

1、附加的接續詞、　ཉི་མ་ནི་དབང་དང་ཐབས་ཀྱིས་ཤར་བ་དང་རྒྱ་ཆེ་ཡར་ནས་ཐུ་ཁ་ཡིན་ཞེས་ཟེར།
太陽は力と共る　上ると霧は消失することなつた。

2、擇樟的接續詞、　ཁང་ཁྱེད་ཁང་པ་ནས་ཁྱོད་དགོས་ཀྱི་ཡིན། ཡང་ན་ཁྱེད་ཅན་ཡིན་ཟེར།
何れか君は家から出ねばならぬのである、でなければ私である。

3、反對的接續詞、　ཁོས་ངའི་ནང་དུ་ཕྱིན་ཏེ་ཀྱང་ངས་ཁོ་དང་ཐུ་ཁ་ཆད་ཡོད།
彼は私の中る来たけれども　私は彼と語はなかつた。

4、相理的接續詞、　ཁོས་ཉིན་ཁ་ཤར་ཐང་ཁ་ནས་ཐོན་ནས་ཐག་ཅིག་ཏུ་ཕྱིན་ཏེ་ཕྱིན།
彼は終日　徒歩として歩んだので疲労して帰つた。

言語の下る線を引きたる言語は接續詞みして、それが前後にある文は、皆文として獨立したるものなり。

二六〇　關係代名詞と副詞との聯合文例

同等の文は關係代名詞或は副詞る依て聯合せらるいものあり。それは制限する意る排ずして、連續的に用いらるいことを規定するものなり。

關係代名詞聯合の例文、　གང་གིས་རྒྱལ་པོ་ཏན་ཏེ་ཏར་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཐུ་ཁ་ ཅི་ཡིས
ランダルマ王は　野蠻の行為　なるものを以て

དགེ་ཟོང་རྣམས་ཐམ་ཕ་གསད་པར་ཡིན་ཟེར།
比丘　等を多く殺したるなり。

副詞る依て聯合の文例　ཁོས་ནི་ཤིང་དེ་ལ་ཤ་ཅ་ཆུ་ཅང་ཆགས་ཡ་ཡདུ། ཅི་ལས
彼は花を植へるを善だ　巧みである。それ故

ཇི་ལྟར་ཡོད་ཀྱི་ཆེད་དུ། མི་རྣམས་ལས་ཀྱི་ལམ་ལ་ཡང་ཁས་ལེན་བྱེད།

そのやうな目的の為め、人等は　役を産ふことを喜んでゐる。

二六一　省約文章

雖構文は時として省約或は攝略せらるゝことあり。斯くして、不必要なる同語の重複を避くるものなり。

1、同じ主辭として二の賓辭ある時は、主辭は一度より以上誌すの必要なし。例せば以下の如し。

ཉི་མ་འོད་ཀར་བ་དང་(ཟླ་མར་) ཀློང་ཆེར་ཁྱབ་ཀ་ཞིག།

日は上つて……光が虛空を滿ふた。

2、所加的、同じ賓辭として二の主辭ある時は、一度より以上賓辭を誌すの必要なし、例は以下の如し。

ཁོ་ནི་ཕན་ཚུན(ཁ་ར་ཡ)ཁ་ནི་ཁ་ར་ཡ།

彼と盛ん（……）汝は橋師である。

3、擇擇的、これは何れか、或はの接續詞を用いて前文の賓辭を省して攝略したるものなり。

གང་ཟག་ཁོ(ཀུ་མ)ཀ་ཡིན(ནམ)ཟ(ཀ)ཀ་ཡིན(ནམ)།

何れかこの人が（盜みをしたか）或はその人が（盜みをしたか）。

4、反對的、これは「けれども」と云ふ反對接續詞を以て、二文を結合して、後文の主辭を略したる文例なり。

ཁོ་ནི་དཀའ་ཐུབ་ཡིན། ཕན་ཀང(ཁོ)ད་ཡང་ཡིན།

彼は貧乏人である、けれども（……）正直者である。

5 推理的、それ故にと云ふ推理的接續詞を以て、二文を結合して、後文の主辭を略することゝ以下の如し。

ཁོ་ནི་ལས་ཀ་ཆེ་ཆེ་བྱས་ཏེ། ཉམ་ངན(ཁོ)ཀ་ལ་ཐེ་ཚོམ་ཟ་ཡོད།

彼は大勞力をした、それゆゑ（……）善い境遇をなつた。

二六二　དང་の語を(ㄊ)接續詞に用ふ

དང་と云ふ語を(ㄊ)と云ふ接續詞に用ひて、二の名詞を結ぶときは、それ等は同一の動詞に對する別々の主辭に非ずして、一の動詞に對する

構合的主辭なりと知るべし。その例以下の如し。

ཁྱི་ནི་དང་ཁོ་ཀ་ཁྱིམ་ཁ་ནས་ཕྱི་རོལ་ཏུ་ཕྱིན།

その犬とそれの主人とは一の家から外に走つた。

西藏文に於ては接續詞としての དང(と)の意に用ふるときは、名詞と名詞との間に、一語づゝ དང を入るゝのみならず、その終の名詞の後にも一の དང を入るゝなり。

二主辭が དང 接續詞にて結合して離し難きものあり。例は以下の如し。

1、ཁོ་ནི་ང་ཚོ་ཕྱི་ནས་ཡོ་ཆེ་ཡིན།

彼と私とは大朋友である。

2、ཀུ་ཧེ་ལ་ང་ཚོ་ཏོ་ལས་ནི་ཁ་ཅིག་ལ་ཡོད་ལ་ཏེ་ལ་ཁ་ཅིག་ཡོད།

若さと經驗と共にあるあるは稀である。

前記の文章に於て兩文何れも、それが二個の主辭を分つて二個の文章となることを記す。試みに(1)を二文とすれば、

ཁོ་ཕྱི་ནས་ཡོ་ཆེ་ཡིན། ང་ཕྱི་ནས་ཡོ་ཆེ་ཡིན།

彼は大朋友である、さうして、私は大朋友である。

と云ふ二文となつて何れもその意をなさず。それと同じく(2)は

ཀུ་ཧེ་ལ་ཡ་ཆེ་ཆུང་ཡ་ལ་ཁ་ཅིག་ཡོད། ཏེ་ལ་ནི་ཁ་ཅིག་ཡ་ལ་ཁ་ཅིག

若さが共にあるあり稀である。さうして、經驗が共にあるあり稀である。

ཡོད།

と云ふことになつて、これもその意をなさず。それはこれ等の二主辭は、全く別離することの能はざるものと知るべし。

二六三　單一の事實と二主辭

單一の事實或は單一に屬する事實と考へらるゝものを、དང と云ふ接續詞にて、二個の名詞として結合する時は、その二個の名詞を別離し、或は二文の主辭となすこと能はず。例は以下の如し。

ཐུགས་ཅན་ཆེ་ཆེ་ཡིན་ཏེ་ཐུ་ཐ་ཏ་ཆེ་ཆེ་ཆེ་ཡ་ལ

大詩人として　正行者なる尊聖　ミラ　ゼパは、

གངས་ཅན་ལྷ་གནས་པའི་བོད་པ་ཡིན།
ヒマーラヤ山に住する西藏人なり。

འབྲས་དང་ཆང་ཁ་བཀྲ་ཤིས་ཀྱི་ཁོ་བོ་ཅིག་ཁོ་ཕ་ཆགས་ཡིན།
米と 醍醐と雜ぜたものは我の好む食物である。

二六四　二の名詞、句等の結合。

二の名詞或は句などが、ཡང་ནས(或は)と云ふ接續詞に依て結合せらるる時、その ཡང་ནས が撰擇的に用ひらるゝに非ざれば、それ等の主辭を構成するものなり。例せば以下の如し。

1. རིགས་ཚུ་ཡང་ནས་ཡུལ་པའི་ཁྱོད་ཀྱི་ཡིན།
種族 或は 部落 組合は 國 衆の 部分である。

2. ཁྱོད་རང་གིས་ཤིང་ཀུ་ཡང་ནས་ཁ་ལོ་ཁགས་ཡིན།
汝 は 菓物 或は 酒を 喜ぶであろうか。

(1)の例は民族なる語を含まるゝものを、種族と部落組合との二に分けて或はの語をて、その含める義の他の一部を云ひしものなれば、一主辭にて譯き樣を二つにせしまでのものなり。(2)の例は撰擇的にて、何れかその一を撰び取る意を表せり。

二六五　接續詞དང་の省略

撰擇的、反對的、推理的接續詞は、決して省略せらるゝことなし。然れども附加的接續詞དང་は省略せらるゝことあり。それ作者の目的が一線連續の文章を作らんとする時、一中心の事實を總て表示してなり。然れども此等の構成は、西藏文に於ては、稀に見る所にして、唯だ名詞の同位格に於て、僅かにこれを見ることを得べし。但し詩歌に於ては屢々發見するところにして、その例は下の如し。(以下の例文中括弧内に挿げたるは省かれし語を表すなり)

ཤེས་པ་ཀུན་ཁྱབ་ཀྱི་ལེགས་ཅན་ཞེ། ། ཤེས་རབ་ཀྱི་ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན། ། (དང་)
學處一切の基礎を持ち 叡智 完璧 の 因 (おいて)

མདོ(དང་)ཚིག(དང་)དཔེ(དང་)ཀུན(ཀྱི)ཁྱོ། ། ཡིག(ཀྱི)ཁ(ལ)ལ(ལ)ཀ(ལ)ཡ(ཡ)ཡ(ཡ)ཡ(ཡ

二六七　空チュンパの説法勸請の序

དེར་རབ་ཏུ་འབྱུང་བ་ཆེ་ཤེས་ཀྱི་ཕྱག་བཙལ།　ཐུགས་དྲོར་ནས།　ཇི་ལྟར་ཐུ
そこで空空パは尊者を禮拝し　御機嫌を伺って、尊者の

ན་ཏེ་ཕྱག་ཨཱ་ཐན་ཐལ་མོ་ཕུལ་ཏེ།　འདི་ལས་ཆེས་ཀུན་ཏུ་ཟབ་ཏོ།
前で腕を組て掌を合して　是の如くに申上げたりき。

二六八　説法勸請の本文

ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་ཆེ།　ཤར་ཕྱོགས་ཡིན་ལྟར་ཆུ་ཀླུང་ཐུ
上人尊者　之事(宗教觀)　古昔過ぎたりれし諸佛は

ཀྱང་ཨ་ཏི་ཡ་ཕ་ཏ་ཀ་ཏ།　ལོ་ཀ་ཡ་ཐ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ
又行相十二などの傳(宗教完全解脱)不可思

ཚ་ཁ་ལ་ལ་ཆགས་ཀྱི་ཏོ་ན་ཏ་ཀ་ཁ་ལ་ལ་ཡ
議なるを衆生のために説かれまりける故に世界に佛陀の

ལ་ལ་ལ་ལ་ལ་ཀ
教法が傳播しまして、(しまりけ。そうして)

ཏ་ལ་ཀ་ལ་ལ་ལ་ལ
ティロ。ナーロ。マルパのかなかなかなえて、上人行者、至上の方方に依て

ཀ་ལ་ལ་ལ་ཐ
も亦各自の傳を　説かれしをいて今や宿善の所化

ཐ
等は成熟解脱の道に入られ能ふことなるが故に、今、尊者
(をなれば幸へり。それ故に)

ཏ
ても　貴方も亦　我等　弟子　等が願望　增長する事と、

ལ
將来の宿善者なる所化となるん者等を　護持して、(と給へり)

ལ
外にも亦、無邊の生類を成熟解脱に入れられんことの為に大悲

ལ
心を以て　尊者　ときよ。貴方の系統と種族

ལ
の起原と共に完全に解脱し給ひし行等(傳記)を説き

ཀ
給はんをなほふと申上げたる故に、(申し上げまりけ。それ故に)

二六九　ミラ空パ尊者の説法序

ལ
そこに大尊者は　破顔微笑せられて　空チュンパよ。乃至の史
(ミラ空パ)　(小乘仏教)　あり

ལ
傳はお前が知てゐられども、身あるなら、身ある者となるべきであって、(をなれば)

ལ
わしの系統はチュンポ、種族はルンセ　わしはミラ空パ　初めは黒業
(密宗)　(生活)　可畏 恐れ者　(悪業)

ལ
をもなし、中間には白(善)業をもなし、今は黒白の二業を

ལ
離れて、業の基礎が盡きれ故に、將来に作者ならざる者

ལ
であって、それ等を廣く説くなら、或所は泣きたくなり、或

ལ
所は笑いたくなる理由が多くあって　説いてもよいが小意義だから

ལ
老人をして衆生安堵せしめよと説かれし故に(説かれた。それ故)

二七〇　空チュンパ再勸請説法

ཡང་ནས་ཀུན་ཏུ་ཕྱག་ཏུ་ཕུལ་ནས་ལན་ཅིག
又空チュンパは礼拝してお願い申上げた　尊者

ཏ
ときよ　貴方は初め　苦行と般若なる

ལ
努力をいて涅槃なる教學などを修行せられて　一心

ལ
以て修傳を勵まれた故に、今は自性を現証せられて、法

盡請法他之遣せられ」故ゑ、未来ゑ於て結縁となゞん業は作されずして

ཀློང་ཁ་ཀུན་ཀྱི་མཐའ་ལས་ཀང་ཁོད།

苦しれざる事は総ての承知をゑ所なれども、(所でありなすの條しながら)

ཁྱེད་ཀྱང་ཡོ། རྒྱས་ཤིང་ཏོ། ཇི་ལྟར་ཡང་མཆོད་ཀས་ལན་ཁ་ཕུལ་ནས།

御系統はキスッポ。種族は多豆　それゑミラを御馳を奉つた理由

དང་། ཕ་ཡིན་ཏེ་ཁྱད་ལ་ནན་ཏན་ཅི་ཡོད་ཀྱིས།　ཕར་ཏ

ど　御身誕生せられて初ゑ黒業をなされた情態　中間ゑ

ཁ་ལས་ཡོ་ཆགས་ཀྱི་ལས་ཀྱང་ནས་ཏ་ཕ་ཏ་ཁོ་ཏ་ཕ་ཏ་ཀྱི་ཆགས

白業を作された情態ゑ因んで泣きたくなり、笑いたくなる理由

ཏ་ལ་ཏགས་ཏོ་ཏ་ཕ་ཆགས་ཀྱིས་ཀོ་ཁ་ཡ་ལ་ཀགས་ཡ།　ཕ་ཏ་ཀགས

ゑついては勘要な利益は不可思議であります故ゑ、　我等

ཐ་ཆགས་ཀན་ཐམས་ཅད་ལ་ཐུགས་བརྩེ་བ་ཆེན་ཡོད་ཏགས་ཏ།

衆生　一切を大悲心を以て思惟遊ばされ、

ཕྱི་ཀཱཡ་ཐུགས་ཀྱི་ཁྱད་ལ་ལས་ཀ་ཡི་ཕ་ཐུགས་ཡ་ཁ་ལ

身語意無関心ゑ御過し遊ばされずゑ廣

ཀགས་ཏ་ཀགས།

說き給へと願し

二七一　一文の切目とその意義

以上ゑて見る角文は一先づ切れたるを以て、一文の終りとなし置きたれども、空ᴳᵃᵐᵖᵒᵖᵃの言葉はこれゑて切れたるゑあらず。以下ゑ挙ぐるが如くゑ續けるなり。尚ほ以上の切目は完全ゑ終らざる願い上るゑあつて、藏文の終結を示す所の完了詞を用いて、ཀགས།願い上るなり。とせざれば意義の續けゑない、接續したりと見ることを得るものあり。注意のためゑそれの續文を挙ぐべし。

二七二　他の諸弟子の說法勸請

ཕྱ་ལ་ལ་ཆོས་ཀྱི་ཆགས་ལྡན་ཁ་ཅིག་ཁ་ཅིག ཏ་ལ་ལ

特ゑ以ゑ集れゑ法の姉妹と金剛兄弟など　と　信心豊富

ཀྱི་ཡ་ཆ་ཤས་ཀྱིས་ཀྱང་ངའི་ཀགས་ལ་ཐུགས་ཡ་ཕ་ཏ་ཡ

の輿様がたも　亦　私の請願　の　助けをなし給はん

ཞུ་ཞེས་ཀགས་ལ་ཕ་ཏ་ཡ་ནས་ཕྱག་ཆགས་ཏ་ཕ་ཏ་ལ།

とを願ふと申し上げて禮拜を多くしましたので(多くしました。故ゑ)

ཏ་ལ ཐུགས་ཀྱི་ཤས་ཆེ་ཆགས་ཀགས།　ཏ་ཏ་ཏ ཆ་ཆ ཆ ཀྱི ཀ

そこゑ心子なる大弟子など　と　信心なる輿様がたも　亦

ཕྱག་ཆགས་ཏ་ཕ་ཏ ལ།　ཐ ལ ཏ ཆ ཡ ཆ ཆ ཀ ཀ ཕ

禮拜を多く敬しまして、　正　人　空ᴳᵃᵐᵖᵒᵖᵃが御座前

ཕ ཏ ཕ ཕ ཀ ཕ ཀ ཕ ཏ ཀ ཀ ཀ

ནང་ཁ་ཁ་ལས་ཁ་ཁ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ལ་ཁ་ཁ་ལ

位の見值から生ぜし過失なついて、罪がないと なしがたい。

ནང་ཁ་ཁ་ལ

位を 重言しなし。

この文中より「ནང」並び「ཁ」小結合語を除くと 主、述、下の四つの二文となるなり。

1. ནང་ཁ་ནས་ཁ་ཁ་ལ་ནང་ཁ་ཁ་ལ

位の最大の欠が 位の見值から生ぜし過失なって罪が なしと 位上 なしがたい 重言しなし。

2. ནང་ལ་ལ་ཁ་ལ

位の最後の用を が 位の見值より生ぜし過失なつ なしがたい と 位を なしがたい 重言しなし。

既の四つの語を欠く時は二文となるを、以結合語 二文を 一文の聯構文とする上記の如し、以下の(2)と異なる文例は、四「ནང」の関係代名詞なき時は二文となり、(3)の文は複雑詞「ལ」語のなきときは、これ亦二文となるなり。

2. <u>四「ནང」関係代名詞</u>は 沙の意味がその重複と印を押さねばならぬ。

3. 四「ནང」関係代名詞は 計量 それの創作者 は 確かに 位で 私ではない。

二七五　聯構文分解の規則

聯構文を分解する方法は、以下の挙げる規則にて 明示せらるるなり。

1. 主辞と賓辞と複雑詞との三に分つべし。
2. 主辞中主辞と主辞と修飾する形容詞とを分つべし。

3. 賓辞中動詞と動詞を形容する語を有する語と、形容語を有する自分語と、動詞と動詞を修飾する動詞とを分つべし。

二七六　聯構文分解表

文章	主辞		結合語	賓辞			
〃　〃	主辞と重なる形容詞	主辞	〃　〃	形容する語を有する附加	形容語を有する附加語	動詞	動詞と重なる動詞附加
1. ཁོང་ཆུ་ཤོས་ཀྱི་དཀར་པོ་དེ་འཕྲིན་བུ་ཁོ་ཡི་ཡག་ཤོས་ཀྱི་ཕྱོགས་ཤོས་ཁོའི་ཐུབ་ཐང་ཆེ་ཤོས་ཕྱོགས་ཀྱི་ཐོ་ཡིག་ཤོས་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཡོད་ཅིང་ཡང་ཐུག་ཏེ་ལ་ཁ་ཡང་ཡང་ཐུག་ཏུ་ལན་ཞུ་ཡོད།།	ཁ་ཡི་ཆ་ཤོས་ཀྱི	ཁ་ཡི་ཡ་ཤོས	ཁ་ཡི	ཁ་ཡ་ཐ་ལ་ལ་ཐ་ཡ་ཡ་ཐ	ཁ་ལ	ལན་ཞུ་ཡོ།	ཡང་ཡང་ཡང་ཐ
2. ཁ་ང་ནི་ཕ་ཡང་ནི་ཕ་ཀ་ཤ་ཡ་ཁ ཁ་ལ་ཁ་ཕ་ཀ་ཤ་ཡ		ཁ་ཕ	ཁ་ང	ཁ་ཕ	ཤ	ཁ་ལ	
3. ཁ་ཕ་ལ་ལ་ཁ་ཡ ཁ་ལ ཁ ལ (ཡ) ཁ ཡ	ཁ་ཕ	ཁ	ཁ		ཁ ཁ	(ཡ) ཁ ཡ	ཁ ལ

二七七　分解を要する聯構文例

1. ཁོ་དང་ཁྱེད་ནི་ལས་ཀ་དེ་ལ་ཐང་ཆད་བྱས།
彼と汝はその仕事に疲労した。

2. གང་ཅི་ཁོ་བོ་ཡང་ཅི་ཁོ་བོ་ཀྱི་ཕྱིས་ལོག་ཡོད་ཚོགས་ཤོ་ནི་ཁ་ཕྱེས་ཡོ་ཅོད།
何れか彼か或は彼の用友か門を開けたのである。

གཞན་ལྷའི་ལག་ཏུ་ཡང་དེའི་ལྡེ་མིག་མེད་ཡོད།
外る誰の手にもその鍵はないのである。

3. ཇི་ལྟར་བདེ་བ་ཅན་ཡིན་ལམ་རྒྱམ་ཡང་ཤེས་བྱ་ཀུན་ཏུ་ཁྱོད་
この主は正しい道を完全に知ってゐる、けれども乘

ཡིན་ལམ་ནི་དངོས་བྱ་བཅོག་དགོས་ཀྱི་ཡོད།
の道は實際る滅さねばならぬものである。

4. གང་ནི་ཁོ་ལ་གནང་བའི་བཀའ་ནི་ཁོས་ཀོ་ཡི་ཆེ་དུ་བཟུང་ཡང་ནི་ཀོ་ཐར་
何れか彼に與へられた命せは彼い解らぬか或は　解るとも

ལྟ་ཐུབ་ཆོ།
なりめであらう。

5. ཁོ་རྒྱལ་ཅིས་ཡར་ཏུ་རྟ་ནི་བཙལ་ཀཱ། ། ཁོ་ནི་ཀྱང་ནི་ནི་དེ
彼等は確かに馬を捜し出した。　係しながら、それは彼等

ལ་ཐུག་ཕལ་ལར་ལ་ཐུར་ལ་ཏུ། ། གང་ཡིན་ཞེས་ན་ནི་ཆོ
に憂い苦れることとなった。　何ぜかと云へばそれは盲

ལ་ལ་ཐུར་ལ་ཕི་ཕྱིར་ཏོ།
目となつたが爲めである。

6. ཐེག་ཆེ་ལམ་ཐུང་བཅང་ནི་ཏི་ཚེ་ཆེ། ། ཐེ་ཚན་ལམ་ཡང་ཤེ་ཆ་ཆ
古来なかり(摩訶)此を説きます。修辞る巧妙なりとも私にはないので

ནི་ཕྱིར་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁོ་ལ་ཐུ་ཚ་ལ་ནི་ལ། ། རང་ཁ་ཡི་ལ་ལ་ཐ
それ故、利他を思ふことも我るいない。自分のみを思惟する為る我へこれを著す。

入菩薩行一T.

7. ཁ་ཅི་ཁ་ལ་ལ་ལ་ཁ་ཅ་ར་ནམ། ། ཁ་ཅ་ཁ་ཁ་ནི་ཕ ཕ
誰かが我を悪口するか、他の者等が害を作すか或は

ནི་ལ ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ ། ། ཁ ཁ ཁ ཁ ཁ

との二あり。それ等の例を挙ぐれば以下の如し。

1、同位、 ཁོས་འདི་འདྲ་ཐུན་དུ་ཕྱིན་པ་དེ་བདག་ཅག་ཤེས་མེད་ཅེས་ཏེ།
彼はこのやうに速み行くその事は我等は知らなかつた。

2、関係代名詞、 ངའི་ཁྱིམ་ཤེ་ཆུ་པ་ཡི་ནོར་ཡང་ཁྱུ་ཞིང་ཟ་ཞུགས།
一我が書物を盗し所の彼い銭入も盗んでゐる。

〃 関係副詞、 ཅི་ཡར་ཁོ་ཕྱིན་པ་ཡིན་བམ་ཞེས་ཅི་ཡང་མི་ཤེས་སོ།
何處に彼は行つたのであるかそこを誰も知らなかつた。

3、疑問代名詞、 དེ་རིང་འདིར་ལུ་ཡོངས་ལམ་ངལ་ཀྱང་ཕེབ།
今日、どこの誰が来たか、私に仰せられんことを願ふ。

〃 疑問副詞、 དེ་རིང་ཁོ་ག་ཡར་ཕྱིན་ཨི་ཡིན་ནམ་བདག་ཀྱིས་ཁྱེ་བར
今日彼い何處に行くか何うあるか我等をして尋ね

ཟེར་ཅིག།
しめよ。

二八一　名詞文句について

名詞文句が名詞の作用をなす理由となる状態に五種あり。それ等の種目を挙ぐれば以下の如し。

1、一文句が動詞に對して、主辭となる状態にあるもの。
2、一文句が動詞に對して、目的となる状態にあるもの。
3、一文句が後置詞に對して、目的となる状にあるもの。
4、一文句が動詞に對して、附加語となる状にあるもの。
5、一文句が名詞に對して、同位となる状態にあるもの。

以下これ等の種目の一々について、逐次にその文例を挙ぐべし。

二八二　文句の動詞に對する主辭

以下に挙ぐる文章中にて横線の引かれたる文句は、主辭或は目的語となれる語なりと知るべし。

1、ཁོ་ཡར་ཁ་ཅི་ཕྱིན་ཡང་ཡ་ལུ་ཡིན་ཅིས་ཤེས།
何處に彼が行くかは　誰にも　知れなかつた。

2、ཁོ་ནི་ལམ་ལང་ཕྱིན་ཏེ་ནི་ངེས་པར་ཡོད།
彼が直ちに歸来るその事は確かである。

(1)文章の動詞は「知れなかつた」と云ふ語であつて、その知れなかつたと云ふ語の主辭は、前文句の彼は何處に行つたかいざと云ふのである。此一文句が名詞の如き状態となつて、知れなかつたと云ふ動詞の主辭となつてゐる事を見るべきである。(2)の文例も亦「確かである」と云ふ動詞の主辭は「彼が直ちに帰り来ると云ふこと」の一文句であると知るべし。

二八三　動詞に對する目的

1、ཁོས་ལྷན་ཏུ་ཐུ་ལོན་ལྷན་ལྷ་དགོས་པ་ཏེ། ཁོ་ནི་ལམ་ལང་ཡོད།
彼は速かに負債を返却　せねばならぬ事を、約束した。　ཁ ནི は限定の印。

2、ག་ལེ་ཁོས་ཏེ་ལྷ་ཡོང་ཐ་ནི་ངས་ཤེས་ཏེ་དགའ་ཡོང།
何時か彼が　それを返すであらう事を、私が知らなければ喜ぶであらう。

(1)の文は動詞「約束した」の主辭は「彼は」にして、それの目的は「速に負債を返却せねばならぬその事を」と云ふ一文なり。この一文は「約束した」と云ふ動詞の目的となつて、名詞の如き状態にあることを見るべし。(2)もこの例解に依て推知すべし。

二八四　動詞に於ける附加文句

1、ག་ཡིན་ལུ་ཡང་ཤེས་ཀ་ཅི་ཡ་ཡོད་ཡ་ནི་ཏེ ཡིན།
何であるか誰にも解らない　それはこれである。

2、ག་ལ་ཁོ་ཡི་ནད་ཀསལ་ཡའི་ཐབས་ཇི་ལྟར་ཡོད་ཀས་ནི་ལ་ངའི་ཐུགས་ཡོད།
何樣に彼の病氣を癒やす方法は何があるか　それに私の願はあるのである。

これの(1)の文中、主文の動詞は「ཡིན」ある」と云ふ語にして、それの目的は「ཏེ」これ」と云ふ語、主辭は「ཅི」それは」と云ふ語なり。それはこの「ある」と云ふ動詞に對しては、「何であるか誰にも解らない」と云ふ一文は、附加文句なりと知るべし。

二八五　名詞に對する同位句

ཁོས་ཕྱིན་པའི་ཐོ་ཡིག་ལ་ང་ཚོ་དགའ་པོ་བྱས།

彼がこゝに来ると云ふこと　即ち　使者の言　を　我等は喜んだ。

གཟུགས་ཀྱི་དེ་བཞིན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན་ནི་གཟུགས་མེད་པ་ཡིན།

色(現象)の真如の　自性は　即ち　無色(無相)　なり。

維摩經 ﾏﾐｷｮｳ ﾏﾋﾟｷｮｳﾏｷｮｳ

これ初の文は「彼がこゝに来ると云ふこと」と云ふ文と「使者の言葉」と名詞とは、事實に於て同一にして、即ちと云ふ接續詞に依て同位格が表されたることを見るべし。次の文もこれに準じて知るべし。

二八六　名詞文句の分解とその文例

初に文中より名詞文句を抽出し、次いで何れが何れの動詞に對する主文なるか、或は動詞に對する目的なるか、又或動詞に對する附加なるか、或は或文句が他に表されたるものと同位なるかを、以下に挙ぐる例について詮すべし。

1. གང་ཁོ་ནས་ཕེབ་པར་ཤེས།　ཡང་ན་གང་ཁོ་ནས་ངེས་པར་དུ་
何と彼は何時来るであらうか。　或は何と彼は確かに
ཕེབ་པར་ཤེས།　ཡང་ན་གང་ཁོ་ནི་ད་ལྟའང་གསོན་ཡོད་
来るであらうか。　或は何と彼は今でも生なてゐるであろ
དམ།　སུའང་མི་མཁྱེན་མཁའ་བྱེད།
うか　誰も知つてゐない。

2. ཕྱུ་ལ་དགོས་པའི་ཤིང་ཏོག་ལྷ་ཕ་ཆོས་ལའང་དགོས་པ་རེད།
牡獅に必要なる果物、即ち牝獅にも必要である。

3. དེ་རིང་ཉིན་པ་འདའ་ཡོང་བ་དེ་ནི་ཡང་དག་པར་ངེས་པ་འདུག།
今日雨が　降らであらうことは、全く確かである。

4. གང་མི་ཅིག་ལ་སྨན་ཡིན་པ་དེ་གཞན་ལ་དུག་ཡིན་པར་ཐུག།
何か或人には藥である所の其が他には毒となることがある。

5. རླུང་ནི་ཙམ་ཞེས་ཞི་བར་མེད་པ་ཁོ་ཀྱིས་ཤེས་དགོས་པ་རེད།
風は決して、靜でないその事は汝は知らねばならぬ。

6. ཀློ་སལ་ལན་ཀ་མ་ལྷ་ཡི་ནང་དུ་ཆོས་ཀྱི་ལན་ཁག་ཤེད་པར་ཐོ་བ་ཤེ་ངས་གསོན།
僧學校の五日の　中に　論戰を聞くであらうと云ふことを私は聞いた。

7. གངས་རི་ནི་ཤེ་ཆེ་ཐེ་ཀངས་ཀ་ནི་ཏེ་ཀ་ཁམ་ཤད་དུ་ཀྱི་ལས་ཐེ་ཁ་ཞེས་ཀྱི
雪山　寶として　雪山　ﾁｾは、印度語の　ﾀｶ即ち　寶稿の意
ཀཏ་ཀ་ཏ་ཡ་ནི་ལངས་ཀ་ཆེ་ཆ་ཡ་ཐུང་ཆེ་ཁ་ཏ་ཡ་ཡིན།
泉と云ふ其處は　佛陀　毘盧遮那(大日如來)の居住所である。

8. ཅི་ལ་ཡོད་པའི་ཡོན་ཏན་ཀང་ཡིན་ནམ་ཅི་ནི་ཡང་ཡང་ཐེ་ཚོམ་ལ
人が有する所の才能の何であらうとも、それは度々　用ふる事に依て
ངོར་ལན་ཆགས་པ་ཡིན།
善くなるのである

9. ཅི་ཕྱིན་པས་ཁོའི་སྙིང་ཀ་ལ་ཤེས་པ་ནི་ཅི་ཅི་ལ་ཆོ་ཕྲེ་ཆ་ནི་ཅི
愚人は　彼の心臓に云ふ　それは　人間には　後生はな
ཤུ་ཀ་ཆེས་པ་ཡིན།
いと云ふことである。

10. ཁོད་ནི་ཁོད་ར་ང་ཀོ་ནི་ཏེ་ཤ་ལས་ཕན་ཚུན་ཀྱི་ཆེས་པར་ཐེག་ཆེ
沙は沙自身の　真實を　知る主をなせよと云ふ所の　教
ཀ་ནི་ནོ་ཏ་ཡ་ཆེན་པོ་ཀས་ཀ་ཡ་ཡིན་ནོ།
誥それは　大聖人　が　　說かれしものなりけり。

11. ཁོ་ནི་ཐུང་ཆུང་ཆུང་ནི་ཆ་ཀཱུ་ལ་ཀ་ཤས་ལ་ཁ་ཅིག་ཡོད་ཡིན།
彼は　甚だ小膽(性慳)なることを除いては性質は善良である。

二八七　形容詞文句とそれの結合

形容詞文句は或他の文句に於ける名詞或は代名詞に對して、形容詞の作用をなすものなり。

形容詞文句は唯だ一種の結合語に依る。それは形容詞文句と形容せらるゝ名詞との間に、屬格語尾なる助辭を入れて両者を結合するなり。例せば以下の如し。

ད་རིང་ཉིན་ཏེ་ཐ་ཡི་མི་ཆགས་ཀ་ནང་ན་བདེན་པའི་དཔང་ཐོ
今日此に来たる所の人等の中にて真實の立證
པར་གྱུར་པ་ནི་ཁོ་ཅིག་རང་མ་རེད།
者となりし者は一人のみではない。

།ཕྱང་ཀྱི་ལམ་མི་མདའ་ནུབ་པའི་ས་དེར་བདག་ཅག་དེའི་རོ་ཁོ་ཐོས་པོ།

狼 ゐ 鉄炮を打たる所のその地ゐ 我等はそれの尸骸を見た。
(打ちたる)

初の文の「今日此處ゐ来た所の」と云ふ文句は、人等と云ふ語を形容したるを見るべし。又次の文の「狼ゐ鉄炮を打ちたる」と云ふ語は、「その土地」と云ふ語を形容したる文句なることを見るべし。

二八八　関係代名詞の省略

関係代名詞が継続的でなく、目的格として制限的意義なれば、屢々省略せらるることあり。以下例文中括弧内ゐある語は省略せられたるものを假りに入れしものなり。

(གང་) དཀའ་ལས་ཆེན་པོ་བྱས་ཏེ་མི་ཐོབ་པ་(དེ)ཡི
(---) 大困難をすること なしゐは 得られない(所の)

བཟའ་མི་ནི་ཁོས་དགོས་པ་རེད།
食物 を 彼は求めてゐる。

二八九　形容詞文句の文例

以下ゐ挙ぐる文例より、形容詞文句を抽出して、それが形容したる所の、或他の文句中の名詞或は代名詞をも指示すべし。もし関係代名詞の省略せられたるものあれば、それ等を補充すべし。

1. ཟླ་མ་འགའ་ཞིག་གི་འོད་ཟེར་ས་འདི་ལ་ཐུག་པའི་ཐར་ཏུ་ཁོ་
或星 の 光線がこの地ゐ達するまで

སྟོང་བཅུ་གཅིག་ཙམ་ཞིག་ཏུ་ཁོ་ཚུ་ཐུག་ཏུ་ཕེབས་པའི་འཕྲིན་ལས་ཀྱི
一 千 年 程 経ることそれを現し起ふ所の 器 械

དང་རྩིས་ནི་རིག་གནས་མཁན་ཁོ་ཚུ་ཀྱིས་ཐུག་ཏུ་ཕུལ།
ゐ 計算を 科 學 者 が 發見成就した。

2. བདག་ཅག་གནས་པའི་ཁང་པ་འཕྱར་ཟིན།
我 等が 住する所の 家が 仆れた。

3. ཁོས་ཞབས་ཕྱི་ལྟ་བའི་མི་དེ་ལས་ཐོབ་པའི་ཀོང་ལར་ཁ་ཟས་ཀྱིས་ཁོ་ཚུ་ཡོད།
彼が仕へ奉つた所の其人から得たる恩恵(給金)ゐ依て彼は生活する。

4. ཤེལ་ཟིན་ལྟ་མ་མེད་ཀར་བ་ཐམས་ཅད་ནི་གསེར་མ་ཡིན།
光明 無礙 と 照す 総ての物が 黄金 ではない。

5. བོད་ལྷ་བཙུ་ཅམ་ཕྱི་མར་རྗེ་ཅོང་ཁ་པས་དགོན་པའི་དགོན་པ་ཕྱི་དགའ་ལྡན་ལ

五百 年 程 以前ゐ 聖宗喀巴(ツォンカーパ) が 建てた所の 寺、 ガンデン 歡喜 其 ゐ

ངས་ལོ་སུམ་བཅུ་རེ་ལྟར་ཙམ་ཕྱི་མར་མཇལ་ཕྱིན།
私は三 十 七 年 程 前ゐ 参拝した。

6. ཁོང་ཁྱེད་ཀྱིས་ང་ལ་ལན་ཕྱིན་ཡོད་པའི་ཚིག་ཆ་དེ་ནི་ངས་པར

なに汝 が 私 ゐ 誘 て ゐる所の 談 話 それは 確 か

དུ་བདེན་པ་མ་རེད།
に 眞實ではない。

7. མི་ཞིག་གིས་ཁོ་ཡི་གྲོགས་ཡོན་ལ་བརྗོད་ལ་བཤད་དེ་འདྲའི་མི

或人 が 彼の 用 友 ゐ 虞 言を言ふ 如き その様な人

ནི་ནམ་ཡང་ཐེབ་ཐུ་ཡིན།
は 何時でも 棄てらるべきものである。

二九〇　副詞文句

副詞文句は或他の文句ゐ於ける或動詞、形容詞、或は副詞に對して、副詞の作用をなすものなり。

副詞文句は属位接續詞の何れゐ依ても、引用せられ得るものなり。但し同位に用ふる ནས་ཏེ་ の三接續詞を除くなり。

二九一　副詞文句を有する文の分解

属位接續詞の意義細目	主　文	副詞文句
原因	ཁོས་དགོས་དོན་ཡོད། 彼はその目的を成さう。	ཅིའི་ཕྱིར་ནམ་དེ་དགའ་ལས་ཆེ་ཆུང་ལས། なぜなれば彼は大苦行をしたからである。
結果	ཁོས་ཤུགས་དགའ་ལས་ཆེ་ཆུང་། 彼はその様ゐ苦行をした。	ཤེས་ཀྱིས་ཁོ་ཐར་ཐུག་ཏུ། それゐ依て彼は解脱した。
目的	ངས་ཟན་ཟས་བྱས། 私は食を食ふた。	ཤེས་ནི་ནད་ཟས་ཀྱི་ཕན་ཡོན་ཕྱིར། それは病氣快復を目的するからである。

細目.	主　文	副詞文句
條件.	བདག་འདི་བྱེད་ཡོད། 私はこれを作すであろう。	གལ་ཏེ་ཕྱི་མས་ཨོག་གནང་ལ་ཐུགས་ཤོར། もし上人から許可せらるゝならばである。
反對.	ཁོང་མི་དཔོན་ཡིན། 彼は正直な人である。	འོན་ཀྱང་དཀའ་ཡོད། けれども貧乏人である。
比較.	ཁོས་ [illegible] ཁ་ཏོན་ [illegible] 彼は　沖を多く要するなり。	ངེད་ལས། 我れより
應應狀態.	[illegible] ཁོ་ [illegible] ཨ་ [illegible] 彼等は收穫をなすであろう。	[illegible] 人等は藤いたなかくを…
時間.	[illegible] 日は毎日　照すであろう。	[illegible] 世界が破壞するに至るまで。

（上文中、終の二文を抜て出し、此又、或は〇、〇又などと誌したらは讀方の順序をして、文を誌す時もこの讀方の順序を順ふて誌すべきなり。こゝは副詞文句を示すための便宜上順序を代へて置きしものなり）

二九二　副詞文句の文章の分解すべき文例

以下に學ぐる文例中より、副詞文句を抽出すべし。次に何の語、或は何の文句が、如何なる語に依て修飾せらるゝか、又如何なる副詞的關係が、それに依て表されたるかを示すべし。

1. [illegible] ཡིན་ [illegible] ཁ་ [illegible] ཡ [illegible]
人等が或仕事を作してゐることそれに依て彼等は
[illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
生計を得せしめらる。

2. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
汝が懺悔をするでなければ我は汝を打つ
[illegible]
であらうぞ。

3. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
何ほど私がなしたそれ程彼は汝を愛して ゐる。

4. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
猫が去つた時には鼠は跳び戲れるであらう。

5. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
老人は注意して徒歩で歩んでゐる。その樣は
[illegible] ཡ [illegible]
せなければ彼は仆れるであらう。

6. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
彼はこんなに長く思惟を實修した、その樣な大目的を得た。

7. [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible] ཡ [illegible]
元國は奴隸となるよりは　比丘を支配する
[illegible] ཡ [illegible]
方が善いのである。

二九三　雜種文について

上述せし所の單文、聯構文、複文の三種が雜然と集れるものを雜種文と云ふ。以下に分解せらるべき雜種文の例を學ぐべし。

① [illegible] ② [illegible] ③ [illegible]
印度の總督太守なる彼は子パール主宮の集會に著いて
[illegible] ④ [illegible] ⑤ [illegible]
大聲にて子パールに　會衆に對して　說明して曰れた
[illegible] ⑥ [illegible] ⑦ [illegible]
と言はれた。それは猫獸虎をどのやうにして、それの惡度
[illegible] ⑧ [illegible] ⑨ [illegible]
なる性質を急に變化出來る事と　それが無害の動物に
[illegible] ⑩ [illegible] ⑪ [illegible]
ならしめる事と　それが怯懦なる鹿などを殺すよりは
⑫ [illegible]
それ等と遊戲せしむべく教てるやうなつた方法も
[illegible]
それである。

二九五　分解せざる雑種文の例

以下は煩雑なる文を、前項の表に準じて分解すべし。

ミラレパ傳、第者父の臨終節

ཡང་ཡང་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁོ་ལ་ཕ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ།　ཁ་ཅིག་ལ་ཕ་ཡ།

又、ある時父上を別れて、　上人さま、　初め父上を別れて

ཕ་ཡ་ཅི་ཞིག་ཟ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ།

為に御薬を多く當められたことは私達が其の様に御愛りまし

ཕ་ཡ་ཡ།　ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁ་ཅ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ　ཡ་ཡ

たかを申上げたので、　私が七歳ほどの時、　父上に

ཕ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ　ཁ་ཅ　ཁ

師や　弟者などを　愈へないと言って　集めた。

ཡ　ཁ　ཁ　ཁ

ものをもちいるように、ていねいにかんがえるべきである。　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

ཐོས་པའི་ཚེ་ལེགས་ཆུང་ཀུན་ཚམ་ཚམ་འཆོར་བ་དང་། ཡབ་ཁུལ་ཁ་ནི་ལ
聞いたクンチュンの小心な人は皆 涙を流して 伯父と伯母と

ཁྱོ་ཀ་ལབ་ཅིང་ཇི་ལ་ཐུང་ཐུང་འཇོམ་ཚེ་ཐུ་ལ། ངེ་ལས་ཚད་ལ་ལུགས་ཡོད
隆只が喧しく言っても 憐れ憫しがった。我母子の業障のみを

པ་ཅང་ཕལ། ཡབ་ཚལ་ཡབ་ཀྱི་ལག་ཆོ་ཅུ་ལ་ཚོ་ལ་ཅུ་ཚོ་ཅོ
與へたので、母は伯母子ツェリ(姪)繼デンではない 慶モ

ཐུ་ལ་ཕ་ཀ་ཅུ་ལ་ཅུ་ལ་ཐལ་ལས། ཡབ་ཀྱི་ལ་ལ་ཅུ་ཚོ་ཅུ་ཚོ་ཅ་ཀ་ལ།
庶 遮 であると云ふたので、伯母子ツェモ ツェ デンと名がついた。

ངེ་ཅུ་ལ་ཁ་ཐེ་ཀ་ཐ་ལ་ལ་ཅ་ལ། ཚ་ལ་ཕ་ལ་ཅ་ལ་ཡ་ཐ་ལ
その時世間の諺 子 主人でない者を主人とすると主人の門犬は

ལ་ནོ་ཐ་ཅ་ལ་ནི་ཅ་ཅ་ཚ་ལ་ཐ་ལ། ཐ་ལ་ཚ་ལ་ཅ་ཚ་ལ་ཐ
放れれると云ふことは我等母子 子 起つた。昔はミラ セタ ラグ ツェン ツェン

ལ་ཐ་ལ་ལ་ཅ་ལ། ཚ་ཅ་ལ་ཐ་ལ་ཐ་ཅ་ཐ་ལ་ཐ་ལ ཐ
が居られた時、人は貴賤総べて私等の機嫌の善、悪しを見た

ལ་ཅ་ལ། ཐ་ཅ་ལ་ཅ་ལ་ཐ་ལ ཐ་ཅ་ལ་ཅ་ལ། ཡབ་ཀ་ཅ་ཡ
のであって、後は有財主 の情態となって、伯父と伯

ཅ་ལ་ལ་ཚ་ཅ་ལ་ཅ་ལ་ཐ་ཐ་ཐ་ཐ་ཅ་ལ།
母の機嫌の善し悪しを見ることになった。

二九九 生母の困難と父セー両親の同情

ཡབ་ཚ་ལ་ཅ་ཚ་ཅ་ཚ་ཐ་ལ ཐ་ཅ་ལ ཐ་ཅ་ལ ཐ ཐ ཐ

ཁྱད་པར་དུ་ཡབ་མི་ལ་ཁེས་རབ་ནུས་མཆོག་ཐུགས་ཀྱི་གཤེགས་ཚར་གྱིས་

特別ゐ父上ミラ・セン ラン・ギャン ツェン 逝去せられた時遺

ཆེས་ཀྱི་ཡིག་ཆུང་ཡོད་པ་ནས་ཟོས་ཏེ། ཕཱ་ཏུ་དང་ཡུ་ནི་ལ་

言の書ゐ記憶ある人々を呼んで、伯父と伯母とゐ

ཤ་ཁྲག་བཏགས། གཕན་གཅུག་ཕྱོགས་ཡོད་པ་ལ་ཁ་ཅུ། ལྟོ་ཕྱོགས་ཡ་ལ་ལ།

胴肉を供へ、外ハ脱肉を持ち者ハ脱肉、切肉を持ち者ハ切肉、

ཆང་དཀར་ཡོལ་ཀྱི་ཁ་ཡང་ཆོ་དང་བཅས་པའི་ཁྱོད་ཆོ་བཅང་ཡོ

酒は陶器(大林)の祝福祝壽を伴ふ所の良好なる饗宴を

དྲངས་ནས། ཕྱིས་ཁ་ཤས)

開いて 開けり。次ゐ、

三〇二 生母の席上雄辯

ཡབ་མས་ཁྱལ་ཀྱི་དབུས་ལྟ་ལངས་ཏེ། ཅོ་ལ་ལོ་ཁས། ཕྱ་ཁྱེས་པ

母は列座の中央ゐ起つて、オー皆様、子が生れた

ལ་ཚོང། ཆང་ཏུངས་པ་ལ་ཁ་ཅམ་ཕྱ་བར་ཁ་དང་ལས། ངས་ཡང

ゐは名、酒宴ゐは談話と云ふもがありますから、幸も亦

ཁ་ཅམ་ཆུང་ཁ་ཅམ་ཅིག་ཁ་ཏོང་ལ་ལེན་པས། ཡབ་ཚ་ལ་ཁོས

談話を少しく致したいので俳座ります。されば、父上ミラ・セン

རབ་ནུས་མཆོག་ཐུ་ཐིམ་ཁར། ཞལ་ཆེས་ཀ་ཤད་ཡོད་ཀྱི

ラブ・ギャン ツェン、亡くなられた時、遺言を說かれたことを記憶ある所の

ཚ་ཁག་ཅིག་པ་ཡབ་ཕ་ཡབ་ཁོ་ཆགས་ཏེ། ཕ[ཕ]ཡ[ཡ]ལ[ལ]ཁ[ཁ]ལ[ལ]ཁ[ཁ]ལ[ལ]ཁ[ཁ

ཕྱག་ཨདོ་ཁ་ལག་ཀྱིས་ཆགས་པར་གསོན་པ་ཏེ་རང་ཡིན། ཡང་
尼 ホ ね 母 ど も を 平 気 で 殺 ない で 養 ふ た の は 我 で ある。 又

ཆོ་ཏན་ལ་དབང་བསྐུར་ནས་ཆུ་ལ་ཐུལ་ཏེ་ཕྱིན་ཏ་ཀ། (ホ ど も 皆 樽 を 沒 べ る 通 り 沈 む と 云 ふ 意)
悪 人 ま 権 力 を 與 へ ら れ る 樽 を 沒 か せ た と 云 ふ こ と は、

འདི་ལྟ་ལ་ཅི་ཡིན་ཞེས། ཞེས་ཟེར་ཏོ།
こ ん な 事 を 云 ふ た も の で あ る と 云 ふ た。

ལུང་ཐུང་ལ་ཏེ་ཁ་ལས་ལངས་ནས། ལེ་ཁོལ་ཁ་ཏོག་ནས། ཐུ་ཀ་ཐུགས།
靈 息 で 座 を 突 然 起 ち 上 っ て、 彈 指 を 打 ち、 褌 を 捲 き 上 げ、

ཀུན་པ་ཁ་ནས་ནས། ནན་ཏེ་ཁ་ལས་ཀྱང་ཁ་ཅིག་ཡོད་ཅེ་ན
足 を 踏 み 鳴 し て (云 ふ た) 全 く 行 か ない な ら 家 も 亦 我 が

དགའ་ཡིན། ཁོ་ལྷུད་ཀྱིས་ཕྱིར་ཕྱིན་ཐེ་ཚོམ་ཅན་ཁ་ཏགས།
物 だ か ら、 貞 心 知 らず め、 出 て 行 け、 と 云 ふ て、 母 を 馬 鞭 で 打 ち

ངེ་ཚེ་ཁོ་ཀ་ཏེ་ལུ་ཐང་ཀྱི་ལྷུ་ཀ་ཀིས་ཁ་ཏགས།
私 等 兄 妹 二 人 を 柚 の 鞭 で 打 つ た。

三〇四　生母の哭泣

ཅི་ཞེ་ན་ཡང་ཡིན། ཡབ་ཚེ་ལ་ཁེས་ར་ནི་ཆུ་ལ་ཆགས་ནི། ངེ་ཚེ
そ の 時 母 は (云 ふ た)、父 よ ミ う 妃 ラ ブ ベ ン よ、 妻 等 母 よ の

ལས་ལྟ་ཁོ་ལ་ལ་ཀུ་ཀ་ལ་ཐུ། ངེ་ཚེ་ཏེ་ཁ་ནས་ཕ་ལ་ཐ་ལ་ཁ་ཏ
運 命 を 御 覽 下 さ い。 私 は 私 ど も で 墓 穴 か ら 見 る と 仰 し や つ た 夫

ཏ་ལ་ཀ་ལ་ཁ་ཏ་ནས་ལ་ཐ་ཀ་ནང་ལ་ཁ་ཏ། ཏ་ཁ་ལ་ཁ་ཀ་ལ་ཁ་ལ་ཀ
令 御 覽 の 時 が 來 ま し た と 云 ふ。 泣 き 仆 れ て 號 を ふ り な

ཁ་ལ་ཅ་ཐ་ལ་ཏ། ངེ་ཚེ་ཁ་ཏ་ཀ་ཏ་ཀ་ཁ་ཏ། ནམ་ཁ་ནང་ཏ་ཁ་ཁ
し て ゐ た。 私 等 兄 妹 二 人 は 時 の 勢 い 泣 か ず ゐ

ལ་ཁ་ལ་ཐ། ཡ་ཁ་ཏ་ཀ་ཁ་ཁ་ལ་ཏ་ཁ་ཁ ཁ་ཏ་ཁ་ནས་ཁ་ལ
られ な か つ た。 叔 父 は 伯 父 ま た 子 が 多 く あ る の で 歓 喜 が

ཏ་ནས། ཁ་ཁ་ཡ་ལ་ཁ་ངེ་ནང་ལ་ཏ་ཁ་ཅ་ནས་ནི། ཁ་ནས
出 來 な か つ た。 外 ま た 村 人 の 我 等 を 身 方 す る 者 等 は 母

ཁ་ཏ་ཆ་ཁ་ཁ ཁ་ཁ ཁ ཁ

第五章 文章の構成

三〇六 文章構成について

文章の構成 ཡིག་ཀློག་ཁ་ཕྲད་ནི། は、部分的の言語或は文句を一の全体なるまで、結合する方法を云ふ一なり。されば全体をその部分に分て分解する方法とは全く反對のものなり。

文章は單文、聯構文、複文の三種あり。單文とは少くとも、一の主辭と一の賓辭と結合して作るものなり。例せば

ཏཱ་ཁ། 馬が走る。　ཏཱ་ནི ta-ni 馬と云ふ語は主辭なして、ཁ། 走る と云ふ語は賓辭なり。主辭は大抵名詞なり。或は名詞の作用をなす他の語、或は語句の如きも主辭となることあり。賓辭は動詞なして、助動詞、副詞、の如きも賓辭中に入れなる。

三〇七、他動詞を用ふる文章構成

動詞の自動なるものは、前例の如く、馬が走る、と云ふだけにて、その意義完備せるを以て、別に他にその目的となる語なしと雖も、其の意義判明せり。然るに他動詞に至ては、單に ཏཱ་ཟ། 馬が食ふ と云ふと雖も、何を食ふかその動詞の目的となる語を云はざれば、その文意は通ぜざるなり。もしこの文に食ふと動詞の目的語なる ཟས། 或は ཤན། 草或は ཟན། と云ふ語を入る、時は、その意の完備すること以下の如し。

主辭、動詞、賓辭。　ཏཱ་ཟ་ཡིན་ནོ།　馬が草を食ふた。

主、目、賓。　ཏཱ་ཟན་ཟོ།　馬が豆を食ふ。

主、目、賓、　ཏཱ་ཟ་ཡིན་ཀྱི།　馬が草を食ふであらう。

以上は過去、現在、未来の三時に對する最も簡なる單文の例なり。

三〇八 主辭に形容詞、句を用ふる單文構成

主辭に形容詞或は形容語句を用いて單文を構成す。形容詞を

用ふるものは、དཀར། 白いと云ふ語を、ཏཱ། 馬或は པད་མ། 蓮華と云ふ語に結ぶ時は以下の如くになるなり。

ཏཱ་དཀར་ཡོད་ཁ་ཕྱིན།　白い馬が走つた。

པད་མ་ཡིན་ནམ་ཡང་ཕྱེ།　白い蓮花は開いてゐる。

དཀར། は純形容詞なして ཡོད། は白いものの義なして、形容詞兼名詞なり。詩句などには ཏཱ་ཡ། 白馬と用ふることあれども、文章上熟語として、ཏཱ་ཡ། として、白馬の義に用ふるものと知るべし。

形容語句を名詞に結ぶ時は以下の如し。

1. ཁ་ཅིག་ཏུ་ཁ་ཅིག་ཏུ་ཡིད་ཀ་ཡ་ཡ་ཡ་ཏ་ཏ། ཏཱ་ཡ་ཡ་ཁ་ཕྱིན།
   迅速と 緩るき心地なるいその馬は 走つた。
2. ཤ་ཡ་ཡ་ཁ་ཅ་ཡ་ཡ་ཁ་ཅ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ། ཡ་ཡ་ཡ་ཡ
   芳香 と 赤色 の 花は 咲いた。

1、の例は迅速と緩るき心地なるいの文句は、その馬と云ふ語を形容したるものなして、芳香と赤色の と云ふ文句は、花を形容したるものなして、何れも名詞に對して、形容詞の役目をなす句なることを見るべし。

三〇九 賓辭に副詞を加ふる文の構成

賓辭に副詞或は副詞句を添加する時は

主辭、副詞、動詞。　ཏཱ་ཡ་ཡ་ཁ་ཕྱིན།　その馬は歩速して行つてゐた。

主辭、副詞句、動詞。　ཏཱ་ཡ་ཡ་ཁ་ཕ་ཡ་ཡ་ཡ།　この馬は歩速して遠かに走つた。

ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ།
白蓮華は、泥に染れて汚染せられずして咲いてゐる。

ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ
飛行機は 鷲より長い距離を急速に飛び能ふ。

これ等の例に依て副詞或は副詞句が、動詞に如何に用いて、文章を構成するかを知るべし。

三一〇 二單文を一單文にする法

分詞を用ふることを依て、二の單文を一單文を構成することは以下の如し。

離　ཁོས་སྟག་ཁོང་བར་ཟློག་ཅིང་། ཁོས་ཐོན་སོ།
　　彼は虎が来ることを見た。彼は逃げた。

合、ཁོས་སྟག་ཁོང་བར་ཟློག་པས་ཐོན་སོ།
　　彼は虎が来ることを見たので逃げた。

以下の挙げる例を分詞を用いて單文を構成すべし。

離、ཁོས་ཤིན་ཏུ་ལས་ཀ་བྱས་སོ། ཁོས་ཉམ་ཆུང་ངོ།
　　彼は甚だ仕事をした。彼は疲労した

離　ཁོས་དེའི་རལ་གྲི་ཕབ་ནས། ཁོས་དགེ་ལུགས་ཀྱིས་སོང་།
　　彼はその剣を捨てた。彼は敵を對して走った。

三一一　一文を絶對句として單文の構成

二文の中において、一文を絶對句とすることを依て單文を構成することは以下の如し。

離　ཉི་མ་ཤར་ཞེས། རྨུག་ཁ་ཡང་ལས་སོ།
　　日は上った。霧が消へた。

合　ཉི་མ་ཤར་བའི་རྨུག་ཁ་ཡང་ལས་སོ།
　　日が上った所で霧が消へた。

以下の例を絶對句を用いて、二文を單文を構成すべし。

離、འཇིག་ཤེས་ལ་ཕྱི་ཆུ་ཐམ་ཕབ་ཅིང་། དེ་མཐོང་ནས་ཐམས་ཅད་ཀྱང་ཚིམ་ཕྱིན།
　　釋言を印を捨てた。それを見て皆満足した。

離、ལྷ་ཁང་ཕྱག་ཨཱ་ཏན་ཏུ་ཆེ་ཤར་ནས་ཕྱིས་ཁ་ཤར་ལ་ཕྱིན་ཏེ། ཁ་ལས་ཀ་ཁ་ཁ་ཤ་ལ་ཕྱིན།
　　負債した者等は零落した。貸した銀行は破産した。

三一二　不定詞を以て二文を單文を構成す。

不定詞を用ふることを依て、單文二を一單文を構成す。例は、

離、ཁོ་ལ་བུ་མོ་གསུམ་ཡོད། ཁོས་མོ་རྣམས་མཆའ་ལས་ཀྱིས་ཕྱིན་ཏུ་ཕབ།
　　彼を娘が三人ある　彼は彼女等を嫁を遣らねばならぬ

結、ཁོ་ལ་མཆའ་ལས་ཀྱིས་ཕྱིན་ཏུ་ཕབ་ཅིང་ཁ་ཤ་ལ་ཕྱིན།
　　彼は嫁をやることを要すべき娘が三人ある。

以下の例を不定詞を用いて、單文を構成すべし。

離　ཁོས་རང་གི་ཁམས་ཉམ་ཆུང་ཞིག། ཁ་ཅིག་ཁོ་ལ་དཀའ་ལས་ཆེ་ཤོས་ཡོད།
　　彼は自分の健康を失ふた。これを依て彼を多くの困難が童つた。

離、ཁོས་ཐུན་ཚོགས་ལ་ཚེགས་པ་ཤེས་ཀོན་ཏེ་མ་ཐུག། ཁོ་ལ་ལག་ཁག་ཤས་ཆུང་ངམ་ཅི་ཡིན།
　　彼は試験を善く準備が出来なかった。彼に十分な時間を得なかった。

三一三　同位名詞句を以て二文を單文を構成

同位名詞或は同位名詞句等句を用ふることを依て、二文を單文を構成するなり。例は以下の如し。

離、ཁོས་ལྷན་ཁག་ལས་ཐོན་ཡོད། དེ་ནི་ཤིན་ཏུ་ཆེ་བའི་ཆད་ཡིན་ལས།
　　彼は負債者から逃げた。それは甚だ不實の業である。

合、ཁོས་ལྷན་ཁག་ལས་ཐོན་པ་ནི་ཤིན་ཏུ་ཆེ་བའི་ཆད་ཡིན་ལས།
　　彼は債權者から逃げたのは甚だ不實の業である。

以下の例を同位名詞或は同位句を用いて、單文を構成すべし。

離、ཀུ་ཤར་ཏ་ལ་ཅན་ཀྱང་ཅང་ཀུ་ཞེས་པ་ཡིན། དེ་ནི་ཤོ་ལ་ཏ་ལ་ཅན་ཀྱི་ཁ་ཟས་ཡིན།
　　支那語ではツァン、チェン、ツン、ち(文成公主)と云ふ一のである。それは西藏語ではキャー、サー、コンチョ支那后、公主、

離、ཀ་ཤ་ཏ་ལ་ཅན་ཡོད་ཅིང་ཆེན་ཀོང་ཆུ་ཁ་ལ་ཀ་ཁ་ཤ་ལ་ཅན་ཀྱི་ཕྱག་ཟ་ཡིན།
　　キャー、サー、コンチョはタンチェン、コンマ、ツンの皇女である
　　支那后、公主、大唐　皇帝太宗

〃　ཁོ་ནི་ཤོ་ལ་ཏ་ལ་ཅན་ཡིན་ལ་ཐང་ཀ་ཤ་ལ་ཡི་ཁ་ཟས་ཡིན།
　　彼女は西藏の主、スロン　ツァン、ガム　ポの　王后である。
　　宗　贊　普

三一四　副詞句を以て二文を單文を構成

副詞或は副詞句を用ふることを依て、二文を單文を構成するなり。例は以下の如し。

離、ཁོས་ཁོའི་ཐོག་ནས་ལས་ཀ་ཤ་ཆུ་ཡོད་ཀང། ཁོའི་ལས་ཀ་ཤ་ཆུ་ཡོད་པ་ཡིན།
　　彼は彼の過失等を自覺がない。彼の無自覺は事實である

合、ཁོས་ཁོའི་ཐོག་ནས་ལས་ཀ་ཤ་ཆུ་ཡོད་ཅིང་ཡོད་ཀ་ཡ་ཡ་ཡ།
　　彼は彼の過失等を自覺なかるべく事實である。

以下の例を對して副詞或は副詞句を用ふることを依て二文を單文を構成すべし。

離、 ཁོ་ནི་ཞུ་ཡིག་ཕུལ་མེད།　དེ་ནི་ཁོས་ཆེད་པར་བཤོད་ཀྱང་ཡོད།
彼は願書を上らなかった。それは彼が参詣する所の原因となった。

離、 ཀོ་བ་ནི་འཇོག་གི་ཐུ་བཏགས།　ཀོ་ཐའི་ཐེ་མ་པ་ནི་མ་ཐར་བར་ཏུག།
皮舟は漏りつゝある。皮舟の沈没は免れないのである。

三一九　單文構成雜種の文例

前記諸種の單文構成方法に依て、以下に挙ぐる所の諸文例を單文に構成すべし。

離、 ཁོ་ནི་རིག་པ་ཐུབ་པའི་མི་རེད།　འདི་ནི་ཐམ་ཅེ་ཤེས་ཤིང་ཡིན་ཡོད།
彼は賢い人である。これは彼が善く知ってゐる事實である。

〃 ཁོས་བུ་ལོན་ནས་ཁལ་ཤོག་ཕུལ་པ་ཐུབ་པོ།　ཁོའི་བུས་ནི་ཕྱིར་ཕུལ་ཞེས་ཟེར།
彼は或負債に依って苦しんだ。彼の子はそれを返すことを約束した。

〃 ཁོས་ལུས་དང་ངག་ཡོངས་བཅུང་བཏུག།　ཁོའི་ལྟེ་པ་ལས་ཤོད་ཅིག་ཟད་ཕྱུང་ཏུག།
彼は急に富者となった。彼の行為に皆驚いを抱むことになってゐる。

〃 ཟླ་གཅིག་ཕའི་ཚེས་གསུམ་ཉིན་ཐོ་ཤར་ཆགས་ཤིང་ཆུ་ཚལ་ལ་ཕར་ཏེ།
四月の(陰暦)滿月日(十五日)の朝、曉星は東に上りき。

དེ་ཅང་ཀི་ཚེ་ལངས་ཁྱད་ཀུན་ཡོད་ཅིང་ཐུགས་ཀར་ཁམས་ངལ་ནས་ཀུན།
丁度その時、佛陀に伺いる、菩薩(悉達太子)がそれを見られき。

དེ་ཅང་ཀྱིས་ཆེ་ཤར་ཐུགས་ཁ་ཏ་ཆེ་ཐ་ཏ་ཀ་ཡ་ཡ་ཡ[ཡ]ར[ར]ཕ[ཕ]ལ[ལ]ཏ[ཏ]ཀ[ཀ]ཡ[ཡ]ཡ[ཡ]ཡ[ཡ

三一八　関係代名詞によって聯構文構成

継続的意義によって、関係代名詞を用いて、聯構文を構成する例。

離．བདག་ཅག་ཁོ་བོར་ལྷ་ལར་བཏང་བ་ཡིན།
我等は昨日 ラサに出立したのである。

〃　བདག་ཅག་དེར་ཞག་མང་པོ་གཅིག་ལས་ལྷོད་ཡོང་།
我等はそこに数日間留まであろう。

合．གང་ནི་བདག་ཅག་ཁོ་བོར་ལྷ་ལར་བཏང་བ་དེ་ནི་ཞག་མང་པོ་ལས
何れは我等が昨日ラサに出立したそこに数日間
ལྷོད་ཡོང་།
留まであろう。

離．དགེ་མཆོག་ལ་ཕྱག་འཚལ་བ། དེ་ལ་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ།
稱有最勝に禮拝する。それに最勝功德を有す。

合．གང་ལ་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ་བ།།དགེ་མཆོག་དེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།
最勝功德を持たる、稱有最勝なる所の者に礼拝する。

三一九　撰擇接續詞の聯構文構成

離．མཆན་ཅན་དེ་ནི་ཕྱུགས་ཡིན་པ་འདུག། དེ་ནི་ཐུལ་ཡིན་པ་ཨ་ཡ།
その動物は羊であるやうである。それは蛇であるやうである

合．གང་མཆན་ཅན་དེ་ནི་ཡང་ན་ཐུལ་ཡིན་པ་ནི་ངེས་པར་འདུག།
何れかその動物は羊或は蛇であることは確かである。

離．ཁོ་ཏོ་ར་ཡིས་ཏོག་ལ་དགའ་ཅ་ཡིན་ནམ། འབྲས་ཀྱི་ལ་དགའ་ཅ་ཡིན་ནམ།
お前は花を好むか、果物を好むか。

合．ཁྱོད་ཀར་ཡིས་ཏོག་ལ་དགའ་ཅ་ཅམ་ཡང་ན་འབྲས་ཀྱི་ལ་དགའ་ཅ་ཡིན།
汝は花を好むか或は果物を好むか。

撰擇接續詞は གང་ or ཅི་ or ཡང་ 即ち何れか誰れかの語を用いて、二文の間に ཡང་ or ནམ་ の語を入れて構成するときは、上例に依て、ཡ誰れの用ふる例も推知すべし。

三二〇　反對接續詞の聯構文構成

反對接續詞の聯構文構成は、ཀྱང་ or ཡང་ or ཨ་ or ཁར་ の三語を

ཅོ་ཅ་ཡིན་ནམ་等の反對接續詞を以て、構成するものなり。

離．ཀུན་ནི་དཀར་ཅ་ཡིན། ཟད་ཟས་ནི་ནག་ཅ་ཡིན།
線は白く(善く)ある。心は黒く(惡く)ある。

合．ཀུན་པ་དཀར་ཡང་ཟད་ཟས་ཀ་ནག།
線は白いけれども心は黒い。

この文を答反對の意味として、合すれば以下のかくなるなり。

ཀུན་ནི་ནི་ནག་ཀྱང་ཟད་ཟས་ནི་དཀར་ (ཅ་ཡིན)
線は黒いけれども心は白い。(くある)

離．ཞི་ཟློ་ཞི་ཐུ་ཟ་ནི་ཐེ་ཚུལ་ལ་ལང་ཐང་ཆུང་ཟ་ལ་ཨ་ཐབ་ཅན།
猫上人は聲は優美にして容子は柔和である

〃　ཞི་ཟློ་ཞི་ཐུ་ཟ་ནི་ཆུ་ཆུ་ར་ཆགས་ཏེ་ཕར་ལ་ཕྱིན་ཕ་ལས་ལོག་ཐོ།
猫上人は前に跳つくと恐しく驚かされた状態で歩を立てる。

合．ཞི་ཟློ་ཞི་ཐུ་ཟ་ནི་ཐེ་ཚུལ་ལ་ལང་ཐང་ཆུང་ཟ་ལ་ཨ་ཐབ་ཅ་ཡང་ཀྱང་ཅོ་ཅ་ཡ།
猫上人は聲は優美にして容子は柔和である。けれども、
ཁོ་ནི་ཆུ་ཆུ་ར་ཆགས་ཏེ་ཕར་ལ་ཕྱིན་ཕ་ལས་ལོག་ཐོ།
それが前に跳つくと恐しく驚かされた状態で歩を立てる。

三二一　諸例規に依る聯構文構成

上に挙げし所の諸例規に準じて、聯構文を構成する例。

離．ཞི་ཟློ་ནི་ཐེ་ཚུལ་ཡ་ཨ་ཐབ།　ཞི་ཟློ་ནི་ཞི་ཨ་ཨ་ཐབ།
猫は柔和である。猫は靜謐である。

ཞི་ཟློ་ནི་ཁ་ཅ་ཡ་ཨ་ཐབ།　ཞི་ཟློ་ནི་ལམ་ཟློ་ཡ་ཡ།
猫は敏捷である。猫は非道である。

ཞི་ཟློ་ནི་ལྟ་ཅ་ལ་ཆུ་ཆུ་ར་ཆགས་ཏེ་ཕར།　ཆུ་ཆུ་ར་ནི་ཁ་ཅ་ཐ
猫の姿(現れ)に鼠が走つた。鼠はそれの穴に進入つた。

合．ཞི་ཟློ་ནི་ཐེ་ཚུལ་ཡ་ཨ་ཐབ་ཅ་ཡ་ཁ་ཅ་ཁ་ཅ་ཡ་ལམ་ཟློ་ཡ་ཡ།
猫は柔和と靜謐である。けれども、敏捷で非道である。
ཏེ་ལ་ནི་ཞི་ཟློ་ཡ་ལ་ཆུ་ཆུ་ར་ཆགས་ཏེ།　ཏེ་ཁ་ཅ་ནི
それ故に猫に現れる鼠は走て　その穴には入
ལ་ཡ།
つた。

三二二　諸例規に依て雜構文を構成すべき例

以下に挙ぐる所の單文を、前述の諸例の中の適當なる語、或は語句を用いて、雜構文となすべし。

གྲི་ཨིའི་ཐུ་མ་དང་ཚུ་ཚུ།
猫　上　人　と　鼠

ཁྱི་ཨིའི་ཆུང་པོ་ཞིག་གིས་ཚུ་ཞིག་པས་ལམ་ཕྱི་བཏང་ནས་ཐེ་ཚད་ཀྱི་ཕན་བྱུང།
老いたる一の猫が走るのを老いたる鼠に依て疲労するのである。

ཁོས་རང་ཏུ་དགའ་བའི་ཟླུ་ཐོག་པས་ཨའོ་ལེ་མང་ཆེ་ཡོད་ཀང་ཕན་ཡོད།
彼は最も好きな食物を得るに多くの思案を費した。

ཟླ་ཏེ་ནི་ཚུ་ཚུ་ཡིན། ཁོས་ཏེ་དག་ལའི་ལག་ཏུ་ཅིའི་ཕྱིན་ཐམས་ཅད་ལྟ་བྱུང།
その食物は鼠である　彼はそれらを悉く（ことごとく）掴へる仕方を発見した。（しかた）

ཁོས་ཐུ་མའི་ཆོས་ལུགས་ཅིས་ཆད་ལྟར་ལམ་ཡང་ཅི་ལར་ཡོད་ལར་ཕྱིན།
彼は上人の法儀で宗法を一致するものを正しく著てゐる。

ཏེ་ནས་ལྷ་ཁང་གི་ཁྲི་མཐོའི་ཐོག་ཏུ་ཆོ་ཅན་ལས་ཀ་ཆེ་ཆེ་ཡོད་ཀ་ཤད།
それから本堂の高座の上に音聲を大聖人の情態に似てゐる。

ཚུ་ཚུ་ནས་ལྷ་ཁང་གི་ཆོས་ཁྲིའི་ཐོག་ཏུ་ཐུ་མ་ཅན་ཡོ་བ་ཞིག་ཡ་ལམ་ཐོང་ངོ།
鼠等は本堂の法座の上に尊い上人（ラーマ）が居られるのを見た。

ཁོ་ནས་ཕྱོགས་ཐུ་ནས་ཐུ་ཆ་ཅ་ཡོ་ཆས་ཤད་ངོ།
彼等は相談して、尊い上人に拝謁を行つた。

ཁོ་ནས་ཕྱིར་ཕྱག་ཆེ་ཡོ་ཅན་ཞིག་ལ་དང་ཞེ་ལས་ཆེ་ཡོ་ཏང་ཅན་ཏེ་ཐུ་ཆ་ལན་ཕྱིར།
彼等は多く礼拝して大恭敬と供に上人に申上た。

ཐུ་ཆ་ལགས། ངན་ཀ་ཅ་ལ་ངན་ལམ་ཡིན་ཆོས་ཅ་ལ་ཏུ་ཁ་ལོན་ཡོ།
上人さま、私等に正法を説明せられんことを願います。

ཞེ་ཨིའི་ཐུ་ཆ་ལ་ཁས་ལན་ལོ། ཀ་ཡི་ཕྱི་ཏེ་ཨིའི་ཅ་ནི་ཁྱི་ཁ་ནས།
猫上人は説かれた。アー、憐れは動物鼠たちよ。

ཁྱོད་ནས་ངར་ལ་ཡང་དག་ཡར་ལེ་ཁ་ལ་ཡར་ཆགས་ངེ།
汝等　私に正しく著く見なさい。

ངའི་ཕ་ཆ་ལ་ཏ་ཡ་ཅ་ཆེ་ཡོ་ལ་ཕྱི་ཅ་ཅ་ཞེ་ཨི་ཡིན།
私の昔時は暴虐嗜殺なる罪悪者猫である。

ངའི་ཕྱི་ཁ་ཡིས་ལ་ལེགས་ཁོལ་ལོ། ངའི་ཁྱོད་ཏ་ཁ་ཅ་ཅ་ཡ་ཡིན།
私の罪悪の業に心が陷いつた。私は汝等を沢山食ふたのである。

ངའི་ཐུ་ཆ་ལ་ཕྱི་ཁ་ཅ་ཅ་ལ་ཆགས་ལ་ཆགས་ལ་ཁ་ཅ་ཅ་ཕ་ཁ་ཅ་ཅ་ཡ་ཅ་ཅ་ལ།
私は以前の一切罪悪を懺悔滅罪をした。

ངའི་ཁ་ནས་ཕ་ཁ་ལ་ལ་ཁ་ཁ་ཁ་ནས་ནས་ཅ་ཅ་ཏ་ཁ་ཏ་ཡ།
世間の業に厭離の心が起つて出家した者である。

ཁ་ཏ་ཆ་ཅ་ལ་ངའི་ལ་ཏ་ཅ་ཅ་ལ་ཐ་ཁ་ཅ་ལ་ཡིན། ངའི་ཏ་ཅ་ཆ་ལ་ཏ་ཁ་ལ་ཡ་ཡ।
お前等は恐怖戦慄する者はいつぬ私は正法のみを修める者である。

ངའི་ཁ་ཡ་ཁ་ཁ་ཁ་ཅ་ཡ། ཁ་ཏ་ཆ་ལ་ལ་ཁ་ལ་ཅ་ཆ་ཏ་ཏ।
私は学僧一純学僧である。お前等、著く見なさい。

ཆོ་ལ་ཅ་ཅ་ལ་ཅ་ཏ་ཁ་ཅ་ཅ་ཡ॥ ཆ་ཏ་ལ་ཅ་ལ་ཏ་ཁ་ཆ་ལ་ཅ་ཅ॥
一切諸法は無我なり。本来無相の法なり。

ངའི་ཁ་ཏ་ཅ་ཅ་ལ་ཅ་ཏ་ཁ। ཁ་ལ་ཏ་ངའི་ཁ་ཅ་ཅ་ཏ॥
一切世界は無常にして生れて滅する器具なり

ཆ་ཅ་ཏ་ཅ་ཅ་ལ་ཡ་ཆ་ཡ་ཡ་ཏ་ལ་ཅ་ལ་ཏ་ཁ་ཅ་ཅ་ལ་ཅ་ཅ।
大慈悲は仏陀如来の御心なり。

ཅ་ཅ་ལ་ཅ་ཏ་ཆ་ལ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཏ་ཁ॥
平等性一切諸法の自性なり。

ཅ་ཅ་ལ་ཏ་ཏ་ཁ་ཅ་ཆ་ལ་ཁ་ཏ་ཅ॥
空性を悟る事は諸法の精要なり。

ལ་ཅ་ལ་ཅ་ཅ་ཅ་ཏ་ཏ་ཁ་ལ་ཅ་ལ་ཏ॥
一切衆生の利益を思ふことは誠に緊要なり。

ཏ་ཁ་ཏ་ཏ་ཁ॥ ཅ॥ ཅ॥ ཅ

ᠪᠣᠯᠣᠨᠳᠤᠨᠠᠷᠢᠨ᠂ᠨᠢᠭᠡᠨᠳᠡᠭᠡᠴᠢᠨᠠᠷᠢᠨ᠂᠂᠂

ཁོ་ནི་ཟས་ཀ་མ་དང་བ་ཙམ་ཞིག་ཏུ་རྒྱུ་ཙ་ཙ་ཡང་བཏུང་ནས་ཡ་ཆོ་ལེ་ཤོད་ཀྱི།
彼は腹が満たないかのやうな粥のみ行つて食べてし生つた。

དེ་ལྟར་ཐུན་ཞག་ཤ་ཅ་ལ་ཞིག་ཏུ་ཞི་ཁྲིད་ཐམས་ཅད་ཀ་ཤད་ཅ་ཤ་ཤ་ཤ།
そのやうにして毎日毎日　猫　上人は説法をしてゐた。

ཤ་ཤ་ལ་ཡི་ཡང་ཀང་ཆོ་ཆ་ལ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ།
その説明も亦　何か嵐ゑ　喜ばれる譬や譬の多くをいつて。

ཐུགས་ཆེ་ཆ་ཆ་ཐ་ཏ་ཆ་ཤ་ཤ།
心底ゑ歓喜せしめてゐた。

ཆོ་ཆ་ཆ་ཆ་ལ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཞ་ཞ་ཞ་ཞ་ཞ་ཞ་ཞ
嵐等　は喜んで毎日毎日上人の説法を聞く

ཡ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ།　ཤ་ཞ་ཞ་ཞ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ
為めゑ行くことをした。毎日毎日彼等の中から一足跡

ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ།　ཆ་ཆ་ཆ་ཆ་ཆ་ཆ་ཆ་ཆ
猫されてゐた。嵐等は上人ゑ疑ひを起さないから

ཤ་ཤ་ཤ་ཤ་ཤ ཤ ཤ ཤ ཤ
殺されてゐるのを知らなかつた。

ཤ ཤ ཤ ཤ ཤ

ལན་ཡང་རེ་རེ་བའི་དུ་ཁམས་ལྟར་འདུག། དེ་ནས་ཀྱང་ལྷ་ཁང་
答へも亦各自ながらの一つの様子である。 彼等も亦 本堂

དུ་ཆུ་མའི་ཆོས་བཤད་ཐན་དུ་ཚུད། དེ་ནས་ཚེད་ཡར་ལངས།
の上人の説法を聞きに行った。 それからなくなってゐる。

ཞེས་དུས་ཆོ་ཏི་ཡིན་དུ་ཐབ་ཏུ་ཁ་ཏན་ཏེ་ཏོན་ཁ་ཐུང་འདུག།
どもの様な時は 固くなかいけれども、事實は達磨が一つなってゐた。

ངེས་ཝང་ཀྱི་ཆགས་ཡས་ཁ་ཤོ་ཞིག་ལ་ལ་ལ་ཡ་ཤ་ལ་ཐུ་ཡ་ཤ་ཀ་ལ་ཐ་ཡ།
その翌日 頭が行く時に列の順序を立てた。

དེ་ནི་ཆགས་རང་ཁོ་ལ་ཀ་ལ་ཤ་ཀ་ལ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ལ་ཏ།
それは頭自身は列の終から二番目に入れた。

ནད་ཀྱིས་ཆ་ཕན་པའི་ཆུ་ཆེ་ཁད་ཆོ་ཀ་ལ་ཀ་ལ་ཀ་ཕ་ཆ་ལ
病気で助からない老婆の前を 列の終りに

ཀཱ་ཤ་ནས་ཤ་ལ་ལ་ཐ་ཐ་ཕ།
運いて行かしめた。

ལ་ལ་ཁོང་ཁའི་ཕ་ལ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ལ་ཤ་ཀ་ཕ་ནས་ཁ་ཁ།
帰って来る時 彼も亦行きと同一にして来た。

ཆགས་ཡས་ཀ་ལ་ཀ་ཕ་ལ་ལ་ཤ་ལ། ངེ་ཆ་ཁ་ལ་ལ་ཤ་ལ
頭が定の口に着いた。 その時彼は静に後を見た。

ངེ་ཤ་ཀ་ཤ་ཤ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ཆ་ལ་ནས་ནད་ཆ་ཁ་ཤ་ཤ་ཀ
そこに猫上人は急に跳びついて病鼠老婆の口を

ལ་ཁ་ཁ་ཀ་ཤ་ལ་ཕ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ཆ་ཁ
両手を以て強めて殺したその者を見た。

ཆགས་ཡས་ཀ་ཤ་ལ་ལ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ཆ
頭は恐怖驚愕の余りに大聲を放った。

ངེ་ཆ་ལ་ཀ་ལ་ཤ་ཆ་ལ་ལ་ཤ
そして穴の中に走って逃入った。

ངེ་ལ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ལ་ཤ་ཆ་ཕ་ཆ་ཤ་ལ་ལ་ཤ
この頃 西藏国に於て大上人と名づけられる者多く居られる。

ཆ་ཆ་ལ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ལ་ཤ་ལ་ཤ
彼等此中には、猫上人の如く衣、食、住の三

ཆ་ཆ་ཆ་ཤ་ལ་ཤ་ཆ་ཤ। ཆ་ཆ་ལ་ལ་ཤ་ལ
のみ得る事を大事件と計へた。彼等の外部の現れを見れ

ན་ཤ་ཀ་ཤ་ཤ་ཤ་ལ་ཤ
は立派な御寺に居られる。 御馳走い法衣を召して居られる。

ཆ་ལ་ཤ་ཀ་ཤ་ལ
法の作業と講演もせられる。 何らから見ても真實の

ཤ
上人の如くに現れてゐる。

ཆ་ཆ་ལ་ལ་ཤ
彼等の内の實行を見ると、隠れ酒を飲む者もある。

ཆ
商利、金利(銀行)を貸す者もある。家畜を多く牧する者もある。

ཤ
婦女を秘密に置く者もある

ཆ་ཆ་ལ
彼等の正法の最勝智と慧眼がない。

ཆ
法行の精妙なる戒律の實性もない。

ཆ
彼等にあるものは偽善の外は一切信人の法である。

ལ
是の如く彼等は根本から一切衆生の利益を思いないのである。

ཤ
自己の欲望を満足する為に法の社會に這入った者である。

ངེ
それは魔の法を行ふのである。佛陀の教徒ではない。

ངེ
それ等は鼠を食ふ為に偽裝した猫の上人である。

ཤ
と様に西藏国に譬喩説が起った。

第七章　複文の構成

三二三　聯構文と複文との相異

聯構文は二個以上の獨立せる單文を、接續詞、或は關係代名詞、副詞等を用ひて結合したるものにして、それが各自の單文は、依然として獨立の意義を有せり。複文は二文以上を結合すれども、一文を主とし、他文を屬とすることに依て構成せらるゝなり。この故に屬となる文は、名詞文句となすか、形容詞文句となすか、副詞文句となして、主文となるものに結合せらるゝなり。

三二四　名詞文句として結合する複文構成

一文を名詞文句として結合するものには、ནས། ཏེ། དེ། 等の接續詞に依て引用せらるゝなり。これ等は同位格の義に於て用ひられ、或は關係代名詞に依て用ひらるゝなり。例せば ནས། 等の接續詞を用ふるものは以下の如し。

雜、ཚལ་ཏེ་ཤན་པ་ནི་ཚལ་ཏེ་ཐམས་བུ་ལ་ཁྱད་པར་ཅན་ལ་ཆགས་ཏེ་
　　瞻蔔華　は　花の　諸　　根　に於て　最勝と
　　ཏ་ལ་ཡིན་ཡོད།
　　香が　芳しく　ある。

〃　ཡང་ནི་ཡང་བ་ཡིན།
　　これは　眞實である。

合、ཚལ་ཏེ་ཤན་པ་ནི་ཚལ་ཏེ་ཐམས་བུ་ལ་ཁྱད་པར་ཅན་ལ་ཆགས་ཏེ་ཏ་
　　瞻蔔　華　は　花の　諸　　根　に於て　最勝と　香が
　　ལ་ཡིན་ཞེ་ནི་ཡང་བ་ཡིན།
　　芳しくして即ちそれは眞實である

この合文中、ཏེ（して即ち）の一語は、瞻蔔華より芳香に至るまでの文を、一名詞句とし、それは眞實であると云ふ主文と同位格なることを見るなり。同じく同位格なれども、關係代名詞を用ひて構成するものは以下の如し。

雜、ཁོ་ནི་ས་ཀར་ཕེབ་ལ་འགྲོ་ཡི་འདུག། ས་དེ་ཤུགས་ཀྱིས་ཤེས་ཡོད་ཀྱང་ཡོ་ཡ་ཡ
　　彼は何れかの地に行きつゝある。その地を誰も知つてゐない。

合、ཀ་ཅར་ཁོ་ནི་ཕེབ་པ་ཅི་ཡ་ཡ་ཤུགས་ཀྱིས་ཤེས་ཡ་ཡ
　　何処に彼は行くかそこを誰も知るものがない。

三二五　名詞句として複文構成の文例

以下に擧ぐる所の文例を一或はより多數を名詞句として複文を構成すべし。

雜、ཁོ་ནི་ཐུགས་ཏ་ལ་ཕྱིན་ཏ་ཆད་ཅེ། ཁོ་ནི་ཆོ་ཏ་ཀ་ཏ་ཅ་ལ་ཐུགས་ལ
　　彼は急に歸り來ないであらう。彼は彼のこの望を實言した。

〃　ཅ་ལ་ཁོ་ནི་ཀྱི་ཕ་ཡ་ལ་ཇི་ཏ་ཡོད་ཅ་ཤ། ཅ་ནི་ཀ་ཤ་ཀ་ཐ་ཆོ་ཆ་ཡ་ཡ་ཏ།
　　そこに彼の目的成就に何か望があるか、それが私の疑問である。

〃　ཁོ་ནི་ཀ་ཡ་ཕེབ་ལ་ཡ་ཡ་ཡ། ངས་ཆ་ཡ་ཡ། ཁོ་ཡི་ཀ་ཅ་ཡ་ཅ
　　彼は何處かに行くのである。私は知らぬ。彼の處
　　ཀ་ཡ་ཡ་ཡ་ཡ་ཅ་ཅ་ཅ་ཤ་ཡ་ཡ།
　　の用在も　それを知らぬのである。

三二六　形容詞文句として複文構成の例證

形容詞文句は制限的即ち修飾的に、關係代名詞或は關係副詞を以て、引用せらるゝなり。形容詞文句を形成するに當て注意すべきことは、關係代名詞、或は關係副詞に於ける前行詞は必ず關係語詞に近かく置かるべきことなれなり。それはこの二語の間に他語の入るべき餘地なきものなり。

形容詞句として結合する例式

雜、ཁ་ཅ་ཡ་ཀ་ཅ་ཀ་ཅ་ཅ་ཅ་ཀ་ཡ་ཅ་ཅ་ཅ
　　一つの家に一足の鷲鳥を有つてゐる。

〃　ཅ་ཅ་ཡ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ
　　その鷲鳥が毎日　黃金の卵を一つ産んでゐる。

合、ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ
　　或家に一足の鷲鳥がある所のそれが毎日　黃金の卵を
　　ཅ་ཅ་ཅ་ཅ་ཅ།
　　一つづゝ生んでゐる。

雛. བདག་ཅག་མ་འགལ་ཞིག་ལ་ལྟོས་མེད། ཁོར་ཡུག་ཏུ་ཅིག་གིས་
我等は或土地を到着せず。そこの牧者の或者が

〃 ཁོ་ཡི་ཁྱིམ་པ་རྣམས་དང་མཉམ་དུ་ཐལ་ལོ་ལས་མཐོང་མེད།
彼の家族等と一緒に坐っているのを見ない。

合 བདག་ཅག་མ་འགལ་ཞིག་ལ་ལྟོས་ཏེ་ཁོར་ཡུག་ཏུ་ཅིག་གིས་ཁོ་ཡི
我等は或土地を着いたときのそこの或牧者者が彼の

ཁྱིམ་པ་རྣམས་དང་མཉམ་དུ་ཐལ་ལོ་ལས་མཐོང་ངོ།
家族等と一緒に坐っているのを見ない。

初の例が獨立文として、「或家に一疋の鷲鳥を有っている」と云ふ文が関係代名詞即ち"ཁོ་ and ཅི་ 所のそれが"の結合に依て、「或家に一疋の鷲鳥ある所の」と云ふ形容詞句となつて、それ即ち鷲鳥を形容しているものとなれるを見るべし。これ獨立の單文が関係代名詞に依て形容詞文句となれるものなり。次の例もこれに依て準知すべし。

三二七 形容詞句として複文構成の文例

以下に擧ぐる所の例文を、形容詞句として複文を構成すべし。

雛 ཁོ་ལྷམ་ཐུ་ཐེ་ལས་ཀྱི་ངོ་བོ་ཁག་ཅིག་ཀྱང་ཆགས་པ་ལ་ལྟ་ཏེ་པ་ཐེ་ལས་ཤེས།
三十年以前にはその人の身の風格を誰も讃歎してゐた。

〃 ཁ་ཅིག་ཁོ་ནི་ཆེ་ཤས་པ་དང་ཁེངས་པ་དང་ཁོན་ཏེ་ཕྱི་ཁ་ཁྱོད་ཡིན།
その時彼は美麗にして きびきびしたる若い 學生である

〃 ད་ལྟ་ཁོ་ཡི་ལུས་ནི་ཆུས་ཤ་ཏན་ཏེ་ཁ་ཅར་ཀོལ་ཤ་ཅན་ཡོད་ཅིང་ཡོད།
今は彼の身は老化して 痛みを伴って 爛醉漢となつた。

雛. བདག་ཅག་ནགས་ཚལ་དུ་ལམ་ཕྱིན་ལ་ཕེབ་ཡིན།
我等は林中に散歩に行つたのである。

〃 ཁོར་ཡུག་ཏུ་ཁང་པ་ཅིག་ཁང་ཀར་ཀུན་ལ་ཕེབ་ཡོད།
そこの第で囲かれた所の一の小屋に着いた。

〃 ཁང་པ་དེའི་ཐོག་ལ་ལགས་ཤིང་ཐུན་ཏེ་ལྷུང་ཡོད།
その家の屋根に 箕樹の青色を以て飾りとなつてゐた。

三二八 副詞句として複文を作る例規

副詞句は副詞の義を用ひらる。関係代名詞或は副詞、或は

從續的接續詞に依て引用せらるゝなり。

從續的接續詞に依て複文を構成せらるゝ例式

雛. ཁོ་ཚ་ཏི་ལུ་ཞིག་ཀྱང་ཏོག་ཏོ་ལ་ཐུག་ཀ་ཡོད་ཀ་ཐུབ།
彼は 忍耐も 滿足を與へることが出來なかつた。

〃 ཁོ་ཡང་ཏག་ཏག་ལ་ཐ་ཚད་ལ་ཕྱིན་ཀ་ཡོད།
彼は完全に なるべく試みることを棄てた。

合. ཁོ་ལ་ཏི་ལུ་ཞིག་ཀྱང་ཏོག་ཏོ་ལ་ཐུག་ཀ་ཡ་ཁེད་ཅ་ཡང་ཏག
彼は忍耐も 滿足 與へうる出來ないに隨つて 完全

ཏག་ལ་ཐ་ཚད་ལ་ཕྱིན་ཀ་ཡོད།
に なるべく試みることを棄てた。

三二九 関係代名詞に依て複文を構成せらるゝ例式

雛. ངའི་བུ་མདའ་ནས་ཁོ་ལ་ཉལ་ཐུག་ཀ་ཡ་ཆེ།
我の子は昨夜 眠りなかつた。

〃 ད་ཆ་ཁོ་ནི་ཚོ་ཁ་ཐེ་ཆ་ཡ་ལ་ལས་ཀ་ཡ་ཡོ།
今日彼は甚だ疲勞するであらう。

合 ངའི་ཁ་ཅིག་ཁ་ནས་ཁ་ཅིག་ལ་ཁ་ཅ་ཡ་ཁ་ཅ་ཡ་ཅ་ཅ
…私の息子で昨夜眠りなかつた所の彼は今日甚だ

ཐ་ཆ་ལ་ལས་ཀ་ཡ་ཡ།
疲勞するであらう。

三三〇 副詞句に依て複文構成の文例

以下に擧ぐる文例を、一或はより多くの副詞句を用いて、複文を構成すべし。

雛. ཁོ་ཆ་ལས་ཐ་ལས་ཅ་ནི་ཤི་ཀ་ཡ་ཁ་ཏ་ཐ་ལ་ལ་ཀ་ཡ་ཡ།
人等は續て 死ぬと 忘れられることになるのである。

〃 ཇི་ཕྱིར་ཁོ་ཏ་ནི་ཀ་ཀ་ལ་ལ་ཡ་ཏ་ཐུ་ལ་ལ་ཆ་ལ་ཁ་ཡ་ཐ་ཏ་ལ།
何故に彼等は名譽と 富とを求めることをするのか。

雛. ཁོ་ནི་ཐ་ཡ་ལ་ཇ་ཆ་ཇ་ཆ་ཡ་ཁ་ཏ་ལ་ལ་ཀ་ཡ།
彼は富裕に 次第々々に大きく生長してゐる。

〃 ཁོ་ནི་ཏ་ལ་ཏ་ལ་ལ་ཀ་ལ་ལ་ལ་ཀ།
彼はそれに滿足しなかつた。

雖、 ཡི་རྒན་པས་ནི་ས་ཕོན་ཆེ་ཡང་ཡོད་ཀྱང་ཁ་ལན་ཡོད།
人等 は 種を 多く 或い 少く 播くであらう。

〃 ཁོ་རྣམས་ནི་བག་ཡོད་པའམ་བག་མེད་པར་འདེབས་ཡོད།
彼等 は 注意するか或は不注意か 播くであらう。

〃 ཁོ་རྣམས་ནི་ཐུག་པ་ཆགས་ཏུ་རྩི་ཡོད།
彼等は 播いたん如くみのるであらう。

三三一 單文を複文とする雜種の文例

雜、 བོད་ཐང་གི་ལྷག་པ་ནི་རིམ་ཕྱིས་ཉུང་ཏུ་ཡོང་འདུག། ཁོ་ནས་ཐང་ཐང་
牧場 の 収穫は 次第に 少く なつた。 それから 広原

གི་འབྲོག་པ་རྣམས་ནི་ཁོ་རྣམས་ཀྱི་ཁྱིམ་ས་ཐོན་འདུག།
の 牧人 等 は 彼等 の 居所を 移した。

〃 ཁོ་རྣམས་ནི་ཀ་པ་ཞིག་ལ་བོད་ཐང་གསར་པ་འཚོལ་དུ་འགྲོ་འདུག།
彼等 は 何處かに 牧場の 新しいのを 捜しに 行つた。

〃 བདག་ཅག་ཀྱིས་ཏུ་ཐུག་པའི་གནས་ཚུལ་གསར་པ་ཐོས་ཡོད།
我等 は 甚だ 悲惨なる 新しい 報導 (新聞) を 聞いた。

〃 བདག་ཅག་ལམ་བར་ཐུག་ཡོ་ཐུང་བའི་ཁང་པ་ལ་ཕྱིན་པ་ཡིན།
我等 は 途中の 悲惨の 起つた 家 に 行つたのである。

〃 དེར་བདག་ཅག་ནི་ཉེ་ཏིར་ཐུག་ཀ་ཀུར་ཆགས་ནས་ཆགས་ཐང་།
そこに 我等 は 悲哀に 依て 慟哭する 者等を 見た。

〃 ཁོ་རྣམས་ནི་ཐམ་ཏེ་ཁྲག་ཡོད་ཀྱི་རྣམ་ཐར་ཁ་ཆུས་ཁ་ནས་ཁྱོ་ལ་ལན་ཡོད།
彼等 は 殺された 因者の 傳記 實話を ゴタゴタに 云ふた。

〃 ཁོ་རྣམས་ནི་ཏོག་པ་ཐོག་པར་ལན་ཆགས་ཡོད།
彼等 は 順序を 整へて 話すことが 出来なかつた。

難 ཁོ་ཀུན་ཆགས་ཁམས་ནི་ཤུ་ལ་ཐག་ཡོད་པར་ཐུབ་ཡོད།
彼は そのやうな 場合に 注意深く 行かれた。

〃 དེ་ལྟར་ཐག་ཡོད་པར་ཐུབ་པའི་མི་ནི་མང་ཡོ་མི་འདུག།
そのやうに 注意 深くする 人 は 多くは ない。

難 ཁོ་ཡི་དཀའ་ལས་ཀྱི་ཡོ་ནི་ཆེར་ཆེ་ཐུང་པར་འགྱུར།
彼の 困難 事 は 次第に 大きくなつてゐる。

〃 ཁོ་ཡི་དཔའ་བ་ནི་མང་དང་མང་ཏུ་ཐུང་ཡོ་འདུག།
彼の 要素 は より 多く 増長してゐる。

難、 ངས་ཀྱིས་ཏུ་མི་མས་ཐམ་ཡོད། ཁོས་རེ་བ་ཐམ་ཅད་བྱུག་ཡོད།
私は 甚だ 心を 惜んだ。 彼は 望みを 総て 失ふた。

〃 ཁོས་ལས་ཀ་ཐུང་ཡོད། ནགས་ཀྱི་ཚེ་ལ་ཁོས་ལས་ཀ་མང་ཡོ་ཐུབ་ཡོད།
彼は 仕事を 棄てた。 昨 年中に 彼は 仕事を 多くした。

〃 ཁོ་ནི་མཐར་ཕྱིན་པའི་ཡོན་ཏན་ཀྱི་ཁ་དཀར་ཡོར་འགྱུར་རྗེ།
彼は 究竟に 達した 徳 の 持 主 の なつた。

〃 ཏུས་ཕྱིའི་རྒྱ་བཀྲིས་ཡོ་ལ་བདག་ཅག་གིས་ཐུགས་ཏུ་ཁ་ཤད་ལན་ཡོད།
次の 二ヶ月間 に 我等は 幸福 に 安樂に 過ごした。

〃 དེར་ཇི་བཙུན་མི་ལ་རས་པའི་གཞུག་ས་ཡོད།
そこに 尊者 ミラレパの 居られた 所 がある。

〃 ཁ་ཡི་ཕག་ཕུ་ཐང་ཐག་ཏེ་ཡོ་ཡོད།
その 巖窟 も 亦 近い 距離 にある。

〃 ཁ་ཏུ་ཁོད་ཀྱི་ཁ་ཕལ་ནང་ཁོད་ནས་ཆགས་ཡོ་ཤ་ཁ་ཤི་ཁ་ཤི་ཁ་ཤ
そこに 光明の 莊嚴 と 白光 紫色 の 雪の 山山 が

ཆགས་ཀ་ཤ་ཁ་ཆད་ཀ་ནི་ཆར་ཏུ་ཡར་ཤ་ཤ།
瑠璃の 色の 中に 輝いてゐる。

〃 ཁ་ནས་ལན་ཡ་ཤ་ཀ་ཡ་ཆགས་ཀ་ཐ་ནས་ཕ་ཁ་ཡ་ཡ་ཡ།
そこに 住する 村人 たちも 自性 善良 にして、

ཆགས་ལ་ནས་ལ་ཤ་ཤ་ཡ་ཆགས་ལ་ལ་ལ་ཡ་ཤ་ཡ་ཡ།
法を 喜んで 人人にも 接待 善い 者である。

備考篇

一、文字文典創作者の精神と組織の根標

西藏文法を正常に理解せんとするには、先づ第一に西藏文字と、その文典の創造者たる、ཐོན་མི་བཟང་པོ Thonmi sambhota、トホン村人、善西藏人（トホンミー・サム・ボタ。サンボタ）。の精神と、その精神より出でたる文法的組織とを知らざるべからず。その精神とはトホンミーは梵語文典に通ぜしも拘はず、その法に依らずして、西藏語に本来固有せる所の法則を発見して、それを秩序正しく組織し、以て西藏文法を構成したる心意これなり。されば トホンミー著の文典は、西藏語の本質に固有する文法を、眞實に表明したるものなるが故に、本書を措いて他に西藏文法を説明する根標を得ざるものなり。

二　根本文典三十偈と性入法の無視と誤解

然るに従来多くの西藏語學者は、トホンミーの著なる ཕགས་ཡུལ་ཁུངས་ནས་ཕེབས་པ། 根本文典三十偈と性入法を無視するか或は曲解して、文典に辞典に多くの誤謬を表せり。これに依て多くの西藏語修學者は、西藏文を正しく構成し或は了解することを能はざるに至れり。例せば多くの文典や辞典には、前置字中性の གི と ར とは、現在詞に用ふる根本規定なるに、その多くは未来詞にするが如き、又男性前置字ད は、他動動と過去詞にのみ用ふる根本規定なるに、これ又過去詞或は未来詞として用ふるが如き、動詞の不定詞は、ཁ་ལོ་ནས་ kha lo nas go、ཕ་ལ་ནས་ pha la nas do と表すべきを、何れの藏英辞典にも、動詞状名詞なる、ཁ་ལ་ kha la go、ཕ་ལ་ pha la do と解釈したるを以て、多くの讀者を誤るが如き等、不規則雜に満ちたるもの多し。斯の如き辞典及び文典に依て、西藏文の正常に解せられざるは、固より當にその處なりとせふべし。

三　舊新両譯の文典根柢たる三十偈と性入法

今より本文典に依て解かんとする文章は、新譯時代即ち西紀八百八十年以來現今に至るまで行はれたるものなり。これはその當時、古語の既み死語に陥りたるものを除きたるを、舊譯時代の文に比して、その繼字法に復置字再置字の省略せられたる言語の二三種あるのみにして、その文法に於ては舊譯も新譯も何れも同一にて、トゥンミーの根本文典三十偈と性入法とに據るものなり。されば舊譯は勿論新譯の文章を正解するに當ても、トゥンミーの法則に隨つて為すことは、正當の事なりと云ふべし。又現代所用の文語も、著者の地方語が混入するものあることを除いて、その文法に於ては矢張りトゥンミーの法則に隨つて、誌されたるものなるが故に、これ又根本法則に隨つて説明もべきものなり。

四　文法變化の異論者の言を説破す

然るに此に一論者あり。曰く由來言語文章は時に隨つて變ずるものなり。故にトゥンミーの根本法則と雖ども、時に隨つて變ぜざるべからず。されば性字に依れる時限動相の區別の如きも、必ずしもトゥンミーに隨ふことを要せざるなり。この論者は未だ嘗て西藏の實際に於て、言語と文章との變遷に劃然として別あることを知らざるものゝ如し。彼の通俗の言語は大に變化したるものありて、特にその發音に至ては、現代の發音を以て舊譯時代のに比する時は、殆んどそれ原音を失へるもの多く存在せり。この點を主として見れば、論者の言一理あるに似たれども、それは通俗語の上より見たる一應の言にして、その文章に至ては、一千百餘年來一切藏經の文章に遵れるが如く、少しも變化なしに存在するものなり。又俗

語のその原音を失せしものと雖も、これを文字に誌して、その意を他に通ぜんとするには、必ず經書に存するが如くに、その發音と全く異なる文字を選擇して、その意義の原語を誌さゞるべからざる語の多く存するなり。例せば「成就したり」の西藏語は bsgrub-bogrubs、にして、これを文字通りに發音すれば、「ブス グルブス」とよまれども、現代の發音通りに藏字に誌さば gsol tub となりて、何の意義も表さゞる語となるが如し。されば俗語と云へども、文字に誌さば必ず古代よりの語形を誌さゞるべからず。然らざればその意義は通ぜざることとなるなり。

又俗語の談話に至ては、その發音の省略變音や、地方訛語の相異等ありと雖ども、その内部に行はるゝ法則の根底をなすものは、その文章に行はるゝトゥンミーの根本法則に依るを見るなり。斯の如き實際にある事實を知る時は、西藏の言語文章の法則は、今尚ほトゥンミーの根本法則を離れて、解することを能はざるを知るべし。

以下トゥンミーに依て發見撰述せられたる所の西藏文法の特質について説くべし。その特質に根本的のもの四と、枝末的のもの四ありて以下の如し。

五　西藏文法根本的四特質

とは以下に挙ぐるが如し。

一、字母單位の特質。　二、字母性別の特質。
三、各性各別表作の特質。四、文章撰造の特質。

西藏文法枝末的四特質

一、繼字法の特質。　二、梵語表音の特質。
三、敬語法の特質。　四、形式語の特質。

六　字母單位の特質

梵語の व्यञ्जन 子音、英語の consonant、國語の子音、西藏語の ཚིག་ཡིག 字母、明成音、と云ふに屬する字母は、二音を一字、或は一綴にて表せり。その二音を一字として表すものは、梵字ञと國字カなり。英語等は二字一綴 ka と表せり。梵字ञを分解すれば ञ＋अ＝ञअとして、國字もこれを準ずれば カ＋ア＝カとなるなり。從來斯の如き方式にて表したるものは、國語には見ざる所なれども、梵語と同じく發聲と韻字とを區別したる所より見れば、梵語方式に依るを至當なりとするなり。故大槻文彦氏は普通の母音、子音と稱ふることの根據なき事を指摘し、母音と云へるを韻字とし、子音を發成とせられたり。それは韻字はアーとかイーと韻音畫化なしと發聲し得る音なれば韻字とし、發聲とはカと發音するに當て、アの前にあるK、(ク)音は、喉内にて相擊したる半音の(ク)音にて、漸やくに聞き取り得る程度の聲なれば、發聲を名づく。この發聲Kに a、i、u、e、o の五韻が加はれば、カ、キ、ク、ケ、コとなり(ク)發聲に五韻が加はれば、サ行の五字となるなり。

然るに西藏語は發聲と韻字との區別を為さず。これ等が合成せられて明かに發音の出來得るものを以て、一字一音とせり。故に西藏語に於ける字母は二音の合成に非ずして、一音を表すものとするなり。即ち明かに發聲なし得る一音なれば ཁམས་ཀྱི་ཡིག 明成音と云ふなり。故に西藏語に於ける發音の單位は半音に非ずして一音なりとす。その一音も他語の如き合成音にあらずして、初めより完全なる一音なりとするなり。この字母單位完全一音の法則に依て、國字は韻字とならずして明成音に屬する字母となるなり。隨つて國數に屬する四韻の如きは、梵語に於けるが如くに別に獨立したる文字

符號を作つて、支分として、明成音なる三十字母に添加することに依て、諸字に於ける四韻の作用を全うせしむることは以下の如し。

四韻の符號は、　ི gigu. 發音はキクと云ふ、他字と合して「イ」を表す。

ུ shabkyu. 發音はシャブと云ふ、他字と合して「ウ」を表す。

ེ ngaengbu. 發音はンゲと云ふ、他字と合して「エ」を表す。

ོ onpu 發音はオンプと云ふ、他字と合して「オ」を表す。

これ等の四の符號が、總ての明成字に加りて諸種の音を成すことは以下に擧ぐるが如し。

ki. khu. ge. ngo. ci. chu. je. nyo.

ti. thu. de. no. pi. phu. be. mo.

tsi. tshu. dze. wo. zhi. shu. zi. yo.

ri. lu. i. she. so. hi. a.

斯の如く三十の字母に、四の韻字符號を添加して、百二十の字母を成じ、原字母と合して百五十字となることは、既に本部の文字篇に表示したるが如し。これ等は皆その支分の有無に拘らず、一音一字一單位として、言語の構成に用ひらるゝものなり。斯の如く一字母一音を一單位として、四字を明成音中に入れて、他の明成音字と共に、言語表現の構成の基礎となしたるは、西藏語に於ける一特質なりと云ふべし。西藏語の ཁམས་ཀྱི 明成と云ふ語に二義ありて、一は既に擧げし如く、明かに成じたる音の義なるが、他の一義は言語を明かに成すの義なりと云ふ。もしこの兩義を合せ用ふる時は、明かに發音を成じて意義ある言語を成すの義となるなり。斯の如く他の國語に於ける字音の成立と異なる所あるは、西藏語に於ける一の特異點なりと云ふべし。此に西藏語に於ては四字は韻字過種母音に非ざることについて、その特異の根據を知る為に一押語を擧ぐべし。

七　西藏語の阿字についての實話

自分が西藏語修學の外讓者であつた、印度ベンゴール州の西藏語大學者 Sarat chandra Dās（秋月僕）氏は、英領印度政府の命に依り、十二年の辛苦を累ねて、西紀一千九百〇二年にその大著述藏英辞典（四六倍版、一三五三頁）を出版完了した。その年の五月に自分は羅薩 Lhasa 府から脱かれ出て、同年の七月には同氏のダージリンにある別邸についてゐた。その頃製本が初めて出来上つた、同氏大著述なる藏英辞典を喜んで余に示された。自分はその大事業の完成を祝賀する挨拶を述べ、次で靜に開卷して、字母表の頁に至るや、思はず卷を措いて ཨ་ཀ་ཁ་ཀྱང ཨ་ཨ་ཡིན（嗟呼失策つた）と西藏語にて歎聲を漏らした。もうと サラット氏は何が失策つたのかと尋ねられた。そこで自分は同書の初頁にある字母表に、The five vowels とあつて、次に ཨ字等の五字が擧げられてゐるのとを指示して去るした。

西藏語に字母には韻に屬する文字は一つもない。梵語や英語や國語にある如き、獨立した韻の文字はないのである。只分として四個の韻字的符號あるのみであつて、この符號のみを以て獨立して發音の出来ないものである。恰も梵語韻字の符號の如きものであつて、必ず他の字母に附屬して、發音なし得るものなり。西藏語には斯の如き符號あるのみにて全く獨立したる韻字字母なきに、The five vowels として五字母を擧げたるは、西藏文法の根本組織に反するものなり。

更に最も大なる失策の一つは、西藏語に於ける阿字は韻字 vowel でなくて、明成音として consonants に屬するところのもので、國語にて普通に子音を表す文字の種類に屬してゐる。然るに、

を有せず、單に符號のみを以て、何れの字母にも只分として附加せらるゝに過ぎず、然るに貴著の辞典には獨立したる字形を有する ཨ字を以て、符號のみよりなる韻即ち vowels の中に入れたる事が大失策の一つであると誤いたに對して、

サラット氏は斷然として揚言せられた。

ཨ字は本質上 vowel である。梵語でも獨語でも英語でも皆さうである。獨り西藏語のみが、その埒外に出る事は出来ない。

自分は同氏の強い斷言に對して考へた。

阿剌比亞語に於ては、ཨ字は consonant であるから一概には言へない。然る所西藏語に於けも阿字は、明成音即ち consonants であることは、貴著のこの辞典の表に依ても、証明せられてゐる。この通りに貴著は阿字を vowels 中に入れてあるに拘らず、是の如く同一の阿字を以て consonants の表中にも入れてある。これは貴方は、トンミーの根本文典三十偈中にある所の經語「ཨ་ཀ་ཁ་ཀ་ཡ་ཡ་ཡ「母數は三十（字）なり」とあるに據られたものであらう。と思ふが云何ですか。

サラット氏驚愕せられて、少頃沈思默考せられた後云はれた。

成、その consonants 中に入れてある阿字は誤入である。西藏語の consonants は二十九字ときべきである。

河然らば トンミーの根本文典三十偈の「母數は三十字なり」と云はれてゐるのを貴方は否定して、何の根據に依てその說を立てんとせらるゝか

サ、字母發音の原理に依ること、又西藏文法の大家、シングルチュ、ラーマは consonants 二十九字說である事に依て トンミーの三十字說を否定する者である。

河、貴方が發音の原理と云はるゝは、梵語や歐洲語に適する原理であつて、西藏語はその原理の支配を受けてゐないものである。何ぜならばその發音の立脚點を異にしてゐるからである。鐵河上人の如きは、母字をvowelゆゑ入れて、consonantを二十九字と論者であるけれども、彼は餘りに梵語にかぶれたる結果、西藏語の特質を忘れて、彼が如く分類するに至つたものである。この分類法を相傳したる西藏の文法家も、巻西の語學者も、皆藏語中の母字をvowelとしてゐる。斯くすることに依て藏語字母の三十は成立出來ないことになり、隨つて語字の構成も字母がないから出來ないことになる。何ぜならば阿字をvowelとする時は、藏語に於てはvowelは皆符號であつて、文字はないから、母字も只の符號とせねばならぬことになる。もし母字を符號として、梵語にあるが如く「とし」の音を表すことゝすれば、この符合は他の字母に附加せられて、その發音を表し得るのみにて、獨立しては何の音も發し能はざるが故に、獨立したる字母の代用をなさゞるなり。故にアの符號「とイの符號ゑとを結合しても、何の音をも表し得ない。且つ西藏語に於ては母の符號を「とすることは、全くない事であるから固より出來ないことである。されば母の一字を明成音中から取り去る時は、四韻の構成も出來ない事となり、隨つて一切の西藏語文章は成立出來ない事となる。されば西藏語に於て、符號のみよりなき韻の中に、獨立したる文字形を有する母字を入るべきではない。トホン、この分類に隨つて、母字は明成音中に入れねばならぬものである。況んやトホンミーは約一千三百年の古昔に於て、

ཡིག་གི་ཕྱག་ལྟ་ལྟ་ཁ་ཅིག།　　།ཕྱག་ལྟ་ཁམས་ཀྱི་ཁ་ལོ་ཅན།
文字はア類とカ類との二(なり)　ア類を明かになすものイなどの四、

ཀ་ལྟ་ཕྲ་ཁ་ནས་ཕ་ཡི་བཅུ།།
カ類は三十(字)なり。

と確定せられて居るに於てをやである。西藏語に於てはこの大鐵則を否定する何物もないのである。と說いた。學問に忠實なるサラット氏は、その說を潔して承認せられた。實に承認せられたのみではない、自らこれを宣揚せらるゝに至つた事は、その後十三年を經過した西紀一千九百十五年に出版せられた、同氏の編著西藏文典集錄の序論に於て、字母表を擧げて、The alphabet of the Tibetan language comprises thirty simple letters :— として可より母に至るまでの三十字を擧げ、vowels sign として、ﾍ、ﾍ、ﾍ、ﾍ の四符號と、vowels として ཨ ཨ ཨ ཨ の四字を擧げて居られる。これに依て見てもサラット氏の如き世界的西藏語學者と雖ども、トホンミーの根本文典に隨はねばならぬと云ふことを、示すものと云ふべきである。

八　字母性別の特質

世界各國の國語中には、その單語に男、女、中の性別をなすものあれども、未だ嘗て字母の一々に、性を分ちたるものあるを見ず。然るに西藏語に至ては、自然に存する性別の外に、梵語に存するが如き言語そのものに性別を立てることは、我國語と全く同一なれども、字母の一々に性別をなすことは、我國語のみならず、各國語とも異なるものあることを表せり。又その字母の性を分つや、男、中、女の三に止まらずして、その上に甚女性、右女性の二を加へて五性とせり。

これは基字の性別として、前置字の性別には、男、中、女、甚女の四性あり。後置字は大別して、男、中、女、の三性とし、それを細分して、男を、上丈夫、中丈夫、下丈夫の三とし、中を、変化中性、二相中性、無相中性の三とし、女を純女、甚女の二に分つて、後置字を八種とせり。

九　字母の性を分つ根據

云何なる根據法則に依て、斯の如く字母を分つに至りしものなるかと云はば、ゆンミーは性入法の四法則の第三として、以下の如くに示せり。

ཇི་ལྟར་ངེས་ཀ་ཡར་ཐེག་ཅེས། །ཡིན་ནི་ཐུ་ཡི་ཐོབ་ལ་ཕྱིས།
何の様に入れ　なすかと云へば、男は　強　の　状態に依て

མཚོ་ནི་ངན་ཡར་ངེས་ཀ་ཡིན། །མཆོ་ནི་ཕན་ཡི་ཐོབ་ལ་ཕྱིས།
中(性)は強い程度に入るなり。女　は弱　い　情態に依て

ཀུན་ཏུ་ཆུང་ནི་ཉམས་ལས་ཡིན།
甚女(性)は甚弱に依るなり。

斯の如く男性字母は、その発聲の努力が強大なるものにして、中性は発聲の努力が稍や強き程度に出して、男性よりは少しく弱き発聲努力なり。女性はその努力が弱く、甚女性は甚だ弱き状態に入るものなり。斯の如くその発聲努力の強大なるものを男とし、それより幾分づゝか弱くなる次第に隨ふて、中とし、女とし、甚女とし、石女として分ちしものなり。勿論梵語に於ても、字母の音聲を強弱の二に分つことあれども、西藏語の如くに、これを性として五つに分ち、又その同じ文字が語中にある位置に従つて、即ち前置字、基字、後置字の各位に於て、その性を異にするものあるが如きは、全く梵語にもなき所なれば、これを以て西藏語の一特質なりと云ふ所以なりと知るべし

一〇　各性各別表作の特質

前記の如く、各自に字母は一々職性せられしが、偖その性は

何のために用ひらるゝかと云はば、それ等は甚だ順序正しく、動詞作用の確實度の強弱に隨ふて、強字ほど確實度の高きものに用ひられ、弱字ほどその低きものに用ひらるゝものにして、それの著しき前置字について擧げんに、以下の如し。

男性ཀ字は前置字中最も強き字なれば、確實度の最も高き過去を表す字として用ひられ、二動に於ては他を支配すと云ふ強き作用を表す他動詞に用ひらる。

中性ཀと དཀ とは最強の次にある程度の字なるが故に、確實度の漸定的なる現在詞と、動相は他動にも自動にも齊しく用ひらるなり。

女性ད字は弱き字なるが故に、確實度の最も低き未来詞と現在詞とに用ひられ、動相はその作用が自らに止まる自動に用ひらる。

甚女性ཏ字は前置中最も弱き字なるが故に、特性を表さゞれば、何れの時限にも擇ぶ所なく用ひられ、自他の二動にも齊しく用ひらるゝなり。

斯の如く前置の各字母が異なる時限や動相を表示して、動詞の意義を明かに表示せることを見るべし。而して前置字なき動詞は、後置字の性を前置字の法式に準じて、これ等動詞の意義は決定せらるゝなり。中には前置字ある語と雖も寧ろ後置字或は再置字に依て決せらるゝ語あり。例せば ད或は ན の再置字ある動詞は、その前置字の云何に拘はらずして、過去を表す語となるなり。斯の如く秩序整然として、前置字後置字の字性に隨つて、動詞の作用が表示規定せらるゝ如きは、他の國語に見ざる所のものなれば、これを西藏文法の特質の一なりと云ふ所以なり。

一一　文章構造の特質

西藏文章構造の順序は、自動詞を用ふる極簡單なる文なれば、初め主辭次に動詞にして、助辭を用ふるものは、その兩語の間に入れらるゝなり。その例以下の如し。

助辭を用ひざる文例。　ནམ་མཁའ་འགྲོ།　མེ་ཏོག་འཕྱེ།
鳥　飛ぶ。　花　咲く。

助辭を用ふる文例。　ནམ་མཁའི་འགྲོ།　མེ་ཏོག་གི་འཕྱེ།
鳥は　飛ぶ。　花　は　咲く。

自動詞にて標準語ある例。　ངའི་ཕ་ཡ་ལ་ཡོ་ཁ་ཡོ་ཡིན།
我　は　於サヤ　行くであらう
主辭助、標準語、助、動詞、助動詞、

他動詞にて標準語なき例。　ཟན（主）ལ（助詞）ཁ（目的）ཟ（動詞）ཡོ（標準語）།
蜂、密　を　頭戴す。
主、助、目的、標準語、　他動詞動

他動詞にて標準語ある例。　ཁོ་ཚ་ཁ་ཤས（主）ཁ（目的）ཁ（動詞）ཡ（標準語）ཡ（他動詞動）ཡ（標準語）ཡ（他動詞動）
彼は　使者を　彼の　兩　を　選つた。

形容詞を用ひて構成する文例。　རི（山）ཆེ（高）།　རྒྱ（海）མཚོ（深）།　མེ（花）ཏོག（美）ཡ（し）།
山　高し。　海　深し。　花　美し。

形容詞を連體法に用ふる例。　ཆེ（高）ཆ（を）ཡ（山）།　ཟ（深）ཆ（を）ཆ（海）།
高　を　山。　深　を　海。

この構造法は我國語文章の構造法に酷似するを見るべし。その名詞、助辭、動詞、助動詞等の順序に至ては、全く我國語と同一なる事を見るなり。これを彼歐洲語、支那語、南洋語の如き組織順序を異にするものに對しては、共通したる特質なりと云ふことを得べし。但し朝鮮語、緬甸語、印度語も西藏語と同一の組織を有する。

西藏語に於ては、この特質の外は、文章構造に於て、一の特長も云ふべき異點あり。それは文章を構造するに當て、言語を接續するや、單にその意義の表示完成を謀るのみならず、接續言語相互の間に於て、字性の一致を期し、音響の調和を成すことを要するなり。もし文章にして音響の調和を缺くときは、假令に文法上その意義を成すと雖も、西藏文とはなしがたきなり。此等の意義を例示する爲め、初め音響の調和せる文を擧げ、次にその然らざるものを誌すべし。

調和の文、　ཟླ（月）བ（は）ཕ（雲）།　ཨ（花）ཡ（は）ཧ（風）ཧ（吹く）ཡ（。）
月　は　雲。　花　は　風　吹く。
ロ、女　　男、男、男、男

不調の文、　ཟླ（月）ལ（は）ཕ（雲）ཡ（）།　ཨ（花）ལ（は）ཧ（風）ཀ（）ཡ（吹く）ཡ（。）
月　は　雲　　花　は　風　吹く。
女、男、　　男、女、男、女、

藏文としては初の二文は甚だ言い易けれども、次の二は甚だ言い難きを覺ゆるなり。この調和の原則は文章篇中に摘示せし如く、語と語との接觸には、男は男の語端に接し、中は中、女は女と何れも同性の語端を接合することを要するなり。前例初の二文は、男は男に、女は女に接合するを見るべし。これ翻て次の二文は、その性の異なるものゝ接合なれば西藏文とはなりがたきことを知るべし。但し音響が相互に階和する時は、必ずしも性の一致を要せざることは、文章篇に詳述したるが如し。これ西藏文は音響の調和を主とすと云ふ所以なり。以上西藏文法について、根本的の特質を擧げたれば、以下枝末的について述ぶべし。

一二　綴字法の特質

西藏語中觀念語には、必ず基字と後置字との二を含めり。その二に前置字の加はるものあれば、又後置字の後に再置字の加はるものもあり。故に原則として後置字のなき基字のみの語は存せざるなり。然れども現行辭典や文典中には、基字のみの語即ち一字のみの語が、多く存するを見るなり。但しこれ等は便宜上新譯時代に於て、省除せられたるものにして、その後置

字、再置字のなきものも、文法上それ等が有するかくの如き取扱はるいなり。例せば甚だと云ふ藏語は、舊譯時代には [illegible] と誌されしものなるが、新訳時代には、[illegible] と誌して、ra再置字のあると同様に、ra字を誌せり。若しra再置字なき現代語の例に徴へば、[illegible] の末に接する助辭はraなりざるべからず。然るにra字を用ひたるは、強端ra再置字のあるものとして、ra字が置かるゝものなりと知るべし。又 [illegible] 上人の語の如きも文法的には、[illegible] と誌さゞるべからず。只新訳時代は簡便を主とする為に [illegible] と誌せども、實際の發音はラーマーにして、西藏人は決してラマとは發音せざるなり。これ等に依て西藏觀念語には、一字一語のものは決して存在せずと知るべし。後置字を添入せざれば、觀念語は構成せられずと云ふことは、性入法の根本的基定なることは、既に明示したるが如し。斯の如く觀念語として基字と後置字との二字以上あることは、西藏語構成の一特質なりと云ふべし。

尚ほその綴字法に至ては、他の國語と異なるものあり。独の象形文字は別として、表音文字の綴字法は歐洲語の如く、文字を横に並列するか、我國語の如く縱に續けるか、何れかの一が用ひらるいなり。然るに西藏語は一綴中にこの兩法を、併用するもの、多く存在するを見るなり。例せば

基字	後置字	字母	發音	譯	基字	後置字	字母	發音	譯
[illegible]	[illegible]	rgyas	ゲエ	廣大。	[illegible]	[illegible]	sergid	ギ	幸福。

前置字	基字	後置字	再置字	字母	發音	譯
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	bogris	ブグ	殺はれき。

初の一綴 ゲエ の語は、基字に [illegible]、[illegible]、ya と縱に重なり、それに後置字 d が横に並列して、一綴一語となれるを見るべし。終の ブグ の語は b 前置字に横に基字が並び、基字に次いで横に後置字 s が並列し、

終りに再置字 s が並べるなり。而してその基字は s、g、r、の三字にして、之となる一音節とが縱に重れるを見るなり。梵語に於ては、韻字節韻の縱に重ねるものあれども、西藏語の如く縱に字母を重ねるものあるを見ず。斯の如く縱に字母を重ねるのみならず、横にも併列するを以て、是れ西藏語に於ける綴字法の一異點なりと云ふべし。

一三　梵語表音の特質

トホンミー、サンボホタ、が、西藏文字を創作するに當て、梵語を誌せる字母、ナーガリー字體を標準として、二十四字を作り、次に梵語になき所の西藏語特有の發音字母を、ナーガリー字體に準じふて、下記の六字を新作せり。それ等は

[illegible] sha。 [illegible] sa。 [illegible] a。 [illegible] ca。 [illegible] cha。 [illegible] ja。

の如し。前の二十四字と此六字とを、西藏字母三十を作れり。斯の如く西藏字母は、梵語用のナーガリー字體に準じて作りしものなるを以て、その字母は殆んどナーガリーと同一樣式に梵語を確實に表し得る特質を有せり。梵語に有する四十九の字母は、西藏文字にて表はさるゝ時は、以下の如くになるなり。

梵語字母	अ	आ	इ	ई	उ	ऊ	ऋ	ॠ
藏語字母	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
假名發音	ア	アー	イ	イー	ウ	ウー	リ	リー
羅馬字發音	a	ā	i	ī	u	ū	ṛ	ṝ
梵語字母	ऌ	ॡ	ए	ऐ	ओ	औ	अं	अः
藏語字母	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
假名發音	リ	リー	エ	アイ	オ	アウ	アン	アク
羅馬字發音	ḷ	ḷī	e	ai	o	au	aṁ	aḥ

梵語字母	क	ख	ग	घ	ङ	च	छ	ज	झ	ञ
藏語字母	ཀ	ཁ	ག	གྷ	ང	ཚ	ཆ	ཇ	ཛ	ཉ
假名發音	カ	カ゛	ガ	ガ゛	ンガ	チャ	チャ゛	ジャ	ジャ゛	ニャ
羅馬字發音	Ka.	Kha.	ga.	gha.	nga.	ca.	cha.	ja.	jha.	ña.

梵語字母	ट	ठ	ड	ढ	ण	त	थ	द	ध	न
藏語字母	ཏ	ཐ	ད	དྷ	ན	ཏ	ཐ	ད	དྷ	ན
假名發音	タ	タ゛	ダ	ダ゛	ナ	タ	タ゛	ダ	ダ゛	ナ
羅馬字發音	ṭa.	ṭha.	ḍa.	ḍha.	ṇa.	ta.	tha.	da.	dha.	na.

梵語字母	प	फ	ब	भ	म	य	र	ल	व	
藏語字母	པ	ཕ	བ	བྷ	མ	ཡ	ར	ལ	ཝ	
假名發音	パ	パ゛	バ	バ゛	マ	ヤ	ラ	ラ	ワ	
羅馬字發音	pa.	pha.	ba.	bha.	ma.	ya.	ra.	la.	wa.	va.

梵語字母	श	ष	स	ह
藏語字母	ཤ	ཥ	ས	ཧ
假名發音	シャ	シャ゛	サ	ハ
羅馬字發音	Sha.	ṣha.	Sa.	ha.

梵語の श ष स ह は藏語の ཤ ཥ ས ཧ と音譯せり。梵藏一致せざることを表せり。然るに一千三百年の古昔玄奘三藏が傳學せし梵語は、現今のチベット人やベンゴール人の如くシャ等を サ等と發音せる地方人より學びし者なるべし。故に西藏文字の サ等を音譯せしものなるべし。されば西藏字母に隨へば サ、サ゛、サ、サ゛と發音せざるべからず。然れども、今は便宜上中央印度の發音に隨つて、シャ、シャ゛、サ、ハと發音することとして、その如くに讀せり。

前表の如く西藏字母は、梵字一字に對して、藏字を以て表し得るものにして、假名文字或は羅馬字の如くに、一梵字を表すに二字或は三字、或は特種の符號を附するが如き必要なく、梵語字母の表す如くに表し得る特長あり。尚ほ重合字の如きに至ては、梵語の多くは横に並合するに對し、藏語の字母は縱に重疊せるの相異あれども、發音上同一の便宜あるものなり。以下に挙ぐる所の語としての並合の梵字、重疊の藏字、假名文字、羅馬字等の對照表を見て、知るべし。

梵字成語	बुद्ध	शाक्यमुनि ।	बोधिसत्त्व ।
藏字音譯	ནང་	ཤཱཀྱ་ཐུབ་ ।	བྱང་ཆུབ་ ।
假名〃〃	ブッダ	シャーキャムニ。	ボーディサットヴァ。
羅馬字〃〃	Buddha.	Shākyamuni.	Bodhisattva
譯語	佛陀、覺者。	釋迦牟尼、能仙。	菩薩、佛道丈夫。

梵字成語	समन्तभद्र ।	सद्धर्मपुण्डरीकसूत्र ।
藏字音譯	ཀུན་ཏུ་བཟང་པོ ।	དམ་པ་དཀར་པོ་པད་མ་ཡི་མདོ །
假名音譯	サマンタ、バドラ。	サダルマ、プンダリーカ、スートラ。
羅馬字〃〃	Samanta bhadra.	Saddharma puṇḍarīka sūtra.
譯語	普賢。	妙法蓮華經。

この表に依て云何に西藏文字が、ナーガリー字体と一致して梵語の發音を正當適確に、顯し出せるかを見るべし。これ西藏文字が梵語表音の特長を有すと云ふ所以なり。

一四　敬語法の特質

吾國の言語學者は、吾國語に美はしき敬語の多く存在することを以て、吾國語特有の言靈なりとして、その長所を自ら誇りとせり。これは他國語の乏しき敬語に比して、多數の敬語の存在する國語を以て、自ら誇りとするは當然なりと云ふべし。然るに西藏語の敬語の多數あることは、決して國語に譲らざるべしと思は

るいなり。固より両者の数を一々計算比較したるる非ざれば、その何れが多数なるかの確定数を示す能はずと雖も、それが西藏語に大多数存在することは、本書の品詞篇中に出だせる名詞と並に動詞の敬語表を見て知るべし。吾国語には物の名に御の字を附して敬語となるもの甚だ多し。西藏語にも ས sku (御身) の語を御の意に用いて、物名の前に附して敬語となるもの多数あり。その例以下の如し。

普通語	譯語	敬語	譯語
ཐུན། ゲーブ。	首。	ཞལ་ཐུན། シーゲーブ。	御首。
ཐོད། トー。	腹。	ཞལ་ཐོད། シートー。	御腹。
ཕྲན། ダン。	胸。	ཞལ་ཕྲན། シーダン。	御胸。
ཤ། シ。	肉。	ཞལ་ཤ། シーシ。	御肉。
ཚེ། ツェ。	壽命。	ཞལ་ཚེ། シーツェ	御壽命。
གཟུགས་པོ། ズク ポ。	身躰。	ཞལ་གཟུགས། シー ズク	御身體。
ཁྲག། ダー。	血。	ཞལ་ཁྲག། シーダー	御血。 或は ཞལ་ཤ། と云ふ。 シーシ
རུས་པ། ルー パ	骨。	ཞལ་རུས། シールー	御骨。 〃〃 ཞལ་ཕྲན། と云ふ。 シーダン。

こは経文ある血と骨との敬語始め初めて誌せるものは、普通語に御の字を附けたるものなれども、経文に載せしものは、敬語に御の字を加へし例なりと知るべし。

普通語に手は ལག་པ། なるがその敬語は ཕྱག། (御手) と云ふ。此語 チャク、或は チャー と云ふ。

を御の意に用いて、手に関係ある語に附せること以下の如し。

普通語	譯語	敬語	譯語
ལག་ཏོ། ラク ゾー。	前腕。	ཕྱག་ཏོ། チャク ゾー	御前腕。
དཔུང་པ། ドゥン パ。	肩、腕。	ཕྱག་དཔུང་། チャー ドゥン	御肩、御腕。
སོར་མོ། ソル モ。	指。	ཕྱག་སོར། チャー ソル。	御指。
ཟླ་ཕྱེ་ཁ། ズダ チェ カ	食指。	ཕྱག་ཟླ་ཕྱ། チャー ズダ	御食指。
ལག་ཕྲེ། ラク チー	手書。	ཕྱག་ཕྲེ། チャー チー	御手紙。
ཡིག་ཆ། イー ギ	書状	ཕྱག་ཡིག། チャー イク。	御書状。
དཔེ་ཆ། ペ ツォ	本。	ཕྱག་དཔེ། チャー ペ	御本。
ལག་ཆགས། ラク チー。	手杖	ཕྱག་ཆགས། チャッ チー。	御手杖。
ལག་ཕྲན། ラク ダン	手袋。	ཕྱག་ཕྲ། チャー ダン	御手袋。
དབང་ཕྱུག། ワン ツル。	灌頂。	ཕྱག་དབང་། チャッ ワン	御手灌頂。
ལྕགས། レチ	業、職。	ཕྱག་ལྕགས། チャー レチ	御業、御職。

等の如し。尚体頭の普通語は、མགོ། なりて、その敬語は དཀྱ། なり。足の通語は རྐང་པ། なりて、その敬語は ཞབས། なり。眼の通語は མིག། なりて、その敬語は སྤྱན། なり。耳の通語は རྣ། なりて、その敬語は ཉན། なり。口の通語は ཁ། なりて、その敬語は ཞལ། なり。これ等は皆御の義を用いられて、それ等の語を扉を各部を隨つて附加して、敬語とせる事以下の如し。

མགོ་ཡངས། ゴー パ ヤンポ。	大様様。	དཀྱ་ཡངས། ケー ヤン。	御大様様。
མགོ་ཝ། ゴー パ。	頭髪、長。	དཀྱ་ཝ། ケー ヤー。	御頭。

目玉 御目。　口びる 御唇。　口びるの 御唇。　口びる 御唇。

髮。　髮 御髮。　髮の毛 御髮。

髮化。　髮化 御髮化。　髮の毛 御髮。

髮。　髮 御髮。　髮の毛 御髮。

眼球。　眼球 御眼球。　眼の玉 御眼球。

眼も　眼も 御眼も。　眼の玉 御眼も。

鼻。　鼻 御鼻。　鼻の穴 御鼻。

耳穴。　耳穴 御耳穴。　耳の穴 御耳穴。

耳朵。　耳朵 御耳朵。　耳の朵 御耳朵。

聞。　聞 御聞。　聞の聞 御聞。

馬銜　馬銜 御馬銜。　馬の銜 御馬銜。

家。　家 御家。　家の家 御家。

阿屋。　阿屋 御阿屋。　阿の屋 御阿屋。

母。　母 御母。　母の母 御母。

父。　父 御父。　父の父 御父。

妻。　妻 御妻。　妻の妻 御妻。

子。　子 御子。　子の子 御子。

娘。　娘 御娘。　娘の娘 御娘。

妻。內室。　妻 御妻。　妻の妻 御妻。

主人。　主人 御主人。　主の人 御主人。

女主。　女主 御女主。　女の主 御女主。

心。　心 御心。　心の心 御心。

庫。　庫 御庫。　庫の庫 御庫。

倉。　倉 御倉。　倉の倉 御倉。

手數。　手數 御手數。　手の數 御手數。

ཟན། サン、	食物、	ཞལ་ཟས། シェ	御食。
བཟའ། ザ、	食物、	གཙུག་ཟས། ツク、シェ、	御食物。
གོས། コエ、	衣服、	ནམ་བཟའ། ナムサー、	御衣。
མེ། メー、	火、	ཕྱུག། シュク、	御火。
རྨི་ལམ། ニーラム、	夢、	མཛད་ལམ། ナーラム、	御夢。
གཉིད་ལོག་པ། ニーロッパ、	睡眠、	མཛད་གཞོ་ལོག་པ། ナーショロッパ	御眠。
ལན་པ། ラン パ、	言葉、	གསུང་བ། スンワ、	御言葉。
ཟེར་པ། シェパ、	說話、	བཀའ་ཚལ་ལ། カー、ツァルパ、	御命せの事。
ཞུ་ཆེན་པ། ツェンパ、	請求、願、	ཞུ་བ། シューワ、	御願。
ནད། ネー	病氣、	སྐྱོན། ニュン	御病氣。
ཤི་བ། シーワ、	死、	གཤེགས་པ། セク パ	御逝去。
སྐྱེ་བ། チーワ、	生、	འཁྲུངས། ツン、	御誕生。
འཚོ་བ། ツォーワ、	生活、	གཞན་ལ། ヒェーパ	御生活。

等、尚ほ々々擧ぐるに足る多くの敬語を有すれども、品詞篇にも擧げしを以て、此には畧せん。此外、品詞篇中動詞の普通語と敬語との對照表には、六十の普通動詞に對して、一々敬語動詞を擧げし所を見られんには、西藏敬語動詞には、普通語に御字を附して、敬語としたるもの多少あれど

も、その多くは一々その語形を異にするを見るなり。斯の如く語形を異にする所の敬語を多數に存することは、我國語にも見ざる所にして、西藏語のみが有する特長なりと云ふべきなり。

一五　形式語の特質

我國語の形式語は、觀念語の如くに、外國より輸入せられ、隨つて我國固有の言語なるが故に、我國語の眞の特色は、この形式語にありと云ふべし。と我國語學者は主張せり。然るに西藏語も亦その形式語については、我國語と同一の主張をなし得るものなり。尚かのみならず、そのこれを用ゆる順序も樣式も、甚だ相似たるものあることは、以下に擧ぐる例に依て知るべし。

ཁོ་ལྟ་ལུ ལ ཅ ལ ཡིན ལ ། ཅིས ཕལ ཆ ཡ ཡ ཡ ། ཁ ལ ལ ། ཕ ལ ། ཆ ལ ། ཡ ལ ། ལ ། ཏ ། ། །

何れも同一の義を表示し居れり。何故に同義なる「の」の語み丸の異字あるかと云へば、これ等は皆一々前行語の後置字よ、その音聲を調和する為めに存するなり。これ等の丸語が云何なる後置字に結合せらるかの法則は以下の如し。

後置字、ཀ་ཁ་ང་ལ་ is ཡི། ད་ན་མ་ is ཡི།

〃 〃 གི་ と ཏ་ は ནི། ཤ་ と無端とは ཀ་ 或は ཡི།

とが續け置かるいなり。これよ依て前後の音聲調和して滑かに言い表さるいなり。この調和音聲の結字法は、餘他の助辭や助動詞よも用いらるいなり。抽簡略よその格語尾なる二三の助辞を擧ぐれは以下の如し。

具格語の ཀྱིས་ ཀྱིས་ གིས་ ཏིས་ ཡིས། は皆屬格語尾の ཀྱི་ ཀྱི་ གི་ ཏི་ ཡི། と同様の後置字よ結合せらるいなり。

又業格、為格、依格等よ通じて用いらるい凡義七語は既よ品詞篇よ示せし如く

後置字、ཀ་ は ར། གི་ と ཏ と強端とは ར།

〃 〃、ད་ན་ཏ་ལ་ は ར། ཤ と無端とは ཏ と ར།

助辞七語中 ཏ と ལ とは何れの語端よも用いらるいなり。

尚は助動詞、定う調、接續詞等の形式語が音聲調和の法則に依て、文章構成の要務をなすことは、既に文章篇中よ明示せし所なれば此よは略すべし。以上述べし所よ依つて、形式語の特質の云何なるかを知るべし。

この特色は第十一よ擧げし所の、文章構造の特質と甚だ相似たるものあるを以て、こゝに一言辯に置くべし。こゝよ擧げたる特色は、文章構成の一部たる、形式語の音聲調和や、其位置等よついて、説明したるものよして、文章全體の構造調和よあらず。然るに第十一よ擧げしものは、文章全體

例を擧ぐれば以下の如し。

リータ　ポータ、　ギャ　ポ　サガ　オ、　メートー　ゼー　テポ　サン　ポ、
ལི་ཏ་ཕོ་ཏ། ནཆ་ཆུ་ཟབ་པ། ཨ་ཏོག་ཨཇམ་ཏེ་ཆུ་ཚན་ཅན།
山、高し。海　深し。花、美しくて香、芳ぶし。

ミー　チェン　ポ　タン　ゲー　ワ　ポン　ポ、　ダカ　サン　テ　ゼン　マー　ダン　ノー。
ཨི་ཆེན་པོ་དང་དགེ་བ་ཁྱོན་པོ། བདག་ཉིད་ཏེ་ཞི་ཞིང་ལེགས་ཤེ།
人　大きくて德　高　し。夫　善良みて事は良實なり。

の如く形容詞が被形容詞の後よ置かるいものよして、西藏文にこの類甚だ多し。併しながら全部がこの順序のみよあらず。形容詞が前行する語よも屢遭遇することあり。例せば、

ラーマー、　ゼー　マー、　チョッ　サム、　ダム　ペー、
ཐ་མ། མཛེ་མ། ཕྱག་ཡམ། དམ་ཆོས།
上人、美　人。鐵　槌。　ダル　法。

カル　チョッ　ペー　ミ、　ダー　リ　マー　ツェン
དཀར་ཕྱོགས། ཁ་མི། ཐ་ལི། དམར་མཚན།
白　方(白月分)　支那人。　嚴　山。　朱　註(筆にて書入れ注)

我國語は「の」の字を(である)の義に用いて、名詞を形容詞に用ふることあり。例せば東京よある人を東京の人と云ひて、東京と云ふ名詞よ「の」の助辞を附して、形容詞化したる如きはこれなり。而して西藏語よ同一の事が行はるゝを見るなり。例せば

ゾサイ　キー　メン
ཟླ་ཟས་ཀྱི་ཁྱིམ།
ゾサ　の　婦人。

ガンデンギ　ペー　ツェー
དགའ་ལྡན་གྱི་ཕྲེང་བ།
ガンデン　の　字書。

ナンセー　キ　ケー　パ
ཤེས་ཤིས་ཀྱི་མཁས་པ།
知足　の　學者。

チン　ダク　ギ　ノー　ツェー
ཕྱུག་ཐུག་གི་ནོར་ཕྲེང།
積那(他)の　財産

ゴンパ　ワ　イ　ケェ　ウ
དགོན་པ་པ་ཡི་ཆོས་ཐུ།
寺　人　の　論法場。

等の如く、これ等の「の」よ當る語は(よある、即ちなる)義を表して皆前行名詞を形容詞化したるものなり。上例よある如く西藏語の「の」は相當する語形に、ཀྱི་ གི་ ཏི་ ཡི་ ནི་ の五個ありて、

の音響調和ニツイテ説キシモノニシテ、形式論ハ勿論観念論ノ空部ニツイテ、その構造法ノ異點ヤその音響調和ノ特質ヲ挙ゲシモノナリ。大體ニツイテ云ヘバ、シ、ニ挙ゲタル特質ハ、第十一ニ挙ゲシ所ノ文章構造特質ノ中ニ、含有セラルル部分的のものなれども、その部分ニ特ニ注意スベキ異點アルヲ以テ、技術的特質トシテ挙ゲタルものナリ。

西藏文典索引

西藏文典索引

〔ア〕

愛情の歎詞 ……149
哀愁の歎詞、例 ……148
a 字は明成音(子音)なる事 ……232
a 字は本質上母音と云ふ主張 ……233
a 字の無性なる理由 …… 67
a 前を現在詞に限り未來に用ひざる根本原則との相異 …… 83
ア字を明成音中に入るる理由 ……231
阿剌比亞語に阿字は子音なる實例 ……233

〔イ〕

一々語形を異にする敬語表……247—8
一切藏經デルゲー開版。序 ……III
一切藏經ナルタハン新版。序 ……III
一切藏經ナルタハン開版。序 ……III
一切藏經北京開版。序 ……III
一字一語の例表…… 6
一字一語は便宜上の作成…… 6
一致の裝飾と例 ……141
一致不一致の裝飾法 ……141
一般通用の熟語と例 …… 59
一文の切目とその意義 ……180
一文を絶對句として單文の構成と例 …206
意義に依る結合法 …… 77
伊具助辭の異なる用法 …… 32
異類中の比較助辭 …… 31
韻字結合は注意して讀む …… 4
韻字符號とその名 …… 1

〔ウ〕

有助現在 ……101
有助未來 ……101
有助過去の例 ……101
有聲 …… 4
有前命動と四命助動との結合表 ……109
有頭字 …… 9
有頭字 Sa 頭十一字 …… 9
有頭字 ra 頭十二字 …… 9
有頭字 la 頭十字 …… 9
有頭有附合同の基字 …… 10
有附字 …… 9
有附字 ya 附七字 …… 9
有附字 ra 附十三字 …… 9
有附字 la 附六字 …… 9
有附字 wa 隅附十六字 …… 9

〔エ〕

依格助辭と例 …… 32

〔オ〕

御足(ジャブ)を御の義に用ひたる敬語表 ……246
御頭(ウー)を御の義に用ひたる敬語表……246—7
御手(チャク)を御の義に用ひたる敬語表……244—5
御身(クー)を御の義に用ふる敬語表 …244
御耳(ニェン)を御の義に用ひたる敬語表 ……246
御眼(チェン)を御の義に用ひたる敬語表 ……246
音の生處 …… 3
音の作者 …… 3
音發聲の努力 …… 3
音聲調和法 ……151
音聲調和不調和の文例 ……239
音聲調和の法則 ……152
音聲調和法則の說明 ……152
音聲の不調和は西藏文を構成せざること ……152
音聲調和を要する藏文の構成……238—9
音便を知るの法 ……162
音便熟通に必要なる參考書西藏人の著書の分……162—3
音便熟通に必要なる參考書譯書の分 …162
音便を主とする結合 ……156
音便を主とする結合の例 ……156

〔カ・ガ〕

開口法に用ふる接續詞 ……121
開の努力聲 …… 4
限る意を表す rang 助辭 ……144
限る意を表す tsam 助辭の例……144
客語の意義 …… 63
格語尾、一定の助辭 …… 26
格語尾及び助辭を引く法則 ……158
格語尾となる助辭表 ……132
格語尾の助辭についての注意 …… 36
格と否定詞構成 …… 33
格語尾助辭用法注意 ……132
格語尾等引用法則の說明 ……158
格語尾に用ふる助辭 …… 26
各性各別表作の特質……236—7
各字は語中の位置に從つてその性を異にすること …… 66
各字母の本性に基づく性別原理 …… 83
可能、適應、許可的形容詞 …… 56
可能、適應、許可的形容詞の語類 …… 56
可能、適應、許可的形容詞の構成 …… 56
可能、適應、許可的形容詞の例 …… 56
可能、適應、許容の助動詞 ……111
可能、適應、許容助動詞の例 ……111
下流に對する呼稱の例 ……147
感動詞、呼詞 …… 12
感歎詞の種類 ……147
感歎詞について ……147
感歎的語句文章 ……150
感歎的語句文章の例 ……150
ga 前置字を他動現在に用ふる例…… 71
ga 前置字自動現在に用ふる例…… 71

gam 等の開攝に用ふる接續詞の例……122
gam 等疑問接續詞に用ふる例……122
gang と de を續け用ふる關係代名詞 … 42

〔キ・ギ〕

喜悅の歎詞例 ……148
キク、gigu …… 2
期願的助動詞語類 ……109
期願的助動詞文例 ……109
期願的助動詞についての注意……109—110
基字性別表 …… 66
基字性變三時二動表……85—86
基字の支分 …… 8
基字と支分と字母との合成 …… 8
基字專用二十字 …… 8
基字前置字後置字性別表 ……152
基字の變化 …… 85
基字の變化についての注意 …… 85
基字、ミンシー …… 8
基數を數ふる特異法 …… 49
基數、十位以上の數へ方 …… 22
基數の呼稱、誌し方 …… 22
基數、滿數の呼稱法 …… 22
基、前、後性別表に對する注意 ……154
基、前、後三置字性別の根據 ……154
基男 ta 字が過去を表す例 …… 86
貴人に屬する物品等の敬語表……246—7
近稱指示代名詞の意義 …… 38
近稱指示代名詞に接尾語添加 …… 39
近稱指示代名格語尾變化表 …… 40
近稱代名詞、場所に用ふる語 …… 39
近稱、場所、人を表す代名詞 …… 39
kyang 等三語の連續法 …… 57
kyang 類結合法則 ……142
kyang 類、攝詞用例の說明 ……142
kyang 類結合法の例 ……142—3
kyang 類を攝詞に用ふる例……142
驚歎の歎詞…… 148
恐怖の歎詞 ……150
kyi 等助辭の諸種用法 ……134
kyi 類、所有の意を表す用法 ……134
kyi 類所有の物を省略してそれを表すもの ……134
kyi 類、離るべからざる關係を表すもの ……135
kyi 類、なる、にあるの意に用ふる例 …135
kyi 類、と云ふ意を表す例 ……135
kyi 類、けれどもの意を表す例 ……135
kyi 類の如き意を表す例 ……135
kyi 類、にの意を表す例 ……135
kyi 類、後の語を略する例 ……135
kyis 等助辭の諸種用法……133
kyis 等を主格とする用例……134
kyis 等を具格に用ふる例……134
舊譯古文の法則。序 …… III
舊譯時代と新譯時代。序 ……IIII
舊新兩譯の文典根據三十遇と性入法 …228
疑問關係接續詞 ……129
疑問形容詞 …… 46
疑問形容詞文例 …… 46

疑問代名詞の文例 …… 41
疑問助動詞と語類 ……113
疑問接續詞（副詞より）……129
疑問助動詞結合法と例 ……113
疑問助動詞と接續詞との別 ……113
疑問代名詞 …… 40
疑問代名詞人稱專用語 …… 40
疑問の助辭 gam 等の例……144—5
ギヤルポ、ランタルマ 序…… II

〔ク・グ〕

九品詞の區別 …… 12
過去分詞形容詞の構成 …… 53
過去分詞形容詞の例 …… 53
過去完了助動詞の例 ……103
過去進行助動詞の例 ……102
廣襄接續詞と文例 ……128
關係形容詞 …… 46
關係代名詞 …… 41
關係代名詞語類 …… 41
關係代名詞實例 …… 42
關係代名と副詞との聯合文例 ……173
關係代名詞に複文とせらるゝ例式 ……223
關係代名詞にて聯構文構成 ……210
關係代名詞の省略とその例 ……190
關係代名詞聯合の例文 ……173
關係代名詞を以て構成する複文の例 …221
觀念語 …… 6
觀念語と形式語との區別 …… 7
觀念語と形式語の文例 …… 12
觀念語の意義 …… 12
觀念語の語類 …… 7
觀念語は術語 ming …… 7
觀念語は二字以上ある原則 …… 6
完了詞動詞の十一語 ……102
完了詞と再攝語との異同 ……102
完了詞の接合法と例……102—3
具格語尾が主格に轉用せらるゝ實例 … 29
具格助辭の例 …… 29
具格助辭を理由詞とする用例 ……134
具格の五語尾、その例……27—28

〔ケ・ゲ〕

形式語の意義 …… 12
形式語、てにをはの用法 …… 7
形式語の特質 ……249
形式語、和漢一致の用法の文例 ……249
形容詞……12—43
形容詞の種類、代名形容詞、數量形容詞、特質形容詞 …… 43
形容詞句として複文構成の文例 ……222
形容詞句として結合する例式……221—2
形容詞句として結合する文例の說明 …222
形容詞文句の意義 ……189
形容詞文句とその結合 ……189
形容詞文句の一結合法則 ……189
形容詞文句結合の例文……189—190
形容詞文句の文例……190—1
形容詞文句として複文構成の例規 ……221
形容詞の前にある例 ……250

形容名詞ケン語類 …… 16
形容名詞狀の接尾語 …… 16
形容名詞チエン、デン、語類 …… 16
形容名詞の意義……54
形容詞を用ひて構成する文例 ……238
形容詞を連體法に用ふる例 ……238
敬語 …… 12
敬語動詞の語形を異にするもの …… 64
敬語に對する一段の注意を要する
事……248—9
敬語の甚だ多き西藏語……64
敬語表についての注意 ……244
敬語法の特質 ……243
敬語名詞の語形を異にする事 …… 18
敬語名詞の多數なる事 …… 18
mkhan ケンの意義と用例 …… 96
結果接續詞とその文例 ……127
決して省略せられざる接續詞 ……176
言語構成の字母の種類 …… 8
言語構成の四種 …… 8
言語と文章と變遷の別 ……228
言語連續に後置字の音性が主となる事 151
現在完了助動詞の例 ……103
現在進行詞文例 ……101
現在分詞形容詞の構成 …… 53
現在分詞形容詞の例 …… 53
現代文も法則はトホンミの根本法則に
依ること ……228
限定指示形容詞の例 …… 44
限定接尾に用ふる pa, ba, po, bo …… 25
限定數詞九が不定數詞となる事 …… 51
限定數詞を不定數詞に轉換 …… 50
限定數量形容詞類例 …… 47
原因或は目的接續詞(副詞より) ……129
原因接續詞と結果接續詞……126—7
原始的副詞の構成と例 ……114
原始的副詞の後置字と接尾語 ……114
原始的副詞の三種語根 ……114

〔コ・ゴ〕

固有形容詞の意義 …… 51
固有形容詞の例 …… 52
呼格 …… 34
呼格の表し方 …… 34
呼格の用例 …… 34
國語固有の形式語 ……249
國語特有の言靈とする敬語法のこと …243
國語の形式語に似たる西藏形式語 ……249
五字一語 …… 5
五種の副詞 ……116
五綴一語 …… 5
後置字性別表 …… 66
後置十字の性別 …… 66
後置字性別表 ……153
後置字、チンヂュク …… 8
後置字性細別表 ……153
後置結合三中性中、無相中性の例 …… 76
後置結合三丈夫の例中、中丈夫の例 … 76
後置結合法中甚女の例 …… 76
後置結合三丈夫の例中、下丈夫の例 … 76

後置結合三中性中、二相中性の例 …… 76
後置字が基字に對する法則 …… 77
後置字三性八部の時限表示例 …… 78
後置字十字 …… 8
後置字性變三時二動表 …… 84
後置字性變三時二動表に對する注意 … 85
後置字を主とする活用動詞……83—84
後置字の三性八部が時限を表すこと … 77
後置字の女性三字 …… 74
後置字女性の內分 …… 74
後置字の純女、甚女の構成 …… 75
後置字中性の內分 …… 74
後置字と再攝語の結合法 …… 93
後置字の入れ得る基字 …… 75
後置字の三性と內分 …… 74
後置字の中性三字 …… 74
後置字の特質 ……161
後置字の特質についてトホンミーの宣
言 ……161
後置字と基字の結合に於ける四法 …… 75
後置字調音結合法三丈夫の例中、上丈
夫の例 …… 75
後置字男性の內分 …… 74
後置字の力を主とする二動三時の表現 77
後置字の力に解消されし前置字の能力
とその實例 …… 77
後置字の男性四字 …… 74
後置字のみにて三時二動の決せらるゝ
動詞の事 ……237
後置字のみに依て過去を現す例 …… 77
後置甚女の現在を表す例 …… 78
後置純女の過去を表す例 …… 78
後置中性が中性語端を引く例表 ……155
後置調音結合法中純女の例 …… 76
後置調音結合法三中性の例中、變化中
性の例 …… 76
後置男性字が男字を引く例表 ……155
後置二相中性の過去を表す例 …… 78
後置の上中下三丈夫は過去を表示する
例 …… 78
後置のみに依て時限を決定する語の少
なきこと …… 77
後置變化中性の現在を表する例 …… 78
後置無相中性の現在を表す例 …… 78
後置變化中性の過去を表する例 …… 78
後置字を主とする a 前動詞表…… 80
後、中、の變化、二相、無相の構成……74—75
肯定動詞 …… 90
肯定動詞、國語のあると同じ用法 …… 91
肯定動詞が助動詞に用ひらるゝ例 …… 91
肯定動詞語類 …… 91
肯定動詞とその例解 …… 91
肯定動詞再攝語十個 …… 92
肯定動詞となる再攝語 …… 92
肯定動詞となる再攝語の意義 …… 92
肯定動詞に對する注意 …… 92
箇別形容詞 …… 46
箇別形容詞の例 …… 46
根語が副詞となる例 …… 94
根語、動名詞に用ふる例…… 98

根語、動名詞、分詞、不定詞表 …… 94
根語が分詞となる例 …… 94
根語が不定詞となる例 …… 94
根本文典三十偈性入法。序 …… I
根本文典三十偈と性入法の無視と誤解 227
根本文典に正反する辭典文典の例 ……227
業格助辭と實例 …… 28
語基、ミンシー …… 8
語句間別の點と線 …… 6
語形を異にする不規則動詞 …… 79
語形異なる不規則動詞の語類 …… 79
語即副詞の用例語類 ……115
語そのまゝ副詞なるもの ……115
合性音便併用の文例 ……160
合性字も各組内の字には入れられざる
事 …… 69

〔サ・ザ〕

再攝語動詞が完了詞助動詞となること 93
再置二字 da. sa …… 8
再置 Sa の入れ得る後置字 …… 75
再置字 da の入れ得る後置字 …… 75
作境同性格の例 …… 33
作境同性格の說明 …… 33
作について能動所動の根語別 …… 96
差押へる意にて(と)の意に用ふる la
義七語 ……136
Sa 再置字結合例…… 8
Sarat Chandra Das 氏……232
サラット氏はトホンミーの原則準奉の意
をその著に表す ……235
三原始副詞結合の文例 ……115
三字一語 …… 4
三時限完了助動詞文例 ……103
三綴一語 …… 5
贊成是認の歎詞……148—9
讃歎、同情の歎詞、例 ……148
雜種文の定義 ……193
雜種文について ……193
雜種文の例 ……193
雜種文分解の表 ……194

〔シ・ジ〕

四韻字の符號 ……231
四韻と三十字母はトホンミーの宣言 …235
四綴一語 …… 5
四部を含める單文分解の表……165—6
四字一語 …… 4
子音を明成音と呼ぶ理由 ……230
使役相の助動詞 ……112
使役相の助動詞の例 ……112
使役相助動詞 byed についての注意 …112
詩歌句終の二線 …… 7
詩歌に於ける ni 助辭用法 ……143
シエー、線 …… 7
シーシエー、四線 …… 7
指示形容詞の二類 …… 44
指示代名詞 de のみにて關係代名詞と
ならざる事 …… 42
指示代名詞の人稱轉用の事 …… 37
指定する ni 助辭 ……143
七綴一語 …… 5
小生命の字母 …… 4
shig の結合法と例…… 26
シツヅの註釋。序 …… I
シヤブチュ、shaes kyu …… 2
集合小努力聲 …… 4
集合努力聲 …… 4
主格の表し方……26—27
主語、持ち主を表す …… 14
主辭、句を以て構成 ……166
主辭、結合語の六種類 ……167
主辭結合語形容詞 ……167
主辭合語屬格名詞等 ……167
主辭合語、同位名詞 ……167
主辭合語、動詞狀名詞 ……167
主辭合語、分詞を略したる副詞 ……167
主辭合語、不定詞 ……167
主辭七樣の構成と例表 ……166
主辭、代名詞を以て構成 ……166
主辭、動詞名詞を以て構成 ……166
主辭に形容詞句を用ふる單文構成…204—5
主辭に强勢語の添加 …… 27
主辭の構成とその意義 ……166
主辭、名詞を以て構成の例 ……166
主辭、名詞あることが推知せらるゝ例 166
主辭、不定動詞を以て構成 ……166
主辭、文を以て構成 ……166
諸格、數、單、複語尾表 …… 36
諸種肯定形容詞 …… 55
諸種肯定形容詞の構成と例 …… 55
諸種接尾語を添へて動名詞とする例表 99
諸種否定形容詞……55—56
諸例規に依る聯構文構成の例 ……211
諸例規に依て聯構文を構成すべき例文 212
所相助動詞文例 ……104
所相動詞名詞法と例 ……105
進行助動詞 ……101
進行助動詞の四種 ……101
新譯時代 ……228
時間接續詞と文例……128—9
實質形容詞の意義 …… 51
實質形容詞の意義の說明 …… 52
實質形容詞の例 …… 51
自然變化比較形容詞構成 …… 58
自然變化比較形容詞の例 …… 58
自乘數を表す法 …… 23
自動詞の語類 …… 62
自動詞の定義 …… 62
自動詞と名づけらるゝ意義……62—63
自動詞を用ひたる文例 …… 62
自動詞にて標準語ある文例 ……238
事物の方向を示す助辭 ……138
事物を處分する助辭、la 義七語……135
字母性別の根據 …… 67
字母性入の四法則 …… 67
字母性入四法則の原文 …… 67
字母性入四法則原文の解說 …… 67
字母三十、韻符四 …… 1
字母三十字中、六字は新字 ……241

字母子音の梵語、英語、國語に通じたる構成 ……230
字母序數の用處 …… 24
字母性別の特質 ……235
字母單位の特質 ……230
字母に性を分つの根據 ……236
字母二十九字說は韻字の構成も不可能 234
字母にて序數を表す法……23—24
字母の生處と作者に對する注意 …… 3
字母の生處と作者の表 …… 3
字母の讀方に對する注意 …… 1
字母を五性に分つ事 ……235
似從格の意義 …… 30
似從格の實例 …… 30
序數の構成 …… 23
序數について …… 50
序數用の pa が基數を形容詞化すること …… 50
序數の副詞構成 …… 23
助辭、てにをは …… 12
助辭、てにをは ……130
助辭轉用の接續詞と二類の接續詞 ……123
助辭、てにをは一字型語類 …… 7
助辭、てにをは二字型語類 …… 8
助辭の大別 ……130
助辭の定義と例 ……130
助辭及び格語を引く方法……157—8
助辭分類について ……132
助辭 rang と tsam の用法 ……144
助辭例文の說明 ……130
助辭の類別 ……131
助辭を用ひざる文例 ……238
助辭を用ふる文例 ……238
助動詞 …… 12
助動詞活用三時限の表 ……101
助動詞添加の必要なる動詞 ……100
助動詞の有無に依て時限を決する動詞 72
助動詞の定義と活用 ……100
助動詞の二相三時に對する特質 ……100
助動否定と形容否定との別 ……111
女性 a 字の弱性……237
女性後置字が女性語端を引く例表 ……156
女性字の特質 …… 67
條件接續詞と文例 ……127
狀態接續詞（副詞より）……129
上流に對する呼聲の例 ……147
從格の意義 …… 30
從格助辭と例 …… 30
從格と似從格との例 ……139
從格の實例 …… 30
從屬文の九種、同格、原因、結果、目的、條件、反對、比較、廣袤、時間…126
從屬、形容詞文句 ……185
從屬詞の種々相 ……120
從屬的接續詞に依て複文とせらるゝ例式 ……223
從屬文の譯 ……185
從屬文の種類 ……185
從屬、副詞文句 ……185
從屬、名詞文句 ……185

十後置 da 强端と命助 dang との結合表 ……108
珠數の如く一貫連續の文 ……177
熟語 …… 58
熟語、形容詞と連る例 …… 98
熟語、數語を連ぬる例 …… 98
熟語、他の名詞と合する例 …… 98
熟語態、構成法 …… 98
熟語 cig の結合 …… 26
熟語と原語形との對照表……58—59
熟語、動詞と組立つる例 …… 98
熟語の構成と意義 …… 58
甚女性字の特質 …… 67
甚女 ma 字の最弱にして個性なき事…237

〔ス〕

數形容名詞の構成 …… 23
數詞 …… 12
數詞の表……21—21
數量形容詞の例 …… 43
數量形容詞類語 …… 47
數、單數、兩數、複數の表し方 …… 34
數副詞の構成 …… 23
srid の可能的用法 …… 92
推理的接續詞にて後文の主辭を略する例 ……174
推理接續詞とその例文……125—6

〔セ・ゼ〕

請願の數詞 ……150
聖典の譯文が權證とならざる理由、序… II
性（字母一々の性）…… 24
性合法に依る言語構成 …… 68
性質の副詞の例表……118—9
性に依て各字母が活用を異にすること…66
性の別は後置字にも用ひらるゝこと …237
性を分つ根據法則の說明 ……236
性を分つ根據法則 ……236
性を分つ法則の說明……154—5
省約文章 ……174
省略關係代名詞 …… 42
省略關係代名詞例 …… 42
石女性字の特質 …… 67
說述形容詞の意義 …… 51
說述形容詞の例 …… 51
折說態接續詞の語類 …… 97
折說態の例解 …… 97
折說態に於ける文と談との別 …… 97
折說態 ste 接續詞の略例…… 97
折說態中 la. nas. dang 接續詞の略例 97
接續詞 …… 12, 120
接續詞基本語と語類 ……120
接續詞 dang の省略 ……176
接續詞としての dang の用法 ……175
接續詞の定義 ……120
接續詞の文例 ……120
接續態已然言の文例……93—97
接續態將然言の文例……96—97
接尾語結合法例解 …… 15
語尾語、重置せらるゝ pa の例 …… 15

接尾語、重置せらるゝ ba の例 …… 15
接尾語なき名詞語類 …… 13
接尾語の單に物或は事を表す語 …… 13
接尾語 ma を人、或は者を表すに用ふる例 …… 14
接尾語 ma, mo を女性に用ふる例…… 14
接尾語 ma 或は mo を物、事、時を表すに用ふる例 …… 14
接尾語、ma, mo 無性、不明を表す例… 25
接尾語 ma のみを用ふる語…… 54
接尾語 ka, kha, ga の異なる用例…… 18
接尾續 ka 類、事情等に用ふ …… 18
接尾語 ka 類、數に用ふ……17—18
接尾語 ka 類、物、事に用ふ …… 17
接尾語 ka 類、小禽に用ふ …… 17
接尾語結合の法則 …… 14
接尾語、小なる者を表す …… 18
接尾語、女性、中性、時を表す……13—14
接尾語の特殊用法と特殊意義 …… 54
接尾語、人又は持主を表す …… 13
接尾語附加にて派生語となる名詞 …… 13
接尾語を有する名詞 …… 13
接尾語 ba, bo が着く後置字 …… 15
接尾語 pa, po が附く後置字 …… 15
接尾語 pa, po の特種用法……15—16
撰擇接續詞とその例 ……124
撰擇接續詞の聯構文構成 ……210
撰擇的に一の賓辭を略する例 ……174
漸加接續詞 ……123
漸加接續詞の例 ……124
前、後、基字の性を八に細別 ……236
前女 a 字は入るを許されざる男性基字 …… 69
前女 a 字が表す意義の法則と解說…… 71
前女置字 a 字の表し得る意義…… 71
前女字 a が自動現在に用ひらるゝ例… 71
前女 a 字の一語にて未來を表す動詞 …72
前女 a 字は後置男にその力を解消せらるゝ事 …… 86
前女 a 字を基女字に入るゝ例…… 68
前女 a 字を有結基の女と中とに入るゝ例 …… 69
前基女性 ma を基中の kha, cha, tha, tsha に入るゝ例…… 69
前女 ma を基女の ga, ja, da, za に入るゝ例 …… 69
前基女 ma を基基女の nga, ña, na に入るゝ例 …… 69
前置 a 字の除去に依て過去詞を構成… 79
前置字と基字との結合表 …… 68
前置字と基字との結合法 …… 68
前置、基字、後置字にて言語構成 …… 68
前置字五字 …… 8
前置五字の性別 …… 66
前置再置の有無に對する總括的注意 … 85
前置再置の有無に依て意義を異にする動詞表……87—90
前置字性變三時二動表……81—82
前置字性別表 ……153
前置字、ソゴンジュク …… 8
前置男性字が入ることを許されざる基字 …… 69
前置 ma 字等用法則の說明…… 73
前置 ma 字等用の例…… 73
前置女性 a 字の入れる基字 …… 68
前置基女 ma 字の入れる基字…… 68
前置基女 ma 字を總てに等用する法… 72
前置中性字が入るを許されざる基字 … 69
前置中性二字が表す意義の法則……70—71
前置中性 ga と da との入れる基字 … 68
前中性 ga 字を基の男、女に入るゝ例 68
前中性 da 字を基の男と女に入るゝ例 68
前中性 da 字を有結基字の男、女に入るゝ例 …… 68
前中性 ga, da 二字の表し得る意義 … 71
前置中性 ga, da の次强度 ……237
前、中二字を未來詞とする原則の無存在 …… 83
前置男性 ba 字の入れる基字 …… 68
前置男性 ba 字他動過去詞の表 …… 70
前置、男性 ba 字の最强 ……237
前置 ba 字の除去に依て過去詞を現在詞に變成す …… 78
前男 ba 字は云何なる基字にも過去を表せる事 …… 89
前男字を基男字に結ぶ例 …… 68
前男字を基女字に結ぶ例 …… 68
前置女 a 字が自動未來に用ひらるゝ例 72

〔ソ・ゾ〕

相對するを示す la 義七語、例……135
相反形容詞の意義 …… 61
相反形容詞の表 …… 61
相反接續詞とその例 ……125
添へる意に用ふる la 義七語 ……136
藏英辭典サラット氏著 ……232
藏語作文上合性管便の必要 ……161
藏文構造と國文構造との酷似せること 238
藏梵字母對照 …… 10
藏梵羅國字對照表 …… 11
屬位接續詞の定義 ……126
屬位接續詞の例 ……126
屬格語尾の調音結合 ……159
屬格助辭と例 …… 31
屬格形容詞の例……43—44
屬格結合に四種類 …… 31
一、主分と支分との結合
二、能依と所依との結合
三、自性同一の結合
四、持主と所屬との結合
屬格、具格語尾、イーデン、ギ、ナム、イエ……27—28
屬格の五語尾、その例 …… 27
俗語進行助動詞の構成 ……101
俗語もその法則はトホンミーの規定に依る事 ……229

〔タ・ダ〕

タ、及びタ。の發音法 …… 11
他動詞の作用 …… 63

他動詞の補足語 …… 63
他動詞の客語に助辭なき語の多き事 … 63
他動詞の例 …… 63
他動詞に la 義七語の用法 …… 63
他動詞にて標準語ある文例 ……238
他動詞にて標準語なき文例 ……238
他動詞を用ふる文章の意義 … ……204
他動詞を用ふる文章構成 ……204
他動詞を用ふる文章の例 ……204
他の諸弟子の說法勸請……180—1
種牛、種馬等に對する表語……24—25
單一の事實と二主辭……175—6
單語構成上後置字の意義 ……151
單語助字の表 ……130
單文の構成要素 ……165
單文四部の釋義 ……165
單文の四要素と必然要素 ……165
單文構成雜種の文例 ……208
單文構成の例、意義 ……205
單文形容詞と國文との相似 ……166
單文の定義と例 ……204
單文の構成 ……164
單文を複文とする雜種の文例……224—5
單文分解表……168—9
第一格、主格と語尾 …… 36
第二格、業格、とその語尾 …… 36
第三格、具格とその語尾 …… 36
第四格、爲格とその語尾 …… 36
第五格、從格とその語尾 …… 36
第六格、屬格とその語尾 …… 36
第七格、位格とその語尾 …… 36
第八格、呼格とその表語 …… 36
第一類助辭表 ……131
第二類助辭表 ……131
第二類助辭 ……141
第三類助辭表 ……131
第三類助辭 ……145
大生命の字母 …… 4
代名詞 …… 12
代名詞 …… 37
代名詞、形容詞に再攝語結合の例表 … 93
代名形容詞の四種類、屬格、指示、疑問、關係 …… 43
代名形容詞の例 …… 43
da 再置字結合例…… 8
da 再置字卽ち强端…… 14
da 前置字を自動現在に用ふる例…… 71
da 前置字を他動現在に用ふる例…… 71
dang 接續詞と轉用と實例 ……121
dang の時事用法の例 ……121
dang の命助用法 ……121
dang の命令用法の例 ……121
dang の理由と時事との副詞的用法 …121
dang の理由用法の例 ……121
dang を助辭として時に用ふる例 ……146
dang を接續詞開に用ふる例 ……121
dang を接續詞攝に用ふる例 ……121
dang を(と)と云ふ接續詞にして二名詞を複合主辭とす……174—5
dang 接續詞の省略せらるゝ文例 …176—7

〔チ〕

チャ等の藏梵異なる發音について ……242
チャ等をペンゴール人等は現今ツァ等と發音す ……242
地位を示す la 義七語 ……135
チクシエー、一線 …… 7
can ldan の習慣讀方…… 16
cig の結合法と例 …… 26
中性字の特質 …… 67
抽象形容名詞構成 …… 54
直說態の意義 …… 96
直說態の例 …… 96
西藏韻字は符號のみ存する事 ……232
西藏韻字を五母音とする誤謬 ……232
西藏紀年の數へ方 …… 50
西藏原文、數の別 …… 35
西藏語發音學上特種の立場 ……234
西藏字母は一音一字の構成 ……230
西藏語に一字のみの語のなき事 ……239
西藏語に數語の多數存在すること…248—4
西藏語に獨立したる韻字なき事 ……232
西藏語の阿字についての實話 ……232
西藏語の韻に獨立の字母なし …… 9
西藏字母三十を二十九とする主張 ……233
西藏文の定義 ……164
西藏文の定義 ……151
西藏文定義の解釋 ……151
西藏文の實辭 …… 29
西藏文は音聲調和を主とす ……152
西藏文の一特質 …… 71
西藏文法枝末的四特質 ……229
西藏文法の根本的四特質 ……229
西藏明成音は二音合成に非ずして一音なること ……230
西藏語讀方の習得法 …… 10

〔ツ・ヅ〕

通貨價格の呼方 …… 49
通俗語の番號呼び方 …… 50
通俗語の變化多きこと ……228
痛苦の歎詞 ……149
ツエク、點 …… 7
adug ヅクの在る、居る、坐すの三用例 …… 92
adug.yod. lag̱s. srid. s̱nang の異同、と例解……91—92
tsam を形容詞に用ふること……144
tsam を副詞として'ほど'の義に用ふる事 ……144

〔テ〕

適當正當不正當の文例……161—2
綴字法 …… 7
綴字の種類 …… 4
綴字法の特質 ……239
ste にて構成せられし複文の例について說明…… 220
ste 類接續詞を以て複文構成の例 ……220

〔ト・ド〕

時、場所、人を表す ka 類接尾語 …… 17
時の副詞の例……116—7
特質形容詞の種類 …… 51
特質形容詞の例 …… 43
特殊の意義を表す pa, ba 等のあること …… 55
特殊義を表す接尾語 pa, bo の例 …… 55
to 完了詞は再讀語になき事……102
トホンミー、サンボホタ。序 …… I
トホンミー、サンボホタ。の卓見 ……227
トホンミー藏字創作はナーガリ字體に據りし事 ……241
同意形容詞の意義と構成……56—57
同意形容詞の例 …… 57
同位接續詞の定義 ……123
同位の四種接續詞、漸加、撰擇、相反、理推 ……123
同位と屬位接續詞の二類 ……123
同位名詞句にて二文を單文に構成とその例 ……207
同格接續詞とその文例 ……126
同語異義を表す例 …… 25
同語尾なる具格と主格との別……29—30
同種中の差別に用ふる nas 助辭の例…139
同性結合、音便結合兩用の例 ……159
同性結合上用字を代へし例 ……157
同性結合と音便結合 ……158
同性結合のために用字を代へし事…156—7
同性音便結合併用の歌……159—160
同類中の比較助辭 …… 31
動形容詞と動名詞との區別 …… 59
動詞 ……12, 62
動詞間の dang 接續詞の省略なきこと 177
動詞活用不變の理由。序 ……IIII
動詞根語の定義と說明 …… 93
動詞語根、動名詞 …… 25
動詞折說態の定義 …… 97
動詞態中接續態の定義 …… 96
動詞態中名詞態の意義 …… 98
動詞の根語、動名詞、分詞、不定詞 … 93
動詞の種類、自動、他動 …… 62
動詞七態の名目 …… 95
動詞と命令助動詞と結合の法則 ……107
動詞の性入法 …… 66
動詞の態の別 …… 95
動詞の補足語の意義 …… 63
動物の牡牝に對する表語 …… 24
動名語、根語のまゝのもの …… 98
動名詞の構成 …… 93
動名詞、根語に pa, ba の添加するもの …… 98
動名詞態の二種 …… 98
動名詞、不定詞に對する注意 …… 95
動名詞を不定詞としたる文典等の誤謬…95
動名詞を不定詞とするチョーマ氏の主張 …… 95
動名詞を不定詞とするチョーマ氏の主張の批判 …… 95

度數の副詞の例 ……117
努力內外の二種 …… 3

〔ナ〕

na, ang 抑へて意を飜す助辭と例…145—6
na 助辭依格用法……136
na 助辭願望的の意に用ふる例……137
na 助辭、疑問的、ならばの義に用ふる例 ……137
na 助辭、業格用法……136
na 助辭四種の普通用法……136
na 助辭諸種用法……136
na 助辭時格用法……136
na 助辭、接續詞の意に用ふる例……141
na 助辭、程度保持、なればの義に用ふる例 ……137
na 助辭、ならばの意にて條件的に用ふる例 ……145
na 助辭、なりしにの意に用ふる例……137
na 助辭、なればの意に用ふる例 …136—7
na 助辭、に於ては、なればの意に用ふる例 ……136
na 助辭八特種用法……136
na 助辭、理由の意に用ふ……136
na 助辭、行く方向を示さゞる事 …138—9
na 助辭、抑意、なるに、の意に用ふる例 ……137
na 助辭爲格用法……136
nas 助辭と他語と結合の注意 ……140
nas 助辭、略詞と接續詞用法 ……140
ナロ、na ro…… 2
男性字の特質 …… 67
男性、女性を表す語類 …… 24
男性上丈夫等と名づける理由 …… 74
男前置 ba 字の表し得る意義 …… 69
男前 ba 字の表す意義についての法則 70
男前 ha 字が表す意義法則の說明 …… 70
snang ナンは adug ヅクの同義語…… 92

〔ニ〕

ni 强勢語の用法……132
ni 强勢詞の例 ……132—3
二字一語 …… 4
二綴一語 …… 5
二單文を一單文にする法及び例 ……205—6
二の主辭に對して一の賓辭を略する例 174
二の賓辭に對して一の主辭を略する例 174
二の名詞、句等の結合 ……176
二名詞が dang の接續に依て離し難き例 ……175
ニーシエー、二線 …… 32
ni 助辭、上に差別する例……141
ni 助辭、下に差別する例……141
ni 助辭、指定義に用ふる例……143
ni 助辭、指定用例の說明……143
ni 助辭、單に差別を表す例……141
ni 助辭、補足と差別の用法……133
ni 助辭を差別詞とする用例……133
ni 補足詞、性入法の用例……133
ni を强勢詞に用ふる文例……133

にての意に用ふる la 義七語 ……136
人稱、自稱代名詞 …… 37
人稱、他稱代名詞 …… 37
人稱、對稱代名詞 …… 37
人稱代名詞の語尾について …… 40
人稱代名詞格語尾變化表 …… 38
人稱代名詞複數語尾 …… 38
人稱複數代名詞と格語尾 …… 38
人、事、物、情一切通用の疑問代名詞 40

〔ネ〕

熱感の歎詞 ……149
nas 語尾を接續詞しての義に用ふる例 31
猫上人と鼠……212—219

〔ノ〕

の如くにの意に用ふる la 義七語 ……126
のためにの意を表す la 義七語 ……136
'の' の字に五字ありて音の調和を謀ること ……250
'の' の字を用ひて形容詞とすること …250
能相と所相の助動詞……103—4
能相助動詞文例……103—4
能相動詞が名詞となること ……104

〔ハ・バ・パ〕

發聲努力の强弱に由て性を分つ法則 …154
八綴一語 …… 5
鳩王とその從屬軍隊……169—171
鳩王と軍隊の談、二 ……171
鳩王と軍隊の談、三 ……172
反意形容詞の意義と構成 …… 57
反意形容詞の例 …… 57
反對接續詞、(副詞より)……129
反對接續詞中、同位と屬位との別 ……127
反對接續詞の聯構文構成……210—1
反對接續詞文例 ……128
反對接續詞にて後文の主辭を略する例 174
半數附加の特異なる數へ方……49—50
場所接續詞(副詞より) ……129
場所の副詞の例 ……116
倍數を表す法 …… 23
ba 前、ga 前無前動詞の語類表……106—5
ba 前を未來詞としたる根本的相異 ……83
pa, ba は用處に依て意を異にする例 …99

〔ヒ・ビ〕

比較形容詞 …… 57
比較形容詞の例 …… 57
比較最上形容詞の構成 …… 57
比較形容詞の構成 …… 57
比較最上形容詞の例 …… 57
比較助辭 …… 31
比較接續詞 ……128
比較接續詞の文例、同度と不同度 ……128
比況の助動詞 ……112
比況助動詞文例 ……112
否定形容詞の構成と例 …… 56
否定の助動詞及その異用法 ……110
否定助動詞の語類と例 ……110

否定詞が名詞接尾語となる事と例 ……110
否定詞の添加と格語尾 …… 33
否定動詞狀形容詞 …… 59
否定動詞狀形容詞の構成 …… 59
否定動詞狀形容詞の表 …… 60
表時法と la 義七語…… 32
表時法とその例 …… 32
疲勞の歎詞 ……149
賓辭中目的語の表し方 …… 29
賓辭動詞の副詞的添加、七種類、…167—8
賓辭、動詞の副詞的添加 ……167
賓辭に副詞を加ふる文の構成 ……205
賓辭の添加、形容詞 ……168
賓辭の添加、副詞句 ……167
賓辭の添加、副詞 ……167
賓辭の添加、不定詞 ……168
賓辭の添加、分詞 ……168
賓辭の添加、副詞狀目的 ……168
賓辭の添加、目的語を有する後置詞 …168
備考篇……227—252

〔フ・ブ〕

不一致裝飾法の例 ……142
不規則動詞 a 前のみの語類表…… 80
不規則動詞が二動三時を表す法……80—81
不規則動詞が二動三時を表す例 …… 81
不規則動詞と例 ……78—79
不幸不快の歎詞、例 ……149
不合法結合は西藏語不成立 …… 69
不定指示形容詞の例 …… 45
不定指示形容詞の語類 …… 45
不定指示形容詞の文例 …… 45
不定詞の構成 …… 93
不定詞の三、cig. ṣhig. shig ……25—26
不定詞を以て、二文を一文に構成と例 …… 206—7
不定數量形容詞語類の例 …… 48
不定數量形容詞の類語 …… 47
不定數量形容詞の文例 …… 48
不定接尾語とその結合法……25—26
附加的接續詞にて聯構文構成 ……209
普通作文にも合性音便は必要 ……161
普通語と敬語の對照表……19—20
普通動詞と敬語動詞對照表 …… 65
普通動詞と敬語動詞對照表、について の注意 …… 64
副詞 …… 12
副詞句として複文を作る例規……222—3
副詞の意義と原始的副詞 ……114
副詞句に依て複文構成の文例……223—4
副詞 Shes の用法の注意 ……114
副詞句を以て二文を單文に構成と例 ……207—8
副詞語根結合の法則……114—5
副詞にて聯合の例文……173—4
副詞文句、結果の例 ……191
副詞文句の定義 ……191
副詞文句、目的の例 ……191
副詞文句を有する文の分解……191—2
副詞より轉じたる接續詞の表……122—3

副詞文句、廣袤狀態の例 ……192
副詞文句、原因の例 ……191
副詞文句、時間の例 ……192
副詞文句、條件の例 ……192
副詞文句は屬位接續詞に引用せらる …191
副詞文句、反對の例 ……192
副詞文句比較の例 ……92
副詞文句の文章、分解すべき例……192—3
複語助辭の表 ……130
複數語の用例表 …… 35
複數を表す語類表 …… 35
複文の構成 ……220
複文の構成と例 ……164
複文の定義 ……185
複文の分解 ……185
分解すべき單文例 ……169
分解すべき雜種文の例 ……195
分解の爲の單文例 ……168
分解を要する聯構文の例 ……184
分詞態の意義 …… 91
分詞の構成 …… 93
分詞態の例 …… 96
分詞態省略型の例 …… 93
分合する助辭 ……141
文語の無變化。序 ……IIII
文章語の變化なき事 ……229
文章の構成について ……204
文章構成の意義 ……204
文章構造の特質 ……238
文章の種類と構成 ……164
文章全體の特色と一部の特質との別 ……251—2
文章の分解 ……164
文法變化の異論者 ……228
文典說明の根據。序 …… V

〔ヘ〕

閉の努力聲 …… 4
返誦讀符 …… 7
返事の聲 ……148

〔ホ・ボ〕

本質形容詞の意義 …… 54
本質、形名、抽象形名詞區別表 …… 54
本典の根據、トホンミー著の根本文典三十偈と性入法 …… 83
本典の動詞用法に關する注意 …… 83
補足詞として用ひらるゝ ni 助辭の例 144
法則破毀の變字、言語不成立の例 …… 69
品詞 …… 12
ーボー bo. ーケエー khal. の量……47
梵韻字十六字と藏字等 …… 11
梵語表音の特質 ……241
梵語藏譯數の別 …… 35
梵、藏、國、羅四音對照字母表……241—2
梵、藏、國、羅にて成語對照表 ……243
梵藏同字數に構成し得る特長 ……243
梵等成語對照上について見る藏字の特長 ……243
梵、明成三十三字母と藏字 …… 11

〔マ〕

埋藏典籍の句終符號 …… 7
ma 助動が前後兩語を否定する例 ……111
ma 前一語形の不規則動詞 …… 73
ma 前動詞の語類 …… 73
ma 前動詞添加の助動詞 ……105
ma 前動詞添加助動詞の表 ……105

〔ミ〕

ミラレエバ尊者の說法序 ……179
ミラレエバ尊者の父、臨終前 ……195
ミラ傳、伯父伯母の財產管領强制…196—7
ミラ、傳父の遺言と逝去……195—6
ミラ傳、伯父伯母の橫暴殘虐……197—8
ミラ傳、生母の困難とジエセー兩親の同情……198—9
ミラ傳財產返還請求の準備 ……199
ミラ傳、財產返還請求の宴會……199—200
ミラ傳、生母の席上雄辯……800—1
ミラ傳、伯父伯母の暴言暴行……201—2
ミラ傳、生母の哭泣 ……202
ミラ傳、親族の慰藉と生母の勇斷 ……203
未來完了助動詞の例 ……103
未來進行助動詞文例 ……102
未來助動詞の添加に依る未來動詞 …… 72
未來助動詞の添加に依る未來動詞の例 72

〔ム〕

無聲 …… 4
無端、後置字なき語 …… 14
無後置字語も文法上あると同規に用ひらるゝ例……239—240
無助現在…… 101
無助過去の例 ……101
無前動詞の二動三時を表す法……73—74

〔メ〕

名詞 …… 12
名詞間の dang 接續詞省略 ……177
名詞句引用、同位の例 ……186
名詞句引用關係副詞の例 ……186
名詞句引用關係代名詞の例 ……186
名詞句引用、疑問代名詞 ……186
名詞句引用、疑問副詞の例 ……186
名詞句として複文構成の文例 ……221
名詞構成と接尾語 …… 13
名詞等に再擬語結合の例表 …… 93
名詞に對する同位句の例と解 ……188
名詞の格次、格名、格語尾對照表 …… 36
名詞の格次第とその名 …… 35
名詞文句引用の種類、同位、關係、疑問の三……185—6
名詞文句が名詞作用をなす理の五狀態 186
名詞文句が動詞の主辭となれる理由 …187
名詞文句として結合する複文構成 ……220
名詞文句、動詞に於ける附加文句の例と解 ……187
名詞文句、動物に對する目的 ……187
名詞文句について ……186

名詞文句の動詞に對する主辭となる例文……186—7
名詞文句の分解とその例 ……188
名詞文句分解の方法 ……188
名詞文句分解の例文……188—9
明成音基字の性別 …… 66
明成韻符結合百二十字 …… 2
明成字と韻符との合同 …… 2
明成字と韻字との性別 …… 66
明成字母の表 …… 1
命助 ṣhig と結合する動詞の例 ……107
命助 ṣhig と結合する動詞例 ……108
命助 cig と結合する動詞例 ……107—8
命令助動詞及動詞と結合法則 ……167
命令助動詞の四語 ……107
命令態の意義 …… 99
命令態は助動詞を得て成立すること … 99
命令詞の構成 …… 99
命令には助動詞添助の必要あること …107

〔モ〕

目的語の助辭 …… 63
目的語に助辭ある古文の例 …… 64
目的語に助辭なき實例 …… 29
目的語に助辭を用ふる實例 …… 29
目的接續詞と文例 ……127
文字と言語の區別 …… 6
文字文典創作者の精神と組織の根據 …227

〔ヤ〕

yang na を接續詞或は撰擇的に用ふる相違の例 ……176

〔ユ〕

唯一語形 a 前動詞の助動詞用法……105
唯一語形の動詞に助動詞の必要 ……100
唯一語形不規則動詞等用例語類 …… 80

〔ヨ〕

容式、度量、情態等に用ふる疑問代名詞…40
yod の居るとあるの用例 …… 92
讀方法 …… 10

〔ラ〕

ラ、la 義七語 …… 28
ラ、la 義七語の用法 …… 28
la 義七語の結合法 …… 28
la 義七語と依格助辭 …… 32
la 義六語、單に行くべき方向を示す例 ……138
lags は yin と同じ用法 …… 92
ラハ、サ、バをラハサワと云ふ事 …… 16
la 助辭願望を示す例 ……138
la 助辭、業、爲、依、時格の例……137—8
la 助辭、四種普通用法 ……137
la 助辭十種の用法 ……137
la 助辭、單に二語を合す例 ……138
la 助辭、餘後を接する爲に 'して' の意に用ふる例 ……138
la 助辭、よりの意に用ふる例 ……138
la 助辭、'ば' の意に用ふる例 ……138

rang は俗語に 'の如し' の意に用ふること ……144

〔リ〕

理由、必要、時等を示す助辭 ……146
立誓の歎詞 ……150
量、形式、理由等疑問代名詞熟語 …… 41
量の副詞の例……117—8
兩極端を表す比較形容詞 …… 58
兩極比較形容詞の例 …… 58

〔レ〕

las 助辭、同基中不同類を撰ぶ例 ……140
las 助辭の撰擇、差別用法 ……140
las 助辭、復基中の差別に用ふ ……140
レエチユンパ再勸請說法……179—180
レエチユンパ說法勸請の本文……178—9
レエチユンパの說法勸請の序 ……178
冷感の歎詞 ……149
聯構文構成の例 ……164
聯構文構成の法 ……209
聯構文四類接續詞 ……173
聯構文推理的接續詞の例 ……173
聯構文撰擇的接續詞の例 ……173
聯構文と四類接續詞 ……173
聯構文と複文との相異 ……220
聯構文の定義 ……173
聯構文の分解 ……173
聯構文の構成 ……164
聯構文の構成と內別 ……209
聯構文は皆二文となる例解 ……182
聯構文反對的接續詞の例 ……173
聯構文分解表 ……183
聯構文附加的接續詞の例 …… ……173
聯構文分解の規則……182—3
聯構文分解の例文……181—2
連續の文例 ……177
連續長文分解的方法 ……181
レンブ、agregbu …… 2

〔ロ〕

六字一語 …… 5
六綴一語 …… 5

〔ワ〕

和藏一致構成文例の說明 ……249
和藏一致構文上形容詞の一致とその例 ……249—250

〔キ〕

爲格助辭と例 …… 30
爲格助辭についての注意 ……146
爲格に用ふる la 義七語 …… 30

〔エ〕

遠稱指示代名詞に接尾語添加 …… 39
遠稱代名詞の意義 …… 39
遠稱代名詞の物、人を表す語 …… 39
遠稱代名詞、場所を表す語 …… 39
遠稱、場所、人を表す指示代名詞 …… 39

— 了 —

昭和十一年十二月五日印刷
昭和十一月十二月十日發行

西藏文典

【定價六圓】

著者　河口慧海　東京市世田谷區代田一ノ六三五
發行人　岩野眞雄　東京市芝公園地七ノ十
平版印刷　松本印刷所　東京市芝區濱松町三ノ五
活版印刷　森島印刷所　東京市芝區西應寺町六一

發行所　東京市芝區芝公園地七ノ十
大東出版社
振替東京一九四七番
東京市世田谷區代田一丁目六三五ノ十一號
大日本藏梵學會